

艦CORE「青い空母 と蒼木蓮」

タニシ・トニオ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

艦CORE「青い空母と蒼木蓮」

『大破壊』から数百年か数千年か……。突如として現れた『深海棲艦』とAMSにより艦船を操る『艦娘』との戦争の時代に、マギーは財団の手によって送り込まれる。そしてそこで出会った青い空母と共にマギーは戦場を駆けていく。ここが新たな『魂の場所』だから。

『艦これ』と『ACVD』のクロスオーバー、主人公はマギーの戦記ものです。

〈注意点〉

・AMSから光が逆流してる作者の頭による稚拙文章

・独自設定過多、フロム脳推奨

・海面ガイドブーストは許容してください

・pixivからの転載、というかこういうサイトを知らなかったので……。なにかあれば教えていただけると幸いです。

・好きなように書き、好きなように更新する、でも感想、批評はバツチコイ。

・「財団」|| 「神代理」と考えたら…….と思つて一応「神様転生」つけてます。

目次

第一話「艦載機『蒼木蓮』が開発されまし

た」 1

第二話「LAST RAVEN」

9

第三話「歓迎会をしよう、盛大にな」

18

第四話「作戦会議」 25

第五話「FAST MISSION」演

習」 36

第六話 番外編「瑞鶴と吹雪と、時々ブー

ストチャージ」 53

第七話「MISSION 02」ガダルカ

ナル島近海攻略 01」 68

第八話「MISSION 02」ガダルカ

ナル島近海攻略 02」 73

第九話「MISSION 02」ガダルカ

ナル島近海攻略 03」 85

第十話「番外編「赤城の残滓」 100

第十一話「番外編「彼女の趣味」

106

第十二話「MISSION 03」深海鉄

騎撃破 01」 115

第十三話「MISSION 03」深海鉄

騎撃破 02」 129

第十四話「MISSION 03」深海鉄

騎撃破	03	——	——	第二十一話	「MISSION04	黒い	138
第十五話	「MISSION03	「深海鉄	——	鳥	04	——	243
騎撃破	04	——	——	第二十二話	「MISSION04	黒い	145
第十六話	「番外編	「汚れ役の唄	——	鳥	05	——	251
167	——	——	——	第二十三話	「EXTRA	MISSION	0
第十七話	「番外編	「工廠暮らしのヤナ	——	N	「死神艦隊撃破	01	268
エツテイ	——	——	——	第二十四話	「EXTRA	MISSION	0
第十八話	「MISSION04	「黒い鳥	——	N	「死神艦隊撃破	02	283
01	——	——	——	第二十五話	「EXTRA	MISSION	0
第十九話	「MISSION04	「黒い鳥	——	N	「死神艦隊撃破	03	298
02	——	——	——	第二十六話	「EXTRA	MISSION	0
第二十話	「MISSION04	「黒い鳥	——	N	「死神艦隊撃破	04	317
03	——	——	——	第二十七話	「EXTRA	MISSION	0
224	——	——	——	——	——	——	——

N	「死神艦隊撃破」05	335	第三十五話「MISSION05」	AC
	第二十八話「EXTRA MISSION」		特別演習「05」	
N	「死神艦隊撃破」06	352	第三十六話「MISSION05」	AC
	第二十九話「木蓮を縛るもの」	367	特別演習「06」	
	第三十話「空母の決意」	387	第三十七話「MISSION05」	AC
	第三十一話「MISSION05」	395	特別演習「07」	
C	特別演習「01」		第三十八話「MISSION05」	AC
	第三十二話「MISSION05」	407	特別演習「08」	
	特別演習「02」		第三十九話「番外編「アオバ・リポ」	
	第三十三話「MISSION05」	419	ト	
C	特別演習「03」		第四十話「番外編「弟子達の憂鬱と師匠達の雑談」	
	第三十四話「MISSION05」	439	第四十一話「MISSION06」	沈
	特別演習「04」			

默海域攻略—01— | 531

第四十二話「MISSION 06」 | 沈默

海域攻略—02— | 538

第四十三話「MISSION 06」 | 沈

默海域攻略—03— | 549

第四十四話 | 番外編「決戰前夜」

563

第四十五話「MISSION 07」 | 本營

奪還—01— | 570

第四十六話「MISSION 07」 | 本營

奪還—02— | 578

第四十七話「MISSION 07」 | 本營

奪還—03— | 586

第四十八話「MISSION 07」 | 本
營奪還—04— | 601

第一話「艦載機『蒼木蓮』が開発されました」

「ふうんふうん、ふうんふうん……」

執務室から、正確には目の前の男から発せられる鼻歌に秘書艦『加賀』はため息をつく。就業時間とはとくに過ぎていくのに、目の前の男はいまだに業務を始めようとせず新聞とにらめっこを続けていた。

「現在マルキュウマルマル。提督、仕事をする気はあるんですか？」

「加賀、俺はもう、いつ提督を引退するか、最近はそれしか考えてなくてさ」

「でしたら明日にしてください。本日は仕事があります」

「明日は雨らしい。辞めるの日は晴れた日って決めてる」

本当はやめる気など最初から毛頭無いくせに……。そう思いながら加賀は再び呆れたようにため息をつく。

「それで、本日はどうなさるので？」

「そのことなんだがな……こいつをみてくれ」

提督は先ほどまで読んでいた新聞紙の一端を見せる。なんてことない星座占いの欄だった。

「ほれ、ここ…今日の俺は『新しい発見があるかも』だそうだ。というわけで加賀、悪い艦載機の開発を頼む。あのクソ妖精どもも今日ぐらいいは良いもん作ってくれるだろ」
「艦載機…ですか？」

「ああ、この前瑞鶴がウチにきたろ？おかげで艦載機が足らなくてな」

「ああ、五航戦の……」

「五航戦って…そりゃ『前世』ってやつの話だろ？今はオレのとこの一航戦だ…そうなつてもらわなきゃ困る。ウチの正規空母はお前らしかいないんだからな…」

初老の提督、白鳥太志しらとりふとしが率いるこの鎮守府は最近できたばかりの鎮守府だった。といつても新参だからというわけではない。人類の敵、深海棲艦との大規模戦闘「MI作戦」での人類側の大敗―。

これにより制海権と多くの戦力を失ったこの国は戦力の再編成を余儀なくされ、生き残りを寄せ集めて出来たのうちの一つがこの鎮守府だった。

この作戦で特に空母の被害は酷く、当初、白鳥鎮守府に配属された空母はかねてより彼の艦隊に所属していた加賀のみであったため、艦載機は彼女が運用する分しかなかったのだ。

「…赤城さんが居てくれれば……」

加賀はその作戦で失った、かつての仲間を思い出していた。自分たちを逃すためにし

んがりを務めた、勇敢な彼女の姿を…。

「加賀、俺は過ぎてしまったことに興味はない。人生なんて、結局は後悔だらけ…：その何が悪い…：。残っちゃった俺らは残っちゃったなりにやることをやるしかないのさ」

「…：。わかりました、開発を行ってきます」

「ああ、第三倉庫の資材を全部使い切ってかまわん。出し惜しみはしなくていいからな」
「はい…：。」

加賀は工廠へ向かおうと執務室のドアに手をかける。が、何かを思い出したように提督のほうへ振り返った。

「…：とここで提督、先ほどおっしゃった言葉は本当よね？机の上の書類…：提督としてやることをやって」おいてください」

それだけ言うとし強めにドアを閉じ、加賀は去っていった。

「こいつはやっちゃまったな…：」

別にできないわけではない。しかし彼はこういったデスクワークが好きではなかった。いつもなら適当に加賀に任せたりもするのだが、今回はそうはいかない。

「おかしいな…：。今日の運勢は結構いいはずなんだが」

そう呟きながら提督は再び占いの欄を見る。

「新しい発見ねえ…：この紙くずの処理をやらなきゃならないんだ…：。せいぜい期待させ

てもらおうとするかね」

——この日、新しい発見は確かにあった。しかしそれは彼の期待を大きく超える『イレギュラー』であつたことは、この時はまだ夢にも思つていなかった。

◇ ◇ ◇

工廠に着いた加賀は所定の箇所へ資材を運搬し、目の前の製造機に目を向ける。鎮守府を鎮守府足らしめる存在。これは深海棲艦により海路を閉ざされ、藁にもすがる思いでこの国が見つけ出した対抗策だつた。

この国には他国に点在する『タワー』をまるで逆さにして埋め込んだような『地下遺跡』が存在している。その『遺跡』から発掘され、原理は不明だが資材を入れればそれに見合った何かを建造する装置。

現在解明されているのは主に三つ。ある一定の操作を行うと、艦船にAMSと呼ばれている装置を組み込み、運用性、機動性などあらゆる性能を向上させつつ、*“*たつた一人*”*で運用することができるといふ破格の性能を誇る兵器を作り出すことと、その兵器と対になる、AMS適正を持った人間の遺伝子情報と人格を与えたクローンに『前世』と呼ばれる艦船の戦闘オペレーションを記憶させた強化人間を作り出すこと。そしてその兵器関連の兵装を開発できること。

——兵器と対になるクローン強化兵は『艦娘』などと呼ばれている。

「結局、〃これ〃はなんなのかしら…」

その『艦娘』の一人である加賀はほそりと呟く。自分を生み出した存在であるが、加賀はこの装置のことをあまり良くは思っていないかった。

まるでヒトを兵器のパーツとして生み出す装置。そのくせ操作するタッチパネルには『妖精』とあだ名がついた二頭身のかわいらしいAIが映っている。自分たちの普段身に着けている衣装も、建造時に一緒に作られたものだ。着せ替え人形か何かのつもりなのか…。まるで玩具感覚だ。兵器もヒトも…。古代人の考えはまるで理解できないし…したくもない…。

しかし、それでもこの装置を利用しなければ自分たちが滅ぶ現実が目の前にある。加賀は、よくわからないまま使えるものをつかう気持ち悪さに目を瞑りタッチパネルに映る『妖精』へいつもどおりに指示を出した。

「不明なユニットが接続されました」

突如、画面が真っ赤になりノイズが走る。

「故障!?!なに…一体何がッ!?!」

予想だにしない出来事に加賀は焦る。普段は鉄面皮で何があっても冷静な彼女であったが、このときばかりは冷静でいられなかった。この装置は鎮守府の生命線であり、なにかあれば鎮守府存続の危機である。加賀は急いでタッチパネルを操作し、作業を中断しようとした。しかし――。

「駄目……操作を受け付けない……」

加賀の操作を一切無視し、装置は起動を続けた。そして画面に文字が浮かび上がる。

『艦載機―AC：R・I・P・3／Mを開発中』

『パイロットデータを確認、マグノリア・カーチスを製造開始』

『戦闘オペレーション：ブルーマグノリアを転送中』

『高速建造システム起動、あと1分で建造を終了します』

まったく聞いたことの無い艦載機が勝手に開発され、本来艦船建造時にしか起動しないクローン製造装置まで動いている。あまりの事態の連続に加賀は立ち尽くすしかない、一分という時間はあつという間だった。

重い金属音を出しながら兵装を開発する装置の扉が開く。中から姿を現したのは補助AIで飛ばすプロペラ機ではなく、蒼い色をした鉄巨人であった。

「これは……一体……」

「―それはアーマードコア、R・I・P・3／M……ここ」では艦載機『ブルーマグノリ

ア』で登録されるらしいわ」

加賀は声のするほうへ視線を移す。そこには一人の女性が立っていた。自分と同じような胴着を身にまとい、鋭い眼光を放っている麗人…。

設定されている年齢は自分と同じくらいか、少し上くらいだろうか。恐らくこの鉄巨人と一緒に作られていた人物であろう。

「あなたは…艦娘なの？」

「なにそれ？私はそのパイロットよ。名前はマグノリア・カーチス…：マギーでいいわ、そっちのほう私が私も慣れてる。…：とりあえずあなたの敵ではないわ、少なくとも今はね」

アーマードコア？艦載機のパイロット？さつきから続くありえない事態に頭が追いついていかない。困惑している加賀の状況を見かねてか、マギーは言葉が続けた。

「私も『私をここへ送ったバカ』が面倒くさがってこれ以上のことは聞かされてないの。よければここがなんなのか、今どういった状況なのか説明できるヒトのところへ案内してもらえない？」

「え、ええ…：わかったわ…：。こつちよ…：ついてきて」

とりあえず提督に相談しよう。そう判断した加賀はマギーを手招きし、提督のいる執務室へ向かいだした。

——これが後に、激戦を共に駆け巡る『青い空母』と『蒼い艦載機』の出会いだった。

第二話「—LAST RAVEN—」

「悪いな…ファットマン…初めて…任務失敗みたいだ……。インターネサインを…破壊しきれなかった…。あと一歩だったんだがな…もう機体がウンともスンともいわないよ…ははは……」

ノイズの混じった通信が、輸送ヘリのコックピット内に静かに響く。『ファットマン』と呼ばれる老人は、通信の主——長年連れ添った相棒へ返信する。

「なあに、オマエさんはよくやったさ。むしろ頑張り過ぎたぐらいだ、ここで休んでも誰も文句は言わんよ。……それに時間稼ぎにはなった、少なくとも俺が老後を楽しく生きるぐらいにはな」

彼らはフリーの傭兵と運び屋だった。タワーを巡る三大勢力の戦争、その渦中で彼らはひたすら戦い続けていた。しかし、ある日を境にその戦争は様相を激変させる。

——後に『大破壊』と呼ばれた日

突如として、まるで空を覆いつくすような謎の特攻兵器が地上に降り注ぎ、三大勢力は瓦解、世界は壊滅的な被害を受ける。三大勢力の生き残りは戦争をやめ、新たに『連

合』を発足し事態の收拾に努めようとしが、J・Oを名乗る人物が他の武装勢力をまとめあげ、〃傭兵による新たな秩序の創出〃を御旗とした『vertex』を発足する。

これにより三大勢力の戦争は『連合』と『vertex』という二大勢力の総力戦へと姿を変えた。

戦力が充実している『vertex』に武装組織や傭兵が続々と集まっていく中、ファットマンとその相棒の傭兵は『連合』に組した。

理由は、ファットマンの相棒いわく「こつちのほうが面白そうだから」

〃好きなように生き、好きなように死ぬ〃それが彼らの哲学だった。

三大勢力の戦争時から名をはせていたファットマンの相棒は『vertex』から危険視され、惜しげもなく戦力が投下される。しかし彼は並み居る強豪、押しつぶすような物量も全て焼き尽くし、誰もが畏怖する存在——『黒い鳥』と呼ばれるようになっていた。

そして、ついに『vertex』の首領J・Oと対峙する。

「…やはりキミが残ったか。今のところは私のシナリオどおり…。後は憎まれ役の幕引きか…。キミの実力は試すまでもないだろう、だが…。これはわたしの我俣だ…私が生きた証を…。傭兵として生きた証を…最後に残させてくれ！」

J・Oは紛れも無く強かった、ほとぼしるほどに……。かつて行われていた『選定』に

含まれていれば、きつと最後まで残ることが予想されるくらいに。

しかし相手が悪かった。蠱毒の壺と化した戦場を生き残った『黒い鳥』の傭兵は、もはや人知を超えた強さを身に着けておりJ・Oの駆る狐目の名を冠したACは瞬く間にスクラップ寸前と化す。

「なるほど…やはり…流石だ…」

「…おまえさん、一体何が目的だったんだ？これも、さつき言っていた“シナリオ”の内なのか？」

「ああ…。キミたちに…私から依頼をしたい…。報酬は…『人類の未来』だ…。きつとキミなら…受けて…くれるだろう…。これで…全てが終わる…礼を言う…」

J・OのACから火が噴出し、機体が崩れ落ちる。同時に『黒い鳥』の傭兵へ依頼のメールが届いていた。

依頼内容は『インターネサインの破壊およびパルヴァライザーの撃破』

——傭兵はある兵器の噂を聞いていた。

どこに属するでもなく、戦場に突如として現れ敵味方関係なく全てを破壊する自立兵器が存在すると、『財団』により起動させられた似たような兵器の数々と戦っていたことがあつた。傭兵はその噂のことを思い出す。その依頼は、まさしくその噂に関する

ることだった。

《最後まで生き残ったキミにお願いしたい。大破壊の日に目覚めた兵器、インターネサインおよびパルヴァライザーの破壊を依頼する。パルヴァライザーは戦闘を繰り返し、そのデータを蓄積し、永久に成長をし続ける兵器だ。ソレをとめるにはその統括機構であるインターネサインを破壊するしかない。…パルヴァライザーはすでに数多くの戦闘を経験している。その強さは想像を絶するものになっているだろう。だが、数々の戦場を渡り歩き、人類の戦闘種として極限にまで至ったキミならばきつと…》

《最強と呼ばれるその力で、未来を救ってくれ…》

メールにはJ・Oの依頼内容と、インターネサインがある座標データが添付されていた。

「ケツ、どうやら『vertex』はもともとオマエさんにぶつけるために組織したようだな。とんだ食わせモンだ…オマエさんに目をつけるヤツにはロクなのがない。で、どうするんだ、相棒？うけるのか？」

「当然だろ、ファットマン」

「聞くまでもなかったか…やれやれ…今回はタダ働きだぞ…」

そうして彼らは指定された座標へと向かい始める。これが『黒い鳥』の最後の任務だった。

指定された施設に侵入し、奥へと『黒い鳥』の傭兵は進む。最奥にまでたどり着くと、待ち構えていた異形のモノが姿を表す。

全身を青色に装飾し、蜘蛛の足のような節足を広げ宙に浮いている…。それは全てを抹殺するケモノへと進化を遂げたパルヴァライザーだった。

——『ケモノ』と『黒い鳥』の戦いは熾烈を極めた。

互いの弾が装甲を削っていき、互いの剣が四肢を刻んでいく…。誰も入り込めない領域の戦い…まさしく『最強』を決めるような決戦。『頂』に到達したのは『黒い鳥』だった。

『黒い鳥』の傭兵は勝利の余韻に浸るまもなく、インターネサインを破壊し始める。残っていた弾を全て撃ち尽し、残った愛刀の『ANOTHER MOON』で中心施設を切り刻む。しかし、パルヴァライザーとの戦闘により彼の愛機は限界を迎えていた。あと一撃…：インターネサインのコアヘレーザーブレードの刃が食い込みかけたところで彼のACから火柱が上がり、ブレードへのエネルギー供給がストップする。

各関節から火花が散り、彼のACは動きを止めた。

そして物語は冒頭へと戻る。『黒い鳥』の傭兵は、長年自分の翼となってくれた老人との最後の会話を楽しむことにした。

「なあ…ファットマン…老後とやらはどうするんだ…？」

「そうだな…海の近くに家でも構えて…釣りでも楽しもうかな？知ってるか？最近じゃあ汚染も随分マシになって、魚が捕れるところもあるらしい」

「魚か…食ったこと無いな…美味しいのかな？」

「…俺がそつちに〃いく〃時になったら持つていつてやるよ」

「そうか…そいつは…楽しみ…だ。…もし…マギーに会ったら…伝えておくよ……一緒に…食べようって…昔みたいに…」

「…ああ、頼む」

「……………今ま…で…………、あり…がとう、ファット…マ…………」

『黒い鳥』は、最後に自らを焼き尽くし、この世から去った。

◇ ◇ ◇

「これがあらまじだよ、ブルーマグノリア」

甲高い男の声が、マギーの頭の中に響く。それはかつて『財団』と呼ばれたものの声だった。

「おまえ…私のバックアップをとっていたの!？」

マギーは『財団』により戦えない体を捨て、意識・人格を電子化するファンタズマ・ビーイングという処置を受け、『黒い鳥』の傭兵へ戦いを挑んでいた。

『黒い鳥』の傭兵は彼女の相棒でもあった。しかし、彼の強さ、そして〃自身の魂の欲

求”に彼女は惹かれ、彼と袂を分かち、殺しあつた。

——すべては互いの納得済み……だから彼女は自分が燃え落ちるとき、心の底から「これでいい」と思った。だからこそ”バックアップをとられていた”という事実は彼女に強い憤り与える。しかし、『財団』はマギーの苛立ちを無視して語りだす。

「キミが思っている以上に僕のできることは少ないんだ。だから保険だよ、そしてソレを使う時がきた、ただそれだけさ」

「なにを勝手にツ!!」

「まあまあ、話を聞いてくれよ。彼は……あの傭兵は、本当によくやつてくれた……忌々しいぐらいに。三大勢力によるタワーを巡る戦争、過ぎた力が氾濫する戦場……あれで人類は滅ぶはずだった。しかし彼が全部焼き尽くしたせいで戦争は長続きし、結局はうやむや。ACとかも全部壊しちゃったもんだから争いは小規模になり、人類はいまだに生き残っている。まっ、このままじゃ近いうちに滅ぶけどね。……だからキミに人類を守る手助けをして欲しいんだ」

「……一体どういうこと？人類を滅ぼすのがあなたの目的でしょ？」

「キミは少し勘違いをしている。”人間を滅ぼすのは人間自身だ”。僕の目的はそれの『証明』だよ……。そして今の状況は僕の”趣味に合わない”」

「さつきから遠まわしな表現を……いい加減本題に入って頂戴ッ！」

「……彼が破壊し損ねたインターネサイン、あれが復活している。キミにはそれを探し出して破壊してほしい。復活したインターネサインは戦闘オペレーションを回収する劣化パルヴアライザー……。いまからキミを送るところでは『深海棲艦』だったかな？ それを世界中にばら撒いていてね、人類を圧殺しようとしている。インターネサインは僕の『管轄外』でね、本体の場所ははつきり言っただけでわかってない。進化の速度は緩慢のようだけど、それでも下手に大規模な戦力と投入すると餌を与えるだけ……。だからキミが適任なんだ」

「……趣味が合わないっていうのは？」

「さっきも言ったろ、僕の目的は『証明』だ。人間を滅ぼすのは人間だということの……。プログラムに従うだけの鉄屑に滅ぼされるなんて、僕は許さない……。これを取り除けば、ヒトがヒトを殺す戦争へ正しく推移する。…そして証明してみせる、彼を…人間の可能性を否定してみせる…」

「それを聞いて私が依頼を受けるとでも？」

「キミは受けるよ、絶対。それに拒否権はない、キミの体も作っちゃってるしね。ちゃんとACも用意してある。あつちでは艦載機『ブルーマグノリア』で登録されるよ」

「なッ!？」

「話が長くなった。もう質問は受け付けないよ、あとは現地のヒトに聞いてくれ。新し

い戦場を楽しんでくるといい……。じゃあ、よろしく」

『財団』に文句を言おうとするよりも早く、マギーの目に光が差し込んだ。思わず目をこすり、そのことに驚く。かつて捨てたはずの肉体が再びある。しかももつと以前に失った左腕も込みで……。服も…見たことの無いものであるが身に着けている。

「現地のヒトに聞け…ね」

とりあえず現状を把握しよう、そう決心しマギーは光が指している方向へ歩き出した。

第三話 「歓迎会をしよう、盛大にな」

秘書艦からの報告を受け、白鳥提督は頭を抱えていた。

「にわかには信じられんな…」

最初、加賀がマギーという女性を連れてきたとき、『開発』と『建造』を間違えて行っちゃったのか？と思っただが、どうやらそうではないらしい。加賀からの報告はこうだった。

——うまくいけば空母一隻分の艦載機が開発できるだけの資材を消費し、たった一機の艦載機”と”そのパイロット”が”遠隔操作により”開発された—

なるほど、加賀も混乱するはずだ。本来艦載機は補助AIを搭載し、空母の艦娘の指示で自立飛行をする兵器だ。ところがこの艦載機はパイロットが存在し、しかもその形状は7mほどの鉄の巨人だという。これはもしかして夢か？と思ひ、手の甲をつねってみたがちゃんとした痛みがあった。

どうやらこれは現実らしい。

「まあ、うなだれていても何も始まらない……。マギーといったな…改めて自己紹介させてもらおう。俺は白鳥太志…この鎮守府の提督だ。色々聞きたいことがあるようだが

「まずこちらの質問に答えてはくれんかね」

「ええ、構わないわ」

「……まず一つ。おまえさんと艦載機を作った装置、それを“遠隔操作”した存在……一体なものだ？ 情けない話だが我々はアレを使いこなせているわけではなくてね。直接操作しても、造るモノの指定すらできん。はつきり言って脅威だ……そいつは。そいつに作られたキミも含め……少なくとも敵か味方かは知りたいたいところだな」

「……あいつは傍観者よ……多分これ以降しやしやりでてくることはないわ。で、その秘書にも言ったけど、わたしは味方……。少なくとも『インターネサイン』を破壊するまではね」

「インターネサイン？ なんだそりゃ？」

「話すと長くなるんだけど……そうね、昔話をしてあげるわ」

マギーは語った。『財団』がタワアのAIであること、その『財団』が引き起こしたタワーを巡る三大勢力の争いが過去にあったことを。そしてその最中、突如として目覚めたインターネサインとパルヴァライザーという兵器のことを――。

「――以上があらまし……。で、『財団』の“趣味の問題”で私がここに送られてきたというわけ」

「なるほど……余計に頭が痛くなってきた……」

衝撃の事実の連続に白鳥提督は再び頭を抱える。得た情報と“彼女”をどう扱ったものか……？執務室が沈黙に包まれる。口火を切ったのは加賀だった。

「提督……もし彼女の話が本当だとしたら……。深海棲艦の正体が戦えば戦うほど成長する兵器だとしたら……私たちは……一体どうしたら……。」

その声には不安がこめられていた。自分たちが頑張れば頑張るほど敵は強くなり、いずれ確実に自分たちが敵わない敵が現れる。マギー情報が確かであれば、真綿で首を絞められているようなものだった。

「加賀……」

白鳥提督は腹をくぐることにした。落ち着きを取り戻すために軽く一呼吸吐き、いつもの陽気な口調で喋り出す。

「なあに、やることは変わらんさ。仮に彼女の話が本当としても、戦わない理由にはならんしな。むしろこの戦争の終わりが見えたんだけ、僥倖じゃあないか。予定通りやつらから制海権を取り戻す。そのついでにインターネサインを探し出すのが増えただけだ。……このことはとりあえず俺たちだけの秘密にしておこう。下手に報告しても混乱を招くだけだしな。なにより本営の頭でつかちどもに説明できる口上を俺は持ち合わせてない」

ハハハ、と白鳥提督は笑い、マギーのほうを見やる。

「おまえさんは味方だったな。ようこそ、我が鎮守府へ。『財団』とやらの秘密兵器なんだろう？こちらとしても多くの資材をぶっこむハメになったんだ、その分の戦果、期待させてもらっていいんだよな？」

「そうね……正直言うと、私はバルヴァライザー……もとい深海棲艦と戦ったことがないからどんなやつらか全く知らない。あなたたちの戦力も良くわかってない……。だからあなたの期待に沿えるかは、今はまだ答えられないわ」

「ただ……」

折角もらった新しい魂、新しい戦場。マギーは『財団』から話を聞いたときから、こころの奥底から湧いていた想いを口にした。

「——負けないわ、何にも、誰にも」

白鳥提督はぞくりとした。なるほど、話を聞く限りイカれてる『財団』とかいうのが送ってきただけある。

「それだけ聞ければ十分だ。頼もしい限りだよ……」

——そして恐ろしい何かを感じる。

これは見極める必要があるな、彼女のことを……早急に……。白鳥提督は一案を出すことにした。

「よし、マギー、俺たちはまずお互いを良く知る必要があると思う。そこで『歓迎会』をしよう、盛大にな」

「歓迎会？」

「ああ」

いつの間にか不安の表情が晴れ、いつもの無愛想な顔へ戻っていた秘書艦に白鳥提督は声をかけた。

「加賀、明日予定の演習、今からやるぞ！準備しろ！」

「今からですか……!? 確かに参加者は全員待機中ですから構いませんが……しかしあれは瑞鶴の艦載機運用試験を兼ねていた筈です。彼女の分の艦載機が足りませんが……いかなさるおつもりで？」

「おまえのを渡せばいいだろう？ なあに、偵察機ぐらいは少し残してやるよ」

「私の艦載機を!!……五航戦の子なんかに譲れません」

キツと加賀は白鳥提督を睨んだ。加賀にとつて、AIの調整を繰り返し一緒に戦ってきた愛機達は誇りだったのだ。しかし、白鳥提督は加賀の睨みにひるむことはなかった。

「まあそう言うなって。代わりにおまえには最新機を配備してやるから……なあ、マギー」

「私？」

「どんなナリをしても、『艦載機』なんだろう？ だったら空母に載せなきゃな、ハハハハ」

ひとしきり笑い声を上げた後、白鳥提督の口調は急に真面目になる。

「……これはおまえさんの試験も兼ねてる。さつきも言ったが、おまえさんには相当の資源をぶっこんでいてな。相応の働きが期待できないようであれば、おまえさんの仕事はパイロットでなく皿洗いになる。艦載機も溶鉱炉行きだ、うちは資材がないんでね」
これは半分本当だった。イレギュラーな存在がわざわざ送ってきた艦載機、きつと弱いはずは無い。ただ、もし自分の艦隊の害になるようなモノであれば、そんなものを運用する気は無かった。

「なるほどね。いい歓迎会だわ、嫌いじゃない」

そんな提督の思いを知ってかしらさずか、マギーの眼は生き生きしだす。その眼は『黒

い鳥の傭兵』と対峙していた時の……傭兵の眼に完全に戻っていた。マギーは、まだ提督を恨めしそうに睨んでいる加賀のほうへ振り向き、手を差し伸べる。

「加賀……だったわよね？ 私は、指示を受ける側で戦うのは久しぶりなの……。あなたのおペレーション、期待してるわ」

「……私も、あなたにはそれなりに期待しているわ」

むすつとした表情のまま、加賀はマギーと握手を交わす。

「よろしくね、加賀」

「ええ、よろしく」

最初の彼女たちの戦場は『演習』に決まった。

第四話「作戦会議」

「うゝ眠いつぽいゝ」

「まったくだぜ、クソが！ 大体、演習は明日だったはずだろ…」

夕立、摩耶はぶつくさと言句を垂れながら会議室へ向かっていた。休日をいいことにグースカ寝ていたところを目の前を歩いている霧島にたたき起こされ、二人はとても不機嫌だった。

「休日とはいえこんな時間まで惰眠を貪っているのが悪いのですよ。もしこれが演習ではなくて緊急事態だったらどうするんですか、まったく…」

そう言っているものの、霧島も二人の気持ちはわからなくも無かった。いくらなんでも急すぎる。なぜ予定を早めたのか自分も良くわかっていないのが現状だった。

そもそも今回の演習は新入りの瑞鶴、秋月の練度を高めるための、航空戦が主軸の演習だったはずだ。特に空母が加賀さんしかいないうちの鎮守府では瑞鶴の育成は急務であり、それゆえ足りない艦載機を今日作れるだけ作って搭載し、明日その演習をする予定だったはず…。だから今日演習を行うのはなにかおかしい…。

「提督のことですから、なにか考えがあるのでしょうが…」

そう眩きながら、霧島は会議室のドアを開ける。

「失礼します。戦艦霧島、および重巡摩耶、駆逐艦夕立、到着しました」

先に来ていた加賀に軽く敬礼をすると、彼女の横に見慣れない女性がいることに気がつく。初めて見る顔だ……新しい艦娘だろうか？もしかしたら彼女が今日の演習となにか関係しているのかもしれない。

（これは早速確認せねば……とはいえ初対面の方ですしここは——）

どう声をかけるか計算しているうちに、同じくその女性に気づいた摩耶に先手を取られてしまう。

「お、もしかしてあんた新入りかい？アタシ、摩耶ってんだ、よろしくな。艦種は重巡洋艦だ、対空ならまかせとけ」

さつきまでの不機嫌な顔はどこへいったのやら、自分が先輩だぞ、とでも言いたげな顔をして胸を張っている。しまった、と霧島がたじろいでいるのも東の間に、いつのまにか夕立も興味津々といった面持ちでその女性に近づいていた。

「こんにちは、白露型駆逐艦夕立よ。よろしくね！おねえさん、新しい艦娘っぽい?! っしよにがんばるっぽい!!」

——完全に出遅れた。

いや、むしろ主役は遅れてやってくるものだ……。私の計算に狂いはありません！ここ

は戦艦としての威厳を見せつけなければッ！霧島もマイクチェックをするときのようにノドを鳴らし自己紹介をはじめた。

「ンンッ あー、はじめまして、私は霧島といいます。艦種は金剛型戦艦、頭脳戦なら誰にも負けません！」

こういうのは第一印象が大事、とメガネをクイッとあげる。

(きまりました、このまま相手の情報を聞き出す追撃開始です！)

そう言わんばかりに霧島は話を続けようとした。しかし、それは加賀の手を叩く音にあえなく遮られてしまう。

「みなさん、自己紹介は済んだわね。色々聞きたいことはあると思うけど、演習まで時間があります。彼女のことは作戦会議内で紹介するので、とりあえずは席に座ってちやうだい」

うう、これからだったのに……。やはり最初に出遅れてしまったのが痛かったか？などと思いつつ霧島は新入りの女性を見る。加賀さんと似たような服装からして空母の艦娘だろうか？でもそうすると余計に今日の演習のつじつまが合わない……。とはいえ、これ以上考えても答えは見つからなさそうだ……彼女の紹介まで待つしかない。

霧島は胸にもやもやを抱えたまま、しぶしぶ着席した。

◇
◇
◇

マギーは、さつき白鳥提督に啖呵を切った態度はどこへいったのやら、といったように意気消沈していた。

理由は二つ。一つは、さつきの彼女たちの自己紹介で毒気が抜かれてしまったことだった。

——どうも今まで会ったことのある傭兵と彼女たちはベクトルが違う。

傭兵の中には変わった者も沢山いた。女性だつて普通にいたし、夕立と名乗る子と同じぐらいの少年兵だつて珍しくはなかった。実際、自分もあの子ぐらいの歳には戦場に赴いていたほどだ。

「クソ傭兵が！ブツ殺してやる!!」とすさまじく口汚い女もいたし、「世に平穩のあらんことを」なんてのたまう新興宗教風情もいた。

だが、そのどれとも違う。緊張感がないというか、殺気がないというか……。とにかく今まで経験したことのない雰囲気当てられていた。

これが私の味方か……馴染めるだろうか？マギーの心情を推し量つてか、加賀はマギーに小声で呟く。

「気持ちにはわかるけど、一応こう見えても彼女たちは激戦を潜り抜けた猛者たちよ。やるときはやってくれるわ、一応……」

「……一応が余計よ」

軽くうなだれているマギーを尻目に、加賀は演習の説明を始めた。

「今作戦は空母を旗艦とした敵艦隊を想定した演習よ。こちらの戦力は私、正規空母『加賀』を旗艦とし、戦艦『霧島』、重巡洋艦『摩耶』、駆逐艦『夕立』。——対する敵艦隊は旗艦を正規空母『瑞鶴』とし、戦艦『金剛』、重巡洋艦『愛宕』、駆逐艦『吹雪』、駆逐艦『秋月』の編成。なお、私の艦載機はほとんど瑞鶴に艦載、私に艦載されるのは瑞鶴に乗り切らなかつた十数機と……新兵器、『艦載機ブルーマグノリア』一機のみ。……作戦成功の要はこの『ブルーマグノリア』にかかっているわ」

「ちよつとよろしいでしょうか？」

「なにかしら、霧島」

「その……今回の演習はあまりにも航空戦力差が酷過ぎます。いくら瑞鶴さんの錬度が低いとはいえ、たつた一機の新兵器でこの差を埋めるのは難しいと思います……」

霧島の疑問は当然のものだった。空母の強みは航空機による大火力の先制攻撃と、制空権を確保し戦況を有利にすることができるところであるが、それは大規模の航空隊がいることが前提である。

しかも相手に「防空駆逐艦秋月」までいるとなると、もはや現在の加賀の艦載機量では戦力が無いに等しい。横に居た摩耶と夕立も同じ考えなのか、うんうんと頷いている。

無論、そんなことは加賀も百も承知だった。

「わかつているわ、そんなこと。でも、やつてもらわなければ、困るのよ……。というわけでマギー、自己紹介とブルーマグノリアの性能を教えてくださいませんか？」

——ここでお鉢が回ってくるのか。

説明を聞いていた3人を見ると、「どういうことだ?」といったように色めき立っている。あまりこういう空気で自己紹介をするのは好きじゃないが、時間もないしそうもいつてられない。加賀も、ちよつと流れは強引だが、それを配慮して自己紹介を兼ねつつACCの性能を話す場を設けたのだろう。

マギーは立ち上がり、口を開いた。

「申し遅れたわね。はじめまして、私はその新兵器のパイロットを務めるマグノリア・カーチスよ、マギーでいいわ」

ここまで言ったところでさっそく横槍が入る。入れたのは摩耶だった。

「艦載機のパイロットって……マジかよ? 正気か?」

彼女たちの戦闘において艦載機は弾と同じ消耗品だった。空母の命令に従いAIによつて自立飛行する航空機……戦闘をすれば必ず何機かは失ってしまう。だからこそ、特に対空を得意とする摩耶にとつてそれに乗るといふのは自殺行為に見えたのだ。

無論、この見解は間違っている。それを正すためにマギーは説明を続けた。

「私は正気よ。あなたの言ってる艦載機っていうのは格納庫にあったプロペラ機のことを言ってるのでしょうか。『ブルーマグノリア』は全くの別物。AC（アーマード・コア）といって、強固な装甲と高い火力を備えた7〜8m大の人型兵器よ」

「人型ア〜？」

「あつ、夕立知ってるよ！ 娯楽室のマンガにあつたつばい。ロボットっていうんでしょ!? 街中でガシインガシインって戦って……海の上で戦えるの?」

「人型ということは地上戦を想定しているように見受けませんが……」

マギーの説明を受け、三人は余計に疑問符を浮かべる。三人と違い直にACを見ていた加賀も、プロペラも羽もないその姿に実は同様の疑問を抱えていた。

説明を急かすように四人はマギーに視線を送る。

「……まあ、確かにACは本来地上戦用を想定したものよ。でも海上でも戦えなくはないわ。プロペラ機のように空を飛び回ることはできないけど、最大約330 Km/h（180ノット）で海面を滑空することぐらいならできる」

その性能を聞き、夕立は目をキラキラさせる。

「すごい速いっばい!!」

だが、すかさず霧島から指摘が入った。

「いや……しかし零戦の最高速度は500 Km/hを超えます……艦載機とすると少し遅い

かも……。肝心の武装はどうなのですか？」

「そのことなただけで……」

途端、マギーは顔を曇らせる。苦虫を噛み潰したような表情をしながら彼女は答えた。

「模擬弾の関係で一部の兵装しか使用できないのよ……」

そう、コレがマギーが最初に意気消沈していたもう一つの理由だった。

マギーのAC『R・I・P・3/M』——ここでは艦載機『ブルーマグノリア』——の兵装は三つ。

レーザーライフル：A u l — K 2 9

ヒートマシンガン：A u v — G 3 9

CEミサイル：S u j — A 2 8

レーザーライフルはまあ、わかる。実弾を使用しない銃に模擬弾が装填できるわけないし、それは予想がついていた。問題はミサイルだ。演習の準備をするために明石とかいう艦娘に兵装の説明をしていた時だが、

「申し上げにくいのですが、マギーさん。このミサイル……とかいう兵器ですか？これに相当する弾はウチでは扱っていないんです……。工廠の装置で解析して登録すれば生産は可能になると思うのですが、生憎……その、演習までには間に合いません。幸いヒ-

トマシンガン？には12.7cm連装砲の模擬弾が入りましたので、それだけでガンバってください！」

などと言われてしまっていた。実戦だったらそれでもブーストチャージで戦えなくてはなかったかもしれないが……艦体を破損させないために模擬弾を使用するのに、蹴るなんてもつてのほかだ。

つまりヒートマシンガン一丁しか使える火力はない。

この手の兵器は装甲の弱い相手ならあつという間に屠ることは出来るが、装甲の厚い相手となると途端に効果が薄くなる。マギーのいた時代とイメージがかけ離れていなければ、恐らく戦艦、重巡洋艦には弾が弾かれてしまうだろう……。

明らかな火力不足……敵艦隊を倒しきることができない。どうあがいても詰んでいく状況であつたため、マギーは意気消沈していたのだ。

「——そういうわけで、今回私が出来そうなのは駆逐艦を倒すことと、空母の甲板をつぶすことぐらいしかないわ……。あとは……残弾によるけど戦艦、重巡洋艦の副砲をいくつかつぶせるかどうかってぐらいか……。悔しいけど……敵を全滅させることはできないわね……」

周囲が沈黙に包まれる。ああ、これは呆れられたか。期待の新兵器がこれでは……なんて思われてるに違いない。

しかし返ってきた反応は想像とは真逆のものだった。

「いやいやいやいや、そこまで出来れば十分だろ!? つか、なに一人で戦うこと前提にしてんだよ?」

「そんなに活躍されたら夕立の出番ないっほい!!」

「私の計算では十分に勝算はあります、みなさん作戦を練りましょう!」

マギーは一瞬理解が追いつかなかった。自分に課せられたミッションは、圧倒的な戦力差を覆せ、だと思っていた。だからこんな反応は想定していなかったのだ。

反応に困っているマギーに加賀は声をかける。

「マギー、確かにあなたが要になるとは言ったけど、一人でどうにかしろという意味ではないわよ。私たちは艦隊、お互い足りない部分を補って戦うもの。制空権は譲ることになるだろうけど、あなたにはそれを補えるだけの可能性がある。それだけで十分よ……ほら」

加賀が指を刺し視線を促した先には、三人がすでに作戦会議をはじめていた。

やれ、三式弾で対空を補うだの、そうすると砲撃戦がだの、駆逐艦を優先撃破してもらって夜戦にもつれ込むだの、さまざまな意見を言い合っている。

「やるときはやってくれると言ったでしょ?」

加賀は無表情な口元を少し緩ませ、このままでは口論が終わらないであろう会議をま

とめるためにその輪へ加わっていった。

——なるほど、やっぱりベクトルが違う。

彼女たちへの認識を改めねば……とマギーは思う。

自分がまだ傭兵だったころ、その強さゆえに一部の例外を除いて単独行動が多かった。依頼主も傭兵を使い捨てとしか思っておらず、与えられる情報も適当なものばかり……。それゆえ顔も知らない味方勢力は弾除け程度にしか思えず、信じられるのは自身の力のみだった。

気づけば加賀の言っていた「仲間を信頼する」という思考をいつの間にか失っていたようだ。……すぐに思考を矯正できるとは思っていない。それでも……。

マギーは彼女たちを見る。

（三大勢力の奴らや財団よりは信頼できそうだ、悪くない……）

「悪くない……か……」

いまさらそんなことを思うなんて……と自嘲しながら、マギーは加賀の後を追うようにその輪の中へ歩み寄っていった。

第五話 「FAST MISSION」 演習

——鎮守府近海、演習海域。

その海域の中央には小島群があり、この鎮守府での演習はその群をはさむような形で開始する。島々により最初は相手を確認することが出来ず、索敵から接近方法まで戦略を求められる地形となっている。

加賀の艦隊と反対側に五隻の艦船が輪形陣で待機していた。それは瑞鶴を旗艦とした、金剛、愛宕、秋月、吹雪の五人編成の艦隊であった。

「瑞鶴さんは演習開始と同時に偵察機を発艦。敵勢力の位置、兵装等の戦力の確認をお願いします。特に加賀さんに配備されているという新兵器には注意してください」

旗艦である瑞鶴に助言しているのは吹雪だった。彼女は白鳥提督の初期艦であり、この鎮守府の最古参の一人である。その経験を生かし、今回の演習が初出撃となる瑞鶴のアドバイザーとしてこちら側に配属されていた。

「わかったわ吹雪！偵察機発艦用意!!」

吹雪の助言どおり、瑞鶴は甲板のエレベーターから偵察機をあげ、発艦準備を整える。あとは演習の開始を待つばかりだった。

「Hey!! 瑞鶴く、そんな緊張しなくても大丈夫だよ。ちゃんとPlain通りやればワタシたちのVictoryで間違いないヨ」

緊張気味な瑞鶴を少しでもリラックスさせようと金剛は声をかけた。実際よほどのハマさえしなければ今回は勝てる勝負だった。

(今回加賀の艦載機の数は瑞鶴に切り切らなかつた十数機のみ。編成は、艦攻・艦爆が半数、艦戦・艦偵が半数ぐらいだったかな…。制空力も攻撃力もあまりに低すぎるネ。熟練した艦載機操作をしてくる加賀でも、この物量差は埋められないでしょ。だから索敵が済み次第、攻撃偏重の艦載機編成で発艦。摩耶や妹の霧島の対空も物量で押し切り、敵艦隊を蹂躪する。あとは島を盾にしながら一方的に観測射撃でFinish!! いくら新兵器とやらがすぐくてもこれは覆せないヨ…)

もしかしたら秋月の出番はないかも…とまで思っていた。

しかしそんな金剛を尻目に、吹雪の表情は険しかった。

実はこの鎮守府の吹雪は戦闘経験こそ豊富ではあったが、戦闘能力は最弱であった。艦船を操作するのに必要なAMS適正が他の『吹雪』よりも低いという障害を持った『粗製』だったのだ。しかしそれでも今まで生き残ってこれたのは、たゆまぬ努力と、もはや特殊能力ともいえる域の『危険察知能力』を持っていたためだった。

その能力が告げていた。

——加賀さんに積まれてる新兵器：あれは危険だ：と。

吹雪はまだその姿を見たことは無いが、今までに無い異質な圧力を感じていた。下手するとフル艦載した加賀さん以上かもしれない。はつきり言って異常だ。とはいえ、どんなものかサツパリわからないため対策のしようがなかった。

「…とりあえず予定通り展開するしかないかな…」

吹雪が小声で呟いた直後、演習開始のブザーが鳴り響いた。

勢いよく瑞鶴から偵察機が発艦する。この演習海域は地形こそ入り組んでいるものの、広さ自体はそこまででもない。偵察機が発艦してから程なくして瑞鶴から連絡が入る。

「敵艦隊を発見したわ！方角は11時、今のところ単縦陣。霧島さんも摩耶さんも観測機を持ってない…やっぱり制空権は諦めてみたい。多分対空特化できてるのかも…」

「かまいません、瑞鶴!!予定通りアウトレンジで決めちゃってヨ」

「ちよつと待って、加賀さんの甲板上に…人型の兵器？ツ!?なにあの加速力!!海面を高速で滑空してこつちに向かってきてる!!」

瑞鶴の偵察機は『ブルーマグノリア』が甲板上からグライドブーストで発艦する様子を確認していた。『前世』と呼ばれる『正規空母瑞鶴の戦闘記録』、それには全く存在しない未知の機体。対処がわからず瑞鶴はうろたえていた。そこへ吹雪から通信が入る。

「瑞鶴さん!! 加賀さんの戦闘機は確認してますか!？」

「えッ、ああえと…確認したわ! 全部艦隊の防衛にまわしてるみたい。艦攻・艦爆機の発艦はまだよ」

——となると今接近してるのはあの一機のみ。

よほど自信があるのだろうか? はたから見ると自殺行為にしか見えない。しかし、先ほどから胸を締め付けるような圧力は強くなるばかり……。油断はできない。

「瑞鶴さん! 現在敵艦隊に向かっている戦闘機の半分をその人型兵器へ! また合わせで、それに向けて艦隊砲撃をすること進言します!」

「ちよつとブツキー!? 敵は艦載機一機だヨ!? それはやりすぎじゃない?」

「相手の戦力は未知です…近づけるのは得策ではないと思います」

「でも…」

「まあまあ金剛さん、旗艦は瑞鶴ちゃんですし彼女に判断を任せましょ」

「ウゥ、まあ確かに愛宕の言うとおりだね…瑞鶴、どうしますか?」

「うっ、ええと…」

——正直やりすぎじゃ?…と瑞鶴も思っていた。しかしアドバイザー役の吹雪がコレほど警戒しているのを軽視もできない。代案も思い浮かばない瑞鶴は吹雪の進言を受け入れることにした。

「まず私の戦闘機でしかけるわ。戦闘機の離脱に合わせる形で各艦砲撃開始、それであの艦載機を確実に仕留めましょ！」

「了解!!」

かくしてA Cと艦隊との戦闘が開始された。

◇ ◇ ◇

「綺麗ね……」

加賀の甲板から発艦したマギーは、汚染が完全に無くなり澄み渡る青空と海に軽く見惚れていた。初めて見る新鮮な景色、できればもう少し堪能したい。しかしそうも言っていない。上空よりこちらを銃撃しようと迫る戦闘機の機影を確認したからだ。

正直プロペラ機に積まれているような20mmの機関砲などA Cにとってカスリ傷である。特に『ブルーマグノリア』は実弾防御に優れている機体であり、機関砲どころか120mmクラスの主砲なら弾くことができた。だから無視してもよかったのだが、この後の『作戦』のことを考えるとあまり得策ではない。

「落とせる分は落としておくか……」

降下しながら迫る戦闘機は『ブルーマグノリア』を凌ぐ速度を誇っていた。しかしその機動は直線的であり、A CのFCS性能からしてみれば止まっているのと大して変わらない。スキャンモードを解き、ヒートマシンガンを掃射する。

「機動が甘いわ、まるでターキーシュートね」

その言葉通り『ブルーマグノリア』へ向かっていった瑞鶴の戦闘機は掃射を受けバタバタと落ちていった。再びスキャンモードを起動したマギーは敵艦隊を捉える。その砲身は全て『ブルーマグノリア』へと向けられていた。

「たかが艦載機一機に随分豪勢ね。でもこの時代の砲撃精度を測るには調度いい！試させてもらおうわ！」

マギーは湾岸基地を襲撃した時を参考として思い出しながら、再びグライドブーストを吹かし敵艦隊へ突撃を開始した。

「相手は小型デス!!一斉掃射でなく波状攻撃で仕留めます!!Fire!!」

金剛の掛け声とともに各艦の砲塔から轟音が鳴り響き、『ブルーマグノリア』へ鋼鉄の雨が降り注ぐ。しかしマギーはグライドブーストの旋回力とハイブーストの急加速を駆使し難なくその雨をかいくぐっていく。

「Shit!どういふ機動性してるネ!?!」

戦闘機ですら不可能な機動をするACに金剛は苛立ちを募らせた。

——次の砲撃で仕留めてみせるヨ!!

ブルーマグノリアの予想進路上に砲塔を向け、まだかまだかと装填完了を待つ。しかし、そのため上空への注意力が散漫になっていた。鳥とは違う影が海面に映っているの

に気付いたのは秋月だった。

「しまったッ！金剛さん、愛宕さんッ!!直上ッ!!」

自分たちの上空に舞う爆撃機の機影に気付き、急いで秋月は砲塔の角度を上げる。しかしマギーに向けて口角をだいぶ下げていたため、反応に遅れてしまった。急いで対空掃射をし爆撃機を落とすことに成功したが、爆撃は既に慣行されていた。金剛と愛宕に数発の爆弾が降り注ぐ。

「きやあー!いつの間に爆撃機を…」

「Shit!新兵器はこのためのオトリでしたか!?!でもこの程度じゃ私も愛宕も沈みませんヨ!!」

「……いや、ちよつと待つて金剛さん!!」

そう、オトリは逆にこの爆撃だった。爆撃の衝撃と煙によって『ブルーマグノリア』を見逃してしまったのだ。どこだ…と周囲を見回そうとするが時は既に遅かった。

——瑞鶴、中破判定——

突然のアナウンスが流れると同時にみなが瑞鶴を見ると、甲板上に先ほどの人型がたずんでいた。既に瑞鶴への攻撃は完了しており、模擬弾が破裂した粉塵によつてまるで甲板が焼き尽くされているかのようにだった。

『ブルーマグノリア』は甲板上で再びグライドブーストを吹かし、今度は秋月へと接近

する。

「くっ！やらせません！」

秋月は対空砲火を一斉掃射し近づけまいとするが、砲塔の旋回速度がその機動へと追いつくことが出来ず、捉えきれない。

「なかなかいい反応ね、でも…」

秋月が射程に入ったことを確認したマギーは彼女に向けて銃弾を放つ。ヒートマシンガンは、駆逐艦の主砲と同口径の弾を機関銃のように発射する兵器である。装甲の低い相手に対してそれは絶大な威力を誇った。駆逐艦である秋月もその類に漏れず、あつという間に大破判定を下されてしまう。

吹雪は思考をめぐらせていた。瑞鶴さんが甲板上で銃撃を受けても中破までだった。おそらく敵の武装は連射力は凄まじいものの、一発一発の威力はそこまでではないようだ。そして敵は確実にこちらの戦力を削ぎに来ている。

(……きつと次は私だ)

やられることを覚悟した吹雪は、金剛たちに進言した。

「金剛さん！愛宕さん！恐らくあの機体の攻撃はお二人の装甲を突破できません！敵艦隊との距離も詰まってきました。悔しいですがここはあの機体を一時無視して観測射撃にて敵艦隊への砲撃を行ってください。現状を逆転するには旗艦の加賀さんを倒

すしかありません。新兵器は次にきつと私を狙ってきます、その隙に早く!!」

言い終えると同時にその視界の隅に『ブルーマグノリア』を捉える。必死の反撃を行うおうとするが、秋月の弾幕をかくぐるほどの機動力を持つ相手に、狙いすらすらつける事は敵わなかった。

「ぐッ」

吹雪の船体に強い衝撃が走る。目を開けると、まるで一休みとも言われているように『ブルーマグノリア』に着艦されてしまっていた。ただそのおかげで、吹雪は相手の姿をはっきりと見ることができた。

黒と蒼を基調としたカラーリングと、鳥をイメージさせるシャープな造詣…。

——まるで鴉だ。獲物をついばむ無慈悲な鴉……。

そしてその口ばしは艦橋へと向けられていた。

——吹雪、大破判定——

そのアナウンスを受け、金剛は舌打ちをする。

「ブツキーの Advice、無駄にはしないヨ！」

吹雪がやられている間に金剛と愛宕は水上偵察機を飛ばし、敵艦隊へ砲撃を開始していた。着弾位置から敵艦隊位置を計測し、砲塔の角度修正を行う。艦隊の距離は縮まっ

ていたが、小島群が邪魔をしてまだお互い艦隊を視認できていたなかった。

これなら偵察機の無いあちらを一方的に攻撃できる……そう二人は思っていた。

——しかしこれは大きな間違いであった。鴉の眼はすでに獲物を捕捉していたのだ。

「ここまで作戦通りだと、かえって気味が悪いわね」

大体今までの任務は想定外の事態が起きることのほうが多かったため、どうもしつくりこない。まあ、こちらのオペレーターがそれだけ優秀なのだろう……と結論づけ、マギーは飛ばしておいたリコンの情報をそのオペレーターへ送信した。

「敵戦艦スキャン完了……スポット開始、加賀、情報をそちらへリンクする。うまく使っちゃようだい」

これが今作戦の要だった。単機で活動する傭兵には忘れられがちだが、ACにはスキャンした敵の位置情報を味方に伝える機能がある。本来なら味方ACとオペレーターにしかその機能は作用しないが、空母をオペレーターとして介することで味方艦隊へ情報を伝えることが可能であったのだ。

——明石曰く、「艦船のAMS装置と、ACのOSが同じ規格だったから出来る芸当」らしい。

偵察機の光学カメラでは捉えきれない緻密なスキャン情報を加賀は受け取る。

「すごい、なんて情報量……いけます」

加賀はすぐさま霧島と摩耶に敵艦隊の詳細な位置情報を送信する。二人の視界にはAMSを通して小島の裏に隠れている敵艦隊の艦影が表示されていた。

「おう、すげーな！丸見えじゃねーか!!」

「これなら計算するまでもありませんね」

二人は全砲門を敵艦隊へ向けた。

「距離、速度、よし！全門斉射!!」

霧島の掛け声とともに、その砲門が火を噴く。発射された砲弾はまるで吸い込まれるように金剛と愛宕に降り注いだ。

「Shit!?!なんデ!?!なんデ!?!」

「いやーん!」

この状況ではありえない砲撃を食らい、金剛と愛宕はあわてふためいていた。しかも砲撃は凄まじい命中率で着弾しており、そのダメージも深刻だった。

「愛宕!このままじゃまずいヨ!!いったん全速力でこの場を……」

「……あの、金剛さん……言いにくいんだけど、私たちの「詰み」みたい」

「What!?!」

気付くと魚雷接近のアラームが鳴り響いていえる。それは敵艦隊の位置情報から死

角を縫って接近していた夕立から放たれたものだった。

「やっと夕立の出番っぽい！ソロモンの悪夢、見せてあげる！」

魚雷は戦艦と重巡洋艦の機動力では最早回避不可能の位置まで迫っており、直撃は避けられなかった。

——金剛、愛宕、大破判定——

演習は加賀率いる艦隊の圧勝で幕を閉じた。

◇ ◇ ◇

「——以上が演習内容です」

演習の反省会が行われている会議室にて、加賀は映し出されている作戦ファイルを横に提督に説明を行っていた。

「まず新兵器『ブルーマグノリア』についての評価ですが……すばらしいの一言です」

普段滅多に人を褒めることが無い加賀であったが、この時ばかりはベタ褒めだった。それほどまでに『ブルーマグノリア』の性能は凄まじかったのだ。

「艦載機でありながら軽巡にも匹敵する火力。制空権を取られた状態であっても偵察機より詳細な情報を得られる索敵能力。まさに驚異的です」

「……加賀、一部訂正させてもらおうわ」

「発言を許可します、マギー」

「今回は武装が制限されていたから無理だったけど、それが無ければ私一人で全滅できたわよ。演習で使っていた左手のヒートマシンガンは…そうね、艦船でいえば副砲のよなもの。右手の主砲が使えれば、戦艦だって撃ち抜けるわ」

場に居た全員が絶句する。特に相手していた艦隊側は若干顔が引きつっていた。

「……発言を訂正します、提督。火力については戦艦に匹敵するわ」

「…おまえが味方で本当によかったよ、マギー」

「お眼鏡には適った？ 提督」

「ああ、合格だよ、合格。マギー、おまえはこのまま加賀に艦載だ。第一艦隊にてその実力を発揮してもらおう。加賀、それでいいな？」

「了解しました。——次に新人二名の評価ですが…」

ああ、本来はそっちが演習のメインだったな…と提督は思い出し、作戦ファイルに再び視線を戻した。加賀は淡々とした口調で秋月と瑞鶴の評価を発表していく。

「秋月から…、流石防空駆逐艦だけあってなかなかの弾幕でした。しかし周囲の警戒がまだまだです。今回、金剛、愛宕への爆撃を許してしまったのはあなたの落ち度です、精進なさい」

「はっ…はいっ!!」

加賀の迫力に秋月は思わず敬礼をしながら返事をする。その後ろでは戦艦姉妹がヒ

ソヒソ話をしていた。

「秋月はよく頑張ってくれたヨ。そもそもあんなタイミングの爆撃防ぐなんて無理だよ、加賀はイジワルネ」

「お姉さま、加賀さんはお厳しい方ですから…」

「そこ、私語は謹んでもらえる?」

加賀は眉を吊り上げ二人を睨み付けた。その圧力二人は口にチャックをする。

——まったく、といいながら加賀は手元の資料をペラりとめくる。心なしか加賀の眉が先ほどよりも吊り上がっていた。

「次に、瑞鶴……やはり五航戦ね…」

「ちよつ、それどうゆうことですか!? たしかに演習じゃ負けちゃいましたけど…」

「そのことを言っているのではないわ」

加賀からの容赦ないダメ出しが瑞鶴に浴びせられる。

「まず艦載機操作がなってないわ。艦爆・艦攻も機動が直線的で打ち落としてくれていつているようなもの。もっと陣形を考えなさい、あれでは七面鳥撃ちもいいところよ」

事実、演習において瑞鶴の艦爆・艦攻部隊はあつという間に摩耶・霧島の対空砲撃、加賀の直衛戦闘機に落とされていた。話を聞いていたマギーも、相対した戦闘機に同じよ

うな感想を持っていた。やはりあの機動は未熟なものだったようだ。瑞鶴もそれは実感していたのか、肩をプルプル震わせながら黙ってる。

加賀の苦言は止まらない。

「それに冷静さも足りないわね。ブルーマグノリアが接近していたとき、あなたは何をしていたの？ 旗艦であるあなたが最優先に狙われることは想定できたはず。直衛の戦闘機を新たに発艦するなり、回避行動に移るなり、やれることはあつたはずよ。吹雪をアドバイザーにつけたのはあなたの経験不足を補うため、決して思考を停止させるためではないわ。状況に飲まれてアワアワしてるだけなんて愚の骨頂ね旗艦として、空母としての誇りは無かったの？」

瑞鶴の目に涙がたまっていく。言われていることはわかっている、わかっているのだが……。

人間は本当のことを言われるのが一番心に突き刺さる。

「泣いたってどうしようもならないわよ、五航戦。これが実戦だったら味方艦隊は全滅……殺したのはあなたよ」

ついに耐え切れなくなり、瑞鶴はガタンと音を立ててその場に立ち上がる。その目は大粒の涙がこぼれ、顔も真っ赤になっている。

「うう、ぐずツ、えつぐ……」

瑞鶴はそのまま走って会議室を出て行ってしまった。

「……おい加賀、ちよつと厳し過ぎるんじゃないか？」

「お言葉ですが提督、甘やかすばかりでは彼女の成長に繋がりません」

「それにしても限度つてもんがなあ……」

「でも加賀の言っていることは事実よ」

「マギー……」

マギーは実戦から成り上がってきた身であり、シビアな思考の持ち主だった。そのため自分が同じ立場なら似たようなことを言っていただろう、と加賀に同調していたのだ。彼女の的には少なくとも今の瑞鶴には載りたくない、というのが感想だった。

「とはいえ、もう少しアメと鞭のバランスをだな……」

「……わかりました、考慮します」

加賀は一言そう提督に告げると、一番付き合いの長い仲間へと歩み寄る。正直甘やかし方などわからないし、私がやるより彼女のほうが適任だろう。

「吹雪、申し訳ないのだけれど瑞鶴のフォローお願いできないかしら」

「あ、はい、わかりました」

こういったケアに関して、加賀は吹雪に信頼を寄せていた。吹雪もなんとなく察していたのかニコニコしている。

——本当、何度彼女に助けられたことか。

MI作戦の生き残りを寄せ集めて出来たこの鎮守府がここまで形になったのも吹雪の尽力が大きかった。彼女の人当たりの良い性格と、何事にも一生懸命に取り組む姿勢にみな感化されまとまっていったのだ。そのため艦種に関係なく吹雪はみなと仲が良かった。彼女なら瑞鶴を励ましてあげられるだろうし、まだ姉妹艦どころか空母が私しか居ないこの鎮守府で瑞鶴の良い友になってくれるだろう。そう思い、加賀は瑞鶴のアメ役を吹雪に頼むことにした。

「今回は間宮の甘味を必要経費として認めます。提督の給料から引いておくわ」

「えっいいんですか？ やったあ!! 司令官、ご馳走様です」

「おい、ちよつと待て、何勝手に決めてやがる」

他の艦娘たちは「相変わらず仲がいいなあ」と微笑みながら、まるでわがままな娘達とそれに手を焼く父親のようなやり取りを見ていた。そんな中、マギーはその光景に一種の懐かしさのようなものを感じていた。

自分がオペレーターだった時、荒野にある隠れ家でファットマンと、そして“彼”と過ごしていたあの日々。

（——最後に一緒にコーヒーを飲んだのはいつだったか……）

いつの間にかマギーは、会議室の窓に映る澄み渡る青空へ視線を移していた。

第六話 番外編「瑞鶴と吹雪と、時々ブーストチャージ」

(もうどれくらい時間がたったのだろうか…?)

会議室から逃げるように出て行つた私は、自分の部屋に閉じこもり、着の身着のままベッドの中で丸くなつていた。布団の中でむせび泣き、今は涙も枯れ果てている。

——悔しくて、悔しくて……そして不安だった。

私は自分が期待されているのを知つていた。空母が加賀さんしかいなかったこの鎮守府において、戦力増強のために建造されてできたのが私だった。だから、数々の激戦を潜り抜けてきた加賀さんとは大きな差はあるけれども——、すぐに追いついて活躍してやるんだから!…:そう意気込んでいた。

それがどうだ。反省会で加賀さんから『五航戦』と罵られた時は腹が立ったが、そのあと指摘されたことについてまったく反論できなかつた。反論できないほど自分が弱いことをまざまざと実感してしまった。加賀さんに馬鹿にされたこともそうだが、それよりもなにより自分の弱さが悔しかった。

そして——

『これが実戦だったら味方艦隊は全滅……殺したのはあなたよ』

旗艦としての責任、空母の役割の重要性、その認識が甘かったことを気づかされた。空母の少ないこの鎮守府において、今後、空母（わたし）の出番は増えていくだろう。旗艦だつて恐らくまた任される。それなのにこんな私でいいのだろうか？こんな弱い私では味方を窮地に追いやってしまわないだろうか？私が空母としての重責に耐えられるだろうか？？そんな不安が頭の中をぐるぐる回っていた。

しかし、それを断ち切るように、コンコン、とドアからノックの音が聞こえてくる。「瑞鶴さん、吹雪です、いらっしやいますか？」

いるにはいるのだが、泣き疲れたけだるさと、今はあまり人と会いたくないという気分から私は返事をしなかった。しかし吹雪は「失礼します」と一言断りを入れた後、部屋に入ってきた。

——ああ、そういうえば部屋に入るときに鍵を閉めていなかったっけ…。

「瑞鶴さん、やつぱりいたんですね。演習…お疲れ様でした。間宮で新作の最中買ってきたんです、一緒に食べませんか？」

最中という単語にピクリと反応してまう。そういうえば今日はまだお昼を食べてなく、痛烈なほどの空腹感を体を感じていることに気付いた。お腹もそれに反応してか『ぐうううう』と音を鳴らす。恥ずかしい…どうしてこう食い意地だけは一人前なのか…。恥ずかしさのあまり、私は余計に布団の中で丸くなった。

「…別に笑ったりしませんよ。戦闘はAMS装置をフル稼働しますから脳への負担がすごくかかります。特に、数多くの艦載機を操作しなければならぬ空母の方々は他の艦船の方に比べて負担が大きいんです。だから、これは今の瑞鶴さんに“必要な補給”なんですよ、ですから…：…お願いです、食べてもらえませんか？」

ここまで気を使われて食べないほうが恥ずかしいと思い、私はのそのそと布団から出て吹雪の隣に座る。

「…：…あ…：…りが…：…とう、吹雪…：…」

さつきまで泣いていたせいか声がかすれてうまく出なかった。しかし吹雪はそんなことを気にせず、私が出てきたことに安堵の笑みを向けてくれた。

「…：…お茶いれますね、ポットお借りします。瑞鶴さんは先に食べちゃっててください」
そういうと吹雪は部屋に備え付けの台所へ向かっていっていく。私はお言葉に甘えて…：…実際お腹も限界だったので…：…先に最中をいただくことにした。

一つ手に取り、口へ運ぶ。パリッと心地いい皮の触感とともに、餡の優しい甘みが口に広がっていった。

——美味しい、すごく…：…。

気づけば私は一つ目の最中を平らげ、二つ目に手を伸ばしていた。

「フフツ、そんなに焦らなくてもまだまだいっぱいありますよ」

台所から戻ってきた吹雪は私と自分用のお茶をテーブルに置き、最中を一つ手に取っていた。私は早速淹れてもらったお茶をいただき、最中の皮に水分を取られた口を潤す。そして再び新しい最中へと手を伸ばす。

お茶で水分を補給したからか、最中の甘みに安心したからか……目には再び涙があふていた。それでも一心不乱に最中を食べる。これが私の人生初めての『ヤケ食い』だった。

お腹も膨れ、落ち着きを取り戻した私に吹雪がお茶のおかわりを注いでくれていた。

「落ち着きましたか？ 瑞鶴さん」

「うん……本当にありがとう、吹雪」

「いいんですよ。……瑞鶴さん、あまり自分を責めすぎないでください。今回の演習、私も色々至らない点がありました。もっと私もしっかりしていれば……、すいません瑞鶴さん」

「えっ!? そんなこと言わないでよ、吹雪……。あなたには色々助けられたわ、いてくれたかったらゾツとするくらい。加賀さんの言うとおり……ダメだったのは私よ……」

加賀さんに言われたことを思い出し、気分がうつむきだす。吹雪をはじめ、味方艦隊だったみんなに本当に申し訳ない戦いぶりだったと思う。再び不安に思考が支配され

そうなっていく。しかし、それを否定するかのような口ぶりで吹雪が話し始める。

「…確かに今回は瑞鶴さんも至らなかつた部分はあつたと思います。ですが、加賀さんは無駄だと思つたことは言わない人です。加賀さんが瑞鶴さんに厳しいことを言つたのは、瑞鶴さんならできると思つているからですよ。……うちの鎮守府で、瑞鶴さんを一番気にかけているのは他ならぬ加賀さんです。瑞鶴さんが飛び出ていつちやつたあと、私にフォローを頼みにくるぐらいですから」

「加賀さんに言われたから吹雪は来てくれたの…?」

「言われなくても来るつもりでしたよ、先ほどの謝罪もしたかつたですし。でも…この最中は加賀さんのおごりです」

（正確には加賀さんが提督の財布から出させたものですけど…）

「…あんなに私ことボロクソに言つてたのに?」

「あの人は不器用な人ですから。……実は瑞鶴さんに言つていたことは、前の鎮守府の時に加賀さんが演習相手から言われたことなんです。あ、そうそう……」

吹雪は何かを思い出したようにゴソゴソとポケットから何かを探り出す。出てきたのは緑色のウサギが表紙に描かれたかわいらしいメモ帳と、そのペンホルダーにぴつたり収まるサイズの淡い緑のペンだった。

「これ、わたしから瑞鶴さんへプレゼントです。それでさっきの話の続きなんです…、

加賀さんも瑞鶴さんと同じように、演習相手に言われたことですごく落ち込んでいたんです。それをどうにかしようって、……赤城さんという空母の人と一緒に……色々考えて……」

赤城という名を出したとき、少しだけ吹雪の声のトーンが下がっていた。私が建造される前に大規模な戦闘があったことは聞いていたが、その時もしかして……。なんであれ、なんとなくだがその人はもういないのだということに察した……。

「——それで『演習や任務の反省点とかをメモに書いてまとめてみよう』って話になったんですよ」

「そのためのメモ帳が……これなの？」

「はい。書き方は特に気にしなくていいんです。書くことでグチャグチャになつてる頭の中を整理するためのものですから。結構効果的なんですよ、これ。書いているうちに客観的になれて、冷静にああすればいい、こうすればよかったって対策とかが浮かんでくるんです。今でも私や加賀さんは続けてます」

そういうと吹雪は自分の手帳を見せてくれた。そのメモ帳は端々がちよつと汚れていたり、付箋がいっぱい貼つてあつたりしていかにも使い込んでいるようだった。

「参考までにちよつとみせてもらつてもいい？」

「え、反省点以外にも色々書いてるんでちよつと恥ずかしいんですけど……」

「いいじゃん、お願いッ」

「……少しだけですよ、あまりじっくり見ないでくださいね」

「りようかい、りようかい」

「そういうと私は吹雪からメモ帳を受け取りパラパラと中身を見させてもらう。中には色々なことが書いてあった。

「魚雷を撃つ時は何頭身先に撃つ」といった技術的なことや、「慢心ダメ絶対」といった格言？的なもの、そして……なにかに濡れたようにシワがついた紙に「ぐやしい」と何度も殴り書きしてあるページ……。

「そこまで読んだところで吹雪に「もうここまでですッ」とメモ帳を取り上げられてしまう。見させてもらったのは三分の一にも満たないとこで、まだまだ先はありそうだった。吹雪が積み重ねてきたものの片鱗が少しだけ見えた気がする。

「もう、あまりじっくり見ないでって言ったのに……。ともかく、瑞鶴さん、こういうのは言われたことを忘れないうちにやっちゃったほうがいいです。どうです、やってみませんか？」

「そう……ね、早速やらせてもらおうわ！」

私はもらった新品のメモ帳に向かってペンを走らせた。

——30分ぐらいたっただろうか。

「はあ……こんなものかな？」

メモには加賀さんに指摘されたことや、次はどうするといった自分なりの対策、そして最後に——

『いつか加賀さんにギャフンと言わせてやる!!』

と決意をつづった。

それでも、結局文字がメモ帳を埋めたのはたったの一ページだけ……。たったこれだけのことにさつきまであんなに落ち込んでいたのかと自嘲し、テーブルに突っ伏してしまふ。吹雪のと比べてなんと薄っぺらなことか……。自分はようやくスタートラインに立ったのだと実感した。

「まだまだ……、これからですよ、瑞鶴さん」

「吹雪にそう言われたら敵わないわ」

お互いニカリと微笑みあふ。とりあえず、このメモにつづるやり方は私の性に合っているようだ。気づけば私は完全に立ち直れていた。

「さて、十分に反省も済みまし……、お風呂に入りますか？次に向けて休息を取ることも反省と同じくらい大切です。それに……」

吹雪は苦笑いしながら私を見ていた。窓にうつすらと映る自分の姿を見てそれに納

得する。ベッドでうずくまって泣いていたため、髪はボサボサ、目は真っ赤、おまけに磯と汗の臭いもしていた。年頃の女の子がしていい格好ではない。

「……一緒に入らない？吹雪」

「はい！いきましようか」

私たちは共同の大浴場へと向かっていった。

◇ ◇ ◇

吹雪と大浴場へと来た私は、浴槽で羽を伸ばしていた。風呂は魂の洗濯とはよく言つたものだ、その時は幸せだった…。

——が、今は見たくない人たちを見つけてしまう。それは演習で私を物理的にボコボコにしたマギーさんと、精神的にボコボコにした加賀さんだった。

「げッ、一航戦ズ…」

思わず口から言葉が漏れる。

「げッ、とはなんですか、げッとは…」

体を洗い終えた加賀さんとマギーさんがそのまま浴槽に入ってきた。というか、なんで私の横に来るの!?

「なにか不満がありそうね、瑞鶴」

「…なんで私の横にくるのかな、と…」

「自意識過剰じゃない？私と加賀は洗い場からまっすぐ浴槽へ入っただけよ」

「マギーの言う通りです。それに不満なら、あなたがここから動けばいいわ」

「ぐぬぬぬ…」

確かにその通りだが、私から動くのはなんだか負けた気がして嫌だった。

——なに、無視してお風呂を楽しんでいればいいのだ、そうしよう。そう心を決めようとした矢先、加賀さんから不意打ちを食らう。

「ところで瑞鶴…目が赤いようだけど大丈夫？」

いや、あなたのせいなんですけど？あなたの指導で泣いていたせいなんですけど!?

思わずそうツツコミたくなってしまうが、同時に加賀さんが心配してくれたことがちよつと嬉しかった。しかし、その思いはすぐさま打ち砕かれる。

「あの程度でへこたれてもらっては困るわ。あと百回はあなたをコテンパンにするつもりですから」

私は絶句した。ドSなのか、この人は…？さすがに見かねたのか、吹雪が加賀さんに話しかけるが……

「あの、加賀さん…いくらなんでもそれは…」

「心配には及びません吹雪、五航戦など鎧袖一触です」

「いえ、そうでは…いや、いいです…」

それだけ言って吹雪は会話を断ち切った。

——え、もしかしてさじ投げたの？

思わぬ友人の諦めに、私の絶望は加速する。しかも、マギーさんより容赦ない追撃が始まった。

「大丈夫よ瑞鶴…いい話をしてあげるわ。(神、)様は人間の可能性を知りたかった。だから人間に試練と、ある言葉を与えた。『死んで覚える』と…」

「そんなダークなソウルが満ちてるような世界の神様は結構です!!」

「それくらい練習して覚えろということよ。なんなら演習の時に私も協力しましょうか？これでも私はオペレーターをやっていた経験がある。今度から私がアドバイザーとして横に立ってあげてもいいわよ。早く錬度を上げて私を運用できるぐらいになってもらわないと」

「それは良い案ですね、マギー。さすがに気分が高揚します」

加賀さんを相手にしながら、横からマギーさんの叱咤がとんでくる。考えたくもなかった…。

「私は心が折れそうです…」

——ん？待てよ、そもそも…

「…そもそも、マギーさんって私の後輩ですよね？なのに、なんで自然に上から目線なん

ですか!？」

そうだ、この人は今日着任したばかりじゃないか。マギーさん自身の只者ではない雰囲気と、なぜだか妙に加賀さんと親しくなっているのも違和感がなかったが…。

「瑞鶴、それはあなたがマギーより下だからよ。演習で直接中破にまでされて何を偉そうに…。悔しかったらさっさと強くなりなさい」

はつきりと言われた…。いや、まあ…確かにその通りだ。私は先ほどメモ帳に書いた『ギャフンと言わせてやる!!』という決意を改めて固める。

「まったく、これではどちらが空母か……」

なぜだか加賀さんは喋るのをやめ、何かを見ていた。その視線の先を見ると、私とマギーさんのある部分——もうちよつと正確にいうと胸部装甲的なものを見ていた。

そして改めて言い直す。

「フンツ、これではどちらが空母かわからないわね」

——鼻で笑いやがった!!

これはッ、こればかりは我慢ならない!!!

「胸の大きさは関係ないでしょおおおおおッ!!!」

思わず立ち上がり私は叫んだ。しかし二人はそんなこと意に介していないように

淡々としていた。

「別に私は胸のことなど一言も言ってますん」

「そうよ瑞鶴、胸なんて関係ないわ。あつても邪魔なだけだし」

そう言いながら、二人は豊満なバルジを水面に漂わせている。あ、あれつてこのサイズだと浮くんだ…と、その立派さに思わず感心してしまうほどだ。いけない、いけない、また二人に飲まれている。

状況は二対一、これ以上関わつても私の胃がマツハで蜂の巣になるだけ…。私は戦略的撤退を選択した。

——戦略的なので決して負けではない、はずだ。

「もういいですッ」

二人を睨み付けながら浴槽を後にしようとする。しかし、よそ見をして歩いてはいけないことを直後に実感した。

「瑞鶴さんッ前ッ!!」

「え? ふぶぶ…」

「きやッ」

ガインッ、と頭に強い衝撃が走る。私はどこかの世界のタンクに轆かれた軽量二脚のごとく半回転していた。かろうじて視界の端にとらえたのは愛宕さんだった。どうや

ら彼女の豊満なタンクに突っ込んでしまったらしい。そのまま浴槽へ再びインする…。水面にプカプカと浮かび上がった私の頭に、柔らかい感触が当たる。見上げると、それはマギーさんの胸部装甲だった。マギーさんが優しい目で私を見ている。

「瑞鶴…、軽量機にだって需要はあるわよ」

——ただのトドメだった。

「うわああああんツ、このオツパイお叱け共オオツ!!」

「オツパイ垂れ下がっちゃえエエツ!!!」

私は反省会の時のように逃げ出した。

そのまま自分の部屋へ行き二時間ねむった…そして…目をさましてからしばらくして帰りの更衣室で会った秋月が私より胸があつたことを思い出し…泣いた…。



一連の流れを見ていた吹雪は違和感を感じていた。それはいつもと比べて明らかに加賀さんが上機嫌だったことだ。しかし、その疑問はすぐに解けた。

初めてマギーさんを見たとき、服や体型が似ているな、としか思わなかった。しかし、お風呂がそんなに気に入ったのか、ご満悦といったように頬を緩ませている表情がソツ

クリだったのだ。かつて加賀さんと共に戦場を渡り歩き、パートナーといえる存在だった……赤城さんと……。

思えば前の鎮守府の時からだが、加賀さんはその性格と強さから対等に話せる人が少なかった。今では秘書艦という立場と、同じ空母が瑞鶴さんしかいないことがそれに拍車を掛けている。だからマギーさんの存在が——加賀さん自身はあまり自覚してないかもしれないが——嬉しいのだと思う。

——このままマギーさんが、加賀さんにとって大切な人になってくれたら……。赤城を失ったところの加賀を知っていた吹雪は切に願った……。

第七話 「MISSION 02」 ガダルカナル島近海攻略

— 01 —

鎮守府会議室。

そこに今作戦に参加する艦娘たちが集まっていた。その雰囲気にはいつもの姦しきは無く、各員真剣な面持ちをしている。

「それではこれより作戦内容を伝える」

映写機により投影されている作戦海域の横にたたずみながら、提督は作戦会議を始めた。

「本作戦の目標はガダルカナル島周辺海域の敵主力艦隊の殲滅だ。ガダルカナル島は資源豊富な周辺諸島とのシーレーンの確保、及び近海制海権を確保するための前線基地としてなんとしても押えなきやならん。今回はそのための露払いだ。こちらの第一艦隊は『加賀』『金剛』『霧島』『北上』『摩耶』『夕立』で出撃。『比叡』『榛名』『愛宕』『千歳』『叢雲』『綾波』の第二艦隊は支援部隊として出撃してもらおう。他の鎮守府のやつらが夜間に奇襲を仕掛けてくれる間に目標海域へと進撃し、敵主力艦隊を撃滅する。主力艦隊とぶつかるときには夜が明けるだろう…、持てる火力を持って敵を叩きのめせ！

「……本当はもう少し準備を整えたかったが、偵察部隊から連絡があつてな。やつら『巢作り』を始めてるらしい、時間がない……」

「巢作りって?」

話を聞いていたマギーは、横にいる加賀に小声で聞いた。加賀は視線こそ前から逸らさなかつたが、同じように小声で答える。

「深海棲艦は資源が採れる場所に基地のようなものを造つて数を増やすのよ。中には主格のようなものが居て、それを倒さない限り数が増え続けるわ」

「まるで蟻みたいね」

「そう捉えてもらつても構わないわ。…多分、私たちを模倣しているのでしょね、滅ぼすために……」

「……なるほどね」

回答を得られたマギーは再び視線を前に向け、提督の話に集中した。

「今回俺たちの目標とする海域はこのこの辺りだ」

提督は海域が投影されているホワイトボードに赤丸をつける。そこはガダルカナル島東部近海の海域だった。

「偵察部隊の情報により予想される敵勢力は、南方棲戦鬼と名づけられた敵の新型を有する前衛主力艦隊……そして『戦艦棲姫』だ……」

その名を口にした途端、先ほどまで沈黙を守ってきた艦娘たちがざわつきだす。

(戦艦棲姫……)

マギーは事前に深海棲艦の種類については学ばされていた。深海棲艦はこちらと同じように各艦種に分かれており、個体差はあるものの分類されている艦船と同程度のサイズ、戦闘能力を有している。しかし、稀にその規格から外れた化け物が存在する。さきほど名が挙がった南方棲戦鬼もそれに類するのだろう。そして戦艦棲姫もその化け物の一種だったはずだ。

記憶が正しければ、もらった資料に『鎮守府の再編成を余儀なくされた大戦にて敵侵攻艦隊に姿を現し、こちらの戦力を数多く屠った要注意敵勢力』と示されていた。

隣に居る加賀を見ると、眉間にしわを寄せ肩が震えている。手も爪が食い込み血が出してしまうのではないかと思うほど強く握り締めていた。それは恐怖によるものか、あるいは――

ともかく、きつとなにか因縁めいたものがあるのだろう。それは加賀に限らず、他の艦娘もきつと……。ざわつきがそれを証明していた。

「落ち着け、お前ら」

提督は艦娘たちをなだめるように話を続けた。

「お前らの気持ちはわかるつもりだ……。先の大戦で戦艦棲姫には散々辛酸を舐めさせら

れたからな。だが、ヤツを倒さなきゃ先には進めん。それに俺は、お前らなら勝てるよと踏んでいるよ」

提督のその言葉により、会議室に再び沈黙が訪れる。

「確かにやつは驚異的な火力と装甲を持つ上、高い速度まで兼ね備えている異形のバケモンだ……だが、今俺たちの中には同じようなやつがいるよな？」

一同の視線が一箇所に集まる。

「お前だよ、マギー。お前さんがいるから、俺はこの海域攻略を引き受けたんだ。ACの火力と機動力なら戦艦棲姫を相手にしても渡り合うことが出来るだろう。そして演習のときに見せてくれた艦隊との連携でこれを撃破してほしい。実戦初っ端から負担をかけるが、今の俺たちで勝つにはこの方法しかない……やれるか？」

「最初に言ったはずよ。私は何にも、誰にも、負けるつもりは無い」

「そうか…頼もしい限りだ」

マギーの意思を確認した提督は、その隣に居る秘書艦へと視線を移す。

「加賀、今回は艦載機操作とACのオペレーションを並列して行うことになる。当然負担も増すことになるが、やれるよな？」

「当然です、五航戦とは違いますから。次は…次こそはやってみせます…ッ」

加賀の目には強い意志が感じられた。絶対に打倒するという、強い強い意思…。皆に

は言わなかったが、これが提督がこの海域の担当したもう一つの理由だった。

戦艦棲姫は前の鎮守府の仲間たちの仇だったのだ。

——復讐という感情は無い、そんなことを思っていたらキリがない：

提督自身はそう思っていた。しかし、加賀や前の大戦に参加していた艦娘たちの中には拭いきれない思いを持っている者がいることも知っていた。だからこそ、彼女たち自身が前に進むために、この海域の攻略は必須だった。

「…あまり気を負いすぎなよ、加賀。お前らも一緒だ。確かに重要な作戦だが、死んだら元も子もない。生きて帰って来い、それが最低条件だ！」

「『ハイッ！』」

艦娘たちの返事が会議室に響く。

「よし…、作戦開始は明日のヒトサンマルマル。それまでに各員準備を済ませておけッ。作戦は夜通しだ…ふんばれよ」

各員は思い思いに会議室を後にしていった。

第八話「MISSION02」ガダルカナル島近海攻略

—02—

マルヨンマルマル

まだ日の上がらぬ海域へ、加賀が率いる艦隊が進入していた。その旗艦の甲板には、まるで獲物を探しているように薄つすらと赤いグローを漏らす人型の機影が見える。

加賀の甲板上で待機していたマギーは、硝煙の匂いを感じていた。無論、完全密封されたACの操縦席の中で実際にその匂いを感じることは無い。

しかし微かに聞こえる友軍の戦闘音と、マギー自身の戦闘勘が鼻腔に錯覚を起こさせていた。

(——戦闘が近い)

マギーは待ちきれないかのように操縦桿を指で叩く。間もなく、加賀から通信が入った。

「マギー、予定海域に到着しました。情報どおりであれば敵新型の南方棲戦鬼率いる敵勢力が近くに潜んでいるはずよ。索敵をお願い」

夜間の索敵ができるのもACの強みだった。光学カメラによって敵を捉える通常の

艦載機と違い、光量を調節できるカメラとスキャンモードをもつACにとって暗闇は大した障害にならず、夜偵ばりの索敵が可能なためだ。

「了解、ブルーマグノリア、発艦する！」

グライドブーストを吹かし、まるで流星のように甲板からACが飛び立った。

「……流石に不気味ね」

夜間の海には昼間に見た美しい風景の面影はなく、ただただ暗闇と静寂のみが広がっている。モニターに映る代わり映えのない景色は、まるで自分は全く進んでいないのは？と錯覚させるほどだ。しかしそんなことはなく、スキャンの端に艦影が映り始める。

「見つけたッ」

まるで宝箱を見つけた子供のようにマギーは意気揚々と方向転換し、その艦影に近づいていく。

「これが……南方棲戦鬼……？」

スキャンが捉えた艦影は、今まで見せてもらった資料の深海棲艦の形状とは明らかに異なっていた。その姿は、なんでも着ければいいでは無いだろうと思わせるように主砲や甲板、魚雷の発射管と思われるものまで搭載されており、その様相はまるでカメラ

だった。しかもその周囲には数機の球体の形状をした浮遊砲台が、まるで護衛のように漂っている。

「まったく…あの自立兵器みたいね。こちらブルーマグノリア、目標と思われる敵を発見！位置情報を送信する。先に仕掛けるわッ、援護を！」

「こちら加賀、了解。…：最終目標は恐らくその奥よ、無理はしないで」

「この程度無理に入らないわ」

「慢心は禁物よ。…全艦、敵の位置情報をリンクします。北上は甲標的を発艦、急いで」
「りようかい。さてさて、やっちゃいますよ」

北上は甲標的のAIを起動させ、目標の座標を入力し海へと放った。

「さて、援護が来るまでには落としてしまうか」

マギーは大型自立特攻兵器を彷彿させる浮遊砲台に狙いを定める。敵もマギーに気付いたのか砲塔を一齐に向け反撃を仕掛けてくる。

「へえ、なかなかの弾幕ね。でも演習の金剛たち程度…、問題じゃない」

当人達が聞けば怒り出しそうなセリフを言い放ちながらも、その言葉通りACの機動性を駆使し器用に砲弾を避ける。砲弾が起こす巨大な水柱から察するに当たればいくらACでも無傷では済まないが、それでもマギーは冷静だった。

そしてヒートマシンガンでけん制しながら両肩のSu—J—A28、ヒートミサイル

を放つ。計12発にも及ぶミサイルが浮遊砲台に襲い掛かり、敵を爆散させた。

「残りは南方棲戦鬼のみッ！これでもくらいなさい」

A Cの右腕に装備されているA u—L—K 29をチャージしながら南方棲戦鬼に接近する。南方棲戦鬼はまるでハリネズミのように備え付けられている主砲や副砲をマギーに向けて掃射するが、そんなものはお構い無しにA u—L—K 29の有効射程まで前進を続ける。

そしてフルチャージを告げる発光を確認すると同時に、敵の艦艇に向けてそれを発砲した。青い閃光が海面を走り、南方棲戦鬼に着弾する。その圧倒的な熱量は艦艇に穴を開け、その周囲の装甲も赤熱化し溶けかかっていた。海水により急激に冷やされる金属の収縮音がまるで南方棲戦鬼の悲鳴のように鳴り響く。

「あと一歩つてとところか…」

「マギー、北上の甲標的がたどり着いたわ。スポットをお願い」

「ちようどいいタイミングね、了解」

スキャンモードを展開し、南方棲戦鬼をスポットする。その情報は加賀をオペレーターとして介し、北上へ送信されていた。

「おお、これが噂のスポットか。敵さんの位置がまるわかりじゃん、良いねえ、しびれるねえ。さて、止めはいただいちゃうよ」

AMSのシステムを介し、北上の眼前に投影されるマーカームが甲標的から酸素魚雷が発射される。魚雷はマギーのレーザーライフルにより空いた穴へと吸い込まれるように命中し南方棲戦鬼の内部から爆発が起きた。

巨大な水柱と共に敵の艦艇は真つ二つに折れ、南方棲戦鬼は海中へと没していく。

「こんなものか…存外あつけないわね」

「マギー、先ほども言つたけど慢心は禁物よ」

（…とはいえ、まさかこれほどとは…）

南方棲戦鬼はスキャンデータを見る限り並みの深海棲艦よりも強力な敵だった。夜間であつたため敵が艦載機を出せなかつたことを差し引いても、それを砲撃戦に移る前に仕留められたことに加賀は驚愕を隠せなかつた。

——提督の言うとおりに加賀は驚愕を隠せなかつた。ブルーマグノリアがあれば、今の私達でも戦艦棲姫に…きつと…。

敵しい態度とは裏腹に、その内心に希望が湧いてくる。そしてその心情を表すかのよう朝日があがり、目に光が差し込んできた。

「oh、もうこんな時間ですわ。戦場でなければこの景色も堪能できたんですけどネー」

「へッ、別にいいじゃねーか。こちとらさつきからなんもしてねーんだ！景色なんぞよ

り敵さんを堪能できないと主砲がさび付いちまうぜ」

「…摩耶、その願いは叶いそうよ。いわゆる連戦つてやつね…」

マギーから各艦に通信が入る。

「こちらブルーマグノリア、新たな敵勢力を発見。……ビンゴよ、新型の空母1隻、さっきの浮いてる砲台が3機…。そして…戦艦棲姫2機」

「戦艦棲姫が2!? マギー、それは本当なの!?!」

「あんな『へんなの』、間違えるほうがおかしいわ」

マギーは艦隊よりも突出していたため、先に敵を捉えていた。まるでタイミングを見計らっていたかのように日の出から現れた敵艦。

太陽の逆光により、その姿は影でしかわからないが…少なくとも戦艦棲姫については間違いないと確信していた。敵の新型空母、装甲空母姫からその二本の脚でカエルのように飛び跳ね、戦艦棲姫は海面に着水する。

マギーは初めて戦艦棲姫の資料を見たとき、その特徴からまさかとは思っていた。

(——確かに、並みの艦船が敵わないわけだ)

深海棲艦は人間の模倣をする。きつと同じだ、〃そこにあつたから使う〃。どこかで入手したあの『へんなの』を、やつらは乗っ取って運用しているらしい。

頭に駆逐イ級のようなものが根を張っているようにへばりついているが、それは紛れもなく『Tō—605A』と『Tō—605D』：通称『へんなの』であった。

◇ ◇ ◇

「戦艦棲姫は私が引き受けるッ。加賀たちはあの空母を!!支援する余裕はないッ、頼んだわよ!」

私はそう伝えると一目散に戦艦棲姫——『へんなの』——に向かつていった。あの2体の火力は絶大でACでも直撃すればあつという間にやられてしまう。艦船でも瞬間にスクラップにされてしまうだろう。とくに『Tō—605A』と呼ばれる実弾砲撃タイプの、まるでブーメランのように回転しながら向かってくる体当たりは駆逐艦程度なら一撃で真つ二つにへし折ってしまふ威力を持っている。

だからこそ、攻撃を避けながら戦える私が相手をするしかない。幸い、深海棲艦の口の奥から覗く真つ赤な目玉は私を捉えていた。

「いいぞッ、こつちに来い!!」

気分が高揚し、まるで傭兵時代に戻ったかのように口調が荒々しくなる。

……この状況は一緒だった。

彼が……、『黒い鳥の傭兵』が“処理”を受けた私と再会する前に引き受けていた依頼

の一つと同じ敵だった。彼の戦果報告を聞くたびに、その圧倒的強さに憧れと嫉妬を募らせたものだ……。彼に敗れた身であるものの、彼と“比べっこ”するための指標が目の前にあることに私は嬉しさを感じていた。

「私にだってやれるッ、やってみせる!!」

私は目の前の敵に全神経を集中させる。再び得た魂に火が灯っていくのがわかる。

——始めましょう、超えてみせるわ、あなたを……

◇ ◇ ◇

「マギーツ、マギーツッ!」

必死の呼びかけも虚しく、彼女は単身で戦艦棲姫に向かっていつてしまった。いくらなんでも無茶すぎる。しかし有効射程外から下手に砲撃支援を行えば彼女にも危害が及んでしまうなにより敵の新型空母や浮遊砲台も無視できる相手ではない。

(——ここは彼女を信じるしかない)

『信じる』とは言うものの、要は彼女に丸投げじゃないか、と心の中で舌打ちをしつつ加賀は今自分の出来ることを必死に模索した。

「お姉さま、加賀さんっ、聞こえますか!?!こちら支援艦隊旗艦、比叡、ただいま到着しましたっ!」

「こちら加賀。比叡、いいところで到着してくれました。これより主力艦隊で敵空母、及び護衛浮遊砲台を叩きます。こちらが砲撃戦有効射程まで接近するまでの間、支援砲撃をお願いします」

「了解しましたっ！よし！榛名っ、気合！入れて！いくよ！」

「はいッ、比叡お姉さま！」

支援艦隊の砲が仰角を高め、敵空母へ砲撃を開始する。主力艦隊もそれに合わせて前進を開始し、加賀も艦載機を空へと放った。

「支援砲撃、敵空母へ着弾」

先行して放っていた艦載機から入ってきた情報を加賀は味方へと伝える。ブルーマグノリアのスポット射撃ほどの命中率はないものの、鎮守府で上位の錬度を誇る彼女たちの砲撃はなかなかのもので長距離にも関わらず見事に敵に命中していた。

しかし、敵の状況を確認しようと近づけた艦載機が突如として落とされる。艦載機から送られる映像が砂嵐になる直前に捉えたものは、敵の艦載機だった。

「戦闘機!? そんな馬鹿な!!」

確認していた限りでは敵空母は砲撃前にはまだ艦載機を発艦していなかったはずだ。しかも先ほどの支援砲撃の着弾具合からして、普通の空母であれば中破は逃れられないほどだったのに……。

「もしかして…噂に聞いた装甲型…?」

その答えを肯定するように、敵の装甲空母——装甲空母姫——から次々と艦載機が放たれる。『目』を落とされてしまったため具体的な数は不明だが、空に映る機影から相当数であることがわかる。

「第一次航空部隊、戦闘陣形へ移行。各艦へ通達、対空射撃用意、……来るわ」

「おつ、やーつとあたしの出番かよ。ちよつとは残しておいてくれよな」

「そうね…あなたに頼ることになりそうだわ、摩耶」

加賀の戦闘機、烈風は非情に高い性能を持つており、加賀の調整したA Iのロジックと相まって、その強さはまさに『一航戦』を体現していた。しかし、浮遊砲台からも艦載機が発艦され単純な数では負けている状況であり、制空権をかううじて確保するのが精一杯だった。

「おう、この摩耶様に任せときなっ！改造で得たこの力、見せ付けてやるぜっ！おまえら、砲角上げな!!」

襲い掛かってくる爆撃機に向けて各艦が対空砲撃を放つ。特に摩耶の改造によって新しく集中配備された25mm三連装機銃の対空射撃は凄まじく、その弾幕のカーテンは爆撃をシャットアウトしていた。

「大丈夫そうね」

仲間の奮戦を確認しつつ、加賀はお返しと言わんばかりに艦攻・艦爆を行う。

——かつての仲間だった二航戦の忘れ形見、『AI：江草』を搭載した『彗星』、『AI：友永』を搭載した『天山一二型』。

二種の艦載機によって編成された航空部隊は敵の対空掃射を鮮やかに避けつつ搭載された魚雷・爆弾を敵に投擲した。その苛烈な攻撃に耐え切れず、浮遊砲台は全て煙を上げながら海へと落ちていく。しかし装甲空母の耐久度は凄まじく、いまだにその姿を健在させていた。

「頭にきました」

「HEY、加賀く、気持ちはわかるけどさー、旗艦はもつとCooーじやなきやNoなんだから。大丈夫！もう敵はこつちの有効射程内だよ、私たちの出番ネ！さて……：Sistersの手前、カツコ良く決めないとネ!! Follow me! 霧島！」

「はい！金剛お姉さまっ！」

「全砲門！ Fire!!」

けたたましい掛け声と同時に35.6cm連装砲から轟音が鳴り響き、砲弾が発射される。その砲弾は容赦なく敵空母の装甲をぶち抜き、大穴の開いた甲板から艦体がひしゃげ、ギギギギと音を立てながら装甲空母姫は海底へと没していった。

「Yeah! どうですカー!!」

「金剛、まだ本命が残ってます。早くマギーの援護に向かわないと……」
「Sorry、そうでしたネ」

装甲空母姫を無傷で撃退できたのは本命の戦艦棲姫をブルーマグノリアが遠ざけていてくれたからだだった。逆を言えばずっとその負担をマギーに押し付けている状態とも言える。

（——無事できて、マギー……）

第二航空部隊の発艦用意をしつつ、加賀は艦隊をマギーのもとへ全速力で向かうよう指示を出す。自らの艦の鈍足さをもどかしく感じたのは久々だった…。

第九話「MISSION02_ガダルカナル島近海攻略

—03」

「チイツ！」

思わず大きな舌打ちが漏れる。正直、私は劣勢だった。

一体一体ならそう辛い相手ではなかったと思う。しかし、二体の『へんなの』はまるで最初からそう設計されていたように絶妙なコンビネーションで襲い掛かってきた。片方の『へんなの』が大型バトルライフルと体当たりで近接攻撃を仕掛け、それを躲すと待ち構えていたかのようにもう一方の支援型がレーザーキャノンを放ってくる。しかもご丁寧にしっかりと二次ロツクをかけてだ。ハイブーストを多用する訳にもいかず、今までに無い蛇行運転を繰り返している。新しい強化人間の体でなかったら三半規管をやられていたかもしれない。

「せめて足場があれば…」

——ブーストドライブで躲せるのにツ、と蛇行時のGで頭を揺らしながら思う。

この時代に造り出された『ブルーマグノリア』は海面でグライドブーストできる程度には——それが財団のお節介か艦船の工廠から建造されたからかは不明だが——水上

適正が備わっていた。

しかし基本的に凹凸の無い水面上では得意とする立体機動が出来ない。必然的に『へんなの』の体当たりを避けるにはハイブーストを使用するしかなく、それがエネルギー消費に拍車をかけていた。レーザーライフル『A u l k 2 9』を主砲とするこのA Cにとつて致命的に不利な状況である。

「……言い訳ね、そんなの」

マギーはその事実を切つて捨てる。

不利な状況なのはわかった。だがそれがなんだ!?! 『彼』は……『黒い鳥』の傭兵はどんな困難な状況も焼き尽くしてきたじゃないか!! 操縦桿を強く握り締めて気を持ち直す。そしてスキャンモードで冷静に敵を分析する。

バトルライフルを装備してる近接型の『へんなの』は、回避行動をとりながら放つていたヒートマシンガンとヒートミサイルによつてだいぶA Pが減っていた。

(これならやれる)

止めを刺してやろうと戦闘モードに切り替え、右腕のレーザーライフルにエネルギーを送る。レーザーライフルの先端に青白いスパークが灯り、その圧倒的熱量が周囲の空を歪ませる。

——あと少しでフルチャージが完了する、その刹那だった。

私のとつた行動が過ちだったことを知る。

『へんなの』が突如として回転を始め、体当たりをしてきた。今までと同じようにハイブーストで避けようとするが、ペダルを踏み込んでもACが想像通りの機動をとることは無かった。

単純な話だ。

レーザライフルにエネルギーを取られ、その残量がハイブーストを吹かすのにギリギリ足りなかったのだ。

——こんな初歩的なミスを犯すなんて……

冷静になっていたつもりで内心焦っていた自分に腹が立つ。だがそんなことはお構い無しに、大質量の鉄塊がACに食い込んだ。

「ぐうツツ!!」

操縦席にも伝わってくる凄まじい衝撃がACを駆け巡る。内部フレームまで歪ませかねない衝撃は容易にシリンダーが吸収できる許容値を超え、ACが硬直する。その時間は僅かだが、後方に控えていた支援型の『へんなの』——『T0605D』——が私にレーザークヤノンを浴びせるには十分だ。

(まだよッ、まだこんなところで終わるわけにはッ!!)

極限にまで高まった集中力が時の流れを遅く感じさせる。何か打つ手がないか、硬直して動かないＡＣの中で敵をつぶさに観察する。そして鳥や雲のものとは違う影が『へんなの』に映りこんでいることに気付いた。

「あれは……!?!」

「()は譲れません」

二体の『へんなの』に上と横から惜しげもなく魚雷と爆弾が叩きつけられる。影の正体は加賀の艦載機だった。

爆撃が直撃する前に気付いた二体はマギーに止めを刺すよりも回避を優先し、カエルのように飛び跳ねる。しかし、それに合わせて今度は艦載機がまるでミサイルのように特攻して追撃を開始する。

「逃がしはしません……」

かつての仲間の仇が、今の仲間をも奪おうとしていた。

（もうやらせはしないッ）

先ほどの戦闘で金剛から「旗艦はＣＯＯＬに」と言われていたが、こんな光景を目にしてそれは無理な話だった。

（プロペラ機などいくらでもあげましょう、だから……）

「あなたたちには()で果ててもらおうわ……ッ」

艦爆・艦攻機は最早陣形を成しておらず、加賀の殺意を具現化した特攻兵器と化して蜂の群れのように『へんなの』へと襲い掛かる。跳躍している『へんなの』は各々備えている武装でそれを迎撃するが、加賀の艦載機はお構い無しに突撃した。

そしてバトルライフルを備えている『へんなの』——『T o o — 6 0 5 A』——に何機もの艦載機が突き刺さり、その爆熱によって装甲がひしやげバランスを崩す。

この絶好の狩り時をマギーは見逃すことは無かった。

バランスを崩した『へんなの』が着水すると同時に、青白い光がその頭部を穿つ。先ほどまでA Cのライフルにチャージされていたものを解き放っていた。加賀の爆撃によつて赤熱化していた装甲にそのエネルギーを防ぐ力は無く、内部まで突き刺さったエネルギーは今までの鬱憤を晴らすように爆散する。抉り取られたかのように頭部を失った『へんなの』はピクリとも動かなくなり、静かに海へと沈んでいった。

「やりました…」

「ええ、…でももう一体はまだ元気なようね」

もう一体の『へんなの』——『T o o — 6 0 5 D』——が発射するレーザーキャノンの攻撃範囲は広く、艦載機の特攻が『T o o — 6 0 5 A』よりも防がれていた。しかも後方に居たためマギーもこちらにはほとんど攻撃をしていなかったこともあり、いまだにA Pはたっぷりあったのだ。

「加賀、艦載機はまだ残ってる？」

「ごめんなさい、今のでほとんど……」

「そう……、私も悪い知らせがあるのだけど。スキヤンによると私とアイツは相性最悪でね、私の攻撃はほとんど通らない」

「……」

これは本当のことだった。レーザーキャノンを装備している『T0—650D』はその特性上冷却装置が備えられており、装甲も放熱に重きを置いたものになっている。それゆえか、TE・CE属性の防御に特化したものとなっており、その二つの攻撃属性しか持たないAC『ブルーマグノリア』の武装では分が悪かった。

「……ただ代わりに砲撃に対する防御は紙よ。艦隊の砲撃なら有効打を与えられるはず。まあ当たれば、の話だけど……」

「なら問題はないわ、あなたがいるもの。もうすぐ金剛達が砲撃有効射程内に入ってきます……。マギーは戦艦棲姫をスポットしつつ、こちらの指定の位置まで誘導して」

「了解……つと!!」

言うと同時にブーストを吹かし、敵から放たれていたレーザーキャノンを躲すと、マギーはそのまま『へんなの』に近づき、まるで「鬼さんこちら」と言っているかのようにヒートマシンガンを浴びせ始めた。敵がそれに食いついたことを確認すると、コック

ピット画面に大きく『A』と映っているポイントまで徐々に戦線を下げしていく。

(冷静に、落ち着いて……)

マギーは——かつての相棒に言うように——自分に言い聞かせる。先ほどのような失敗はもうこりこりだった。蛇行を繰り返す敵の二次ロックを振り切りながら、無いよりはマシと残りの武装を浴びせていく。

『へんなの』を操っている深海棲艦に感情があるかは不明だが、あれば確実に腹を立てていただろうと思ってしまうくらいに、『へんなの』は必死に『ブルーマグノリア』を追っていた。そのため狩場に誘い込まれていたことに気付くことはなかった。

「誘導おつかれ〜」

本当に戦場にいるのかわからないような気の抜けた声がACのコックピット内に響く。しかし、その声の主——北上——はその声のトーンとは裏腹にしっかりと仕事をこなしていた。

突如として『へんなの』の足元から水柱があがり、左足の半分が砕け散る。海中に息を潜めていた甲標的の魚雷が命中していたのだ。そして、それは獲物をこの場に縫い付けるトラバサミでもあった。

「スポット情報、各艦ヘリンク完了……。金剛、砲撃の合図を……」

「OK！まかせなヨー！皆さん、準備はOKですカー!？」

「はいッ、金剛お姉さま!!」

「おう、いつでもいけるぜ!!」

「まあ…うん、わびさび程度にはね〜」

「早く撃ちたいっばい!!」

「Ye ar!!じゃあいきますヨー! Burning Love!!」

単縦陣の艦隊から一斉に轟音が鳴り響く。同時に発射された砲弾は鋼鉄の雨となつて『へんなの』へと降り注いだ。『へんなの』は必死に避けようとすも、左足を失い得意の跳躍もすることは叶わず、ただその場でバランスを崩すだけに終わる。鋼鉄の雨はACのスポットにより驚異的な命中精度で突き刺さつていき、『へんなの』をただの鉄塊へと変形させていく。雨が降り止むころには『へんなの』の砲門は潰れ、装甲は剥げ落ち、正に虫の息となつていた。

「なかなかしつこいわね、でもこれで終わりよ…」

止めを刺すべく、『ブルーマグノリア』はグライドブースを吹かして急接近していく。そしてそのままハイブーストを重ねて吹かし、ACの一番装甲の厚い左足で『へんなの』の頭部を思い切り蹴り上げた。ACの限界速度から繰り出されるブーストチャージは戦艦の主砲をも越える巨大な弾丸と化し、その頭部を寄生していた深海棲艦ごと粉碎する。

今度こそただの鉄塊と成り果て、『へんなの』は海へと沈んでいった。

その場に佇む『ブルーマグノリア』へ加賀から通信が入る。

「…戦艦棲姫の撃破を確認。周囲の索敵完了、他の敵影はないわ…。作戦目標達成、私達の完全勝利です…。お疲れ様、マギー。帰投しましょう、鎮守府へ…。」

「…ええ、わかったわ。ブルーマグノリア、これより帰艦する」

蒼いACは朝日を浴びながら青の空母へと飛んでいった。

◇ ◇ ◇

「HEY! 正に快勝でしたネ!! 提督もきつと喜んでくれマース! 提督う、褒めてくれるかナー♪」

「…はあ、金剛、気持ちはわかるけど少し静かにできないかしら…? まだここは戦闘海域内なのだけど」

「Oh! Sorry」

と意味つつ全く会話を止めようとしないうちに戦艦に加賀は頭を抱えた。他の第一艦隊のメンバーも咎めるどころか一緒になって会話に花を咲かせている。

(まあ、無理もないか…)

今回の相手は本来であれば大破が出るどころか、下手すれば轟沈してしまうものかいてもおかしくはなかった。しかし結果は私が艦載機を八割ほど喪失、『ブルーマグノリ

ア』が中破といったところ。そして艦隊はほぼ無傷で敵勢力を全滅。金剛の言葉を借りれば、正に快勝といえる。気分が高揚しても仕方ない。

「こちら叢雲、今のところ敵影はないわよ。引き続き警戒を続けるわ」

「…了解、お願いするわ」

それに今回は一緒に帰投している支援艦隊の子達が警戒してくれている。特に先ほど定時連絡をくれた叢雲と、一緒に支援艦隊にいる綾波は真面目な上、遠征でこうしたことには慣れている。帰り道に敵潜水艦に撃たれる、ということも無いだろう。

空にもかろうじて残った艦載機を飛ばし警戒に当てているが、見つかるのは他の艦娘の偵察機や帰投している味方艦隊のみ。

(どうやら私達だけでなく、他の鎮守府も勝利を刻んできたようね……)

それは制海権の奪取を意味し、ある程度の安全が確保できたことがわかる。ならば少しばかりこの勝利の余韻に浸ってもバチはあるまいと思ひ、味方の雑談には目を瞑ることにした。

「やっぱり今回のMVPはマギーですネ！すごい活躍でしたヨー！」

「あれ、でもマギーさんって艦載機っぽい。艦載機ってMVP貰えるの？」

「おや、マギーさんがもらえないならもしかしてこの北上さまがまたMVPかな？ なんだって南方棲戦鬼の止めさしたし、戦艦棲姫にも大ダメージ与えたしね。いやー、

報酬の間宮券、なんに使おうかなー?」

「おいおい、なに勝手言ってるんだよ北上! お前今回はマギーのおこぼれ貰っただけじゃねーかッ! 大体、順当に考えりゃ艦載機の手柄は加賀の手柄だろー」

「Oh! じゃあマギーは後で加賀に何か奢ってもらうといいですネー! 間宮のアイスなんかオススメだよ! Good tasteネ!」

「……………」

「ん? マギー、どうしたんですか?」

「…え? …ああ、ごめん…、少しぼうつとしてた……」

「そうでしたか…まあ無理もないデス、マギーは今日とつても頑張つてました! 帰投は私達に任せて、マギーは大船に乗ったつもりでゆっくりしているといいデース!」

「大船にだつたらもう載つてるっぼい?」

「ははッ、確かにな!」

「……………そうね、そうさせてもらうわ」

そう伝えるとマギーは通信を切り、仲間達の会話からはずれた。そこには普段と違う彼女らしくない弱々しさがあつたように感じ、心配になつた私はプライベートチャンネルで彼女に呼びかけた。

「マギー、どうしたの?」

「…なんでもないわ、大丈夫よ、加賀…」

「……嘘言わないで。付き合いはまだ短いけど、あなたは私の艦載機よ…それぐらいはわかります」

「……情け無いと思つてた。私は提督に“負けはしない”と言つたのに…私一人では勝てなかつたかもしれない…」

「…提督は“私たちとの連携で勝て”と言つていたはずよ…、そしてその通り私たちは勝つたわ、何も恥じることは無いと思うけれど……。マギー、なぜそんなに一人で勝つことにこだわるの？」

これは演習の時も、戦艦棲姫に向かって行つてしまつたときにも思つたことだった。ACが強すぎるのもあるのかもしれないが、それ以上に彼女自身になにかくりがあるように感じた。

「……私はこの時代に造られる前、あなたたちで言う『前世』で“ある傭兵”に負けた…。その傭兵は同じ相手に一人で勝つていたわ…」

「戦艦棲姫二体を一人で？そんな馬鹿な……」

戦艦棲姫は二体もいれば並みの艦隊では太刀打ちすることはできない。本来ならば元帥クラスの司令官率いる精銳が出張ってくる相手だ。

それを相手に時間稼ぎしていた『ブルーマグノリア』ですら圧倒的だと思つていたの

に……。私からしたらもはやそんなのはオカルトの域であり、恐怖を感じてしまう。

「これは本当の話よ。何もかもを焼き尽くす、死を告げる鳥……。『黒い鳥』と呼ばれた彼だつたら……きっと……」

思い出を語るようにゆっくりと発したその言葉には、明らかな羨望の感情が込められていた。そうか、だから彼女は一人で勝利しようとしていたのか……。

「あなたはその傭兵の様になりたかつたの……?」

「……そうだつたのかもね。でも私は『選ばれなかつた』。……彼に負けて燃え墜ちているときは『これでいい』と思つていの……。心の底から……。なのに……。今日の戦闘で確信したわ……私はまだ『敗北に呑まれたままだ』」

それを聞いて、私はあるセリフを思い出す。彼女と初めて会つたときの、あの言葉……。

『——負けないわ、何にも、誰にも』

私は……あれが彼女が自身に言い聞かせていた言葉だと理解した。

提督がマギーに感じていた『恐ろしいなにか』、それは彼女自身でも抑えられない闘争への欲求。そして……敗北に呑まれたままの自分を赦すことができない、憤怒のような感情なのではないかと思う……。きっとそれは敗北を払拭しない限り自身を焦がし続けるのだろう……。

ならば――

「ねえ、マギー…確かにあなたは“選ばれなかった”のかもしれない…。でも、私達となら『黒い鳥と呼ばれた傭兵』と同じ戦果を出せたのも事実よ。……戦艦棲姫は、私の…前の鎮守府の仲間の仇でした。あなたがいたから…その雪辱を晴らすことができたわ…。私には…あなたが必要よ、マギー…。それと一緒に、私があなたの“必要”となれないかしら…。あなたの“敗北”を拭い去るその日まで……」

「加賀……」

「…そういえばこの空母、改造前は煙突の関係で『焼き鳥製造機』なんて言われていたらしいわ。あなたを『黒い鳥』にするにはうってつけだと思うけど……」

「フツ…フフフフ。……以外ね、あなたがそんな冗談も言えたなんて知らなかった。…ありがとう、ちよつとだけ…考えさせて……」

そう言うってから、鎮守府に帰投するまで彼女は一言も喋らなかつた。ただ、母港に着いた時に見た彼女の表情は、気のせいではなければ少し和らいでいたように見えた……。

◇ ◇ ◇

「倉井様、これが偵察機の映像です…」

「これは…ACか」

「はい、……彼らは一体どこでこれを…？まさか『企業』が…？」

「いや、それは無いだろう。奴等の実験と我々の計画…、その思惑は一致している。わざわざこんな不確定要素を入れる必要は無い。何より、やり方が奴等らしくない…。恐らくだが、『企業』に似たナニカの手引きだろう」

「あの『企業』に似たものが存在するのですか!？」

「…翔鶴、それは大したことではない。重要なのはこのACが『秩序を破壊するもの』かどうかだ。…No. 2、No. 8、このAC…どう感じる?」

「この映像だけではなんとも言えんな…ただ…良く訓練されている、やや蛮勇に過ぎるが」

「俺も同意見だ…倉井、このACが我々の新しい敵か?」

「…今は保留だな。しかし、こいつが我々のイレギュラーであればプログラムを修正せねばならない…それも私の仕事だ」

——すべては理想のため、復活のために……

第十話「番外編」赤城の残滓

私は甲板の上に立っていた。そこは炎に包まれ、消火を行う者や逃げ惑う者、すでにただの肉塊となつてしまつた者などが見える。遠くを見ると見慣れた空母が同じように火に包まれていた……。

（加賀……？）

そんな状況にいても冷静にいられたのは、これが夢だと分かつていたから。舞い上がる火の粉まで確認できるほど鮮明な景色とは裏腹に、本来ならするはずのむせ返るような硝煙や血の匂い、聞こえてくるはずの爆音や悲鳴が全く無く、まるで無音映画のようであつたのと、その映画に合わない女性が隣に佇んでいたからだ。

「こんにちは、マギー」

声をかけてきた女性は私と似た服——ドウギと言うらしい——に赤色のミニスカートを身にまとつているが、その立ち振舞いには粗野な私と違い上品さがある。

——こいつと会うのはこれで何回目だつたか……？

私は何度か同じ夢を見たことがあつた。原因は分かっている。こいつは残滓なのだ。艦娘の人格を形成する情報は主に二つ。

一つは艦船を動かすのに必要なAMS 適正のある体、そのクロインの元となった人物の記憶。これは性格や言語、作法などの基礎知識の元となるらしい。

もう一つは自分の艦船の戦闘オペレーション。これにより自分の艦船の性能や操り方、戦術を生まれながらにして持つこととなる。

戦闘オペレーションなどと銘打っているが、その艦船の歩んできた歴史そのものが人生にまるっと上書きされるため、まるで自分がその艦船の生まれ変わりのように感じるらしい。中には艦長の名前まで覚えている者もいるようだ。

——だからそれは『前世』なんて呼ばれている。

私の場合にはフアンタズマビーイングにより自分の情報、『魂』と言い換えてもよいそれを電子化されていたが、これには遺伝子情報などは無い。そのためこの時代に『開発』された時に、本物の私に似た艦娘の体に私の『魂』を上書きしてできたのが今の私だった。夢に出てくるこいつは上書き時に消えきらなかった艦娘の残滓なのだ。

「どうです、今の生活にはなれましたか？」

「そうね、あとはあなたが出てこなければ文句ないわ、『赤城』……」

「そんなこと言わないでくださいよ。私はあなたでもあるんですから」

「体はね」

「心もですよ。貴方の『魂』が上書きされたとき、ちよっぴり『私』が混ざっているんで

す。だからこうして私が出てきてしまうことがあるんですよ。特に貴女自身が揺らいでいる時は……」

「私が揺らいでる……？」

「ジレンマを感じているんじゃないんですか？自分だけでは黒い鳥に追い付けないと、戦艦棲姫との戦闘で感じてしまった…。だからといって他人の手は借りたくはない、けれどもやはりそれでは“届かない”……何より負けっぱなしは嫌だ。そんな所ですかね？」

「……そうやってわかってるような口を聞くやつは嫌いなだけだ」

「不機嫌になるのは凶星を言われているからです。貴女の時代でも組んで行動する傭兵は珍しくもなかったでしょう？加賀たちと協力することは、そんなに悪いことではないと思いますけど……」

「……それはあなたが艦娘だからそう感じるだけよ。私とは違うから……」

「いいえ、マギーさんも十分艦娘ですよ。……今、周囲に広がっているこの光景は、“わたしの最後”なんです。いつかあつた戦争、その戦争で『赤城』は……『私達』は負けたんです。私達艦娘は生まれた時から、その『敗北』が刻まれています。……きつと皆がそろって戦場に赴くのはそれを払拭したいから……その『敗北』に抗い続けるのが艦娘なんですよ……マギーさんと一緒です」

「だから私も艦娘だと?」

「はい、そして艦娘はそのために協力を惜しみません。だからマギーさんが加賀達と共闘するのはむしろ当たり前のことなんですよ」

「……だからって『はいそーですか』って切り替えできたら、私はここに居ないわ」

「…難儀な方ですね」

「自覚はあるわ、治せないだけ……」

「それはそれでどうかと……。まあ今の生活を気に入ってはくれているみたいですし、気長にいきましょうか。『フアットマン』や『彼』以外に信用できる人たちに囲まれて過ごせば、なにかが変わると思います。それにあなたの時と比べて美味しいものがいっぱいありますしね!」

「…それ関係ある?」

「大いにありますよ!食は全ての基本です!!ちなみに今は秋刀魚がオススメなので、晩御飯は秋刀魚の塩焼き定食にしましょう!」

「……覚えてたらね」

途中まで良いことを言っていたような雰囲気だったのに……こいつは……。うなだれながら目を閉じる。

しばらくしてから顔を上げ、目を開けたときには見慣れたACのモニターが目の前に

あった。

「…マギー、母港に着きました」

「…ええ、ああ……ACを工廠へ搬入するわ」

どうやら帰路の途中、ACのコックピット内でうたた寝をしていたようだ。加賀の呼びかけ寸前で起きたためか、幸いそのことがバレている様子はない。金剛から「ゆつくりしているといい」とは言われていたが、流石に眠りこけていたのはバツが悪かった。

今回の戦闘で工廠の修理装置入り、通称『入渠』が必要だったのは私のACだけだったので重ね重ね恥ずかしくなり、そそくさと『加賀』から『ブルーマグノリア』を降ろしドックへ運んでいく。

艦載機が『入渠』とはおかしな言い回しだが、この時代には未知の技術の塊であるACは『入渠』でしか直すことができならしい。ドックへ移動が済みACから降りると加賀が近くの壁に寄りかかっていた。

「どうやら私を待っていたようだ。」

「お疲れ様、マギー……。ちよつと早いですが、晩御飯一緒に食べませんか？」

『グウウウ』と言葉よりも先に体が返事をしてしまう。自分があまり上品な方ではない事は自覚しているが、それでもこれは恥ずかしい。

「なんでこの体はこんなに燃費が悪いんだ！」と内心、赤城に毒づく。

「フフ…、では混雑する前に行きましよう」

「…今日の日替わりってなんだったっけ？」

「たしか『秋刀魚の塩焼き定食』よ、今が旬ね…。私はそれにする予定…」

「じゃあ私も…、これは気分が高揚するわね」

「マギー、人のセリフ取らないで…」

「別にいいじゃない」

「こんなくだらない雑談をしながら、私は加賀と食堂へ向かっていった。そういえば、同じ年ぐらいの同性とこうやって過ごしたことは『前世』では無かったかもしれない。

「——なにかが変わる…か…」

「？マギー、なにか言いました？」

「…なんでもないわ」

ちなみに焼き魚を食べるのはこれが初めてで、骨をとるのに悪戦苦闘するハメになったものの、『秋刀魚の塩焼き定食』はとても美味しかった。それは旬だったからか…それとも誰かと一緒だったからかは、今の私にはわからなかったが…。

第十一話「番外編」彼女の趣味

カリカリカリカリ……とペンを走らせる音のみが部屋に響いている。

少し前までは蝉や鈴虫の鳴く声や風鈴の音色も聞こえていたのだが、気付けば風に冬の気配を感じ始める季節となり、それらのBGMは鳴りを潜めていた。それに少々の寂しさを感じるものの、この趣味とも日課とも言える日記を書くために記憶を反芻するには、この静寂もちょうどいいと思う。それほどまでここ最近では日記に書くことが増えた。

日記をつけ始めたのは前の鎮守府の時からだった。きつかけは提督との会話だったのを覚えている。

「加賀、おまえ趣味とかはないのか？」

「……なぜそのようなことを聞くのです？」

「いや、そういうやおまえが仕事以外なにかしてる姿を見たことが無いと思っただけ……。仕事熱心なのはありがたい限りだが、それだけだと人生つまらんど……。」

「戦うために造られた艦娘にそのようなこと必要でしょうか？」

「そういう思考がいかなのだ、まったく……。よし、加賀……おまえなにか趣味を作れ、こ

れは命令だ」

「……はあ……」

いきなりそんなことを言われても困る、と思いつつも命令であれば仕方ない……。とはいえどうすればいいか分からず、当時の私は右往左往していた。

そんな時、赤城さんから「じゃあ日記でもつけてみては？」と提案される。私は必要なことをまとめて手帳にメモするようにしているので調度いいのでは？と思つてのことらしい。それから私は日記をつけ始めた。提督からは「それって趣味に入るのか？」と言われたが、「任務とは関係ないことですから趣味です」で押し通した。

最初は何を書けばいいか分からず、赤城さんと何をしたらか等を書いていた。そのため内容は赤城さんのことだらけになり、覗き見た本人からは「これじゃあ誰の日記か分からないわね」なんて苦笑いされるほどだった。私としては思い出を積み重ねているようで以外に悪くないと思つていたのだが……。

そう言われてちよつと恥ずかしくなり日記の内容を変えらるも、結局『赤城さん』と書いていた箇所の一部が『蒼龍、飛龍』に入れ替わっただけだった。どうも自分が何をしたらかを書くのは苦手なようだ。

……なので「MI作戦」で赤城さんや蒼龍、飛龍……艦隊の仲間を失ったとき、この日記は真っ白になった。なんとか立ち直つて日記と向かい合うことができるように

なつても、肝心の書き記すことがなかったのだ。

鎮守府が再編成され新しい艦娘たちが徐々に増えていっても、秘書艦業務の多忙さや自分の無愛想さも相まって前の様に過ごす相手に恵まれることも無く、日記は一行で終わることも珍しくはなかった。無理やり書けなくはないが結局任務内容についてになつてしまい、それでは普段取っているメモと違いがない。

(もうやめようかしら……)

ばらばらと読み返してもなんの面白みもない、まさしく「つまらない人生」を体現している日記に意義を感じなくなり、私の頭にはそういう考えがよぎり始めていた。

しかしある日、彼女……『マギー』と出会つて状況が一変する。

カリカリとペンを走らせる音を一旦止め、彼女と出会つた日の日記を見直す……。改めて見直すと内容が全然まとまっていなかった。まあ無理もない、この日は色々なことが起き過ぎた。

《『開発』でACとそのパイロットまで出来てしまったこと》

《そのパイロット、マギーから深海棲艦の正体が『大破壊』の時に暴れていた成長する古代兵器、『パールヴァライザー』だと聞かされたこと》

《いきなり演習を組まされ、ACの性能に驚きを覚えたこと》

《演習の反省会で厳しくしすぎて瑞鶴を泣かせてしまったこと(その後もお風呂でま

た泣かせてしまったこと」》

《ランチメニューを目にしてマギーが秋月と一緒に「食事がこんな豪勢でいいの!？」と驚いていたこと》

《そして、彼女の本当においしそうに食べる姿が……赤城さんとソツクリだったこと……》

驚くことがあり過ぎてこの日はパンクしていたことを思い出す。そしてこれを境に日記を書く時間が増えていった。

早くマギーが鎮守府に馴染めるように、何よりお互い空母と艦載機として理解を深めるため、という理由によりマギーと私は同室に住むことになった。それを皮切りに秘書艦の業務まで手伝ってくれるようになり、彼女と一緒にいる時間が増えていく。その時間と比例して日記に書くことが多くなり、今ではどのことを書こうか迷ってしまうほどだ。

本日もまだ書きたいことを書ききれていない。戦艦棲姫に快勝できたこと、マギーの抱えているものを垣間見れたこと、それに対する私の想い……。

……ああ、そうだ。

晩御飯を食べた時に、初めて焼き魚を食べたらしい彼女が骨に悪戦苦闘していたこと……。「とれたわッ」と綺麗に剥がせた背骨を見せてきて、普段とのギャップもありとて

も可愛かったことも書いておかねば。

その時のことを思い出してつい笑みをこぼしてしまう。

こうやって記憶を反芻する時間が日記を書くときの楽しみの一つだった。

「……楽しいんですもの、やっぱり『趣味』ね」

以前の提督の言葉に改めて反論する。再び部屋にカリカリカリ……とペンを走らせる音が響いた。

◇ ◇ ◇

「……こんなものかしら」

日記を書き終えページを閉じると同時に、部屋の後ろから扉を開ける音がした。どうやらマギーが帰ってきたようだ。

「ん？加賀、まだ起きてたの？」

言われて時計を見ると深夜1時を時計の針が過ぎたところだった。

「……もうこんな時間だったのね」

「もしかして日記書いてたの？こんな時間まで……」

「今日は書くことが多かったから……」

大半があなたのことなのだけど……とは言えないが。同室する者によつては中身を

切り開き、第二、第三艦隊が切り開いた海域を警備してシーレーンを維持する、といった形体をとっている。

第一艦隊は錬度が高い「M I 生き残り組み」で形成されており、彼女達もその一員なのだが、全員しつかりした性格の持ち主であるため新人の「建造組み」も入り混じる第二、第三艦隊の旗艦や指導を任されている。

それに対し、他の「M I 生き残り組み」はローテーションや任務との相性で第一艦隊と第二、第三艦隊を行ったり来たりするが、私は数少ない航空戦力であるため第一艦隊旗艦にほぼ固定されている。

そのため私と妙高型の彼女達とは一緒の艦隊になることはほとんど無かったのだ。

「同じ艦隊を任せられる者同士語りたいたいみたいね。明日の……もう今日か……、祝勝会も出るみたいだから楽しみにしてる」といいわ

「そしてそのまま酔いつぶれる」とでも言いたげな笑みをマギーは浮かべていた。

「そうね、楽しみにしているわ」

また日記に書くことが多くなりそうだ、と思う。まあ、酔いつぶれないでいることができるだけだ……。

マギーが来てから色々な変化が起きている。戦局であったり、私自身であったり……。以前の私だったら先程の「楽しみにしている」という返事はしなかっただろう。

きっとこれからも色々なことが動き出していく。それが良いことだけではないとは思っけれど、それも含めてこの「趣味」で書き記していこう……。

いつか今日みたいに「ああ、こんなこともあったな」と微笑むことが出来るように……。

第十二話「MISSION03_深海鉄騎撃破—01」

ヒトマルマルマル

執務室に差し込む朝日によりその室内が暖まり始めた頃、一人の男が欠伸をしながらぼやいていた。

「なあ、マギー、もう10時だ…。俺は10時と15時は休憩すると決めている」

「ならそれは書類を片してからにして」

ぼやいた男、白鳥提督は秘書艦補佐に任命された女性に休憩を却下され「チッ」と舌打ちをする。

「はあ、人選をミスっちゃったかな……」

「じゃあこのレポート作成止めるけど、いいの？」

「……頼む」

わかっているんだっけならさっさと仕事に戻って、と提督をひと睨みあと、マギーはノートPCへと視線を戻した。

「はあ、吹雪が秘書艦の時が恋しいぜ……」

有能な秘書補佐を目の前にしながらそんなことを呟き、提督は渋々書類を手を取っ

た。

執務室がこんな状態になったのはほんの些細な切っ掛けだった。現秘書艦である加賀がマギーとの食事中に「うちの提督は書類作成まで押し付けてくるから大変だわ」と愚痴をこぼした際に、マギーが「私そういうの得意だから手伝おうか？」と申し出たからである。

マギーは黒い鳥と組んでいた時に依頼のレポート作成を担当しており、そういうことには慣れていた。ならばいざ、ということでも手伝ってもらおうと、殆ど添削もせずに大本营に提出できる程の書類を作成してくれるので、加賀と提督は両手を上げて彼女を歓迎した。しかし、提督にとつて思わぬ誤算が発生する。

「これでサボらせてくれたら最高だったんだがね……」

マギーは提督のような人物の扱いに馴れているのか、のらりくらりと仕事をかわそうとしても直ぐに捕えられてしまう。しかも上がってくる書類のペースも加賀一人の頃より当然早くなっているため、仕事は早く終わるものの時間単位の作業量が増えたのだ。

無論、本来ならそれは良いことなのだが、マイペースを信条とする白鳥提督には面白くなかった。そんなおり、執務室の通信機からコール音が鳴る。通信室にいる大淀からだ。お、助かった、と内心提督は思う。この時間帯の連絡は艦娘からの緊急連

絡を除けば、だいたい知り合いの提督からの連絡とかだ。どうせ演習のお誘いだろう、ついでに雑談に花を咲かして少し休憩に付き合ってもらおうとするか……。そう思いながら受話器を取とる。

「おう大淀、俺だ、どうした？」

『提督にお電話が……。』

「相手は？」

『それが、その……。』

大淀が口ごもるなんて一体誰だ？と提督はいぶかしむ。——嫌な予感がする。提督の予想は見事的中した。

『……。倉井元帥からです』

「……」

先程までのだらけたの表情が一転して強ばる。倉井元帥……。個人的に最悪の部類に入れている人間からだったからだ。こいつが関わるものは大抵口クなものがない。とはいえ大将である自分の上司からの連絡に応じないわけにもいかなかった。

「わかった……。替われ」

『……。はい』

受話器から発せられる音声がうら若き乙女の声から低く渋味のある男性の声に変わ

る。

『久しいな、白鳥』

「これはこれは倉井元帥殿、私なんぞに一体何のご用で？」

『そんな言い方をするな、貴重な同期だろうに』

「ああ、そうだな……テメーが薦めた戦線拡大で貴重になっちゃった」

『必要な犠牲だ』

「お前に都合の良い状況を作るのにか？」

『何か誤解しているようだな……。私の全ては秩序をもたらすためにある、私欲の為ではない……。これから貴様に下す任務も然りだ』

「……チツ、ああそうかい」

「それで……用件はなんだ？」

『ガダルカナル島の基地型深海棲艦撃破の報は聞いているな？』

「ああ、確か飛行場姫だったか……。お前のとこの艦隊でやったんだろ？」

『ああ、その通りだ』

白鳥提督が戦艦棲姫らを倒した任務はこのための布石だった。ガダルカナル島近海の敵勢力を排除し、その海上から艦隊砲撃にて飛行場姫を撃破する、当初からその予定であり、つい先日その作戦成功の報を白鳥提督は聞いたばかりであった。

『後は上陸部隊にて島の残存勢力を掃討し、制圧を完了させる手筈だったのだが……。敵新型により上陸部隊全滅の報告が入った……。貴様にはその新型の討伐をしてみよう』
「おい、ちよつとまで。それは陸での話だろうか？なら陸軍の管轄だ、なぜ俺に回ってくる？」

深海棲艦にも陸上型が存在する。飛行場姫のような基地型もいれば、そこから生産される四つ足の生えた戦車の様なものや小型の浮遊型砲台などもいる。それらは陸上警戒用の兵器なのか、数は多いが個々の能力は低く『巢』ごと艦隊砲撃である程度減らし、しまえば後の掃除は陸軍の管轄である。犠牲になった部隊はお気の毒だが、蟻の様に潜んでいる敵に対して海軍ができることは精々物資や兵の運搬ぐらいだ。

『討伐』は明らかにお門違いであるはずだった。

『それについては見てもらった方が早い、今その新型の画像を送った』

白鳥提督のPCからメール受信を知らせる音がする。画面をみると、件名も無くただ画像データのみ添付されているメールが一通届いていた。その画像を開き、白鳥提督は息を飲む……。

『大本営ではそれを“深海鉄騎”と名付けたが……。貴様はそれの正体がわかるだろ』

逃がっている兵士が撮ったのかピントがズレてぼやけているが、白鳥提督はその独特のフォルムに見覚えがあった。画像に映り込んでいたのは『ブルーマグノリア』と同じよ

うな二本脚の鉄巨人……紛れもなくAC だったのだ。

「……一体なんのことだ？」

『惚けるなよ、戦艦棲姫二体を相手取っていたあの蒼い奴……あれと同じものだ』

偵察機でも放っていたのか、倉井元帥はどうやら前の戦闘の様子をどこからか観察していたらしい。

「覗き見は趣味が悪いぜ、倉井……」

『あれの報告をしていない貴様に言われたくは無いな』

「たかが艦載機一機、いちいち報告書に書いてたらきりがないと思うが？」

『よく言う……。まあいい、そのことについては不問としよう。ともかく、“あれ”にこの深海鉄騎の撃破を依頼したい。陸軍には荷が重いが、“あれ”ならばそう苦戦はしないはずだ……。詳しい内容については後で正式な指令に記載する。蒼い奴の力、見せてみる……』

そう言い残し、倉井元帥は通信を切った。白鳥提督はため息をつきながら受話器を置く。そして聞き耳を立てていた二人の秘書、加賀とマギーに「お前らに仕事だ」と言い放ち、先程の会話の内容の説明を始めた。

◇ ◇ ◇

「しかし、よりもよって一番知られたくない奴にAC のことがバレるとはな……早

「速面倒事が舞い込んで来やがった。俺は面倒が嫌いなんだがね」

二人に説明を終えた提督が愚痴る。

「随分と嫌ってるみたいだけど……、その倉井元帥って何者？」

提督にここまで言わせる相手の事が気になり、マギーは質問を投げ掛けた。

「一応俺の同期だよ、大した交流は無いがね。……と言うより、誰も奴の事をよく知るやつはいない。士官学校にも在籍してなかったしな。着任式の挨拶で誰も知らない同期がいてビビったぜ」

「どういふこと？」

マギーはこの時代のことをまだあまり知らない。しかしそれでも組織の上部、提督などの士官になる者は基本的に相応の教育なりを受けた、いわゆるエリートコースの人間がなることは知っている。それはどの時代でも変わらない……だから倉井が異様な例であることがわかる。

「さあな、相当な金でも積んだんじゃないか？『企業』なんてのがバックにいるって噂もある。そいつらが何者かもよくわからんがね」

「ただの成り上がりってわけ……？」

「いいや、やつは立場相応に優秀だよ、上のジジイどもに取り入る手腕も含めてな。しかし……とにかく胡散臭い、後ろ楯の『企業』つてのも含めて……。聞いた話じゃ、深海

棲艦の出現を予知していたそうだ。しかもやつらを支配できれば、この国を世界屈指の強国にできると奴は上層部に吹聴しているらしい」

「深海棲艦を支配ですか……そんな馬鹿なこと……」

「できるわけない、と加賀は反論しようとした。しかしあることを思い出し言葉が途中で詰まってしまう。

「……俺も噂を聞いた当初はなにをイカれたことを、と思つたよ。それを信じて戦線を拡大し続ける馬鹿どもも含めてな、だが……、もし奴がそうさせる程のなにかを知つていたらしたら……」

マギーは提督がなんのことを言おうとしているのか分かった。それは自分が『財団』から破壊目標として依頼されたものだろう。

「バルヴアライザ深海棲艦統括機構……インターネサイン……それを知ってるって言うの？」

にわかには信じがたい事だった。そもそもインターネサインは『財団』の話の信じれば、『大破壊』当時ですらJ・Oといった一部の人間しか知らなかった情報のはずだ。ましてや『大破壊』以前の技術が失われつつある現在において、『財団』などのタワーAIでもなければ知り得る情報ではない。

「あくまで可能性の話だ、マギー。倉井がなにをどこまで知ってるのか皆目検討もつかん……。ただ単に話に乗せるのが上手いだけかも知れんしな……。だが、奴が戦線拡大を

推し進めているのも事実だ……まるで何かを探すように……。そして俺たちをその為の駒程度にしかアイツは思っていない。……だから極力関わりたくなかったんだがな」
提督がAC『ブルーマグノリア』を開発したことや『インターネサイン』のことを上層部に報告しなかったのはその為だった。知られば今回の様に体よく利用されるのがわかっていたからだ。

「……でも提督、これはチャンスかも」

マギーの発言に白鳥提督は目を丸くする。

「一体どういうことだ？マギー」

「倉井元帥がインターネサインを知っているようがいまいが、深海棲艦を支配するっていうなら目標はそれなんですよ？こちらと目的は違ってても、目指す所が同じなら情報を得るには調度いい……。こっちも上手く利用してやればいいわ。今回の『深海鉄騎』の件もそう……。倒したACを回収できれば、なにかインターネサインに繋がる情報を得られるかも」

ACにはパイロットデータとリンクして様々な情報が記録されている。深海棲艦に乗っ取られてからの戦闘ログ等を解析できれば、インターネサインに繋がる足掛かりが得られるとマギーは考えていた。

「……なかなかしたたかな女だな、全く」

前向きなマギーの意見に提督は素直に感心する。

「虎穴に入らずんば虎子を得ず」よ……提督」

加賀もマギーの考えに賛同していた。そもそも艦娘は深海棲艦を撃滅するために造られた存在だ。その本懐を達成できる可能性があれば、多少の危険があつても前に進みたかつた。

「おまえもやる気満々つて訳か……揃いも揃つて殊勝だな。わかつたよ、利用されればなしつてのもの確かに癪だ……。おっさんは役に立たんかもしれないが、出来る限りの配慮はしてやるさ。まッ、とりあえず正式な指令が来るまでそのやる気を維持しておくんだな」

ハツハツハツハツ、と笑いながら提督は秘書艦達の肩を激励するように叩く。そしてそのまま執務室のドアへと向かい、ノブに手をかけた。しかし、それは回されることなく終わる。

「……提督、出る前にこの書類に押印して貰えない?」

なにさりげなく逃げようとしてるの、とでも言いたげな目を向けながらマギーは書類を突きつけた。

「マギー……、今のは見送る流れだろ?」

「まだお昼まで一時間近くあります」

加賀も合わせて書類の束を提督に突きつける。提督はノブに掛けた手を戻し、うなだれながら自分の机へトボトボ戻っていった。

「全く、ウチの秘書艦たちが優秀過ぎて涙が出そうだぜ」

「あの野郎、早く指令送ってこいよ……」と先程までの「関わりたくない」という発言を棚に上げ愚痴りながら書類に判子を押ししていく。

結局優秀な秘書艦たちにより昼までみっちり仕事をするはめになった白鳥提督であつた。

◇ ◇ ◇

イチヨンマルマル

提督のPCの画面を二人の秘書艦が凝視している。そこには次の作戦内容が映っていた。

《ミツシオンを説明する。ガダルカナル島に出現する敵新型陸上深海棲艦、深海鉄騎の撃破が今回の目標だ。目標は飛行場跡地周辺に出現することが確認されている。恐らく飛行場姫を再建している深海棲艦の防衛戦力として配備されているのだろう。そのため、まず航空戦力にて敵再建部隊を爆撃し目標をおびきだす。後は例の艦載機で目標を撃破してくれ。こちらからも軽空母『龍驤』を支援として送ろう。指定の海域で合流し、共にガダルカナル島に向かえ。指令内容は以上だ、期待している》

「以上が指令内容だ。こちらの航空戦力を考慮して支援つけてくれるなんざ太っ腹だな。あいつのところでやってくれたらなお良かったんだが」

白鳥提督は倉井元帥から届いた指令のメールを加賀とマギーに見せながら皮肉を言う。

「とりあえず目標近海の制海権は確保できている、恐らく海上で敵に出会うことはあるまい。目標も陸上だ、行きは護衛は天龍と吹雪で充分だな？ちようど近くの駐屯部隊まで物質運搬の任務を任されている、そのついでだ。帰りも適当に合流して戻ってこい。何か質問はあるか？」

提督の発言に加賀が小言を言う。

「随分と雑ですね」

提督のデスクの上にあるPC画面を見せられながら他には何もなく口頭のみとは、指示を聞いているのが自分とマギーしかないとはいえちよつと適当過ぎはしないか？と思っていた。

「遠征系の説明なんていつもこんなもんだろ。今回は爆撃支援があるにはあるが、どつちかといえばAC 輸送任務だしな。陸から上のことはマギーに一任する。そつちの方がマギーも都合がいいだろ？」

微妙に言い逃れに使われているような気がするが、事実その通りだったためマギーは「そうね」とだけ返事をした。

「よし、じゃあ早速行つてこい。下で天龍たちも待つてる。マギー、気を付けろよ」
「わかつてるわ」

そう返すとマギーは踵を返し、加賀と共に港へと向かつて行つた。

「……やれやれ、これで口うるさいのがいなくなつた」

二人の秘書艦が居なくなつた執務室にて提督は呟く。暫く忙しかつたし、鬼の居ぬ間になんとやらだ、と提督は椅子に体重を預け休もうとした。しかし、それは儚い夢に終わる。

執務室のドアから少々強めのノックが鳴り、「失礼する」と凜とした声を通る。中に入つてきたのは鎮守府の第二艦隊を取りまとめる艦娘の一人の那智だつた。

「ん？どうした、那智？お前、今日は非番だろ？」

「ああ、だから貴様がサボらんよう加賀たちに見張りを頼まれている」

「嘘だろ……」

午前中と同じオチだ。どうやらウチの秘書艦どもは俺を過労死させたいらしい。

「そんな呆けた顔をするな。私も手伝つてやる、後で奢つてくれればな」

「……高いのは無しだからな」

全くもって抜け目のないやつらだ、と提督は部下たちに称賛を送る。無論、半分皮肉だが。まあこの分なら何かあっても大丈夫だろうと加賀たちへの心配を打ち切り、昼前と同じように書類を片しながら彼女たちの帰還を待つことにした。

第十三話「MISSION03_深海鉄騎撃破—02」

先日の激戦がまるで嘘のように、今私達のいる海域には砲撃の爆音も艦載機が空を切る音もしなかった。その激戦によつて敵を殲滅し、制海権を取り戻したのだから当たり前と言えば当たり前なのだが……。

そんな静寂の広がる海の上で、一つの歌声が艦隊に響いていた。

おくれは天龍く

戦く場くのく運び屋く

おくれは天龍く

いゝつもく運び屋く

なんだかなああく

どこかで聞いたことのある、懐かしさを感じる曲であつた……と言えば聞こえが良いが、その懐かしさには煩わしさの記憶しかなく、反射的にイライラしてしまう。加賀は私達が『護衛対象』であり、艦隊の旗艦が歌つている当人であるためかだんまりを決め込んでいるが……。やはり私は我慢ならない。

「少しは静かにして、天龍。仕事する気あるの？」

「なにを言っただんだマギー、今絶賛仕事でござ。ただ俺の電探にはなんも反応が無いだけさ。吹雪はなにか『感じる』か？」

急に天龍に話を振られ、少々しどろもどろしながらも吹雪は答える。

「いえ、なにも……アハハ」

聞いた話、吹雪には下手な電探よりも精度の良い『危機察知能力』を持っているらしいが、それにも反応は無いらしい。つまりは平穩そのものということだ。

「だろう、なら気を張ってても疲れるだけさ。抜けるとこ抜いとくのが遠征のコツだぜ」
ははは、と天龍は笑いながら言い放つ。彼女はこの鎮守府で初期の古株らしく、随分と提督に毒されてしまったのか話しているとまるで彼と話しているような気分になる。

「……はあ、貴方が貴方なりに仕事してるのはわかったわ。でもそのふざけた歌だけは止めて」

天龍は「提督の歌、駆逐のガキどもには受けいいんだけどなく」なんてぼやいていたが、生憎私は一緒に口ずさんだりできるほど子供ではない。あと、あの歌を教えた提督には帰ったらたらく仕事プレゼントしてやろうと心に決めた。

そんな提督への嫌がらせを考えていると、天龍は少々真面目さを含めた口調で加賀に通信をする。

「で、加賀、そろそろ例の合流ポイントだぜ。偵察機出しといたほうがよくねーか？」

「あら、本当ね……。偵察機、発艦します」

あんなにおちゃらけていながら以外に仕事はしっかりこなすところが余計に提督に似ている、なんて思いながら私はACを甲板の端へと寄せた。

目の前を助走をつけて偵察機が飛び去ってゆく。

◇ ◇ ◇

加賀が偵察機を飛ばしてから暫くすると、軽空母を見つけたのか彼女が口を開く。しかしその声には驚きが混じっていた。

「あれは……AC!？」

「どうしたの加賀？」

「目標と思われる軽空母をみつけたのだけれど、その……、三機のACに取り囲まれているの……」

——まさか深海鉄騎に先手を取られたか!?そんな考えが頭をよぎる。

「もしかして敵!？」

「……いえ、ちよつと待って、あれはモールスかしら……? “我味方ナリ”……そう信号がきてる。軽空母が攻撃を受けている様子もないわ」

どうやら加賀の偵察機にACから「味方だ」と信号が送られているらしい。つまりは支援にきた軽空母の持ち物ということだ、そのAC達は。

(一体どういうこと?)

だからこそ頭に疑問符が思い浮かぶ。そもそもこの任務は、深海鉄騎に対抗できるのがACだからから舞い込んできたはずだ。なのに依頼元がACを連れているのは理屈に合わない気がする。なぜわざわざ私達に任務を回してきたのか真意が見えず、ACが敵で無いとわかつてても警戒を解けなかった。そうしているうちにあちらから通信が繋がられる。

「お、時間通りやね、感心感心。うちが軽空母の龍驤や、よろしゅうな!」

こちらの警戒を知ってか知らずか、随分と陽気な挨拶だ。ACを連れていなければ、あの胡散臭い元帥の部下とは思えない。

「……白鳥鎮守府所属、正規空母の加賀です」

「AC『ブルーマグノリア』よ。早速で悪いのだけれど、ちょっと聞いていいかしら?」

「お、なんや?」

私はストレートに疑問をぶつける事にした。

「そのACはなに?それだけの戦力を持つているのなら私達がわざわざ出向く必要は無いと思うけど?」

「んー、そやな、一つずつ答えよか」

自分で包み隠さず聞いておいてなんだが、随分とあっさり返答がきて少々拍子抜けす

る。しかしその内容は再び緊張を走らせるには十分だった。

「まずこの子達は『ユーナツクちゃん』ゆうてな…」

「UNACC!？」

「なんやキミイ、知つとるんかいな」

まさかこの時代でまたコレに出会うことになるとは思ひもしなかった。確かに動きにぎこちなさを感じていたが、なるほどそういうことか……。

「マギー、UNACCとは？」

「え、ああ……あの龍驤のACは加賀の艦載機と同じ様に、AIを積んだ無人機なのよ。Unmanned Armored Core（無人のAC機体）の略、それがUNACC」

「おお、その通りや、正式名称はうちも知らなかったけど……キミ、詳しいなあ」

「……なんであなたは知らないのよ」

「うちは倉井はんから貰ったもん運用しとるだけやからな。……実はうち、派遣で倉井はんのところにいるだけなんよ。だからそこまで詳しい話は聞いとらへん」

部下らしくない、と先程思っていたが本当に部下でないとは……。つまりこいつの持つてる情報は知られても問題ない程度のものでしかない、ということだ。とはいえ、情報を得られるに越したことはないので話を進めることにした。

「……それで、なんで私達に任務を？」

「ああ、それはやな。うちも倉井はんには聞いたんやで、『頼む必要あるか?』って。でも『貴様だけじゃ荷が重い』って突っ返されたってな。ついでにキミらの実力を測るゆーとつたで。随分とキミのACを気にかけてるようや、倉井はんは……」

「そういうこと……」

UNACもいるせいとか、まるで死神部隊の『選別』のような印象を受ける。とにかく——いい気分はしないもの——これは試験らしい。受かったらどうなるかなど分かったものではないが……。

ただこちらとしても得られた情報はあつた。

——倉井元帥はACに精通している。

UNAC自体、専門知識がないと運用できない上に、龍驤のACでは『荷が重い』と言っていた。龍驤のACはシリウスの軽量二脚UNACと酷似しており、生産性はいいだろうがその性能は決して良いものとは言えない。でもそう判断できるのは比較対象——他のAC——を知っているからこそだ。深海鉄騎のシルエットから、恐らく経験と照らし合わせて『荷が重い』と言つたのだろう。その通りであれば、かなりの場数を踏んでいることでもある。倉井元帥が自分用のACを持つていてもなんら不思議ではない。

提督が彼のことを謎が多いと言っていたが、もしかしたら私と同じように『大破壊前』の人間である可能性が出てきた。『企業』というのも、もしかしたらタワーに関係するものなのかもしれない。思っていた以上に食べない男のようだ、倉井元帥とは……。

「それで、質問は以上でええんか？」

「……ええ、とりあえずは」

正直に言えばまだ色々聞きたいことはあるが、恐らくこの龍驤というのはこれ以上のことは知らないだろう。なので質問はここで打ち切った。

「よっしゃ、ほなじやあ行こか！ 深海鉄騎討伐や！」

あくまで支援として送り出されているわりに、ガダルカナル島へ向けて龍驤は先陣を切って進路をとる。まるで旗艦のような振る舞いだ。こちらも本当の旗艦へ挨拶し、進路を変更する。

「こちら正規空母加賀、これより天龍艦隊を離れ『深海鉄騎討伐』の任に向かいます……：護衛ありがとうございます」

「こちら天龍、了解した。こつちも物資の輸送が終わつたら拾いに来るからな。頼まれたんは必ず運ぶのが俺のポリシーだ、やぶらせるなよ」

「ええ、わかつたわ」

そう言ううと天龍はまた例の鼻歌を歌いながら、吹雪と一緒に別方向へと舵を切ってい

く。

「ええ仲間やねえ。うちのところはよそよそしいところがあるから、素直にうらやましいわあ。そや、マグノリアはん。うちらもコレを機に仲良くなれんかねえ？」

派遣だと色々な気苦労があるのか、ため息混じりに龍驤は提案してきた。

「……なれたらいいわね」

しかし、私の口から出た返事はそっけない。恐らく龍驤は悪い艦娘ではないだろう、というのは今までの会話でなんとなくわかった。

ただUNACのせいで素直に返事が出来なかつたのだ。龍驤がどんな人物であれ、どうもその隣にいるACがなにかの拍子に襲い掛かってくるのでは？と勘ぐってしまう。そんなことをする意味はどこにもないのに……。

やはり『前世』でのことがネックになっっているようだ。UNACに助けられた回数より襲われた回数のほうが圧倒的に多いのだ、仕方ないだろう。

「なんや反応薄いなあ。もうちよつと、こう、楽しく行こうや」

私のそっけない返事に龍驤が不満を漏らす。もし龍驤のACを弾除けに使わせてもらっても、果たして同じようなセリフを言ってくれるだろうか？そんな考えが頭をよぎる。あちらのACと連携を取る気が、もはや私には微塵もなかった。

「龍驤、マギーと交流を深めるのはいいですが、あちらに着いてからの段取りを……」

「おお、そやな」

二人の空母が島に着いてからの段取りを話し始める。私もいかに龍驤をその気にさせつつUNACを利用するか思案を巡らせつつ、その会話の中へと入っていった。

第十四話 「MISSION 03」 深海鉄騎撃破——03」

「龍驤、目的の地点へ着きました」

「よっしゃ、じゃあ段取りを確認するで」

加賀の連絡に龍驤が元気よく声を張り上げる。一応「深海鉄騎討伐」の任にあたり旗艦は加賀なのだが、何故か仕切っていたのは龍驤だった。きつとそういう性分の艦娘なのだろう。本来ならば指揮系統に乱れを生じさせないために加賀が仕切るべきなのだろうが、生憎ここにいるのは龍驤を除けば私と加賀だけである。なので特に問題は無し、わざわざ指摘して龍驤の不満を買う必要もないので話を続けさせた。

「まずは当初の予定どおり、飛行場姫がおったところにうちと加賀の艦載機で爆撃。んでもって、討ち漏らしをうちのユーナツクちゃんたちで掃討しつつ深海鉄騎をあぶり出す。マグノリアはんは海岸にて待機、深海鉄騎を発見次第現場に急行。——以上でええな?」

「大丈夫よ、問題無い」

ちなみに『ブルーマグノリア』を海岸で待機という案を出したのは私である。表向きは「万が一深海鉄騎が空母を強襲してきた場合、すぐに対応できるように」という理由

だが、本当はUNACを偵察兼削り役にするためだ。

複数のACで戦闘する場合、普通なら同時に攻め込んで数の利を得る戦い方をするものだが、それは人間同士の場合である。UNACの場合、龍驤の指示である程度陣形を組んだりはできるだろうが、細かい判断は出来ず連係なんて取れたものではない。それどころか、こつちが敵の近くで戦っていたら誤射をくらう可能性もあるのだ。ならばいつそ削り役にして玉砕してもらおう、というのが今回の考えである。

と言つても、これは加賀にも言つてないことではあるが……まあ、言い分なら後でどうにでもなるだろう。龍驤は私がそんなことを考えているとは知らず、景気よく艦載機とUNACを発艦させていた。

「ほな、お先に失礼するで！ マグノリアはん、うちだけで深海鉄騎をやつてしもうたら堪忍な♪」

「それならそれで楽だから助かるわ」

——そんなことは無いだろうが、と思ひながら返事をする。それにもし、たかがUNAC三機程度にやられるような相手なら最初から戦う価値もない。残骸を回収させてもらつて終了なだけだ。

「こちららも艦載機を発艦します、マギーは所定の場所へ」

「了解よ、加賀」

私も加賀から発艦し、海岸に着陸する。その頭上を加賀の航空部隊が綺麗な陣形で通り過ぎて行つた。

◇ ◇ ◇

暫くすると龍驤から連絡が入る。

「早速奴らを見つけたで！うへへ、ホンマ蟻みたいや、気持ち悪い」

どうやら飛行場姫の再建場に着いたらしい。出発前に資料で見させてもらったが、深海棲艦の小型陸上型は四つ足でイ級のように有機的なデザインだった。以前、奴等の性質を聞いて「蟻みたいね」と評したことがあるが、他人の目からみてもそう感じるようだ。

「かなり再建も進んでいるようね。龍驤、陸上型と一緒に施設も破壊してしまいましう」

「せやな、ほないくで！」

合図と共に二人は絨毯爆撃を敢行する。どうやら護衛として浮遊砲台も居たらしいが、練度の高い二人の艦載機はそんなものお構い無しとでもいうかのように、対空射撃をヒラリヒラリとかわしながら爆弾を投擲していった。

まだ建造途中で大した防御力もないのか、飛行場跡地はあつというまに廃墟へと早変わりする。そしてその廃墟をさらに蹂躪しに、三機のACが侵攻を開始した。

「害虫駆除や、逃がさへんで〜」

三機のACはまばらに散り、スキヤンを駆使しながら物陰に潜んでいた深海棲艦を見つけて出す。戦車程度のサイズと戦闘力しか持たない陸上型では龍驤のUNACが持つハンドガンとパルスガンに耐えることも出来ず、あれよあれよと駆除されていく。しかし未だに深海鉄騎は姿を見せなかった。

「あれ、おかしいなあ、もう目標が出てもいいころやと思うけど……」

「いえ、龍驤……、目標出現しました!」

加賀の艦載機がそれらしき機影を発見する。だがそれは相手も同じようで、艦載機に砲口を向けていた。次の瞬間、耳を引き裂くような銃撃音が鳴り響き、空を舞っていた艦載機が次々に堕ちていく。

「そんな……、第一爆撃部隊喪失!!龍驤、マギー、気をつけてツ。敵は強力な機関砲を持っています」

——ガトリングガンか。

マギーは加賀からの情報を冷静に分析していた。しかも艦載機を墮とせる射程を考えると、ある程度何を積んでいるかも予想できる。

「その程度の武装なら大丈夫や、うちのユーナックちゃんたちの装甲でも充分弾ける!」
削り武器としては馬鹿にできないのだけれど……というマギーの不安を他所に、龍驤

は深海鉄騎の元へUNACを突撃させた。

(まあ調度いいか)

ガトリングガンは基本削り武器であり、普通はそれとは別に主砲を持っているものである。それを龍驤のUNACで確認させてもらおう——そうマギーは考え、敢えて遅れて海岸より出発した。

「こちらマギー機、目標地点に向かつてるわ。龍驤、そつちの様子はどうか？」

「こつちはもう視認できる位置まで来とるよ。このまま三機でメタメタに……あッ！」

「……どうしたの？」

「アカン、一機やられてもうた……」

「はあ!?! 幾らなんでも呆気なさ過ぎる。あなた一体なにやってたの!?!」

「そないなこというたって、いきなり射程外からこつついビームと、えと……あれや、ミサイルが飛んできたんや、しゃあないやろ!!」

「はあ、……残りがやられるのも時間の問題ね」

しかし、これで思惑通りに相手のアセンを大体把握することができた。

——ガトリングガン、ミサイル、レーザーライフルを積んだ二脚型。

武器の構成は『ブルーマグノリア』と似ているが、ヒートマシンガンより重量のあるガトリングを積んでいるあたり重量二脚だろう。思えば出撃前に送られてきた深海鉄

騎の画像も少し太めだった気がする。これで戦い方も掴めた。

「龍驤、敵は重量二脚と呼ばれる種類のACよ。火力や装甲が高い分、動きが遅い。二手に別れて接近、敵を軸に旋回するように動いて。そうすればまだ戦えるはずよ」

UNACに少しでも敵のAPを削ってもらうために龍驤へ指示を出す。

「よっしゃ、おおきに！やったるで〜!!」

龍驤は一機目の仇と言わんばかりに高揚した声をあげた。UNACが二手に分かれて急接近を開始する。しかしマギーの指示通りに敵を取り囲むことは叶わなかった。深海鉄騎も、その巨軀からは信じられない速さで接近してきたのだ。

「ちよっ、どういうことや!?話がちやうやん!!」

龍驤が動揺している間に、深海鉄騎は手に持つている武装を変更しながらUNACに向けて急加速する。そしてその勢いのままUNACを思いきり蹴り飛ばした。

ACのコアにも匹敵する太さの脚部から繰り出される衝撃は、易々と龍驤のUNACの上半身を引きちぎる。そしてゴロゴロと転がるUNACには目もくれず、深海鉄騎は地面を蹴り急加速、もう一機のUNACへと先程切り替えた武器を振りかざす。

マギーが現場へとたどり着いたのはまさにその瞬間だった。

——『ANOTHER MOON』

その黒色の光刃が深々とUNACに突き刺さり、その身を焼き尽くしていた。その光

景にマギーは「自分の最期」をフラッシュバックさせる。

「そんな、馬鹿な……、なんであの機体が……」

その黒刃に『機動重二』と呼ばれる特異なアセン。マギーはそのACのことをよく知っていた。しかしそれを「信じたくなくて」スキャンを走らせる。

——たまたま似ているだけだ

きつと『Unknown』と表示される、そうに決まっている。

しかし表示された機名は忘れもしないものだった。

それはかつて『傭兵』と一緒に組み上げた機体。そして数々の戦場を渡り歩き……私を殺した機体……。

——AC『ストレイド』

その機体の左肩には、焼け掠れた『黒い鳥』のエンブレムが刻まれていた……。

第十五話 「MISSION03」 深海鉄騎撃破—04

「マギー、聞こえていますか!? マギー!! 敵がそっちに向かってるわツ、注意して!」

加賀の呼び掛けに私は我を取り戻した。気がつけば深海鉄騎はブレードを格納し、切り替えたガトリングガンをこちらに向け接近している。

「くっ、まずい……ッ」

私は『ブルーマグノリア』のハイブーストを吹かして近場の残骸へと滑り込んだ。既に敵から放たれていたガトリングガンが残骸の端部を削り飛ばす。

——落ち着け、落ち着くんぞ

残骸越しにスキャンで敵を捉えつつ、そう自分に言い聞かす。そのまま大きく深呼吸をし、焦りを息に乗せて吐き出した。

「……よし」

クリアになった頭で状況を整理する。

(なんであのACを深海棲艦が……?)

マギーが最初に思い浮かんだ疑問。しかし少し考えてみればそれは当たり前前のことであった。

それもそうだ、財団の話を信じればあの機体はインターネサインの止めを差し損ねて、その目の前で眠っていたはずなのだから……。奴等からしたら戦艦棲姫と同じように「あつたから使っている」に過ぎないのだろう。そしてそれは同時にあることも示唆していた。

——あのACには『統括機構』インターネサインの場所が記録されているはずだ。なんとしてもあのACを打ち倒し、回収しなければならぬ。

(……しかし私に勝つことができるだろうか……?)

「なに弱気になってるの!!」

声に出し自分を叱咤する。仮に目の前にいるのが本物の『傭兵』だったら私は怯えるのか? 逃げるのか?

——否、断じて否だ!! それは私ではない!

例え相手が誰であれ、『勝つ』ために戦うのが私だ! ましてや相手は“鉄クズ共”だ。あれが『彼』に匹敵するとは到底思えない。

そんなのに少しでも気圧されてしまった自分を恥ずかしく思う。頭が完全に戦闘モードへと切り替わった。

——倒そう、あいつを。

スキャンモードを解き、レーザーライフルをチャージする。そしてそれが完了すると

同時に身を隠していた残骸を思い切り蹴って、深海鉄騎の頭上へ身を投げ出す。その刹那に捉えた敵の左腕にも『待っていました』とばかりにチャージ済みのレーザーライフルがあり、その銃身をこちらに向けていた。

「その程度は想定済みよ」

私はレーザーライフルを放つと同時に思い切りペダルを踏み込んだ。『ブルーマグノリア』のブーストが強い光を放ち、機体を急加速させる。コンマ数秒前に機体があった場所には相手から放たれた閃光が通り過ぎていた。対して、こちらのレーザーライフルは命中していたものの敵の胸部装甲に当たっていたらしく致命傷には至っていない。

「まあこんなものか」

元々相手のTE防御が高いことも想定済みだ。元よりまともに撃ち合って勝てるアセンではない。あちらのレーザーライフルはこちらの物より高火力で当たれば只では済まないが、その分リロードが遅めである。その合間を狙い手数で押しきるしかないのだ。

再びレーザーライフルに灯をともしつつ、牽制とばかりにヒートマシンガンとミサイルを放つ。深海鉄騎もガトリングガンを掃射しミサイルを撃ち落としながら反撃してきた。お互いの弾が相手の装甲をノックし合う。こちらのコックピットには、まるでトタン屋根に激しく雨が打ちつけられている時の様な音が鳴り響いていた。

「うるさいわね……」

しかし焦るわけにはいかない。互いのサブウェポンが装甲を貫通しない以上、メインウェポンの差し合いが勝敗の分かれ目となる。あちらの『主砲』が直撃してしまえば一瞬で状況がひっくり返りかねない。気の抜けない状況が続いていた。

そんなおり、先に私のレーザーライフルがチャージ完了の合図を告げる。その発光に気付いたのか深海鉄騎はハイブーストを吹かし距離を取った。

「甘いッー」

しかし『ブルーマグノリア』は近くの岩を蹴り、追従するようにその距離を一瞬で詰める。その様子はまるで肉食獣が獲物を仕留めようと飛び掛かっている様だった。そしてその爪を降り下ろす。レーザーライフルと言う名の爪は、深海鉄騎の右肩を掻きむしった。同時に放っていたミサイルと敵の右肩に備えられているミサイルの誘爆により深海鉄騎は凄まじい爆炎に包まれる。各関節からバチバチと悲鳴が鳴り、元々焦げた色合いの装甲がさらに焼け焦げていた。

しかしそれでもお構い無しのように、深海鉄騎は残った左肩のコンテナからミサイルを繰り出し反撃する。ハイスピードミサイルというカテゴリーに含まれるそれは、その名の通りの凄まじい速度で『ブルーマグノリア』へ迫った。直撃すればその速度と合わさった爆発の衝撃で容易にACCの機動力を削ぐ代物だ。そして足の止まった相手に

『主砲』をぶつけるのがこのACの常套手段の一つであった。

しかしそれを知っているマギーにとつてこの反撃は想定の域を出ない。空中でハイブーストを吹かし近場の残骸に接近、そしてその残骸を蹴って”ミサイルに向かつて”飛び出す。機体を掠めるように通りすぎたミサイルはその勢いを殺せずに残骸へとぶつかった。

『ブルーマグノリア』は跳躍の勢いをそのままに、別の残骸へと身を隠す。

「やはりそうね……」

——深海鉄騎は強いが……”弱い”

単純な強さであれば深海鉄騎は以前戦った戦艦棲姫を上回っている。……が、今回の戦闘フィールドは海ではなく陸上、しかも私の得意とする障害物の多い地形だ。そして何より、私はあの機体のことを『ブルーマグノリア』と同じぐらい熟知している。『彼』と一緒に組み上げ、その活躍をずっと見てきたのだから……。

だから深海棲艦の操作がいちいち甘いと感じる。恐らくあのACの戦闘記録でも解析して操作しているのだろうが、そんな聞きかじり程度の情報だけで使いこなせるほどACは、特にクセの強いあの機体は易くない。

残骸から様子をうかがっている間に『ブルーマグノリア』のジェネレーターは消費した分のエネルギーの再充電を完了していた。

(あと2、3回同じやり取りをすれば終わりか……)

この戦闘に見切りをつけた瞬間だった。身を隠している残骸越しに深海鉄騎が急加速してこちらに接近を開始する。スキヤン情報を読み取ると、まだ辛うじてハンガーシフトが生きていたのか右手のガトリングガンをブレードに持ち換え、ついでに左のレーザーライフルを実弾のライフルへと変更していた。何をしてくるか察し後退する。

同時に身を隠していた残骸に斜めの線が刻まれ崩れ落ちた。その切り口は凄まじい高温により、切り裂いた黒刃と同じ色に焼け焦げている。

「随分と思いい切りがいいわね」

このままでは分が悪いと踏んだのか、近接戦へと切り替えたいらしい。レーザーライフルに使用していた分のエネルギーをブーストへあてがい、グライドブーストやハイブーストを駆使して『ブルーマグノリア』に追従してくる。重量二脚でありながら装甲を犠牲にして機動力を高めた脚部がその動きを可能にしていた。後退しながらヒートマシンガンとミサイルを浴びせてもそれなりに高い装甲に物を言わせ、深海鉄騎はまるで猪の様につっ込んでくる。

清々しい程にブレードでの一発逆転を狙った戦法だ。しかし、まぐれの一発でも食らってしまえば待ち受けているのは先程の残骸と同じ末路である。——なるほど、確かにじり貧の状況を覆すには以外に良い手かもしれない。

「まあ……当たればだけど」

だが、そんなまぐれの一発など私は許すつもりはない。ましてやその『ANOTHE R MOON』はもつての他だ。

……『黒い鳥の傭兵』が私に止めを差したとき、その一振りには『明確な殺意』や『愛情』……様々な想いを……まさしく『魂』を込めてくれていた。なにも込められていない、ただ振り回されているだけのそれにやられることは『彼』への侮辱に等しい。

——『傭兵』と『お前』じゃ違う！

そう言い放つようにレーザーライフルで向かってくる深海鉄騎の脚部を穿つ。そしてバランスを崩し勢いそのまま前のめりに突っ込んできた深海鉄騎目掛けて、思い切りブーストチャージをぶちかました。

カウンター気味に蹴りが決まり深海鉄騎の巨体が地に伏す。ブーストチャージの衝撃でACに取りついていた深海棲艦が壊れたのか、深海鉄騎もといAC『ストレイド』はピクリとも動かなくなつた。スキヤンをかけてもエネルギー反応は見られず完全に沈黙している。

「どうやら終わりみたいね……」

久々に『最後の時』を思い出したからか……勝利の喜びよりも哀愁のような、何とも

言えない感情がこの胸を占めていた。

◇ ◇ ◇

「さて、どうしたものか……」

私は倒したACをどう回収するか悩んでいた。任務内容を聞いた当初はACの戦闘記録を解析できればよかったので、コア部分だけ持ち帰ればいいと思っていた。それでも脚部の許容重量を容易に越え機動力が著しく低下するが、空母まで運ぶことぐらいいはできる。しかし今回の獲物は見ず知らずのACではなく『ストレイド』だ。できれば全てのパーツを回収したかった。

『ストレイド』は私が『彼』に戦い方を教え、その戦い方を生かす為に一緒に組んだ機体であり『ブルーマグノリア』と似た特徴を持っている。だから今のACと同じ感覚で扱えるので予備機としても確保したかったのだ。

「いや、それは言い訳かな……」

マギーはぼそりと呟く。

——理由はそれだけではない。

『ストレイド』には様々な思い出が詰まっている。『彼』と『ファットマン』との……『三人家族』の思い出が……。自らそれを捨てた私に言う資格は無いかもしれないが、あの日々はかけがえのないものだった。だからお気に入りのテイベアをいつまでも

持っている人のように、『ストレイド』を手元に置いておきたいというのが本心なのだろう。

——ヌイグルミでなくACという辺りがなんとも私らしい……と自嘲した。

「……加賀を待たせてしまっけど、何回かに分けるしかないか」

こんなことなら龍驤のUNACを残しておけばよかった、なんて白々しいことを思いながら、関節部でバラすことに決めた。多少破損させてしまっだろうがドックに入れば大丈夫だろう。そう思い『ストレイド』に『ブルーマグノリア』のマニピレーターを伸ばす。

しかし、それが触れることはなかった。どこからともなくプロペラ音が聞こえ、その轟音が『ブルーマグノリア』に近づいてくる。

——加賀たちの艦載機とは違う……

マギーが普段聞く音とは違う、大きく低い重低音が周囲を支配する。そしてマギーはこの音を知っていた。

「装甲ヘリ!?なんでこんなところに……」

『ブルーマグノリア』の目の前に『ファットマン』が使っていたようなヘリが姿を表した。その装甲には『鶴のエンブレム』が刻まれている。ヘリはそのまま『ストレイド』の上空に留まり、スピーカー越しにマギーへと呼び掛けた。

「こちら倉井元帥直轄部隊、旗艦の翔鶴と申します。深海鉄騎撃破、お疲れ様でした。このACは解析に回すためこちらで回収します」

そのヘリを操作しているのは、どうやら龍驤と同じ倉井元帥の艦娘らしい。とすれば、このヘリは艦載機ということか……。AIの補助があるとはいえ装甲ヘリを遠隔操作できるとは、流石元帥の艦娘といったところだ……。と、マギーは翔鶴の練度に感心する。

しかしいきなり「ACを回収する」という物言いに、当然憤りも抱いていた。マギーの喉元まで文句が出かかる。だが文句が先にでたのはマギーではなく龍驤であった。通信機から彼女の声が聞こえてくる。

「翔鶴！あんたがいるなんてうちは聞いてへんよ！」

「ええ、伝えていませんから。貴方たちの任務は深海鉄騎の撃破、私の任務は貴方たちがしくじった場合の尻拭いと深海鉄騎の回収です。こちらのことを伝える必要はありません」

「それでも普通仲間にはゆるとくもんやろがッ」

「仲間……？貴方がですか？老人たちから送りつけられた『鈴』風情がなにを偉そうに」
「ぐ、ぐぬぬぬ……」

「どうやら龍驤が自らを『派遣』と言っていたことにはなにか訳があるようだった。

しかし、マギーにとって今そんなことはどうでもよい。マギーは二人の会話に割って入る。

「仲間割れの最中悪いけど、翔鶴といったか？ 貴方の仕事はもう無い、帰ってくれて構わないわ」

それを聞いて翔鶴は意識を龍驤からマギーへ向けた。

「それはどういったことまで？」

「どうもこうもないわ、そのACCの回収はこちらで行う」

「へりも無いのですか？ 第一、そちらに譲る理由がありません」

「どうせ欲しいのはこのACCの戦闘記録だけでしよう？ 解析が終わったらレポートは提出する。こっちはそちらと違って貧乏所帯でね、パーツも欲しいのよ」

「それはそちらの都合でしょうに。倉井様から任を受けている以上、変更はありません」

翔鶴にACCを譲る気はなかった。回収が彼女の任務であり当然といえば当然である。だがマギーも譲る気は全く無い。

「じゃあ言い方を変えるわ。信用できない貴方たちにそれを譲る気はない。とつとと失せろッ！」

そうマギーは言い放つと同時にレーザーライフルをへりに向けチャージを開始した。

(やりすぎよ！マギー!!)

加賀からプライベートチャンネルの通信で注意される。しかしマギーはチャージを止めない。

(後で説明するけど、あのACには『統括機構』の場所が記録されてるの！譲るわけにはいかない！)

(…!?)

マギーはそう伝えて加賀を押し黙らせた。翔鶴はレーザーライフルを構え続けているマギーに呼び掛ける。

「貴方の行動は反逆罪に問われますよ」

「原則として任務中に得た資材はその艦隊の物ではなく、違反しているのはそっちでしょ」
マギーはそう翔鶴に反論した。現状、大本営には各鎮守府を細かく管理する力は無く、鎮守府の運営は各々に丸投げされている。そのためこのような制度が設けられたのだ。しかしそんなことでは翔鶴は引き下がらない。

「そのACは資材の範囲を越えています」

「あら、私のACは不問にしてくれたのには？」

マギーは倉井元帥が言っていたことを引き合いに出す。正直屁理屈の域を出ないことをマギーは重々承知していたが、元々口論で決着をつける気はなかった。

「さっさとしないとヘリも『資材』になるわよ」

レーザーライフルのチャージが完了し、そして青い閃光が、目の前の地面をえぐった。その閃光は『ブルーマグノリア』の物よりも遥かに強力な出力で放たれており、地面は未だ赤熱化している。当然『ブルーマグノリア』から放たれたものではない。

「誰ッ!？」

マギーはすぐさまスキャンモードに切り替え、別のレーザーが飛んできた方向を向いた。そこには逆関節の白いACと中量二脚の白いACが悠然と立っている。そしてその肩には星座と数字が描かれたがエンブレムが刻まれていた。

「蛮勇に過ぎると思っていたが、狂犬の類이었다か……」

「No. 2、助かりました」

「気にするな翔鶴、我らが押さえている間にACを回収しろ」

先程のレーザーはこのNo. 2と呼ばれる逆関節のACから放たれたものだった。マギーは「ふざけるなッ!」という言葉をこのACに向けて発しようとする……が、その言葉が喉につまって出ない。吹雪のような直感をもっているわけではないが、AC乗りとして培われてきた勘が告げてた。

——こいつら、強い……

恐らく各々が死神部隊のACと直角以上だろう、それほどの圧力を兼ね備えている。

「チツ、……貴方たちが『尻拭い担当』って訳ね。……一体何物?」

「マギーの問いかけに逆間接の横にいた中量二脚のACが答える。

「我らはただの骨董品だ。貴様も同じではないのか?」

「骨董品……」

まるで自分たちを『物』扱いするような言い方にマギーは違和感を覚える。しかしU
NACのような独特の電子音声からすぐに彼らがどの様な存在かを察した。

「なるほどね……。悪いけど今の私は貴方たちと違って人間よ」

「……そうか、それであの強さとは驚異的だ。それで、『譲る気は無い』のか?」

「……無いと答えたら?」

——瞬間、この場に殺気が満ちる。

「……この場が再び戦場になる、ただそれだけだ」

先程よりも若干低い声で中量二脚のACが答えた。元々かなりの威圧感を放っていた二機のACの圧力が更に増している。それはその回答が本気であることを示していた。

(今の状態でやれるか……?)

こちらのACは大したダメージは無いものの、残弾、特にミサイルがほとんどなくなっていた。二機のACを仕留めるには少々心ともない。いや、仮に万全の状態でもこ

の二機相手では分が悪いかもしれない……。視線を横にずらすと翔鶴のヘリが『ストレイド』へハンガーを降ろしている。早く覚悟を決めねば……。時間がない。操縦桿をゆくりと握り直し、トリガーに指をかけた瞬間だった。

「こちら白鳥鎮守府正規空母加賀です」

加賀が『ブルーマグノリア』のスピーカーを介して話し出した。

「仲間の無礼、許してもらえないかしら。そのACはそちらへ譲ります」

「ちよつと加賀ツ、なに勝手なことを……ッ」

「お願いマギー……ここは押さえて、お願いよ……」

加賀の諭すような言葉にマギーの熱くなっていた頭が冷える。

（確かに加賀のいう通り……か、クソツ）

現実的にそれしか選択はなかった。マギーが落ち着いたのを感じ取ったのか、二機のACの威圧感も薄らいでいく。落ち着いた口調で再び中量二脚のACが喋り出した。

「冷静だな、良いオペレーターだ。仲間にも恵まれたじゃないか、蒼いAC。……そういえばまだ名前を聞いていなかったな」

教える義理は無いがいつまでも『蒼いAC』と呼ばれるのも不便だと思い、マギーは答える。

「……マグノリア……、マグノリア・カーチスよ」

マギーが名を告げた瞬間、二機のACがピクリとした。そして何かを思案しているように、しばし沈黙が続く。そして中量二脚のACが思いがけない名を出した。

「フランシスの末裔か？」

「!?、え、ええ、そうだけど……」

急に何代も前の祖母の名が上がリ、マギーは驚く。

もしかしたらこいつらは祖母の時代の遺物なのだろうか？祖母と会ったことがあるのか？……もしかしたら『最初の黒い鳥』と……

マギーの思案を他所に、中量二脚のACは話を続ける。

「そうか……。カーチスの末裔、深海鉄騎のエンブレム……これも因縁というものか。貴様らも『統轄機構』を探っているのか？」

「No. 8!?喋り過ぎです!!」

中量二脚のAC—No. 8—の漏らしたワードに翔鶴が怒鳴る。もちろんマギーは聞き逃さなかった。

——今、こいつは確かに『統轄機構』と言った。

予想通り、倉井は、こいつらは知っているのだ、深海棲艦の正体を……。噂されていた倉井元帥の目的、『深海棲艦の支配』という話が俄然真実味を帯びてくる。

「沈黙か……『統轄機構』がなにか聞いてこないのだな。肯定と受け取らせてもらうが

「？」

「……ええ、構わないわ」

「そうか、やはり知っていたか……しかし……とすれば、やはり貴様が、貴様らが。そうなのか……？」

「No. 8はボソボソと呟く。その問いかけはマギー達へというよりも、自分自身に問いかけているようだった。」

「まだお前たちには働いてもらわなければならない……、だが、いずれ……」

「そこまでしておけ、No. 8」

「No. 8が何かを言いかけたところでNo. 2がそれを制止する。」

「翔鶴のいう通り、喋りが過ぎるのは貴様の悪い癖だ……気持ちにはわからなくても無いがな。もう深海鉄騎の固定は完了した、帰投するぞ。我々は与えられた任務を遂行する、ただそれだけでいい」

「No. 2がそう言い終えると同時に、翔鶴の操作する装甲ヘリは『ストレイド』を吊り上げそしてそのまま空へと消えていった。二機のACも『ブルーマグノリア』の射程外までヘリが離れたことを確認すると「……さらばだ」と一言残し、後を追うようにこの場から撤退していく。」

「その際にNo. 8がちらりとこちらを見ていたが、それがなにを意味するのか、結局

何が言いたかったのかはマギー達にはわからずじまいでこの任務は幕を閉じた。

◇ ◇ ◇

「すいませんでした、マギー。勝手に割って入ってしまつて……」

彼らが去つた後、加賀から謝罪の通信が入る。しかしマギーはそれを否定した。

「そんなこと無いわ、むしろ助かった。おかげで“次”ができたわ」

——多分止めてくれてくれなかつたら、私はきつとあの二機のACに襲いかかつていただろう。

マギーはそう確信すると共に、冷静になつた頭でそれが悪手だと理解していた。だから加賀に対しては純粹に感謝しなかつた。

「加賀……今回、深海鉄騎を確保できなかつたのはたしかに痛手よ。あいつらはACを解析してきつと『統轄機構』の場所をつきとめるでしょう。知っているのはあいつらだけ、主導権はいまだにあつち……でもまだチャンスはある」

マギーはNo. 8の言葉を思い出す。

「幸い私達をまだこき使うようだし……悔しいけれど“次”を待ちましょう。その時はこの雪辱を晴らしてやるわ」

「……そうね」

決意を新たに二人は静かに闘志を再燃させる……が、ここで騒がしい声の邪魔が入

る。

「いやいや、ちよいまち！何で君ら『統轄機構』のこと知つとんねん!? いや、それよりも深海鉄騎に『統轄機構』の場所が記されとるつちゅうのはどういうことや!？」

「……ああ、まだいたの?」

マギーは二機のACの衝撃でさつきまで龍驤の存在を本気で忘れていた。当人も疎外感を感じていたのか「当然やボケー!!」と少々怒ったように騒いでいる。

「流石に倉井元帥のところにだけあつて『統轄機構』のことは知ってるのね」

以外そうにマギーは言った。UNACの時のこともあり正直知らないと思つていたので。

「当たり前や！ちゅーか、それを探るためにうちは派遣されてるんやで」

「……翔鶴だっけ? あいつが言つていた『鈴』つてのはその事?」

「そや、大本営も一枚岩じゃないつちゅーことやな」

実は龍驤は倉井元帥を信用しきれていない上層部から派遣されていた艦娘だった。任務は倉井元帥の情報秘匿を防ぐことである。

「どおりで邪険にされている訳ね」

マギーは龍驤に対する翔鶴の態度に納得する。

「うっさいわ！それよりどうやねん!?! ……あれに『統轄機構』の情報が入つとるのはホン

マか？」

先程までとは違う真剣味を持った声で龍驤はマギーに訊ねた。

「ええ、本当よ。何で知ってるかは長くなるから省かしてもらうけど……あれは過去に『統轄機構』までたどり着いた唯一のACなの。だから戦闘ログとかを解析すればきつと『統轄機構』の場所が分かるわ」

「そか……いや、おおきに。実は調査の進展もないし、この任務終わったら異動届でもだそかと思っとったけど……おかげで一仕事増えそうや」

「どういたしまして……、でいいの？」

「ああ、構わへん……最後にマグノリアはん、2つ聞いてもいいやろか？」

再びその声に真剣味を加え、龍驤はマギーに質問をした。

「……答えれることなら」

「じゃあ一つ。マグノリアはんも深海鉄騎の解析はできるんか？」

「ええ、当然」

「そか……じゃあもう一つ。こつちが重要や。キミらは『統轄機構』を見つけてどうするん？」

「それは……」

少々答えにくい質問だった。白鳥提督の話から、倉井元帥にそそのかされている上層

部の方針は当然『深海棲艦の支配』だろう。私達の目的は『破壊』だ。上層部の『鈴』である龍驤にそのことを伝えてこちらの鎮守府へ変に圧力をかけられたりしないか、そんな不安がよぎる。しかしあそこまで倉井元帥の部隊にケンカを吹っ掛けておいて今さらか……と思ひ至り、マギーは正直に答える事にした。

「破壊よ」

加賀と声がダブる。彼女も同じタイミングで同じ考えに至ったのか、声のトーンまで一緒だった。その様子がツボに入ったのか龍驤は笑い出す。

「ふっ、ふふふ、君らおもしろいなー。うん、ようわかった、君らは信用できそうや。安心し、悪いようにはせーへんよ。大本営も一枚岩じゃないってゆったやろ。少ないけど君らと同じ考えの人もおる、うちはそっち側や」

龍驤は上機嫌に自分の立場をさらす。マギーはそれを確かめるように聞いた。

「味方……と考えていいのかしら」

「せや、よろしゅうな、マグノリアはん、加賀。さて、じゃあうちは増えた仕事を片付けに帰投させてもらうわ。ほなさいなら〜」

そう告げると龍驤は舵を切り、翔鶴たちが消えていった方向へと同じように消えていった。龍驤が視界から消えるのを確かめた後、マギーが呟く。

「最後まで騒がしいやつだったわね」

「……そうね、でも収穫は得られたわ」

「どうかしら、頼りになるかどうか……」

「ふふ、でも…私達だけではないことがわかっただけで十分よ。それだけで、十分な収穫です」

しばらくすると資源輸送任務を終えた天龍から通信が入る。

「おい、そっちも終わってるみてーだな。じゃ、帰ろうぜ、俺たちの鎮守府へ」

行きと同じ隊列を組み、艦隊は帰投を開始する。抜錨前にマギーは天龍へ頼みごとをした。

「天龍、あの鼻歌はなしよ」

「え、まじか?」

隊列は同じものの、母港まで旗艦の鼻歌が海上に響くことはなかった。

第十六話 番外編 「汚れ役の唄」

ガダルカナル島より少し離れた泊地、屈強な体躯をした軍人達が次の戦に向けて準備を進めている中を、ゴロゴロとドラム缶が転がっていた。転がしているのは何ともこの場に不釣り合いな少女二人である。

「ふう、これで半分くらいか」

少女の一人、天龍は運んでいたドラム缶を仮設の倉庫に置くと額の汗を腕で拭った。

「この調子なら夕方になる前に終わりそうですね」

続いて倉庫までドラム缶を運んできた少女、吹雪はそう答えながら天龍にタオルを差し出す。天龍は「ん、サンキュ」と礼を言いながら拭いきれなかった汗をタオルで拭き取った。

加賀達をガダルカナル島近海まで送り届けた天龍と吹雪は現在もう一つの任務をこなしている最中である。深海鉄騎撃破後に再度ガダルカナル島に上陸する部隊、彼らへの物資輸送だ。彼らの待機している泊地までたどり着いた二人は、せっせと自分たちの艦から荷下ろしをしている最中であつた。

ちなみに艦娘の仕事は輸送までで、荷下ろしまでする必要は無い。しかし終わるまで

手持ちぶさたなこともあって二人は自主的に手伝いをしていた。最初は陸軍兵士から「君たちじゃ危ないからいい」と止められたが、強化人間の体を持つ彼女達は見た目よりも遙かに頑強で膂力があり、物資を1/3も運び終わった頃にはそんな声は上がらなくなっていた。今ではすれ違い際に劳いの言葉を掛けられるほどだ。

そんな二人に一人の兵士が駆け寄る。

「お疲れ様です、天龍さん、吹雪さん。これ差し入れです、少しご休憩なさってください」
そう言うのと兵士は彼女達へ水筒と包みを差し出した。

「おう、サンキューな！吹雪、ちよつくら休憩にしようぜ」

天龍はハキハキした声でそれを受けとると、吹雪に休憩を提案する。吹雪も「そうですね」と返答すると二人揃って兵士へ軽い敬礼をし、倉庫裏の日陰へと移動した。

倉庫裏に着くと二人は立て掛けてあったジープの予備タイヤを横に倒し、それに腰を掛ける。そして差し入れを膝の上で荷ほどいた。包みの中身は海苔もついていないシンプルな握り飯だ。さつそく天龍は「いただきます」と手を合わせた後、その一つを頬張る。

握り飯の中には刻まれた沢庵が入っており、その甘じよっぱさが身に染みだ。いかにも男が握ったものといった感じだが、天龍はその大雑把さが嫌いではなかった。

「そう言えば一年前も同じ差し入れ貰いましたね」

天龍と同じように握り飯を頬張りながら吹雪は言った。

「ん、そうだったっけ？よく覚えてるな」

「覚えてますよ……、天龍さんと、あと龍田さんと初めて一緒に行つた遠征のことですか
ら」

「俺たちが着任してすぐの時から……最初に吹雪と会つた時の印象が強すぎてそこら辺あんま覚えてねーな、はははッ」

「あ、あれはもう忘れてくださいッ！」

吹雪は恥ずかしさで顔を真っ赤にする。天龍が吹雪を最初に見かけた時、吹雪は大泣きしていた。大泣きしながら加賀をマウントポジションで叩いていたのだ。その光景の印象が強すぎて天龍は任務の時のことを忘れかけていた。吹雪としては恥ずかしい思い出であり、それこそ忘れて欲しかったが……。

「そうか……にしても、もう一年も経つたのか……」

天龍は今の鎮守府に着任した時の事を思い出した。

◇ ◇ ◇

「……が新しい配属先か……」

艦から降りて見渡した鎮守府の感想は『ボロボロだな……』だった。深海棲艦からの

爆撃を食らったのか所々が崩れている。

「あら、随分綺麗なところね」

いつの間にか俺の隣にいた龍田が正反対の感想を述べていた。

「龍田……それ皮肉か？確かに二元いた所と比べりや綺麗だけだよ……」

それを言ったら肥溜めだつて絶景になつちまう、と思つた。それほどまでに俺たちがいた鎮守府はひどい有り様だつたのだ。

人類が大敗し、鎮守府の再編を余儀なくされた『M I 作戦』。この時の俺達は戦力外通知をくらい遠征に回されていた。当時の俺は必死に抗議したがそれが覆ることはなく、なんで『旧型艦』の艦娘なんだと愚痴つていたことを今でも覚えている。それでも意地はあつたので「大量に資材を持ってきてビビらせてやるぜ！」と息巻いていたこともだ。しかしそれは徒労に終わった。

俺達が遠征から帰投すると、鎮守府はもはや原型を留めていなかった。そこにあつたのは焼け焦げた残骸や硝煙の残り香……。そして燃えたり潰れたり吹き飛んでいる肉、肉、肉……。肉、肉、肉……。

「は……う？なんだよこれ……う？意味わかんねえ……」

理解したくなかつた。散らばっている肉塊が、数日前に挨拶をした人たちの物だと……。一緒に飯を食つてきた仲間の成れの果てだと思いたくなかつた。

「ねえ、天龍ちゃん、ここ違うわよね？私達迷って違うところに着いちちゃっただけよね！」
珍しく龍田も狼狽してる。無理もない。俺も同じ気持ちだった。

「……とりあえず確認しようぜ」

何を確認したかったのか、発言した自分もよくわかっていなかった。とりあえず突っ立ってるだけにもいかないだろ、との思いがあつたに過ぎない。俺は龍田と一緒に鎮守府らしき場所の散策を開始した。

力なく歩みながら目に入る光景は、まさに地獄だった。魚雷でも撃ち込まれたのかのように建物は焼き尽くされ、逃げようとしたやつらを狙ったのか至る所に機関砲が掃射された跡が残っている。原型を留めていない肉塊がその威力を物語っていた。

圧倒的な暴力によって虐殺が行われた光景がずっと……ずっと広がっている。

(まるで漫画のーシーンみたいだな……)

駆逐のガキが読んでたロボット漫画の似たシーンを思い出しながら、その何千倍もグロテスクな現実の中を歩み続ける。

(……)が俺たちの鎮守府なら、この先にデカイ時計台があるはずだ……)

そんなものなければいい。心からそう思う。なければ「ここは違う」といえるからだ。しかし……やっぱ現実というものは非情らしく、歩を進めた先にそのシンボルは存在していた。しかも巨大な何かに袈裟懸けされたように斬り倒されて……。

「……もういいわ、天龍ちゃん。私疲れちゃった……」

突き付けられた現実を前に、龍田は腰が抜けたようにその場に座り込む。

「……………」

俺もどうすればいいのかわからなくなり、龍田に寄り添うように座り込んだ。

——この後のことはよく覚えていない。

龍田と共にぐったりとしていたところを大本営の調査隊だったかに回収され、気づけば今いる鎮守府へ配属が決まっていた。ひどい話、その間こちらの意思を確認するようなことは一切無かったが、その事に怒りは沸かなかつた。

——どこでもいい、ただ戦えさえ出来れば……

俺たちの仲間を、帰る場所を滅茶苦茶にしたやつらに一矢報いられればいい。半ば自棄っぱちな思いだけが俺の中を占めていた。

(早く出撃命令が下されねえかな……)

そう思いながら新しい港で迎えを待つ。しばらくするとこの関係者らしい男がこちらに近づいてきた。

「遠路はるばるお疲れ様です。軽巡洋艦の天龍さんと龍田さんですね？自分は当鎮守府の整備長を勤めます、やないといえます」

「よお、俺が天龍だ。んで、こつちの大人しそうなのが龍田。……にしても迎えに来るま

で随分掛かったな。遅えな、ちやつちやとしろよ」

「す、すいません！なにぶん、どこもかしこも人手が足りないものでして……」

『やない』という男は申し訳なきそうにしながら頭をかく。

「とにかく、提督から執務室まで案内するように言われています。どうぞ、付いてきてください」

「そう言われ俺たちは大人しくやないの後に続き執務室に向かつていった。途中でやないから、

「そう言えば……提督からお二人の艦の補給を急ぐように言われてるんですよ。もしかしたら直ぐに出撃命令があるかもしれない」

と聞かされ少しだけ気分が高揚する。やないは「着任早々大変ですね」と苦笑いしていたが今の俺には都合がいい。執務室に着くとやないがドアをノックする。

「失礼します、提督。新規着任艦二名、お連れいたしました」

「お来たか、入ってくれ」

執務室から随分としゃがれた声が聞こえる。中に入ると50代後半ぐらいに見えるオッサンが座っていた。どうやらこいつが俺たちの新しい提督らしい。

「では自分はこれで」

「おお、あんがとさん。補給のほうもよろしくな」

やないは「ハッ！」と敬礼を済まして執務室を出ていく。提督は俺達の経歴でも書かれているのであろうプリントをチラ見しながら喋りだした。

「遠路はるばるご苦勞だったな。俺がここの総指揮を行う白鳥太志だ。そつちの眼帯をしてるほうが天龍、そうじゃないのが龍田で相違ないな？」

「ああ」

「そうか。では早速で悪いが任務をお願いしたい。……本当は数日ぐらい休みをやりたところだが、生憎ウチは余裕がなくてな……」

そんなもつたいたいつけなくていい。さっさと命令してほしかった。

『敵を撃滅しろ！』

『仲間の仇をうて！』

『その身尽きるまで戦ってこい!!』

俺はその言葉を待っていた。しかし提督から発せられた言葉はそのどれとも違う、期待はずれもいいものだった。

「比較的被害の少ない桂島まで行って物資を受け取って来てくれ」

「は……？」

——そんな命令、俺は期待してない。

「ふっざけんな!!遠征任務じゃねーか、それ!そうじゃねーだろ!コテンパンにされた

んだぞ!!俺達は!!仲間を……みんなみんな殺されたんだぞ!!!」

「わかっている……だからこの任務を頼むんだ」

提督のなだめるような口調が逆に俺の神経を逆撫でした。俺は提督の襟元を掴み上げ睨み付ける。

「わかかってねーよ!!だったら敵を殺してこいつて言えよ!死ぬまで戦ってこいつて言うてくれよッ!」

その言葉を聞いた瞬間、提督は表情を豹変させ強い怒気を含んだ目付きで睨み返してきた。

「わかかってねえのはテメエだ糞ガキ!次死ぬとかふざけたことぬかしてみろ!ぶん殴るぞ!!」

「ッ……、やってみろよオッ!」

俺はつかつかとなり、右拳を提督の顔面向かって降り下ろそうとする。しかし後ろから龍田に止められた。

「おい龍田!離せッ!」

右腕に力を込めながら怒鳴り散らす。しかし龍田は更に俺の右腕を強く掴み離そうとしない。

「嫌よ……私は天龍ちゃんまで失いたくないし、こんなことする天龍ちゃんなんて見た

くないわ」

「龍田……」

右腕の力を抜くと、龍田が震えているのが伝わってきた。目尻にも涙が溜まっていた。そんな龍田の様子を見て俺の中の熱が急激に冷めていくのがわかった。

俺は襟から手を離し、改めて提督の顔を見る。先程までの強い目力とは裏腹に、提督の眼下には濃いクマが出来ており頬もやつれていた。気苦労が絶えないのかまともに寝れていないのがあるかと分かる。

(こんな人を殴ろうとしたのか、俺は……)

自分が随分と焼きが回っていたことにやっと自覚できた。俺は提督から少し離れ、深々と頭を下げる。

「その……悪かつ……大変失礼しました、提督……」

上官に殴りかかったんだ、この程度で済むわけない。このまま拳骨を食らおうが何されようが文句は言えない。しかしはじめははじめだ、どんなことでも甘んじて受けるつもりだった。だが提督は俺の頭に手をのせ、軽く撫でるだけで終わらせる。声も最初の時と同じトーンに戻っていた。

「元気はあるようで結構、結構。龍田、おまえも冷静だったな。いいコンビなんじゃないか？お前ら。こいつはアタリを引いたかな」

がはは、と提督は笑って場を納めた。本当は提督自身、笑う元気も残っていないだろうに……。どうやらアタリを引いたのは俺達のようなようだ。

提督は続けて喋る。

「……お前たちの気持ちはわかるつもりだ、痛いほどにな。だが、俺達は生き残っちまった。だから、“生きるため”に今できることをやるしかない……先に逝った奴らのことを無駄にしないためにも……。改めて言うが、遠征任務……頼めるな？」

「……はい」

龍田と共に返事をする。自分の気持ちと完全に折り合いがとれた訳ではなかったが、結局これが今俺が出来る精一杯らしい。

なら前の時と同じ、精一杯やろう。そう自分に言い聞かせ、頬を叩いて気合いを入れる。

「よっしゃあ！行くぞ龍田！天龍水雷戦隊、抜錨だア」

「ああ、ちよつと待ってくれ」

「んだよ提督!?!せつかくノツてきたのに!」

「すまんすまん、大切なことを伝え忘れていてな。うちの駆逐艦を一人連れていつてほしいんだ」

「駆逐艦?ここ他にも艦娘いるのか」

秘書艦もいないし、ここに来るまでそれらしいのを見かけなかったので俺はてつきり誰もいないものだと思つてた。

「一応うちにはお前らを除いて吹雪という駆逐艦と加賀という正規空母の二人がいる。どちらも俺の鎮守府の生き残りだ」

「へえ、まともに生き残るなんてスゲーじゃん。さぞ優秀な艦なんだな」

俺は軽い嫉妬から口調が皮肉気味だった。すると提督は苦笑いを浮かべる。

「いや、お前らと似たようなもんさ。吹雪つてのは旗艦から戦力外通知くらつて途中退場、加賀つてのも損傷が激しくなつて途中で戦線を離脱した、……だから生きてる。お陰で二人とも意気消沈、特に加賀が酷くてな。今は吹雪が看てくれている状態だ。このままじゃ吹雪も倒れちまいそうだがな」

「おい、まさか介護疲れの気分転換に遠征付き合わせるつもりじゃねーだろうな？遊びじゃねーんだぞ」

「わかつている、あくまで資材確保のためだ。気分転換はついでだよ」

「おいおい……」

「ははは、こういうときは他のことに没頭するに限る。というわけだ、……その窓から寮っぽい見えるだろ？その205合室に吹雪はいるはずだ。任務のこと自体はもう伝えてある。悪いが吹雪を迎えに行つてくれ。どうせ燃料補給までまだ時間はあ

る、ついでに自分たちの部屋を探してくるといい。今なら選り好み放題だ」

「へいへい、そりゃ魅力的なこった……」

俺は意気消沈しながら執務室を出た。あの提督、どうやら俺にガキのおもりまでやるつもりのようなのだ。はあ、と俺が溜め息をついてる横で龍田はクスクスと笑っていた。小声で何か呟いている。

「こういうときは他のことに没頭するに限る……ねえ……」

「……う？なんだよ龍田？」

「あら、なんでもないわよ。ただ天龍ちゃんって面倒見がいいから丁度良いかなって思ってただけ」

「は？なにが丁度良いんだよ？」

「さて、なんのことかしら？」

龍田は早足で先に進んでいく。

「あ、ちよつと待って、おい、龍田」

結局あいつがなんのことを言っているのかはわからなかった。ただ、龍田がいつもの調子に戻ってくれたのが俺には嬉しい限りだった。

◇ ◇ ◇

提督から言われた部屋に近づくと何やら話し声が聞こえてくる。恐らく吹雪と加賀

のものだろう。

「……で……から、少しは何か口に入れてください……でないと元気出ないですよ、加賀さん」

「悪いけど……食欲ないわ」

「……そんなんじや赤城さんが悲しんじやいますよ……」

「……ッ！あなたが赤城さんを語らないでッ！！私の気も知らないで勝手なこと言わないでちょうだい！！」

加賀と呼ばれる空母の怒鳴り声の直後に人を押し倒すような物音が聞こえてくる。

「もしかして喧嘩か!？」

俺が部屋に駆け寄りドアを開けると、やはり喧嘩が始まっていた。……いや、喧嘩と言っていいものかどうか……。駆逐艦の艦娘——吹雪が泣き叫びながら加賀に馬乗りになり、まるで駄々をこねる子供のように加賀を叩いていたのだ。加賀は無抵抗に……というより余程予想外だったのか呆気にとられたまま、ただ吹雪を見ている。どちらとも俺達には気づいておらず喧嘩は続行されていた。

「加賀さんだつて……!!私の気も知らないで勝手なこと言わないで下さいよッ!!私だつてあの場所に残りたかつた!!でも私はそれすら許されなかつた!!……きつとこの先も……ずつとずつと……戦える加賀さんとは違うんです……なのに……なのにッ……あなた

がそんなこと言わないでッ！ だったらあの空母を私にくださいよッ！！ 私だって、私だって力が欲しかった！！ みんなを守る力が……ほし………かった……」

そこまで言うのと吹雪は加賀の胸に頭を埋め、今度は咽び泣き始めた。加賀はどうすればいいのかわからないのか無言のままだ。

(気まずいな……)

俺は正直、見なかったことにしてこの場を去りたかった。しかしこのままでは吹雪をいつ連れ出せるかわからない以上、そうは問屋が卸すまい。意を決して二人に挨拶を仕掛ける。

「あ………先輩方、気は済んだか？」

そう言いながら二人の近くで屈み、吹雪の頭を軽く撫でる。吹雪が泣き顔を上げ尋ねてきた。

「あな……ズズツ………たたちは？」

「提督から聞いてなかったか？ 今日からここで世話になる軽巡の天龍だ。後ろにいるのが妹の龍田な。提督がお前と一緒に遠征に行つてこいつてき。……にしてもヒデー面だな、おい。まだ時間あるし、ちよつと顔洗つてこいよ」

「………はい、………グスツ………」

めそめそしながら吹雪は力無く立ち上がると、不安定な足取りで部屋出口に向かって

いく。俺は龍田に「ついていってやれ」と目で合図をする。龍田は「わかってるわ」と同じ様に目で返すと、吹雪の背中を擦ってあげながら一緒に部屋を後にした。

「さて……正規空母様よ」。俺は詳しい事情とか知らねえけどさ……。駆逐のガキにあそこまで言わせちゃうなんて、ちよいとダセエんじゃねえの？」

加賀は横たわったまま力無く答える。

「……吹雪のあんな顔、初めて見ました……」

どうやら加賀にとつて吹雪の行動は本当に予想外だったようだ。吹雪は見た目からして真面目そうだし、きつとずっと溜め込んでいたのだろう。

「……俺はさ、あいつの気持ち痛いほどわかるよ」

「……」

加賀が未だに起きる気配を見せない。「もしかして寝てねーよな？」と思ひ横目で見ると、一応俺の話は聞いているようだった。なので話を続ける。

「俺達も戦力外をくらったクチでよ、ぶつちやけそんなに強くねえ。好きなように戦うことも、自分の死地を決めることもできやしない。……仲間の仇を取りたくてもさ、たぶん駄目なんだ、俺達じゃ。だから本当は自分が戦いたくても……託すしかねーんだよ、あんたらみたいに強い奴等によ。なのに頼みの綱がそんなんじや、そりや泣きたくもなるぜ」

そこまで聞いてやつと加賀は上半身を起こす。

「そんなに期待されても困るわ、私は肝心なところで損傷して逃げ帰るような艦よ……」
「でもおまえにや次の戦場があるだろ？俺たちと違ってな。次があるってんなら俺たちが資材でもなんでも調達してやるさ。それが今俺たちのできることだからな。……だからお前はお前の出来ることをしてくれよ、頼むぜ」

これは切実な願いだった。俺だって艦娘の端くれだ、正規空母の強さってやつを知っている。だから——勝手だとは思うが——俺たちの悔しさも背負って欲しかった。こいつにはその力があるだろうから。

「……」ここまで言われるなんて一航戦失格ね。でも、それでも何もしなかったら……それこそ赤城さん達に顔向け出来ない……か」

加賀は気だるそうにしながらもゆっくりと立ち上がった。

「……挨拶がまだでしたね」

加賀は右腕を上げて肘を前に出し、海軍式の敬礼をした。

「正規空母、加賀です。軽巡洋艦天龍、及び龍田、あなた達を歓迎するわ。これからよろしく」

「おう、よろしくな」

俺も同じく敬礼をとり挨拶を終えた頃、廊下から足音が聞こえてくる。どうやら龍田

たちが戻ってきたようだ。あちらも龍田が上手くやってくれたのか、吹雪の顔つきがだいぶ良くなっていた。

「加賀さん！」

起き上がっている加賀を見るなり吹雪は抱きつく。

「さつきはすいませんでした……その……叩いたり勝手なこと言ったりして……」

加賀は、最初こそどうするべきか手を空中で遊ばせていたが、そつと吹雪の頭に手へのせ小動物でも愛でるように撫ではじめる。

「いいえ、謝るのはこちらです。すいませんでした、吹雪。……随分面倒を掛けましたね。もう、大丈夫よ」

加賀は吹雪を撫でながら俺たちの方へ顔を向けた。

「すみません、天龍、龍田……吹雪をよろしくお願いします。私はあなた達がいつ戻ってきてもいいよう、今私のできることをしておくわ。……着任早々、手間を掛けさせてしまったわね」

「おう、全くだぜ」

「大丈夫ですよ、天龍ちゃんは頼られるの大好きですから」

「なに言ってるんだよ龍田、んなわけねえから」

「そうかしら、顔、いつもの天龍ちゃんに戻ってるわよ」

「はあ？なんだよそれ」

「お二人とも仲良いんですね」

気付けば吹雪もこつちを向いてクスクス笑っていた。

「あくもう、うるせえ！今度こそ天龍水雷戦隊抜錨だ！てめえら、ちやつちやと行くぞ！」

——これがこの鎮守府初日の出来事だった。

吹雪みたく任務先でもらった差し入れのことなど流石に覚えていないが、このときのやり取りは一年たった今でも鮮明に覚えている。こんな面倒くさい出会いなど忘れようが無い。

それに……今では誰も逆らうことが出来ない秘書艦様をいじれる貴重なエピソードの一つだ、忘れるなんてもつたいたいというものだ。

◇ ◇ ◇

「天龍さん、天龍さん……どうしました？」

「ん、ああちよつと昔を思い出しててな」

吹雪は俺の顔を覗き込み、きよとんとしていた。どうやら思っていたよりも長く、俺は物思いにふけつていたらしい。

「……にしてもこの一年、俺ら物運びしかしてねーなア」

振り返った思い出の中に戦場らしい戦場はなかった。まあそれも仕方ない。俺たちの後に配属されてきた艦娘たちは、みな「M I 作戦」に参加して生き残った猛者ばかり。そんな奴等の中で俺たちが戦場に出張ることなど当然無く、演習の穴埋めが関の山。この結果は当然といえば当然だった。

最近は「建造組み」の新人が増えてきたが、結局遠征の旗艦を任されるだけだ。やることはちつとも変わらない。

「そうですね」

吹雪は屈託のなさそうな笑みを浮かべる。……感情を押し殺したような、上っ面だけの笑みを……。

(それも変わらず……か)

ずっと一緒にいるせいで気付いてしまった、吹雪がたまに浮かべる乾いた笑み。多分、気付いているやつは鎮守府でも数人だけだろう。恐らく加賀も気付いていないその笑みが、俺は苦手だった。なんとかしてやりたくても俺にはどうしてやることも出来ない。こればかりは吹雪自身しか癒すことができないものだから……。

——吹雪の魂は、未だ戦場に惹かれている。

これは俺と吹雪の決定的に違う点だった。俺は悪い言い方をすればもう戦場を諦めている。それは戦えるやつらに任す。だから代わりに俺はそいつらを精一杯支えよう。

そいつらが何時でも万全で出撃できるように、この鉄粉まみれ油まみれの仕事をしよう。そう決意していたし、今ではこの仕事に誇りだつて持っている。

吹雪も無論、この仕事を軽んじているわけではない。むしろ一生懸命誠実にやっているほうだ。しかし、それでもどうしようもなく戦場に焦がれている部分が吹雪にはあり、それがあの乾いた笑みを作り出してしまうことを俺は知っていた。

本来、吹雪の駆る特型駆逐艦は俺や龍田の旧型と違い非常に優秀な艦だ。普通なら第一線で活躍していてもおかしくない。現にうちの鎮守府にいる叢雲がそれを証明していた。あいつは夕立に並ぶうちのエースだ。だがこの吹雪は同じことができない。

『粗製』

艦船を操作するのに必要な『AMS適性』。本来なら艦娘はそれを十全に備えて生まれてくるが、この吹雪だけはそれが極端に低いという障害を抱えていた。実は起動するのもギリギリらしい。そのため反応速度は最低で、戦闘での命中率も回避率も極端に悪かった。その上AMSへの負担が増す関係で、武装の増設などの改修も許されない。『最弱の艦娘』、それがこいつだった。

それでも生き残ってこれたのは、AMS適性の代わりとでもいうように身に付けていた『危機察知能力』を持っていたからであるが……それも戦えなければ戦場では大した用をなさない。だから吹雪は俺たちとずっと一緒だった。ずっとずっと後方支援に徹

していた。

(べつに悪いことじゃねえだろ……)

俺はそう思う。実際、余計な武装などがない俺たちの艦は燃費も良いし遠征に適している。吹雪の能力だって安全なルートを進むのに一役買っている。適材適所ってやつだ。だから仲間も感謝してくれることはあれど、蔑むやつなんか一人もいない。

——しかし、それでも……吹雪は自分自身を赦せていないようだった。

きつとこれは、この現状は、吹雪の望む生き方ではないのだろう。弱い自分がたまらなく嫌で、守られている自分が赦せない。なんでそんな脅迫概念のようなものを持っているかは俺は知らない。ただ、これがこの吹雪の性なのだろう。

——『最弱の身』にはあまりにも重い性だ。

俺はそれが痛々しすぎて見るのが嫌だった。だからそれを紛らわすために鼻歌を奏でる。

(知らねえだろうな……この歌覚えたきつかけがおまえだったなんて)

歌詞は自分用に替えてしまっているが、元は提督から教わった『汚れ役』とかいう題の歌だ。これでも提督の家に代々伝わっているものらしく、なんでも運送業にご利益があるらしい。音程がズレズレのふざけた歌だが、なかなかどうして気に入っている。吹雪も気に入っているのか、この歌を聞かせると笑みに少しばかり潤いが戻る。

「マギーさんは苦手みたいですけど……私は好きですよ、それ」

そういうと一緒に歌を歌い始めた。

「よし、じゃあ腹も膨れたし、続きするか」

差し入れを包んでいた袋や水筒を適当に片し、鼻歌を歌いながら自分達の艦へと戻っていく。吹雪を横目に見るといつもの様子に戻っていた。

（吹雪……いつおまえが自分を赦せるかは知らないけどさ……その時が来るまでは、横でまたこの歌を聞かせてやるよ）

「……どうしました天龍さん？」

「いや、なんでもねーよ」

——少女二人は、今日も歌いながら鉄と油にまみれていた。

第十七話「番外編」「工廠暮らしのヤナエツテイ」

白鳥鎮守府の工廠の片隅にはテントが張られており、そこは整備兵の仮眠場所として利用されている。その仮眠テントをあまりにも常用し、もはやそこに仮暮ししていることから妙なアダ名をつけられた男がいた。

——「工廠暮らしのヤナエツテイ」こと、やない整備長だ。

ちなみにこのアダ名は、とあるレディな駆逐艦が観ていた映画より彼に名付け、一部の……主にそのレディの姉妹達に浸透している。本来であれば目上の人物に対してアダ名で呼ぶなど失礼な話であるが「可愛いから許す！むしろ親しみがあつてイイ!!」と言つてのけるのがやないであつた。

——そう、彼は紳士なのだ。

そんな彼のもとに、ある仲のよい艦娘が訪れる。

「失礼しまーす、やないさん。ああ、やつぱりここにいた」

ちなみに「ここ」とは無論テントのことである。

「あれ、夕張ちゃん？おつかれー。どうしたの？『むせる戦記ポト娘』の最新刊なら僕の部屋だけど？」

「あッ、やないさんが持ってたの！？後で貸して……じゃなくて……ちよつと相談があつて来たんだけど……今日つてお休みじゃなかった？」

スケジュール表では、やない整備長は本日非番である。だから夕張は彼に相談を持ち掛けようとしたのだか、目の前のやないは絶賛仕事中的ようだった。

「いや、実は加賀さんが前の任務で第一航空部隊を喪失しちゃつてさ……演習もすぐ入つてたもんだから急ぎ補給が必要だね。想定外のことだったから人手が足りなくてさ、それで僕が……。今ちよつと艦載機のA Iチェックが終わつたところだよ」

ちなみに艦載機の補給は整備兵泣かせの一つである。

工廠にある装置には造つた物を修理する機能がある。AMSというオーバーテクノロジーが組み込まれた艦娘の軍艦は自分達では修理できず、現状この装置に『入渠』させるしかない。逆を言えば『入渠』さえさせれば勝手に修理されるのだが……補給まではこの装置はしてくれないのだ。そのため補給は人の手によつて行わなければならず、整備兵の主な仕事の一つであつた。

その中で艦載機の場合は飛行機本体は装置が造つてくれるが機銃の弾や魚雷は人が補充しなければならず、しかもパイロット代わりのA Iのチェックも必要なため他の艦

船よりも二度手間三度手間必要なのだ。お陰でやない整備長は工廠暮し二日目に突入していた。

「そうだったの……じゃあ相談は無理よね……」

ろくに休めていないやない整備長に気が引け、夕張は相談を断念する。かなり残念だったのか思いきり両肩を落としていた。

「大丈夫、大丈夫！もう艦載機の武装チェックも終わってるし、後は加賀さんに引き渡すだけだから！」

「え、でもやないさん……休憩取らなくていいの？」

「ここで十分休憩してるから問題ないよ」

——本当はそんな訳ない。彼の言う休憩とはPC作業中に寝落ちした3時間のこと指しており、当然疲労は取りきれしていない。彼の体はバキバキに凝り固まっている。しかし——

「それに君の頼みを僕が断るわけないだろ！」

ドヤ顔で彼は言つてのける。艦娘の前で良い格好をしたがるのが彼の悪い癖だった。

今回の件も実は加賀から、「演習の日程をズラしてもらおうよう頼んでみます」と提案があつたのだが……「いやいや、加賀さんに恥をかかせるわけにはいきませんよ！」と言つてやない整備長が自ら引き受けていたのだ。こうした行動が彼の工廠暮しの一因でも

あつた。

ちなみに夕張の「ちよつと相談」は「一日開発に付き合え」と同義である。当人はちよつとアドバイスを貰うだけのつもりで誘うのだが、ほぼ確実にヒートアップし一日が潰れるのだ。整備兵の間では常識であり、無論やない整備長も知っている。しかし、それでも彼は断らない。

——そう、彼は紳士だから。

「ありがとう、やないさん！」

夕張は満面の笑みを彼に向ける。例えこれがデスマーチの入口だとしても、その笑みを見たやない整備長に後悔は無い。

(ふうーこれで工廠暮らし三日目決定だなー)

深夜明けの変なテンションのではあるが、彼は覚悟を決め夕張の後に付いていった。

◇ ◇ ◇

やない整備長が夕張に案内されたのは会議室だった。作戦会議などの予定が入っていないければ誰でも借りることができ、夕張がすでに利用申請を出していたらしい。やない整備長が中に入ると、意外な人物がお茶菓子をつまみながら待機していた。

「マギーさん、なんでここに？」

「夕張に相談持ちかけたらここに待つように言われたのよ……。助っ人連れてくるって

言つてたけど……整備長が？」

「ええ、多分そのつもりで呼ばれたんだと……」

ここに来る途中やない整備長はあらかじめ夕張にどんな相談か質問をしていたが、「着いてからのお楽しみよ！」と言つて彼女は教えてくれなかった。なので彼も事情を把握している訳ではなかったが……

「マギーさんの相談つてことは十中八九ACのことですよね？」

「その通り!!」

マギーの代わりに夕張が答える。そして会議室のホワイトボードを思いきり叩くと、ボードが半回転し“議題”が現れる。どうやら夕張が事前に書いていたらしい。無駄に芸が細かい。

「なになに……『ブルーマグノリア超強化改修計画』…………は？」

議題に書かれていることを理解した瞬間、彼は固まる。

(あ、これ無理なやつだ……)

夕張は毎度難題を持ち込んでくるが今回は無理難題というやつだった。

それもそのはず、あくまで彼は軍艦の専門家であり、彼の好きな『むせる戦記ボト娘』という漫画から飛び出てきたようなロボットなど門下外もいいところである。

「んっん、夕張ちゃん……僕、ACはちよつと難しい……かも……」

「愛でどうにかならない?」

「ん〜そっかー、愛か〜……」

確かにACはやない整備長の好物である。一人の男の子として本物のロボットにロマンを感じざるを得ない。一日中ACを眺めていても飽きない自信が彼にはあった。

しかし一人の技術者としてはACはともじやないが手が出せる代物ではないことを痛感している。AMSこそ搭載されていないが、その装甲に使われている金属の精製すらできないオーバーテクノロジーの塊なのだ、どうしようもない。

——『愛』でどうにかなればいいんだけど……

「ゴメン無理」と言いたいが目を爛々と輝かせている夕張を見ると喉が詰まる。「がっかりさせたくない」という思いと「無理だ」という思いの狭間で彼は悩み苦しんでいた。そんな彼を見かねたのか助け船がマギーから出される。

「整備長、あの議題はあの子が勝手に書いただけよ。元々はACの武装を作れないか聞いただけ」

「『ブルーマグノリア』にですか? いや、しかし……今の兵装に匹敵するものはちよつと……」

ACの性能底上げよりかはだいぶマシな議題だが、それでも無理難題は変わらない。当然のことながらレーザーライフルやミサイルは今の時代ではオーバーテクノロジー

である。物があれば工廠の装置で修理やミサイルの複製ができるが、ゼロから開発することは不可能であった。

「なにもそこまで期待してないわ。仮に開発できたとしても重量的に積めないだろうし……。私が欲しいのは重量過多にならない軽量の追加兵装よ。もつと持続戦闘能力が欲しいの」

「ああ、なるほど……」

要は敵の駆逐や艦載機程度に虎の子のミサイルやレーザーライフルを使いたくないらしい。雑魚狩りに調度良い程度の兵器であればなんとかなりそうな気がする。

「いや、夕張ちゃんが『超強化』とか書くからちよつとビックリしちゃったよ」

「む、艦娘的には兵装が増えるのは立派な強化よ！やないさん！」

「あははは、ごめんごめん」

夕張に怒られながらもやない整備長の顔はほころんでいた。無理難題と思っていたことがただの難題で済みそうなことに安堵していたからだ。結局難題には変わり無いことには眼を逸らしつつ、やない整備長は話を先に進めることにした。

「では早速ですがマギーさん……夕張ちゃんも僕もACに関しては何人ですので、できたら積みそうな武器のカテゴリだけでもピックアップしてもらえませんか？その中から開発できそうなものをこちらで提案しますんで」

「わかったわ」

マギーはホワイトボードに書かれている議題を消して、ズラズラとACの武器のカテゴリを書き出す。ライフル、ショットガン、ガトリング……実に多くの名前が上がっていき、その豊富さにやない整備長と夕張はどれを造ろうか迷ってしまう。

そんな中、一つ気になる武器の名前を発見する。

「パイルバンカー……」

二人は同じ武器の名前を呟く。

「すごい、パイルバンカーなんて浪漫武器、実在してたんだ!!」

やない整備長もそうだが、特に夕張が目を輝かせ始めた。パイルバンカーは彼女が現在絶賛ハマっている「ポト娘」にも出てくる武器だ。敵に近接し、どんな装甲も打ち貫く杭を打ち込む「最高にカッコよく」て「最高に頭の悪い兵器」。接近戦を仕掛けるリスクを考えたらとてもじゃないが使えない空想武器だと彼女は考えていた。

「マギーさん、コレ何に対して使うんですか!？」

「え、対ACとか……」

「ACに!？」

「さらにありえない回答に彼女は驚く。マギーは感覚が麻痺してしまっているためなとも思っていないが、ACの速度は艦船と比べたら超高速である。平均速度100」

200 km/sをゆうに超え、しかも三次元機動をする兵器なのだ。しかもサイズも10 mと小型である。これにパイルバンカーを当てるとは、プロ野球選手の投げる球に対してこちらも球を投げて当てようという難易度に匹敵する。しかもはずしたらその球が自分に命中するようなりスク込みでだ、常人の発想ではない。

「すごいすごいすごい!!マギーさんの時代の人たちってみんな『変態』だったんですね!!」

——夕張の周り以外の空気が固まる。

「……ねえ夕張、喧嘩なら買うわよ」

「違います!!マギーさんッ!あれは彼女の的に褒めてるんです!!我々の業界で『変態』は褒め言葉なんです!!」

夕張の『変態』発言にやない整備長は必死の言い訳をする。夕張と若干同じことを考えていたのは秘密だ。

「はあ、もういい、わかった……言っておくけどパイルバンカーは却下よ、ブーストチャージで十分だし……それに、わたし変態じゃないし……」

(ブーストチャージも十分変態的です)

マギーのむくれ顔にギャップ萌えを感じつつ、やない整備長は心の中でツッコむ。

(しかし、はてさて……どこらへんで落としどころをつけるかなー)

やない整備長はいかにしてこの場をまとめるか頭を悩ませていた。

——2時間後

「とうわけで余っている単装砲を利用してハンドガンをつくろうと思います」

夕張がやたらとパイルバンカーに固執したせいで右往左往してしまっただが、やない整備長の尽力によりなんとか案がまとまる。

「ま、妥当なところね」

「えー、面白味が少ないわ」

どうもまだ夕張は納得しきれていないようだが、マギーの及第点が得られたのでやない整備長は夕張の発言を無視した。というか話の軌道修正に疲れきってしまいそんな元気が彼には残っていないかった。

「じゃあ後はヨロシクね、整備長、夕張楽しみにしてるわ」

開発する兵器も決まり、マギーは会議室を後にする。

「よし、やないさん！こうなったら最高のハンドガンを造りましょ!!」

（ああ、そっか……まだ開発するもの決まっただけなんだっけ……）

そう、あくまでハンドガンを造ることが決まっただけである。これから設計することを考えると彼は頭が痛くなった。しかし——

「うーん、威力重視か連射重視か……迷うところね。ねえ、やないさんはどう思う？」

「……そうだなあ——」

楽しんでそうに悩んでいる夕張を見ると、やない整備長は顔をほころばせて一緒に議論を始める。これが彼の生き方だった。

——どんなに辛くても彼女達の前ではカッコつける。

それが整備長として、一人の男としてこのやないが出来る精一杯のことだから。

やはり彼は紳士なのだ。

◇ ◇ ◇

後日

「ばんばかばくん！ マギーさん、例の品、完成しましたよッ」

まるで似せる気がない愛宕の物まねをしながら夕張がマギーの元へ開発の報告にきた。

「へえ、早速見せてもらおうかしら」

マギーは夕張に連れられて工場へ行くと、すでに『ブルーマグノリア』の右肩にハンドガンが備え付けられている。

「超連射型単装砲『秋霧』」

「射程と仰角機構を犠牲に造った、初のAC専用単装砲です。もはや艦船では扱えない

代物です」

「口径は？」

「50口径」

「リロード時間は？」

「5発／秒」

「弾は？徹甲弾？」

「高速徹甲弾でございます」

「なかなかね」

「そこは『パーフェクトだ夕張』って言うてよろ」

「？パーフェクトだ夕張……これでいいの？」

「感謝の極み」

「それなんのマネ？……まあいいわ。ところで整備長は？」

いかに兵器の説明が好きそうなもう一人の功労者がいないことにマギーは疑問を投げかける。

「ああ、あの人はいつも通りテントで仮眠中です」

『秋霧』の開発が済むと、やない整備長は風呂に入る間も惜しんでテントへ駆け込んでいた。流石に疲労がピークに達しており、今はグースカと寝息を立てている。

「そう……、じゃあお礼はあとにするか。彼、なになら喜ぶかしら？」

「あ、それならハンドガンを使った感想を聞かせてあげて」

「構わないけど……それでいいの？」

「うん、やないさんはそれが一番喜ぶわ！あの人『変態』だから！」

——我々の業界では褒め言葉である。

第十八話「MISSION04_黒い鳥—01」

倉井元帥の鎮守府にて、こそこそと通信室に入り込み誰かと通信を取ろうとしている影があつた。倉井元帥は現在大本営に向中であり、まさに鬼の居ぬ間にという様相である。ただ残念なことがあるとすれば、例え倉井元帥がいたとしても大して警戒はされておらず、本当はこそこそする必要もあまり無いことであつた。

——要は舐められているのだ、捨て置き、と……

それに腹が立つものの、警戒に値する暗躍を出来ていないことに情けなさを感じながら、影の主——龍驤——は自分の本当の上司へと通信を繋ぐ。

「あー、あー、『最近どうでつか?』」

『ぼちぼちでんなー』……………なあ、龍驤……………この合言葉、やめにせんか? 意味があるとは思へん』

「なにゆつてんねん、これは挨拶も兼ねてるんやで、大切にせんいかんよ! 赤羽はん!!」
『赤羽元帥』

彼が龍驤の本来の上司であり、彼女を倉井元帥の元へ送り込んだ張本人である。現在には前線から身を引き大本営勤めだ。

「わかった、わかった……それで、深海鉄騎とやらからは何か引き出せたか？」

「……あつかんわ、やつぱりちんぷんかんぷんやで」

「貴様、倉井から無人ACを授かって運用しているのだろうか？何故出来ん？」

「んなこと言つたつて、うちはUNACちゃんのお操作方法聞かされてるだけや！解析と
かできへんわ!!」

「……はあ、やはり情報の真偽確認は無理か……」

「ああ、そういえば倉井はんはそっちでなんて言つとつたん？」

倉井元帥の大本営への出向は深海鉄騎から引き出した情報、統括機構インターネ
インの場所についての報告をするためであった。赤羽元帥としては倉井元帥のもたら
す情報の真偽を確認したかったため、龍驤に深海鉄騎の解析を指示していたのだが……
結果はご覧の様だ。

「統括機構は『沈黙海域』^{サイレントライ}の向こう側……だそうだ」

「あー……、やつぱりそうやったか。随分と荒れたやろ？会議」

「ああ、皆薄々考えていたとはいえ信じたくなかつた答えだからな。知らぬが仏、という
やつだ」

『沈黙海域』^{サイレントライ}とはSOUTH FRONTIER近海に存在している“境界線”の内
側のことである。深海棲艦が出現した際にSOUTH FRONTIERが制圧され、

作り出された境界線。そこに入った途端何処からともなく飛来物が押し寄せ、どんなものも打ち落とされるのだ。艦載機だろうが戦艦だろうが……。かといって水中は水中で数えきれない程の機雷が漂っている。

誰の侵入も許さず、入れれば最後、水底に沈む運命が待ち構えている……ゆえに『沈黙海域』。攻略方法は未だ確立しておらず、避けて通るしか手立てがない場所である。

「倉井は駒が揃ったので近々攻略する……とぬかしていたがな」

「流石やね、あの人……それで統轄機構は具体的に何処やつて？」

「それがだ、わかったのは沈黙海域の向こう側としかやつは言っていない。詳細は現在調査中だそうだ」

「……おかしいなあ、マグノリアはんの言う通りなら深海鉄騎には詳細な場所の記録が残ってる筈なんやけど……」

この前の任務にて龍驤はマギーから「深海鉄騎は統括機構までたどり着いたAC」と聞いていた。それが正しければ倉井元帥は嘘の報告をし、情報を隠していることとなる。

「報告にあったあれか。なぜマグノリア・カーチスがその情報を知っているかは省略された……とあったが、信頼できるのか？」

「嘘をついてるようじゃなかったで。ACのために翔鶴に喧嘩売ろうとしたぐらいやか

らな、それなりに確信はあったとウチは踏んどるよ」

「なるほどな……しかし、やはり深海鉄騎の解析ができんと話にならん」

「せやかて、さつきも言ったけどウチらはACの解析なんかできへんよ。倉井はんもそれが分かつとるから放置しとるんやろ。舐めくさりおつて、ほんま腹立つわ〜」

「……そういえばさつきの……マグノリア・カーチスであれば解析できる、と報告書にあつたな？」

「確かに報告書にそないなこと書いてたよう……でもそれがなんやちゆうねん？」
「いや、良いことを思い付いてな」

赤羽元帥の声が今までの神妙そうなものから打って変わって楽しそうなものになる。まるでイタズラを思い付いた子供のようだ。きつと悪い顔しとるんやろな、あのオッサン……と龍驤は苦笑いを浮かべた。

「龍驤……確か貴様、居心地悪いから異動したいと言っていたな？」

「まあスパイに優しくしてくれるやつはおらんわな、普通」

「いいぞ、その願い受領してやる。今日から貴様は白鳥のところへ異動だ、さつきと準備しな」

「はッ?!いきなりなにゆうてんねん!!」

「なに、問題は無い。白鳥も空母不足を嘆いていたからな、きつと歓迎されるだろう」

赤羽元帥もまた白鳥提督の同期であった。しかも倉井元帥と違い同じ釜の飯を食べた仲である。そのこともあり、前線に残っている白鳥提督とは互いに無理を言い合う持ちつ持たれずな間柄だった。

——例のAC乗りが奴のところなのは都合がいい。

急なことだが、きつと奴なら悪態をつきながらも対応してくれるだろう。

そのような信頼を赤羽元帥は白鳥提督に持っていた。

「でだ、龍驤……随分急なことだし、私達はACのことをよく理解していないからな、UNACを一機ぐらいなら積み間違えてしまうこともあるだろう」

「……うわ、そういうことかいな。大丈夫なん？それ」

要は深海鉄騎をパクって白鳥提督のとこまで届けろということだ。下手しなくとも軍法会議ものである。しかし赤羽元帥は悪びれた様子もなく語る。

「奴だって色々強引な手を使っているのだ、たまにはこちらもやらせてもらおう」

「はあ、しゃくまないなあ……責任はそっちで取ってよ？」

「分かっている。今の私はそれくらいしかできんしな。そっちに忍ばせている作業員にも今連絡を送った。倉井が戻る前にケリをつけろ」

「了解、はあくほんま人使い荒いわ」

龍驤は通信を切り、急ぎ足で工廠へと向かっていった。



装甲空母『翔鶴』の中には三機のACが格納されている。No. 2、No. 8……そしてその隣にある三機目を倉井元帥は整備していた。その三機目のACに通信が繋がられる。相手は隣にいるNo. 8だった。

No. 2、No. 8は『デザインド』という処置を受けた元人間であり、身体の機械化の末彼らはACと一体化させられている。そのため彼らは誰かと話すときはACのスピーカーを使うか近場の通信機にアクセスする必要があった。スピーカーは音が大きすぎるのであまり使用せず、彼らはもっぱら後者の方法を使用する。特に個人的な話であれば尚更だ。

「倉井……深海鉄騎の処分、あれでよかったのか？」

倉井元帥は整備の手を動かしたまま答える。

「龍驤が持ち出したことか？整備不良のUNACを持ち出したことによる不幸な事故。全ては海の底に沈みそれで終わり。……シナリオに何か問題があるとしても？」

「随分回りくどいと思ってる……」

「ただ解体するにしても色々理由があるのさ……ましてや、こんなものが身に付くとな」

そう言う倉井元帥はコックピットから手だけを出し、階級章をNo. 8に見せつけ

る。

「自由を謳歌していた鳥も随分と変わったものだ」

「変わるもなにも……それはオリジナルの話だろう。私は倉井であつてクラインではない、私は私だ。貴様らを下した人物とは別人だよ」

珍しく彼が言葉に乗せた感情は自嘲だった。最初の黒い鳥の写し身ながらも、その性質と真逆のことをしている。そんな自分をどこかおかしく思っているのかもしれない。

「気分を悪くしたなら謝る」

皮肉のつもりで言った訳ではなかったので、No. 8は誤解を解く意味も込めて謝罪をした。

「気にするな。それよりもNo. 8、深海鉄騎の処分が気に入らないようだが……どうした?」

「……貴様のと……いや、クラインのと似たエンブレムだったからな……、そのわりには呆気ないと思っただけだ。下らない感傷だ」

心のどこかで望んでいた黒い鳥との再戦、その面影を感じさせるACがこれからつまらない最後を迎えることにどこか虚しさを感じていた。

「そういうことか……そんなものすぐに忘れる。黒い鳥……それはエンブレムなどの有無ではない。私達が秩序を造り出すという限り、必ず目の前に現れる。あれはそうい

う存在だ……」

倉井元帥は断言する。自身のオリジナルがそうであったからか、『企業』から時代の節目にそのような存在が観測されてきたことを教わったからか、それが世の理とでも言うような力強さを持って……。

「今回は……やはりあのカーチスの末裔がそうなのか？」

それに対しNo. 8は自らの考えを吐露した。自分達に与えられた新たな任務、現状それを阻害しうる唯一の存在。自分達に匹敵する戦闘力と闘争本能と兼ね備え、しかも統括機構のことも知っている。まるでタイミングでも計られたように現れた彼女にNo. 8は因縁のようなものを感じていた。

「……少なくとも修正対象ではあるな。しかしイレギュラーというのは“想定外”だからイレギュラーというのだ。ヤツ以外の“想定外”も想定しておいたほうがいいだろう」

倉井元帥はACの整備を終えコックピットから立ち上がる。そして決意を確かめるように自分の『逆さ吊りの鴉』のエンブレムを仰ぎ見た。

「……例えなにが来ても、イレギュラーは全て消すかな」

人間の可能性——戦いをやめられない性。

それを制御するために、秩序を復活させるために『^チ黒い鳥^カ』をこの身に宿している

の
だ
か
ら
。

第十九話 「MISSION 04」 黒い鳥—02」

——夢を、夢を見ていた。

かつての、大切な人達の……最後の夢を。

『状況は最悪だ、俺たちには撤退しか残されていない。……そこを越えられたら、それも潰えるがな』

司令官から艦隊に向けて通信が入る。その声からは酷く心苦しさが滲んでいた。「つまり私達でここを死守しろ、ということですね」

旗艦である赤城さんが司令官の言葉の意図をすくい取る。それは司令官が言おうとしてもなかなか吐き出せなかった命令だった。

『……その通りだ赤城。怨み事なら今のうちに聞くぞ』

「そうですね……帰ったらみんなで美味しいもの食べたいです。もちろん提督の奢りですよ、フフツ」

『……俺は怨み事と言ったはずだが？』

「無いものと言うことは無理ですから。……二人はなにかありますか？」

赤城さんは蒼龍さんと飛龍さんに話を振る。その口調は通信で顔は見えないけれど、

いつもの笑顔の時の声と同じだったと思う。

「私はお寿司食べたい!!飛龍は?」

「んー、私はパフェがいいな〜」

蒼龍さんも飛龍さんも、まるで食堂での会話みたいに明るかった。ここが死地だとは微塵も感じさせない程に……。

『……このバカ娘どもが。いいぞ、帰ってきたら何でも奢ってやる、だから……だから……、そこは……頼んだぞ』

そして通信が切られた。司令官の言葉はまるで臓物から絞り出したように苦しそうで……、いや、本当に苦しいのだろう。愛娘たちに「死んでこい」と言ったのだ、どんなことがあっても仲間を見捨てようとしなかったあの人にとって、それは計りきれないほど辛い決断だったはずだ。

「ついで『生きて帰ってこい』とは言わなかったねー」

飛龍さんは少々残念そうに呟く。私は知っていた。飛龍さんは司令官のことを一人の男性として好きだったことを。

「なんかさー、『前世』の多聞丸と似てるんだよね、渋いところとかさ」

そんなことを言いながら蒼龍さんと会話に花を咲かせていたことを見たことがある。

「仕方ありません、そんな無責任なこと、あの方が言えるわけ無いでしょう」

「そーだよ、飛龍。それにさ、あれ……提督絶対泣いてたよ。それだけでジューブんでしょ」

赤城さんも蒼龍さんも、飛龍さんに負けず劣らず司令官の事が好きだった。尊敬する上官として、父親代わりとして、魅力的な男性として……。

——私はそんな皆さんが大好きだった。

「私も……やっぱり私も残ります!」

「なりません、吹雪。あなたには撤退中の加賀と合流し、そのまま帰投するよう命じていたはずよ」

さつきまでの雰囲気とは打って変わり、赤城さんは凜とした厳しい態度で私に言い放つ。

「で、でも……私でも弾除けぐらいにはなります!だから!!」

「なりませんと言っているでしょう!!吹雪ツ!!」

通信機のスピーカーが震えるほど赤城さんは怒鳴っていた。こんなに厳しい口調の赤城さんは初めてで、私は身をすくませってしまう。

「いいですか!私達がここで身を賭すのは未来に火を残すためツ、大切な提督たちを守るためです!!ですが、あなたがここに残ったところでそれは犬死と同義。伊達や酔狂で命を懸けることは許しません!もうここに貴方のやるべきことは無いわ、帰投なさい

「！」

キツパリと、明確に、役立たずだと宣言された。それが赤城さんの優しさだった。

「ですが……ですが……赤城さん……」

「……貴方が私達を想ってくれているように、私達も貴方の事を想っています……それに、貴方までいなくなってしまうたら提督はきつと壊れてしまうわ。貴方は貴方のできることをしなさい。……提督と加賀を、宜しくお願いします」

「……わかり……ました……駆逐艦吹雪、これより帰投を開始します……」

私に反論の余地は無かった。いや、結局のところ弱い私には最初からそんなものは無かったのだ。私はそのまま、大好きな、大切な人達に背を向け帰ることしかできず、ただただ無力な我が身を呪うだけだった。

——そして……鎮守府に帰投できたのは私と加賀さんだけだった。

私はそのあと、自分に出来ることを必死に探して頑張った。それが赤城さんとの約束だったし、それでもしないと自分の存在価値を見いだすことができなかつたから。必死に、必死に、あの時の無力をぬぐい去るように……。

それでもふと、思ってしまう事がある。

——赤城さん、再びあの時の様なことがあつたら……私はまた仲間に背を向けなければならぬのでしょうか……。



「吹雪、吹雪ッ」

聞きなれた自分を呼ぶ声と一緒に体を揺さぶられて、私は目を覚ました。時計を見るとマルロクマルマル過ぎを指しており、その時間ピッタリに設定していた目覚ましでは起きていなかった事を知る。

「あなた随分うなされてたわよ。また例の夢でも見てたの？」

上半身を起こした私の顔を覗き込むようにして、同居人の叢雲が聞いてきた。

「おはよ、叢雲。……うん、まあそんなところかな」

「かな、じゃないわよ、全く……ほら見なさい」

差し出された手鏡を見ると、目を赤く腫らし髪がボサボサのお化け屋敷の幽霊のような女の子が映っており、一瞬それが自分だとは認識できなかつた。

「うわ……」

「わかつたらさっさと顔洗いに行きなさい、辛気臭いつたらありやしない」

叢雲は私の顔にタオルを投げつけ洗面所に行くよう促した。ちよつと荒々しい感じもするが、何だかんだいって洗顔クリームをテーブルに置いておいてくれる辺りが

叢雲らしい。そんな彼女の優しさに甘えつつ出口に向かっていると、もう一人の同居人の綾波ちゃんから目薬を渡された。

「おはよう、吹雪ちゃん。これ良く効くから使って」

「ん、ありがとう」

どうやら目も充血していたらしいのでありがたく借りることにする。こういう時、二人が一緒の部屋でよかつたと思う。しっかりといて、優しくて、この二人の前だと見た目通りの女の子として振る舞うことができるから。自分の弱いところをさらけ出せる存在がいてくれなかったら、私は多分どこかで潰れていたと思う。

二人の好意を享受し、洗面所で人前になんとか出せる顔にしてから部屋に戻ると、二人はもう制服に着替え終わっていた。

（あれ、いつものとデザインが違う……）

その二人の制服に違和感を感じ少々戸惑いを覚えるが、すぐにあることを思い出す。

「あ、改二の最終調整、今日だったっけ？」

「そうよ！それが終われば正式配備！これでますます活躍出来るわ!!」

叢雲が胸を張って自慢げに答えた。叢雲の第二改造を証明する新しい制服にはスリットが入っており、そこから黒いインナーがちらついて見える。それが変化の乏しい強化人間の身でありながらも発育し、女性的になった部分を強調していて二重の意味で

羨ましくなる。

「吹雪ちゃん、綾波もどうですか？」

綾波ちゃんの制服を見ると形状こそ前の制服と変わらないものの、黒色に変わった襟と、それに入っている赤線のコントラストが大人びて見えて何だかカッコよかった。

「すごい！カッコいいよ、綾波ちゃん！」

私は思ったことをそのまま口にする、叢雲が何だかむくれて突っかかってくる。

「ちよつとゝわたしのと反応違うくない？」

「そんなことないって、叢雲もカッコいいよ！……やっぱり黒が入つてるといいなあ……」

自分の制服と思わず見比べてしまう。私は今の制服が嫌いではないが、二人のと比べるとちよつと子供っぽい。……まるで成長しない自分みたいだ。

「……なくにしよげんのよ！」

暗い気持ち吹き飛ばすように叢雲に背中を叩かれる。

「あんただって遠征の度に真っ黒になって帰ってくるじゃない、私達とお揃いよ」

「それはただの油污れでしょ、も」

そんな下らないやり取りを皮切りに私が暗くしかけてしまった部屋の空気が再び明るくなった。

「あ、もうこんな時間!？」

楽しい時間はすぐ過ぎてしまうようで……もとより大して余裕があつた訳でもないけど、もう任務の時間が迫っている。

「あんた今日も遠征だっけ? ご苦労様ね。また今の綾波ぐらい真つ黒になつてきなさいな」

「吹雪ちゃん、気を付けてね」

「うん、行つてきます!」

私は二人の「家族」に挨拶し、部屋を後にした。



「失礼します」

執務室のドアをノックし中に入ると、一緒に遠征に出る天龍さんと龍田さんがソファに座つてお茶を啜っていた。もしかして待たせちゃったかな、と気まずそうな表情を浮かべると、それを汲み取ってくれた龍田さんが「そうじゃないわ、あくれ」とでも言うように別方向を指差す。その方向の先は司令官であり、私たちへの命令を他所に誰かと電話中だった。

「はあ、今日だど!? ふざけやがって!! てめーはいつもそうだ、こっちの都合を少しは考えて喋りやがれ! …… ああ、ああ、…… チツ、わかつたよ! ちようど用事のあるところの近場だからな、特別だぞ、クソつたれめ」

それから二三言葉を交わし、司令官は電話を切った。内容は良くわからないが、司令官がため息をついているあたり何だか面倒事を押し付けられたようだ。

「……待たせてすまん、お前ら。ついでにもう一つ謝ることがある。つい今しがたお前らのやるこが増えた」

「はあ? んだよそれ……」

天龍さんは不機嫌そうにソファに座りながら足をバタつかせた。どうやら私たちも電話の面倒事に巻き込まれたらしい。

「まあそうスネんでくれ。遠征の帰り道にちよつと寄り道するだけだ。どうやら赤羽のクソ野郎様が軽空母を恵んでくださるらしい。そいつを迎えに行つてやつてくれ」

赤羽元帥には私も何度か会つたことがある。確か司令官と同期で、今は大本營に勤めている方だ。よく物資などの提供の代わりに変わった任務を依頼をされたりするけれど、軽空母の引き取りとはまた一風変わった依頼だ。

……何か訳ありなのだろうか?

「ちなみに迎えに行く空母つてのは……天龍と吹雪は会つたことがあるだろう、この前

の龍驤だよ」

「ああ、あいつか……、ん？あいつ倉井元帥の部下じゃなかったか？」

「いえ、天龍さん。確か龍驤さんは『派遣』って言ってましたよ。まさか赤羽元帥の艦娘だとは知りませんでしたけど……。にしても、なんでまたウチに？しかも随分急みたんですけど……」

「……ああ、それなんだが」

説明しようとする司令官の口はなんだか重そうだった。予想通り、やはり何か訳ありのようだ。

「どうやらこちらへの異動ついでに、倉井のそこから深海鉄騎を『ギンバイ』してきたらしい……。マギーに解析させるつもりのようにだ……」

「あらく、穏やかじゃないわね」

「プツ、ハツハツハツハツ、すげえな、龍驤のやつ！なるほど、提督がそんな顔するわけだぜ」

天龍さんは痛快そうに笑っていた。この前の任務の帰り道で加賀さんとマギーさんからことのあらましを聞いていた時に、天龍さんは相手のやり方に腹を立てていた。だから実際今回の事が痛快なのだろう。

龍田さんも天龍さんから話を聞いていたのか、それとも司令官の困っている顔が可笑

しいのか、その言葉とは裏腹にニコニコしている。

「まったく、こつちの気苦労も知らないでテメーら呑気なものだな……」

司令官としては元帥間のいざこざに巻き込まれた訳であり、その気苦労は末端の兵士である私たちにはうかがい知れないものがあるのだろう。司令官は『いわゆる大人の事情』というのが嫌いで前線に残ってる節もあるので、尚更頭が重そうだ。

「まあ良いじゃねえかよ、提督。千歳と千代田を空母に改造するとはいえ、うちはまだ航空戦力が少ねーんだ、調度いいだろ。それに秘書艦様達が深海鉄騎を欲しがってたじゃねーか。ご機嫌取りにプレゼントすればいい」

司令官には申し訳ないが天龍さんの言う通り、私たちの立場からすれば今回の話は良いこと尽くめだ。この鎮守府の航空戦力不足を補うため千歳さんたちは軽空母に改造が決定していたが、やはりなれない艦載機操作に不安を感じているようだった。だから指導ができる練度を持つ龍驤さんが来くれるのは本当にありがたい。

マギーさんも深海鉄騎に対してただならぬ執着があるようだったので、きつと喜んでくれるだろう。

「……それにしても、深海鉄騎かあ」

——アーマードコア

マギーさんとの演習の時に見せつけられたその持つ圧倒的な力。艦載機サイズで

ありながら戦艦に匹敵する火力と駆逐艦を超える機動力、その上艦隊の力を底上げする索敵能力まで凝縮された「力の結晶」。つり橋効果なのか『ブルーマグノリア』に銃を突きつけられた時、押しつぶされそうな恐怖と同時ににか惹かれるものを感じていた。そういうえばACの操縦にはAMSは関係ないらしい。

「……私でも乗ったりできないかな……なんてね」

あれは一人乗りだし、回収が済めば一機余るはず。だからそんな希望をほんのちよつぱり持つてしまう。子供がプロ野球選手とかにあこがれる程度の、まさに「夢」程度の淡い願望。あ、龍驤さんが持つてくるなら無人機なのかな……まあどうでもいいけれど。実際有人だろうと無人だろうと所詮「夢」に変わりはないのだ。

「——よし、龍田、吹雪、物資運搬ついでに期待の新戦力様を迎えにくぞ！天龍水雷戦隊、抜錨だ！」

「久々に一緒の出撃ね〜」

「はい、行きましょう！」

——これが私の最後の「抜錨」になるとは、この時はまだ想像だにしていなかった。

第二十話 「MISSION 04」 黒い鳥—03」

「もうそろそろですかね？」

元々の任務内容である物資の輸送を済ませ、天龍さん率いる水雷戦隊——といっても、あとは龍田さんと私だけだけど——は追加任務であるリュウジヨウさんの護送任務へ移行していた。護送と銘打ってはいるが、巡航する海域は安全が確保された海域であり、実質ただの道案内だ。

「そうだな……つと、俺の電探に反応ありだ。小さいのが……五つ、大きいのが一つ、多分龍驤だな」

合流予定海域にて天龍さんがそれらしい反応を掴む。ちよつぷり遅れて私の電探にも同じ反応が映った。

「私も捉えたわ。でも天龍ちゃん、この小さい反応はなに？ なんだか大きいのと等間隔で動いてるけれど……」

龍田さんも同じ反応を捉えていたけれど、その反応に疑問を示す。そういえば龍田さんだけ動いているACを見たことがなかったつけ。

「ああ、そいつは恐らく龍驤の無人ACだよ。確か、いーのつくちゃん？ だっけ？」

「UNACですよ、天龍さん」

「よく覚えてるな吹雪、そう、それだ。それを護衛がわりに展開してるんだろ」
「へ〜そうなんだ〜」

そんなやり取りをしているうちに龍驤さんとの距離が詰まっていく。暫くすると空母の前方を守っているであろう無人ACとすれ違った。

「あ、天龍さん見てください、この前のと違う形してます」

「お、ホントだ。今度のは黄色の……足が変な形してるな」

「へ〜ACってあーやって動くのね〜。あの足、まるで鳥みたい」

「確かに龍田の言う通りだ、鳥足だな、鳥足！」

「鳥足やなくて逆間接って言うんや！んなダサイ言い方せんといてーな！」

突如として通信にツツコミが割り込まれる。その声の主は当然龍驤さんだ。前回の任務で私たちの回線のチャンネル知られていたのか、先程までの会話を微妙に聞かれています。

「よお、龍驤！水臭せえなあ、通信繋いでたなら挨拶してくれば良かったのに」

「いやあく〜なんか君らがおかしな話しとるから、こらツツコまなアカンと思つてな〜、え〜と……」

「天龍だよ、天龍！んで隣の軽巡が龍田、駆逐艦の方が吹雪だ」

「軽巡の子は初めましてやね。ウチが軽空母の龍驤や！よろしゅうな！」

「龍田よ、よろしくねー。それにしても……赤羽元帥から私たちが迎えに行くって連絡は聞いてないのかしら？」

確かに龍驤さんは私たちの名前を満足に覚えていなかった。別にそれが悪いとかいうことではなく、普通は合流相手の情報は事前に与えられるものだ。少なくとも名前ぐらいいは聞かされるはずなのだが……。

「あゝ実はな、夜逃げ同然で来たもんで、そんなん聞く暇無かつたんよ。いやゝ顔見知りか迎えに来てくれてホンマ助かったわ！」

どうやら随分と急いでいたらしい。龍驤さんの甲板を見ると、手土産の深海鉄騎が布と紐でぐるぐる巻きにされ艦載機の発艦に邪魔にならないよう端に括りつけられていただけだった。いかにもただ載せただけといった感じで、よつぽど急いでいたのがよくわかる。天龍さんも「そんなんでよく合流できたな……」と若干呆れていた。

「ま、まあええやないか！こうやって無事合流できた訳やし。これからよろしゅうな！」

「はあ、まあそうだな……歓迎するぜ、盛大によ！」

「おつ、ケーキでも用意してくれてるんか!？」

「そうだな、着任祝いに何か奢ってやってもいい」

「あらく天龍ちゃん太っ腹。私はなに頼もうかしらゝ」

「おいつ龍田!?奢るのは龍驤だけだぞ!!」

そう言いつつも、天龍さんはなんだかんだ私たちにも奢ってくれていることが多い。帰つたらなにを頼んじやおうかな、龍驤さんとはどんなお話しをしよう……。

——そんな期待で胸を膨らませている時だった。

カチリ……という空耳と共に、突如として心臓を鷲掴みされたような感覚に襲われる。身に覚えのある感覚……これは『恐怖』だ。私たちに今、敵意が向けられている。

(そんな馬鹿な!?ありえない!)

私は敵意を恐怖心で感じとれる特技があつた。それは普段なら敵が近づくと徐々に『恐怖』が大きくなっていく感覚がするのだが……、まるで”スイッチを切り替えた”ようにいきなり『恐怖』を捉えるのは初めてだった。

——きつと気のせいだ、そういう時もある。きつと……。

確かめるように電探を再確認した。

「やっぱりなにも映ってない……」

しかし、恐怖心は大きくなる一方だ。だが、電探には依然として私たちと無人ACしか映って……。

「ACが……近づいてきてる?」

それに合わせて恐怖心が大きくなっていく。いや、そんな、まさか……。

「龍驤さん、すみせん。一度UNACを止めてもらえませんか？」
「ん？なんでや？」

「確かめたい事があるんです、お願いします」

「確かめたいこと？なんやそれ？」

「……おい吹雪、無人ACから何か感じるのか？正直に答えろ」

私の様子がおかしいことに気づいたのか、天龍さんも私に確認を取ってきた。天龍さんは私の特技を知っておりその声は真剣そのもので、私はありのままを伝える。

「……UNACから、凄く……」怖い”感じがするんです……」

「ツ！おい！リユウジョウ！！さっさとACを止めるツ！今すぐにだ！！じゃねーと……。」

テメーを敵とみなす！」

天龍さんは龍驤さんに主砲を向け、それが冗談でないことを強調する。

「な、なんやねん!!君ら急に！わかった、わかったから、そんな物騒なモン向けんといてーな!……ほら、今待機命令でしたので、これで止まるはずや」

しかし電探の反応にはACが止まっている様子は無い。

「おい、どういうことだ？龍驤……」

「ちや、ちやうねん……おかしいんや……。何度も命令してるんやで！ホンマや!!なの……UNACちゃん達が……命令を受け付けへん!!暴走!!……いや、まさか……仕組

まれとつたんか!!?」

それを聞いた瞬間、天龍さんは私たちに指示を飛ばす。

「龍田！吹雪！陣形を整えろ!! 『あれ』は敵だ!!」

私たちは急いで龍驤さんも組み込んだ複縦陣を組んだ。天龍さんは吠えるように龍驤さんにも指示を出す。

「おいッ、龍驤!!お前自身は味方なんだろう!!? さっさと艦載機出せ、迎撃するぞー!」

「あかん、駄目や……」

「なにが駄目だ!?まさか積んでねーとかは無しだぞー!」

「ちやうわ!!艦載機は今急いで準備しとる!ウチが言いたいんは、君らは逃げえつてこいや!やつらの狙いはきつとウチや、君らまで巻き込まれることは無い」

しかしその案は龍田さんより却下された。というより無理だったのだ。

「そうしたいのはやまやまなんだけどね。あのお人形さんたち、誰も逃す気は無いみたいよ」

恐らく龍田さんにも同じ様に映っているだろう電探の反応を見ると、まるで私たちが取り囲む様にUNACたちは円を描きながらにじりよつて来ていた。これを仕組んだ者がいるとすれば、関係者は全員消すつもりなのだろう。

「お互い腹くくるしかねえぞー!」

「せやけど……ああッもう!!ウチが何とか隙を作ったるッ。君らでぶちかましたれ!!」
そう叫ぶと、龍驤さんの艦体からありったけの艦載機が発艦していく。それがこの訳のわからないまま巻き込まれた戦の、開戦の狼煙代わりだった。

UNACたちの輪を乱すように龍驤さんの艦載機はACの軌道上に爆弾を投擲していく。UNACは器用に、時にマギーさんが演習の時に見せていた急加速など用いて爆撃を躲していくが、どうやら避ける方向に一定のロジックがあるようで気付くと五機のUNACは二機と三機の固まりに二分されていた。UNACの動きを理解した上で正確な距離、タイミングで爆撃を行う、正に針に糸を通す様な作業をこの土壇場で龍驤さんは行っていたのだ。その練度に舌を巻き、この人が元帥直轄の艦娘であることを実感する。

「このまま動きを止めたる!砲撃準備頼んだで!!」

私は慌てて二機に固められている側のUNACに照準を定めた。私のAMS適正では反応が遅く動いている的に当てるのは不得意だが、そうでなければ話は別だ。

照準を定めている間に、二分されたUNACたちに龍驤さんの艦載機が突撃していく。UNACはまるで鳥撃ちをするように次々に艦載機を撃墜させていくが、その撃墜した影から次の部隊が間髪入れずに襲いかかった。

「どや!隙の生じぬ二段構えは!!これでもくらいッ!」

反撃の隙も与えず第二航空部隊から投擲された爆弾がUNACに降り注ぐ。

「今や!!」

龍驥さんの掛け声と同時にUNACたちは爆炎に包まれた。うっすらとだが、爆撃の衝撃でか確かににその影は動きを停止している。

「龍田!吹雪!いくぞオ!!」

「砲撃戦始めるね〜」

「当たってー!!」

黒煙が立ち込めている場所へ畳み掛けるように、私たちはありつただけの砲撃を行った。全ての砲頭を向け、放てるものを全て放って……。そして次弾装填までの僅かな静寂が訪れる。

「ど、どうだ、こんだけ浴びせりゃひとたまりもねーだろ。……だよな?吹雪?」

若干すぎるように天龍さんは私に確認をとる。私ならこの状況でも”感じ取れる”からだ。だからこそ……私は私自身も言いたくない事実を告げなければならぬ。

「天龍さん……来ます……」

心臓を握り潰す様な『恐怖』は消えていなかった……。私たちの砲撃により生じた水煙の中からUNAC達がゆったりと姿を表す。多少表面が焦げ付き、装甲に幾つかへこみが見えるが……どの機体も五体満足で、その挙動にダメージは感じられない。

——ACは強固な装甲を持っている——

どこかで聞いたこと——叢雲から戦艦棲姫との戦いの話を聞いたときだったか？——を思い出す、まさか戦艦張りだとは思ひもしなかった……。そしてその情報は私たちを絶望させるには充分なものだ。

「まさか私たちの主砲が通らないとはね。……どうしましょうか？天龍ちゃん？」

「……龍驤はもう一度さつきみたいの出来るか？」

「……無理やな、さつきので艦載機の数も減つてもうたし、なにより投下する物がもうほとんどのあらへんよ」

砲弾の装填待ちとは別物の静寂が艦隊を包み込む。

——詰みだ。

それが目の前に突きつけられた現実だった。

「それでも……それでも私は諦めたくありません!!」

私は主砲の照準を調整し、再びUNACに狙いを定める。

「たとえ主砲が数発弾かれたって、だつたら百発当てればいい!!もう失うのは嫌なんです……大切な人たちをまた失うのは……死んでも御免なんです……」

——諦めたくない。

心が折れたらそこで全てが終わってしまう。例えどうしようもない絶望を突きつけ

られていても、那由他に一つでも可能性があればそれで十分だ。とにかく赤城さんたちを失ったときのような惨めな自分に戻ることだけは嫌だった。

心のどこかで「それはただの意地だ、無意味な行動だ」とささやく声が聞こえてくる。それを振り払うように、私は装填が完了した主砲から掃射を始めた。

「いつけえー！」

次々に私の船体から発せられた砲弾は海面にいくつもの水柱を作っただけだった。龍驤さんの支援もなしに、ACにまともに弾など当てられる訳がなかったのだ。

しかし、それでも諦めず撃ち続ける。すると、私の放った一発の砲弾が奇跡的にUNACに直撃した。

「やったー！」

だが空しくも弾が跳弾する金属音が木霊するだけで、UNACはびくともしない。それどころか弾が当たったUNACはまるで蹴った石が当たった人の様にこちらを睨み付け、大きな火を吹かして急接近してきた。

「あ」

——『死』が迫ってくる。

一瞬の出来事だったのに、まるでスローモーションのように眼前に迫ってくるUNACが見え、恐怖で足がすくみ奥歯がガチガチと音をならす。あまりの怖さに思わず目を

つむった瞬間、船体に凄まじい衝撃が襲い掛かった。

「きやああああッ」

あまりの衝撃に私は操縦席から弾き飛ばされ、艦内を転がりまわる。解体用の鉄球でもぶつけられたような強い力が掛かり、艦体が大きく傾いていた。

「吹雪イツ!!」

「!?しかもうた、アカン!!避けられへん!!」

私を体を震わせながらろうじて身を起こすと、艦橋の窓一杯に軽空母の側面が広がっていた。再び強い衝撃が艦体を襲う。UNACの攻撃により艦の進路が反れ、龍驤さんの軽空母と激突してしまったのだ。

再び至るところに体を打ちつけ体はボロボロになり、口の中も鉄の味しかしい。

「ん…………ン…………もどら…なきや」

それでも早く体制を立て直さなければとの思いから必死に操縦席へ戻りAMSシステムを繋ごうとする。だがうんともすんとも反応がない。

「なんで、どうして!動いてよ!!」

なんども接続をやり直し必死に再起動を繰り返すが、機器は沈黙を保ったままだった。

「そんな…………」

当然電探も確認できず通信もダメで味方の安否もわからない。

わかることは『怖いもの』が周囲を囲っている感覚と、その『怖いもの』の銃からと思われる発砲音が聞こえるだけだ。

「このままじゃ……また……なにか、なにか無いの!？」

ANSの接続を繰り返しながらも、必死に出来ることがないか思考をめぐらす。しかしいくら考えても何も出てこない。

——無理だ

「そんなことないッ!」

——お前は無力だ

「そんなこと……そんなこと……」

——諦めろ

心が軋む感覚がする。

”折れる”……そう思った瞬間だった。

ガシャンッ

艦体に三度目の衝撃が走る。私の思考を断ち切るように、何かが落下してきたような

衝撃。私は急いで艦橋の外を見る。……布にくるまれた何か、私の船に落ちていた。
「ツツ!!」

『それ』が何であるか答えをはじき出す前に、私の体は『それ』に向かって走り出す。走りながら頭の中で答え合わせをする。

(きつと私の艦とぶつかった衝撃で龍驤さんの艦から落ちてきたんだ……)

なぜ『それ』がここにあるのか自分なりの答えを出すが、同時に別の疑問が湧く。
(『それ』を私はどうするつもりだ?)

私は『それ』の扱い方など露も知らない。『それ』を目の前にしたところでどうすればいいか分からない。しかし、それでも体は『それ』に向かって走るのをやめなかった。

「はあ、はあ……」

私はついに『それ』の目の前にたどり着く。

——深海鉄騎……いや、『アーマードコア』の目の前に。

強化人間の臂力に物を言わせ、ACに絡みつく布を引つpegす。すると落下した衝撃のせい……ACのハッチがまるで私を招き入れるように開いていた。

「……うん」

私は覚悟を決めACに乗り込んだ。

◇
◇
◇

「えっと……どうすれば？」

ACに乗り込んだのはいいものの、ハッチの閉じ方すらわからない。とりあえず片っ端からそれっぽいボタンを押してみた。ほうっておいたらお互い水底へ沈む運命なのだ。だったら「壊れるかも」という心配は考えないことにした。いくつかボタンを押したとき、画面に明かりが付きハッチが動き始める。

「やった！」

ハッチが完全に閉じ、コックピット内を照らすものがパネルの明かりだけとなった。

〈おはようございます、メインシステム、パイロットデータの認証を開始します〉

〈パイロットデータがありません、新規パイロットデータを作成しますか？〉

コックピット内に女性の声が響き渡り、タッチパネルに〈yes〉〈no〉が表示される。

「えと……yesでいいんだよね」

私〈yes〉に指を置いた途端、画面内にわけの分からない文字が乱立し始めた。

「え、え?!」

〈くあwせdrftgyふじこいp／／……コネクタヲカクニン〉

〈バトルオペレーション、『ダークレイヴン』ヲダウンロードシマス〉

表記を読み上げる声にもノイズが掛かっており、ACのことが分からない私でも何か

がおかしいことがわかる。そして突如として首筋にあるAMSコネクタに、まるでスタンガンを押し付けられているような痛みが走った。

「~~~~~ツツツ!!!!なにかが……流れッ……こんで……くる!!」

しびれるような痛みで体が痙攣し、頭が煮立っているように熱い。意識が途切れそうになる。

——ようやくその激痛から開放されたとき、目の前にはただただ真っ白な空間が広がっていた。まるでホワイトアウトを起こしたようにあたり一面真っ白だ。

「ほお、パルヴァライザーの作ったシステムにまさか人間がアクセスしてくるとは、しかも君みたいな子が……。これも素養ってやつなのか?」

声のする方を向くと、黒ずくめの服に白いジャケットを着た男の人が佇んでいた。

「あなたは……ここは一体……」

「ここは君の頭の中だ」

「どうやら激痛で意識が途切れそう、と思っていたが本当に途切れてしまっていたらしい。とすれば、これは夢なのだろうか?」

「ああ、言っておくが夢とはちよつと違うぞ。アナウンスで流れていただろうか?今は“ダウンロード中”なんだ」

「ダウンロード中……?」

「そう、この機体の戦闘オペレーションのな。さっきのもう一つの質問に答えよう。俺はその戦闘オペレーションシステムだ。……そうだな、説明書、と思ってくればいい」

説明書、つまりこの人はACの扱い方を教えてくれる存在……。

「お願いです!! だつたらこれの使い方を教えてくださいッ、早く!!! じゃないと天龍さんがッ、龍田さんがッ、龍驤さんも……。早く! 間に合わなくなっちゃう! そんなの…… そんなのもう嫌なんです!!」

「……それが君の”答え”か?」

「は……?」

「焦るのはわかるが、これの確認は大切なんでな。人は、戦うために戦うのではない…… 自らの”答え”を成すために戦う。”答え”の是非はどうでもいい、重要なのは有無だ。それを違えてしまったら、”人ではなくなってしまう”。だからもう一度聞くぞ? 君の”答え”はなんだ。『君は”なんのために戦う”』」

——私の戦う理由

当初は、戦うことが当たり前だった。艦娘として生を受けたときから、それが義務付けられている運命だった。だからそれについてあまり考えたことは無い。

でも赤城さんたちの死を目の前にして、確固としたもの出来上がった。同時に戦場か

ら離れることになり、胸に秘めるしかなかつたそれを今この場で吐き出す。

魂から叫ぶように。

「私は……私はもう失いたくないんです。大切な仲間を、かけがえない人たちを……。そして、それを守れない無力な自分が嫌なんです。……強くありたい、力が欲しい！みんなを傷つけるような存在を全て焼き払えるような力が!!……そうだ、私が皆を、皆を……ッ」

〈『ダークレイヴン』ノダウンロードガカンリヨウシマシタ〉

〈システム通常モードに移行、パイロットデータ『吹雪』を登録します〉

突如として真つ白の空間にアナウンスが響き渡る。

「……どうやら完了したようだ。そして確認させてもらった、君の”答え”を。今この瞬間から、君はレイヴンだ」

「好きなように生き、好きなように死ぬといい。誰のためでもなく、自分自身の”答え”のために。『コレ』はそのための力だ。……成就しろよ、君の答えを」

励ますように説明書さんに肩を叩かれ、私は目を覚ました。既にACの戦闘システムは起動しており、画面には複数のカメラにより擬似的に作り出された自機後方からの視点が表示されている。

「…………えと、あ、そうだ!!」

私は呆けていた頭をたたき起こす。ACに乗り込んでからどれくらいたったのだろうか!?とにかくみんなの安否を確認せねば。ACをスキャンモードに切り替えリコンを飛ばし、周囲を見渡した。目の前の龍驤さんの軽空母も、リコン越しに捉えた天龍さんと龍田さんの軽巡もかなりのダメージを負っているものなのか健在している。

「よかつた…………まだ間に合う!」

ここで私はあることに気付いた。

——ACの使い方が分かる

ACにどんな機能があるか、この機体にはどんな武装が積まれているか、どう戦えばいいか…………。それを理解できている。それが分かると同時に、目から大粒の涙があふれ出てきた。

「やれる! やれるんだ! 私にも…………」

私は今、『力』を握り締めている。焦がれ続けていたものがこの身に宿っている。それがたまらなく嬉しかった。

「…………泣いてる場合じゃない」

そうだ、『力』はあくまで行使するものだ。言われたじゃないか、「己が答えを成就しろ」と。私は涙を拭い去る。

さあ、成すべきことをしよう。私の大切な人たちを傷つける怖いものは、消してしまえばいい。今の私にはそれが出来る。

「……吹雪、”発艦”します！」

ACのブースターに火を灯し、私の名を冠する艦体を思い切り蹴り出す。

——まるで殻を内側から破るように。

「私が皆を護るんだから!!」

——雛鳥はその産声をあげ、大海原へと飛び立った。

第二十一話「MISSION04_黒い鳥—04」

「吹雪イ!!」

UNACから蹴りを食らい大きく傾いた駆逐艦『吹雪』は軽空母『龍驤』へと激突した。安否を確認するため慌てて吹雪に通信を繋げようとするが、それが全く繋がらない。

「クソツ、龍驤!!お前は無事か!?!」

「……ウチ自身はな……せやけど……艦体の方は吹雪がつつかかってもうて巡航不能つてとこや。こらあかんわ」

「マジか……」

気付くと吹雪を蹴ったUNACは後ろに下がっており、そいつを加えた五機のUNACは動きの止まった俺たちの回りをグルグル回り始めていた。

「……まるで『かごめかごめ』ね〜」

「なあ、龍田……その場合『籠の中の鳥』は俺たちか?笑えねーよ」

『かごめかごめ』、その唄の解釈の中には罪人の事を唄ったものだという説もある。『後ろの正面』にいるのは処刑人ということらしい。今回は『後ろの正面』どころか全方

位が処刑人だが……。

そして処刑人達による銃殺が執行される。UNAC達はロジックに刻まれている有効射程距離を保ちながらその両手に持つているライフルで天龍達に攻撃を開始した。

ACのライフルは艦船の主砲に比べ射程が短いものの、軽巡の口径と同じ弾を秒間単位で連射する事が出来る。天龍たちの14cm単装砲の10発/分と比べるとその発射間隔は圧倒的であり、たった五機であるにも関わらずその弾幕はまるで連合艦隊からの砲撃を彷彿とさせる激しさで天龍たちに襲いかかった。その猛攻に天龍、龍田の軽巡は勿論のこと、龍驤の軽空母ですら瞬く間に戦闘力を喪失させられてしまう。反撃の手段すら削がれ、あとはこのままなぶり殺されるだけとなった。

「クソツ！ あいつらバカスカ撃ちやがって！」

正直もう持ちそうになかった。機器からはレッドアラートがけたたましく鳴り、退避勧告まで出てる始末だ。

「逃げられるなら逃げてーよー！ うわっ?！」

突然被弾とは違う大きな衝撃に見舞われ、バランスを崩してしまう。恐る恐る艦橋の外を見ると、止めを差しに来たのかUNACが俺の艦に取り付いていた。そいつの向け

る銃口と目が合う。

(あ、死んだな、こりや)

次の瞬間、俺の目には敵の砲弾のドアップが写り、それが最後の光景になる……はずだった。だが実際に俺の目に写し出されたのは”黒い羽”であった。

艦橋越しにも熱を感じる、何もかもを焼き付くような灼熱の黒い羽……。それに撫でられたUNACは溶断され、ズルリと上半身が崩れ落ちる。そしてそれが”羽”ではなく”剣”だと理解した。俺の艦の上にその黒剣を持った新たなACが直立している。

「大丈夫ですか!?!天龍さん!!」

そのACのスピーカーから聞きなれた声が出た。

「おま……まさか吹雪か!!?一体どういうことだ、これはッ」

「なんとか無事そうでした。……説明は後です。私がみんなやつつけちゃいますからー!」

「な、なに言って……」

俺の言葉を遮るように、鼓膜が破れるような銃撃音が鳴り響く。吹雪のACが剣から機関砲に装備を切り換え、敵に攻撃を開始していたのだ。摩耶の対空射撃も真つ青な機

閃砲の弾幕は、UNACの装甲に弾かれていますもの「そんなの関係あるか」とでも言わんばかりに浴びせられ続け、UNACの装甲をベコベコに凹ませていく。そして反対側のデカイ銃から目を焼くような閃光と共に光弾が発せれ、それと同時にACの両肩から魚雷の様なものまで発射された。どちらも艦船の砲撃を超える速度で突き刺さり、UNACを粉碎する。

「これで二つッ！」

俺の近くにいた二機のUNACの撃破を確認すると、吹雪の駆るACはまるで自らが弾丸の様に急加速して俺の艦より飛び立っていった。

「……………すげえ……………」

そうとしか言いようがなかった。開いた口が塞がらないとは正にこの事だ。俺たちが必死になっても抗えなかった『理不尽な力』を、『さらに理不尽な力』で振じ伏せていたのだから。

(こういうのなんて言うんだったか……………)

俺はしつくりくる表現を思い出す。

(ああ、そうだ、『暴力』だ)

あれはまさしく『全てを焼きつくす暴力』だった……………。

◇
◇
◇

「これで三つ目ええッ!!」

天龍さんを襲っていたUNACを屠った私は、残りのUNACの元へと急行した。ここで今度は龍田さんに取り付こうとするUNACがいたため、グライドブーストの加速を生かしてそのままブーストチャージを決める。重量級の質量に速度を乗せて繰り出される蹴りは一撃必殺の威力を秘めており、それを食らったUNACは大きな水柱を作って海中へと没した。

「あとは二つ……」

残りのUNACに視線を向けると優先目標が切り替わったのか艦への攻撃を止め、明らかに私を狙って間合いを詰めてきている。このまま正面から撃ち合いをしても負けるつもりは無いが、それをすると龍田さんや龍驤さんに流れ弾が当たる危険があった。もはや二人の艦の耐久力は限界であり、海上での砲撃戦は避けたいところだ。

「……よし」

周囲を確認し敵を倒す算段を立てると、それを早速実行に移す。ACをスキャンモードに切り換え、敵を見逃さないようにしながら後ろへグライドブーストを吹かし距離を取る。そしてそのまま駆逐艦『吹雪』の元まで下がると、それを足場にして軽空母『龍驤』の甲板へと駆け上がった。甲板に着地すると同時にドリフトターンして敵が迫ってくる面に機体を向ける。

「すみません、龍驤さん」

聞こえてるかわからないが、さっきのターンで甲板を傷つけてしまったことと、これからもう少し傷つけてしまうことを謝った。リコンを飛ばし二機のUNACを確認すると、戦闘力のない艦船を無視して馬鹿正直にこちらの軌跡を辿って追ってきている。

「かかった!」

私は武装をガトリング『AM/GGA-206』からブレード『X099 ANOTH
HER MOON』へ切り換える。そして食い入るようにスキャン越しに敵を捉え、タ
イミングを計っていた。二機のUNACが艦体に足を掛け一緒に甲板上に飛び出して
きた、その刹那――

「今だッ!!」

その隙を狙いグライドブーストで一気に距離を詰める。そして戦闘モードへの切り
換えと同時に、二機のUNACへ居合いのような『一閃』をまとめて刻む。一機は上半
身が綺麗に両断され甲板に上がることなく海へと落ちていき、もう一機は足を切断され
着地できずに甲板の上をゴロゴロと転がっていった。膝から下が無くなったUNAC
はまるでひっくり返った蟬のように体をバタつかせており、その滑稽な姿が「こんなの
に私たちは殺されかけたのか……」と怒りを沸かせる。その鬱憤を晴らすようにその頭
を思いきり踏み砕き、止めを刺した。

「これで五つ目……」

再びACをスキャンモードへ切り換え周囲を見渡す。

「敵勢力の全滅、及び護衛対象の残存を確認……」

そして通信のチャンネルを合わせ仲間に呼び掛けた。

「みなさん、ご無事ですか!!?」

「こちら天龍、何とか生きてるぜ。艦の風通しがだいぶ良くなっちゃったがな」

「こちら龍田、私も生きてるわ。吹雪ちゃんのお陰ね、ありがと」

「龍驤や！ウチも無事やで！にしてもキミ、いつの間にそれに乗り込んだん？ちゅーか、なんで操縦できて………ん？」

「……よかった、本当に……よかったア……」

龍驤さんが喋り終わる前に、私は皆が無事だったことへの安堵と、成すべきことを……”自分の答え”を成就できた事への喜びで涙を溢れさせてしまっていた。

「皆さんが無事で……ホントによかつ………」

そして緊張の糸が切れると同時に、人形の糸まで切ってしまったように意識を手放す。

「……おい、応答しろ！吹雪、吹雪イ!!」

まどろみに沈む中、微かに自分の名を呼ぶ声が聞こえるが、それに答えることは叶わ

第二十二話「MISSION04_黒い鳥—05」

「提督、あのACの解析が済んだわ。ピングよ、やっぱり統轄機構の位置データが残ってた。これがそれよ」

私は提督にそう伝えると、彼の目の前に統轄機構のデータの入ったCDを置いた。

「ああ、ゴ苦労だったなマギー……」

差し出したデータは一応最重要機密クラスのものであり、大本営を動かすほどの影響力があるもののだが……提督の反応はイマイチだ。

「はあ……、あとこれ、明石から預かってきた吹雪の診断書」

「おお……ちよつと見せてくれ」

平静を装っているが明らかに先程と違う反応を提督は見せる。軍からしたら一尖兵の診断書などゴミも同然だが、今の彼にしてみればそのペラ紙一枚の情報が何よりも重要なようだ。

提督は艦娘を部下というよりは自らの娘のように見ている節がある。無論それは時々たま垣間見える程度であり、普段は提督としての線引きはしっかりしているのだが……。それでも、一番付き合いの長い吹雪は実の子同然なのだろう。診断書を見ている

姿はもはや提督ではなく、一人の父親だった。彼は娘の診断書を読み上げる。

「全身打撲に軽度の裂傷……後は『AMSの過負荷による過労』……なんだこりや？」

「それが吹雪が寝込んだ原因。といっても、あくまで過労だから命に別状は無いし直に目を覚ますでしょう、って明石が言ってたわ」

「それはわかるが……アイツの艦には『粗製』用のリミッターを設けてたはずだ。AMSの過負荷ってのは一体……？」

「それについては、そうね……。『こっちの情報』にも少し関係があるから私から話すわ」
こっちも忘れるなよ、と言わんばかりに『統轄機構の情報』の入ったCD』を再び見せつけながら、私は説明を始めた。

「まず結論から言うと、吹雪のAMSコネクタに負荷をかけたのはあのACよ」

「ちよつと待て、ACはAMSを使用しないんじゃないやなかったか？」

「本来はね。でもあのACに深海棲艦が妙なプログラムを仕組んでいた。戦闘オペレーション『ダーククレイヴン』……。恐らく深海棲艦がACを操る為に組んだプログラム。吹雪の過負荷はこれがインストールされたせいよ。どうやらAMSに反応するみたいでね、倉井元帥はパイロットデータを削除してたけどこれに気づく事はなかった。おかげで統轄機構の情報も知ることができたわ」

「……おい、マギー。そのプログラム、大丈夫なのか？」

「深海棲艦が作ったもの」と聞いて提督は顔のシワを寄せる。そんな訳のわからないものが愛娘に流れ込んでいたのだ。”父親”としては心配で堪らないのだろう。

「直接人格に影響を与えたりするものではないわ。あくまでこれは『ACの戦闘記録の集積情報』、艦娘の『前世』と同じ様なものよ。ただ情報量が莫大だったから負担がかかっただけ」

「……そうか、ならいい」

吹雪が大丈夫なことが分かった筈なのに提督の顔はどこか浮かないままだ。そしてその表情のまま私に質問を投げ掛けた。

「……なあ、マギー。そのプログラムがあれば誰でも乗れるのか？」

「……………吹雪を乗せたくないの？」

——無言だった。

きつと葛藤があるのだろう。提督としての自分と父親としての自分の……。実は、吹雪は今回の件で艦体を喪失している。帰投するために龍驤に衝突していた吹雪の艦を天龍と龍田で泣く泣く雷撃処分したとの報告があった。だから吹雪にとって今がターニングポイントなのだ。退役し普通の女の子となるか、AC乗りに転属し戦場を駆けるかの……。そして決定権を持つ提督の中では、どちらにするかの天秤が今はまだ釣り

合っている。

(私に重りを置き、ということか……)

提督はきつと、”提督”としてどうするべきか分かっている。ただ踏ん切りがつかないから私に”傾けて”欲しいのだろう。だから私は彼の望む回答をした。

「……さっきの質問の回答だけど、他の艦娘でも可能よ。吹雪のパイロットデータを削除して同じ手順を踏めばいい、でも……あのACに吹雪以外を乗せるのは私が許さない」

「なぜだ、マギー？」

「吹雪に流れ込んだプログラムは所詮マニユアルの様なもの。それを”読んだだけ”でUNACを撃破するなんて、普通できるものじゃない。自分で気づいてるか知らないけど……彼女、『一種の天才』ってやつよ」

これは世辞でもなく本当の事だ。私の『前世』の時には何年もACに乗っているにも関わらずUNAC以下の雑魚なんかゴロゴロいた。それどころか五対一の状況を覆すとなると熟練者でも厳しい。それを初めて乗ったACで実現した吹雪は、はつきり言うて異常だ。いくら戦闘オペレーションが流れ込んだからといって誰でもできる芸当ではない。

「私が会ったことのあるAC乗りで、その手の『例外』だったのは一人しかいない」

「一人……」

「あのACの前のパイロット、『黒い鳥』と呼ばれた傭兵……そいつだけ」

「……まるで吹雪が乗るのは『運命』だと言いたいみたいだな？ お前がそんなロマンチストだとは知らなかったぜ」

「勝手なことと言わないでくれる？ それに『運命』なんかじゃない、これは『必然』よ。彼女の素養と意思が手繰り寄せた『必然』……」

「そうだ。確かにACがそこにあつたのは偶然だったのかもしれない。それでもACに乗つたのは吹雪の意思によるものだ。彼女は自分で『戦う選択』をしたのだ。」

「戦場に焦がれ続けた者として、同じ様に『戦う選択』をした者として、私は吹雪の選択を尊重してあげたかった。」

「それは私よりも一番付き合ひの長い貴方の方が理解してるんじゃない？……とにかくあのACに吹雪以外を乗せるのはあり得ない。それが個人として、秘書艦補佐としての私の意見よ」

「……」

再び執務室に沈黙が訪れる。しかし、それはドアをノックする音により破られた。秘書艦である加賀が入室してくる。

「失礼します。提督、吹雪が目を覚ましたわ。あと明石から追加報告が。検査と休養を

取らせるため二日入院させるそうよ」

「……そうか、了解した」

そこまで伝えると加賀は自分の机に座りテキパキと仕事の準備を始める。なので私も私の仕事の始める事にした。必要な書類を片手に執務室のドアへと向かう。

「じゃあ提督、私はあのＡＣの整備に移るわ」

「最終的に決めるのは吹雪だぞ」

「じゃあやつぱり必要でしょ？……ああ、あと……」父親の「今の貴方」も嫌いじゃないけど、

『そのＣＤ』を扱うときは”提督”に戻ってからにして」

そう忠告を残し、私は執務室を後にした。

◇ ◇ ◇

マギーが執務室を出てから暫くして……。加賀は書類を整理する手を止め俺に尋ねてきた。

「……提督。吹雪の件、どうなさるおつもりで？」

「どうもこうも、さつき言った通りだ。あいつの答えが最優先さ。例えそれがどんな答えでもな……」

その回答に満足したのかしてないのか、加賀は「そう」とだけ返事をすると、先程まで手に持っていた書類を俺の前に差し出した。

「では『これ』の追加申請を出しておきますね」

それは『艦娘の制服』に関する書類だ。

「……おまえもそつち側の考えか？」

「あの子の気持ちを考えればそうかと……。きっと喜びますよ」

「そうか……そう……だな」

俺はその書類に了承の印を押した。

◇ ◇ ◇

「うーん、やつと退院だ」

ベットの上で私は上半身を伸ばす。思っていた以上に私の体は疲弊していたようで、入院前と今では明らかに調子が違うのが分かる。その疲労が取れた今、元気が有り余って仕方ない。

「……早く乗りたいな」

時間が経てば経つほど『あの時の感覚』を忘れてしまわないか不安になる。

(本当に私があれば動かせてたんだ……)

本当は夢なんじゃないか？ そんな考えが頭を過り、それを振り払うようにACのコックピットの感覚を思い出す。操縦桿の形、フットペダルの固さ、ブーストを吹かした時にかかる衝撃……。

(うん、そうだ……夢なんかじゃない)

一つ一つの感覚を丁寧に確認し、全て現実のことだと再確認する。

「吹雪、起きてるか？」

「わひゃッ!!」

急に声を掛けられつい変な声が出てしまった。どうやら夢中になり過ぎて人が近づいていることに気づかなかつたらしい。声ができる方を見ると、ベットを囲うカーテン越しに見慣れた人影が立っていた。

「あ、はいッ、大丈夫です！司令官」

「おう、邪魔するぜ」

「どっこいしょ」と言いながら司令官は近くにあったパイプ椅子へ腰を掛けた。同時に持っていた紙袋を横に置く。何が入っているのだろうか……？」

「今日退院予定だが、体調はどうだ？」

「…あ、はいッ！ゆつくり休ませてもらいましたから、もうバツチリです！」

「そうか、そいつは良かった。……そういえば、お前とこうやって話をするのなんざ久々だな」

「え？あー、確かに……」

確かに司令官とこうやって話すのは久々だ。別に普段会話が無い訳じゃない。何か

の報告ついでに雑談したり、食堂で見かけた時は相席して一緒に食事を取ったりもする。でも何かのついででなく、こうして面と向かって話すのは本当に久々だ。

いつからこうなつたんだっけ……。

「私が天龍さんたちと遠征によく出るようになって、加賀さんが秘書艦を引き受けてくださるようになって……こうして司令官と二人きりでお話しするのはなんて一年ぶりぐらいじゃないですか？」

前の鎮守府の時は私が秘書艦をやっていたので、二人きりになつたりすることは特に珍しい事ではなかった。よく二人して書類とにらめっこをしていたものだ。

だから今の鎮守府になって司令官と少々距離が空いてしまったことに、ちよつぴり寂しさを感じているところもある。なので今の状況に少しばかり嬉しさを感じてしまうのは仕方ないことだと思う。

だけどそんな私とは反対に司令官は浮かない顔をしていた。この人がこんな顔をするときには、決まって大切な話をするときだ。

「二年か……。ここを再建してからもうそんなに経つのか。前の鎮守府の時からそうだが……。お前にや苦労をかけっぱなしだったな」

「どちらかと言えば私が苦労をかけさせてしまっていたような……。その……『粗製』でしたし……」

「そんなことないさ。お前たちが正式配備されて、右も左もわからねーまま深海棲艦と戦争を始めて……それでもやってこれたのはお前が側で頑張ってくれてたからだ。本当に……頑張り過ぎなぐらいさ、だから……ここで下がったって誰も文句は言わねえよ……」

「司令官……」

どうやらそういう話らしい。確かに私は艦を失っている。それはお見舞いに来てくれた天龍さんと龍田さんから聞いていた。司令官は笑顔を作り、無理して明るく振舞い始めた。

「なくに、退役後のことは気にしなくていい。今はどこもかしこも人手不足だからな、なにでもなれるぞ、はっはっは」

「……司令官……」

「なんだったら俺の息子を紹介してやろうか!?士官学校に通っていてな、今はまだ鼻垂れのクソガキだが当時の俺よか優秀だぞ。自分で言うのもなんだが、将来有望の優良物件だ」

「司令官……」

「お嫁さんなんか女の子の夢だろう。お前が実の娘になるのも悪くな……」

「司令官!!」

私は話を遮った。司令官は本当に私のことを大切にしてくれている。それは良く分かっていて。今の話も私を思ってくれてのことだ。正直それもありがたかな、なんて思ってしまうほど魅力的な話だったし……。

でも、それでも、私の答えはもう決まっている。「好きなように生きろ」とアレに言われたときから……。

「私はACに乗りたいです」

司令官は先程までの作り笑いをやめ、どこか物悲しそうな顔を浮かべた。

「……やはりか。俺は、本当は……最初から知ってたよ。お前の中にある、その想いをさ、吹雪。俺はずっと、戦いの中で生きてきた。お前みたいな奴が……赤城たちや同期のアホどもが……死んでいくのを見ながらさ。だから吹雪、お前だけでも解放してやりたかった。でもそれは、やはり俺の思い上がりだったんだな……」

「……司令官はお優しいですね、いつも。そんな司令官が、私は大好きです。加賀さんのことも、叢雲や綾波ちゃん、夕立ちちゃんのこと……天龍さんや、龍田さん、マギーさんや瑞鶴さん、金剛型の皆さん、妙高型の方々も……。前の鎮守府の人達と同じぐらい今の鎮守府の皆さんが、私は大好きです。ここが、”私の魂の場所”なんですよ、司令官。だから……だから皆を守りたいんです、今度こそ……」

「……それがお前の答えか、吹雪」

司令官は横に置いていた紙袋を手に取り、私に差し出した。

「結局これは無駄にならんかったか、ははっ……。これに着替えて工廠まで行ってこい。俺はこれから赤羽のアホウと『面倒事』の処理があるんで一緒には行けんが……。お前が『この道』を選んだ場合の指示はしてある。マギーの奴がほくそ笑んでたからな、気を付けろよ、はっはっはっはっは……」

司令官は笑いながらも、少し寂しげな背中を見せ病室を去っていった。

（私のワガママを聞いてくれて、ありがとうございます……。お父さん）

私は感謝しながら、早速プレゼントの紙袋を開ける。

（着替えろってことは、多分制服かな？）

先の戦闘時にゴロゴロと転がり回ったため、前の制服はボロボロに破れてしまっていた。だからきつと、その予備の制服が入っているのだろうと思ひ中身を出す。

（これは……）

確かに予測通り、それは制服だった。しかしいつものと違いスカートと襟の色が黒く、入っているラインも白ではなく赤だ。一見綾波ちゃんのと同じ物だが、胸のリボンが青色になっている。紛れもない、それは『吹雪改二』の制服だった。『粗製』の自分には一生縁の無い物だと思っていた物が目の前にあった。私は急いでそれを身に纏い、窓ガラスを鏡代わりにする。

「うわあ」

叢雲と綾波ちゃんの新しい制服を見たとき、正直置いてきぼりをくらったような気分だった。でも、これで二人と同じだ。変に気を使われることも無く、あの二人と並び立てることが出来る。それが嬉しくてついその場で一回転してしまう。そして後ろにあつた時計が目に入り、それなりの時間が経っていることに気がついた。

「あッ、こんなことしてる場合じゃない！工場に行かないと!!」

新しい制服の喜びも束の間、今度はマギーさんを待たせている事への焦りが出てくる。あの人は普段からちよつと怖めなのに、それが怒った時のことなど考えたくない。私は早足で工場へと向かった。

◇ ◇ ◇

「遅い！待ちくたびれたしやない」

工場の前にまで着くと、突如として声を掛けられた。その声の主はマギーさんではなく、なぜか叢雲だった。その隣で綾波ちゃんがヒラヒラと手を振っている。

「あれ、二人ともどうしたの？」

「吹雪ちゃんに見せたい物があつて、ここで待っていたんですよ」

「なのにアンタ全然来ないんだから……。この私を待たせるなんていい度胸してるわね」

「叢雲ちゃん、早く吹雪ちゃんに見せたくてずっとソワソワしてましたもんね」

「な!? そ、そんなことないわよ!?! いいから! 早く中に来なさい!!」

遅れたことを謝罪する暇もなく二人は会話劇を繰り広げ、そして私を工廠の奥へと引っ張っていった。

工廠の奥にまで来るとマギーさんの『ブルーマグノリア』と、そしてその横に『あのAC』の姿がある。——だがその姿は私の記憶とは違っていた。

まるで燻製でもされたようにくすんだ機体色だったはずの『あのAC』は、白をメインカラーに綺麗に塗り直されていた。一部の黒く塗られている部分には私の新しい制服と同じ様に赤いラインが入っており……というか、機体の首元なんかは制服のデザインまんまだ。襟を再現したように赤いラインの入った黒い逆三角形の外側に、私のリボンと同じ色の青いラインが入っている。左胸の胸部分装には錨のマークが刻まれていた。

「どうですか? 吹雪ちゃん。吹雪ちゃんの制服をモチーフに私たちがデザインしたんですよ」

「ビーよ! なかなかのもんでしょ! 我ながら良くできたと思うわ! これがあんたの新しい力、『吹雪式』よ!」

「『吹雪式』……」

確かに胸部装甲に白文字で『式式』と書かれている。

「ちなみに命名は天龍さんです。『二』じゃなくて『式』なのは、そっちの方がカッコイイからって。龍田さんと、あと第六駆の子達を連れて塗装まで手伝ってくれたんですよ。遠征部隊卒業祝い……だそうです」

綾波ちゃんからその事実を聞いて、感謝で胸が熱くなる。

「何か感想はないの？それとも良すぎて声も出ないかしら!？」

叢雲の言う通りだった。純粹に格好いいカラーリングというのもあるが、何よりも『仲間が私のためにしてくれたデザイン』が嬉しかった。私にとってこれ以上のものは無い。感動で胸が一杯になり、声が出せなかったのだ。それでも何か言わないと失礼だなどと思い、なんとか言葉をひねり出す。

「……ありがとう、二人とも。私、頑張るよ、この『吹雪式』で……」

すごく少ない言葉だが、精一杯の感謝を込めたつもりだ。二人もそれを感じ取ってくれたのかニッコリと微笑み返してくれた。

「じゃあ、早速張り切ってもらうわよ」

突如として上方から声が降りかかる。声のした方へ顔を向けると、『ブルーマグノリ

ア』のコックピットからマギーさんが顔を出していた。

「シユミレーターの準備はできてるわ。提督に、あなたが”こつち”に来た場合は私が師事をするよう頼まれてる。さあ、早く準備して。……あなたの力を見せて頂戴」

マギーさんは期待を込めた眼差しと共に、UNACとは比べもにならないほどの圧力を私にぶつけてきている。なぜだか分からないがそれに懐かしさのようなものを感じ、同時に気分が高揚してくる。

「はい…すぐ行きます!!」

私は『吹雪式』へと駆け出した。

コックピット昇降用のワイヤーに掴り昇っている途中、エンブレムが目に入る。ACの左肩に雪の結晶を背負った三本脚の鴉が描かれていた。三本脚の鴉……『八咫鳥』はこの国では太陽の化身とされているため、雪を背負っているのはなんだかおかしい気がするが……。しかし『艦娘』でもあり、そして『レイヴン』でもある自分を表しているいいエンブレムだと思った。そうだ、もはやこのACは私の分身なのだ。

コックピットまでたどり着くと、すぐさま中に入りメインシステムを起動する。するとシユミレーターモードのため周囲とは違う空間が映し出された。いくつもの塔が立ち並んだ、荒廃した建物……その中央に『ブルーマグノリア』が鎮座している。まるで「ここは私の縄張りだ」とでも言っているかのよう。

ならば同じ”鴉”としてやることは一つだ。

《『吹雪式』、行きます！》

仮想空間ではあるが、私は全力で『ブルーマグノリア』へ襲い掛かった。

第二十三話 「EXTRA MISSION」 死神艦隊撃破—01—

—鎮守府近海

シーレーン維持のための巡回任務に重巡『那智』率いる艦隊が繰り出していった。彼女にとつてはいつもと変わらぬ慣れた任務……しかしだからといって気を抜くわけにはいかない。「シーレーンは維持することが大変であり大切なことである」と、那智はいつも部下の艦隊に言い聞かせているし、彼女自身もそう理解している。だからガダルカナル島をはじめ戦線を押し返し、最近では深海棲艦に会いわなくなった近海の巡回においても決して厳しい態度を崩したりはしない。それどころか今回においては何時にも増して力を入れていた。

なぜそのようなことになっているかというところ、遡ること数刻前——。

「おい貴様、何だこの編成は!?!」

私は提督から渡された編成表を机に叩き返していた。当たり前も当たり前だ。私が今回与えられている任務は『近海の巡回警備』であるというのに、その編成が馬鹿げて

いるからだ。

私、重巡『那智』を旗艦に、駆逐『綾波』、軽空母『龍驤』……まではまあいいとして。しかし残りが雷巡『北上』、そして極めつけに戦艦『比叡』『霧島』とはどういうことだ?!しかも全員が最前線を任されるウチの精鋭達だぞ……。挙句、さきほどはまあいいと思っただがこの『龍驤』もおかしい。詳しくは知らないが、奇跡的にコアが無事だったとかなんとか……改修した自立型のAC「UNAC」を一体搭載しているとかいう話だ。

噂や報告書でしかその性能は知らないが、ACというものが驚異的な力を持っていることは理解しているつもりだ。マギーからも酒を交えながら戦果を聞くこともあるが、毎度毎度驚嘆させられている。なので『ブルーマグノリアを搭載した加賀』ほどではないにしろ、この龍驤がそこらの軽空母とは一線を画した力を持っていることは想像に容易い。

だから、だからこそだ。誰がどう見たって近海巡回任務のメンバーではない。一体何と殴り合いに行くつもりだ?

「まあ落ち着け、那智。これにはちゃんと理由がある、聞いてはくれないか?」

提督は私の態度を想定済みだったのか全く動じている様子はなかった。落ち着いた態度で淡々と、しかし少々の苦々しさを含んだ口調で説明を始める。

「……実は他の鎮守府の艦隊がこの近海で消息を絶つていてな。二週間ほど前に一艦隊、後日その搜索に当たっていたもう一艦隊が相次いで消えた。そしてつい先日、そことは別の鎮守府の艦隊が消えたんだ……。一応そいつら含め全員まだ行方不明扱いらしいが……。正直絶望的だろうな。そして、何かキナ臭いものが潜んでるのは間違いない」

「ここまで入り込まれるとなると……。潜水艦、しかもヨ級の flag shipか、まさかソ級か？」

この国の本土周辺は鎮守府間で連携して警備網を張っている。なので深海棲艦が接近してくればほとんどの場合どこかの網に引っかかり、手厚い防衛で撃退されることとなっているが……。それでもたまに深海棲艦の潜水艦がそれを抜けてくることもあるにはある。なので件の『キナ臭いもの』は強力な潜水艦だと私は思っていた。しかしその予想はあっさりとは否定される。

「……最初にやられた二艦隊は対潜哨戒任務に当たっていた艦隊だ。潜水艦の線は薄いな」

「なんだと?」

対潜哨戒任務は防衛網の穴を埋めるために、その名の通り対潜水に特化した兵装で入り込んできた深海魚共を狩り尽くす任務だ。いかに強力な潜水艦といえど、この部隊と

鉢合わせして無事どころか全滅させるなど不可能と云つていい。つまり、これは潜水艦の仕業ではないということになる。

……では敵は一体なんなんだ？

「その……、やられた艦隊の奴等から何か情報は送られてきてなかったのか？ 長距離通信の範囲内だろうに」

「それが突如として通信が繋がらなくなつたらしい。通信する暇もなくやられたか、あるいは……」

「通信を妨害するものを持つてるか、ということか……？」

もしそれが電探まで欺けるものであつたら最悪だ。海上の防衛網は電探による広範囲索敵と、艦隊間の連携によつて成り立っている。それを利かなく出来るといふのであれば潜水艦でなくとも本土にまで容易く侵攻することができだろう。それは未だに近海付近に潜んでいる『キナ臭いもの』が証明してしまっている。

もし敵が航空戦力を有しており本土が爆撃でもされたら……想像したくもない。……と、ここで私にある疑問が浮かんだ。

「ちよつとまで、その未確認敵勢力の目的はなんだ？」

そうだ、その『キナ臭いもの』は本土近くの近海にいるのだ。やろうとすれば本土を襲撃できる位置に奴等はいる。にも関わらず現状の被害は三艦隊だけ。いや、これも十

分なほどの痛手だが……三艦隊を全滅させるほどの力を持つものにしてはやることが半端だ。これが偵察のつもりなら逆にやるのが派手すぎる。

(本当に深海棲艦か?)

深海棲艦にも目的のようなものはある。といつてもこちらの予想でしかないが、それでも進路や編成で何処を攻めようとしているか、何処を守っているかなどは読み取ることはできる。稚拙な部分が多い(それ故に何とか反撃の糸口を掴めるのだが)にしろ、その行動には何らかしらの意図があるのだ。だが、今回はそれが全く分からない。

「那智、俺にも潜んでる奴等の目的は分からんよ。そいつらがどんな奴等かも……。ただ、危険極まりないのだけは確かだ。確実に仕留める必要がある」

「なるほど、それでこの編成というわけか」

「本当は加賀とマギーもつけてやりたかったが……」

「いやなに、かまわん。敵の本土、あるいは鎮守府への襲撃が可能性として存在している以上、二人をうかつに動かすわけにもいかんだろう。もし上陸戦力でもいたら対応できるのは戦闘機とACだけだからな。……しかし、私が旗艦でいいのか?」

「ああ、無論だ。ここいらの海域を一番知っているのはウチじやお前達妙高型だからな。なにより俺はお前らを信用している」

「ものは言いようだな。そう言っついても仕事をまる投げするくせに……だが、悪くな

い。よし、では貴様の期待に答えてやろう。この那智艦隊でキナ臭い奴等に灸をすえてやるー！」

こうして私達は鎮守府近海を通常ではありえない戦力で巡回することとなった。そして現在、被害にあった艦隊の通信の途絶えた場所から敵の潜んでいそうな場所をいくつか予測しつつぶしている最中である。

「もうすぐ四つ目の予想海域だ、全員気を引き締めろ」

「了解」

艦隊の仲間と通信を繋いのまま、鎮守府との長距離通信も繋ぐ。目標が近づけば恐らくなにか影響がでるはずだ。注意深く予想海域へと近づいてく。

「こちら龍驤、偵察機が正体不明の艦影を見つけたで!!数は…四つ、艦…は…:…く…や
d」

龍驤の報告と同時に通信にノイズが走る。いつの間にか鎮守府との通信も繋がらなくなっていた。

——”当たり”だ。

私は通信回線を通常回線から偵察機の映像などをやり取りするAMS回線へと切り替える。多少負担が増すが何らかの妨害を受けているこの状況下で仲間とやり取りを

するにはコレしかない。

「各員、回線の切り替えは済んだな!? 目標発見だ、戦闘準備!! 龍驤、敵艦種の特定を頼む」
「おっしや、えーと……」

「その必要はありませんよ」

突如としてAMS通信に艦隊の者以外の通信が割り込まれる。発信源をたどるとそれは目標から発せられているものだった。

「あなた方が今回の”演習相手”ですね。私はこの『死神艦隊』の旗艦を務める空母棲鬼『加』と申します。短い間になると思いますが、お見知りおきを……」

——こいつはなにを言っているんだ？

空母棲鬼は確かに確認されている深海棲艦だ。だが空母棲鬼に限らず、深海棲艦はこんな流暢に喋ったりはしない。時たま恨み言のようなことを口走るなんて話を聞いたこともあるが、それは壊れたテープレコーダーの様に同じようなことを繰り返すだけとしか聞いていない。本当に深海棲艦なのか怪しき満点であり、龍驤に確認をせかす。

すると龍驤から困惑気味に回答が返ってきた。

「……こいつの言つとること、ホンマやで那智。確かにこいつらデータベースと一致す

る……全員深海棲艦や……」

「なんだと!？」

「だから『加』さんが言ってるでしょー。あ、私は軽巡棲鬼の『那』ちゃんです! ヨロシクね!」

「これ『那』、相手に失礼ですよ。ああ、申し遅れました、私は軽巡棲姫『神』と申します」

「あ、えと……駆逐棲姫『春』といいます、はい」

頭が痛くなる。意思疎通が可能な深海棲艦だど? 今まで色々な種類の深海棲艦と渡り合ってきたがこんなのは初めてだ。見たことも聞いたことも無い。しかもあつちの『加』とかいうやつが”演習”だとぬかしていたが、本当にノリが演習前のそれじゃないか。こんなやつらが探していた目標なのか?

頭がこんがらがり必然的に沈黙を続けてしまうと、相手の旗艦から再び通信が入る。

「こちらが名乗ったのに黙ったままとはいただけませんね」

「……失礼、こちら白鳥鎮守府第二艦隊旗艦、那智だ。いくつか質問してもいいか?」

「ええ、どうぞ」

「一つ、貴様ら何者だ? 二つ、この近海で三つの艦隊を沈めたのは貴様らか? 三つ、貴様らの目的はなんだ!」

「そうですね、では順番に。一つ、私達は見たとおりの存在です。二つ、確かに近海で三艦隊お相手しました。三つ、最初に申し上げた通り”演習”ですよ。……もういいですか？もうそろそろ、その説明をさせていたただきたいのですが？」

「ちよつと待て、説明になっていない。大体、なにを成すための”演習”だ？」

「？戦うための”演習”ですが、なにか？」

「……」

——ダメだ、話がかみ合わない。先程意思疎通可能だと思つたが、それは撤回する必要があるな。こいつの回答からは「戦うために戦っています」とでも言わんばかりの意思が読み取れる。そんなのは狂人の、”イカレ”の思考だ。

……いや、そうだ。こいつら人ではなく深海棲艦だつた。元よりこちらが理解できる存在ではないのだ。

こちらが呆れているのを構いなしに『加』は話を続けた。

「もう良いですね。では演習の説明をさせていただきます。内容はごく単純。貴方達は私達『死神艦隊』と戦っていただくだけです。ただし戦闘は実弾を使用、なのでこちらが負ければ最悪死にますのでそのつもりで。どちらかの艦隊が全滅したらそこで終了、以上です。……貴方達はいままで戦つた”雑魚”とは違うようですので気分が高揚しています。是非私達の良い糧となつてください」

「……今、雑魚といったのか、屠ってきた奴等のことを……」

「ええ、大した経験にもなりませんでした」

——ふざけるな。

私は理解できない存在だから、相容れない存在だからといって「しかたない」で済ませられるほど大人ではない。確かに奴等にやられた艦隊の者達と面識があつたわけじゃない。しかし、それでも同じ国を守る誇り高き同胞達だ。それを貴様らの自分勝手な闘争に巻き込んだ挙句、コケにするとはい語道断だ！ 奴等のあまりにも自分勝手な発言に私の腸はマグマの様に煮えくり返っていた。

「……いいだろう、その演習とやらを受けてやる。貴様ら、生きてこの海域を出られると思ふなよ!!」

私は宣戦布告をし、「演習」の火蓋を切った。奴等を撃滅するための指示を仲間に出す。

「龍驤は航空部隊を発艦、奴等を爆撃しろ。ただしACは艦隊の近くで待機、防衛に回せ」

「ほう、UNACちゃんもあつちに行かせなくていいんやな？ その心は？」

「貴様の錬度は信用しているが、相手は空母棲鬼だ。まともによつても制空権は取れない。だから戦闘機は爆撃機の護衛に集中、敵爆撃機は無視してかまわん。敵の爆撃はこ

ちらの対空砲火とACで全て叩き落とす！」

「なるほど、たしかにACのFCS性能なら艦載機なんて七面鳥撃ちと一緒に。でも、そうするとスキャンつかったスポット砲撃ができなくなるで」

「あまり我々を舐めてもらっては困るな。そんなもの無くても当てて見せるさ」

そうだ、私を含め戦艦『比叡』『霧島』も数々の戦を渡ってきた高錬度艦だ。自身に蓄積された『前世』とは違う”本物の経験”による砲撃精度はもはや大人数で運用していた”オリジナルの軍艦”とは比べ物にならない。私達なら制空権を取られていようが砲撃を当てられる自信があった。

……それに奴等は何か隠し球を持っているような気がする。それが来た時の艦隊の防衛をACにさせたいという気持ちも少々あった。弱気なように聞こえるのであえて発言はしないが……。私は続けて指示を出す。

「北上は急いで甲標的を発艦！」

「そんなの那智さんが相手と喋ってる間にもうやってるよー。あんなクズ鉄に律儀に合わせる必要なんて無いじゃん」

「流石だな……。綾波は各砲撃の援護をしつつ、雷撃戦に備えろ。やつらが近づいてきたらそのまま食いちぎれ!!」

「はいー！」

北上も綾波も普段の態度からは想像できないほど殺る気に満ちている。良くも悪くもマイペースな彼女達だが、それが今回はいいほうに向いているようだ。

「那智さん、こちらも砲撃準備は万端です！私の計算によれば我々の勝利は固いでしょう！」

「ええ！比叡も！気合は！！十分です！！」

「よしッ！これより戦闘を開始する！さあ、那智の戦、敵に見せ付けてやるぞ！！」

全員の士気が高い、いい流れだ。このまま奴等をこの海底に沈めてやる！！
 確固たる殺意を持って、私は戦闘を開始した。

◇ ◇ ◇

「プランD、所謂ピンチね」

——空母棲鬼『加』は冷静に状況判断をしていた。

私の艦載機を掻い潜り的確な爆撃、それに気を取られている間に間髪いれず甲標的による雷撃。それにより『春』と『那』が小破、私と『神』もそれなりのダメージを負ってしまふ。いかに性能の高い深海棲艦の艦でも砲塔がつぶれてしまったりすれば攻撃力が落ちるのは当然だ。しかも私の艦載機による爆撃は敵艦隊のACと共同の対空砲撃により完封されている。

その上で重巡と戦艦二隻からの砲撃戦を余儀なくされ、状況はジリ貧状態。しかも相手の砲撃精度が今まで相手にしていた艦隊とは比べ物にならないほど高い。なるほどこれが最前線の一級戦力か……。

「なるほどじゃないよ、もー。見てよこれ、艦橋かおはやめてって言うてるのに容赦ないんだよ!!」

『那』が騒ぎ立てるのでそちらへカメラを向けると、艦橋に敵の砲弾が突き刺さり煙があがっていた。私達が艦娘と同じ”生身であつたら”即死していただろう。

「ふむ、状況はあまり芳しくないわね。『神』、あなたはこの状況をどう切り抜けようと思う？」

「この距離では不利ですので……多少無理してでも接近し、雷撃戦に持ち込むべきかと……ですが……」

『那』が『神』との会話に割って入り、彼女の言わんとしていることを奪う。

「それは敵さんも予想してるんじゃないかなー。あつちの駆逐艦、すごい殺気だつてるし……なによりUNACだつているんだよ。それはそれで『那』は自殺行為だと思うなー」

——まあ、その通りだろう。

この状況に陥ってしまう砲撃戦の火力不足は今後の課題だ。『あの方』に戦艦かそれ

に代わるものを用意してもらおう必要があるだろう。しかし、さて……それで今後はいいとして、今をどう切り抜けたものか。そう思案していると『春』より一つの提案がある。

「あの、もう艦隊戦の経験は十分にさせていただきましたし……、あちらもUNACとはいえACを使用しているのですから、もう“お二人”を出撃させてもよいと思います、はい」

「……それもそうね」

たしかにその通りかもしれない。戦場で果てることになんら恐怖はないが、今後の課題も見つかったのだ。もう少しこの危機的状況を楽しんでいた気持ちもあるが、それで沈んでしまうのは面白くない。私は簡単に決着がついて経験にならないため眠らせていた“二人”を起こすことにした。

『M』『V』出番です、出撃してください」

二人のメインシステムを起動したとたん、『V』より大音量の通信が入る。

「ハッハアツ!! やつと俺達の出番かあつ!! ほう! 今回の相手は中々骨がありそーじゃねーか!!」こいつは望外だぜ!! エエエエエム!

「すこしは音量を落とせ『V』。……それで『加』、俺達は奴等を落とせばいいのか?」

「ええ、いつも通りお願いします」

「了解した。いくぞ『V』、いつも通りお前が前衛で、私が後衛だ、いいな」
 「はあッ！俺は前でぶっ放す、それしか出来ねーよ!!ハッハア!!」

艦内の操作を行い、私は軽口を言い合っている二人を甲板のエレベーターへと運び込む。そして深海棲艦の異形の甲板から二人は姿を現した。『あの方』……『財団』より運用を任された私達『死神艦隊』の前身……。そして私の最強の艦載機、重量二脚型AC『M』、タンク型AC『V』。

「死神部隊」、発艦してください」

「おっしやッー！いくぜエエエ!!」

『V』は反撃の狼煙とばかりに両腕のオートキャノンを上空へ撒き散らした。それにより艦隊の周りを取り囲んでいた敵軽空母の艦載機が全て粉みじんになる。

「相変わらずすごいですね」

「全くだ、『V』といるといつも騒音にはことかかん。では『加』、いつてくる」

『M』は『V』と対照的に静かにブーストを吹かし、『V』の後ろを追従していった。あの二人が出撃した以上、最早私達にすることはない。

「……はあ、あつけないものですね。貴方たちは、本当に強かった。多くのものを学ばせていただきました、ですから……。せめて楽に死ねるよう、祈ってあげますよ」

『加』は祈る手も、信じる神も無いながら、勝利を確信し那智艦隊の冥福を祈った。

第二十四話 「EXTRA MISSION」死神艦隊撃破—02」

「なんや、あれ……」

最初に異変に気づいたのは龍驤だった。彼女の爆撃機が空母棲鬼『加』の甲板から何かが出てくるのを捉えていたからだ。

爆撃機に供えられている光学カメラのズームを最大限にする。甲板から出てきた何かは艦載機ほどのサイズだが特異な形状をしていた。

数は二つで、一つは戦車を履いたような足に体と同じ程の大きさの巨大な砲を両腕に構えている。もう一つは太い二脚の人型で長いライフルを両腕に持っていた。そして両方とも敵艦隊と同じ黒と赤の機体色をしている。

龍驤は自身がUNACを操る身であるため、瞬時にその二体がどのような存在であるかを理解した。

「AC!？」

それは紛れもなく、戦艦に匹敵する火力と装甲を持ちながら駆逐艦を易々と越える機動力を持ち合わせる化物艦載機、アーマードコアだった。

そしてタンク型ACが両腕を空に向け「ハッハー!!」と叫ぶと同時にその場で火花のような弾幕が放たれ、それを捉えたのを最後に全ての艦載機とのリンクが途切れてしまう。

「嘘やろっ?!航空部隊が全滅やて?!」

タンク型ACの圧倒的な弾幕に龍驤は絶句する。だが呆けてばかりもいられない。

急ぎ第二航空部隊の発艦準備を行いつつ、旗艦である那智へ脅威が近づいていることを連絡した。

「那智ーいま空母棲鬼からACが二機発艦しおった!!」

「なにッ!?!」

那智は相手がか隠し球を持っているだろうことは予想がついていた。何せ三艦隊も全滅させた連中だ、これで終わるはずがない、と。しかしそれでもACが出てくるのは全くの想定外だった。

那智はまともにACが戦っているところを見たことがない。聞いた話でしかACを知らないのだ。

(まづいな……)

なので適切な対処がすぐさま思い浮かばない。そこで彼女は今この場で一番ACに詳しい龍驤に意見を仰ぐという対処を取った。

「龍驤、敵A Cの特徴と対処について貴様の意見を聞きたい」

「ええで。敵A Cはキャタピラ脚と重量二脚の二体。武装はよくわからなかったけど、少なくともキャタピラ脚の方は一瞬で航空部隊を消せる火力を持つとる……。近づかれた場合は想像したくないな。ただ二機とも重鈍そうなナリやったで。A Cの中じゃ比較的鈍足やと思う。せやから近づかれる前に全艦の波状攻撃で仕留める！多分これしかないで」

龍驤の回答に那智は一瞬、「深海棲艦どもを放つてでもか!？」と言ってしまったけれど、それをぐつと飲み込む。

何故ならマギーと共闘経験のある仲間達が誰一人として反論を上げていないのだ。

戦艦『比叡』『霧島』ですら、自らの全砲門をたかだか10 mにも満たない存在へ向けることに躊躇いを感じさせていない。

(敵に回すとそれほどの脅威ということか……)

那智は急ぎ想像していたA Cの戦力を上方修正し、艦隊へと指示を出す。

「全艦、深海棲艦への砲撃を中断しA Cを狙え！決して近づけさせるな！龍驤のUNACは待機、深海棲艦からの爆撃に備えてくれ。各艦、分かっていると思うが的は小さいぞ、波状攻撃で仕留めろ!!」

「了解！」

各艦は一斉に砲頭を下げ、迫る脅威に的を絞る。

敵は、目視ではブースターからの発光により辛うじて存在が確認できるほど離れている位置にいた。

(……まだだ)

A Cの中では鈍足といえど、その速度は艦船を軽く上回っている。その上であの小ささだ。当てるにはもう少し寄せる必要がある……。

那智はA Cが有効射程に入るのを静かに見守っていた。近づけたくない相手を近づけることに矛盾を感じるが、今はまだ耐えなければならぬ。

……そして電探に写る反応が想定していたラインを越えた瞬間、溜めに溜めていたものを解き放つように那智は叫ぶ。

「各艦！撃てー！ツツ！！」

静寂を打ち破り、艦隊から止めどなく砲弾が放たれる。その様相はもはや移動要塞であり、圧倒的な物量でA Cを圧殺しようとしていた。

◇ ◇ ◇

「ハッ、ハハハッ、ハハハハハハッ!!おいつ、見ろよ『M』!あいつら最高だ!!本気で俺たちを殺すつもりだ!!」

水柱から降り注がれる海水の雨と敵の砲弾の雨の中を掻い潜りながら、俺はこの興奮

を相方へ伝えた。初めての戦に気分が最高にハイになって仕方ねえ。

一応この前にも出撃したが、ありや駄目だった。

『加』達にやられ、逃げ惑う奴等を沈めるだけの作業……そう、作業だった。

だが今はちげー！こいつらは俺たちを殺すために惜しげもなく全てをぶつけてきやる！その物量はまるで『アレ』みてーだ！『アレ』ってのがなんなのかイマイチ思い出せねーが、とにかく『アレ』だ。

圧倒的な物量で俺たちを殺そうとするやつらだ！

そいつらに突きつけられる「もしかしたら死ぬかも」ツツー刺激は、そいつらをぶつ壊した時のエクスタシーをよりハイなものにしてくれる！

だからさあ、もつとだ！もつと俺を殺しに来てくれ！

そんな俺の願いに答えてくれるように今度は航空部隊が爆弾を抱えて突撃してきた……が、その数が気に食わない。

「駄目だ、まだ足んねエ!!俺に当てたきや倍は連れてこい!!」

俺は発艦した時みたたくオートキャノンを撒き散らしそいつらを全てはたき落とす。

すると『M』から通信がはいった。

「おい『V』、油断が過ぎるぞ。本命は下だ」

俺のすぐ横を『M』のスナイパーライフルの弾丸がかすめ、海面に突き刺さる。する

と巨大な水柱が上がった。

「どういことだとリコンを飛ばし周囲の海面を見ると、俺たちがどこにいても当たるように水平線状に魚雷が広がっている。どうやら本命はこの魚雷みてーだ。」

「たしかに俺たちに魚雷を当てる場合は海面ギリギリまで浮上させる必要があるが、それを気づかせないために航空部隊を使うとはなかなか贅沢な使い方だ、嫌いじゃない。」

「現に『M』がいなかったらロケット弾一発分ぐらいの手傷は負ってただろうしな。」

「『V』、どうやら敵艦隊はACを知っているとみえる。対応の切り替えといい、先程の攻撃といい、AC戦を想定していなければできないだろう」

「『M』の奴は冷静に敵を分析してた。なるほど、確かに一理ある。」

「だがな『M』、俺は奴等がACを知り尽くしているとは思わねーな」

「『M』は俺に指摘されるのが気に食わないのか少々不機嫌そうに「ほう、と言うと？」と聞き返す。だから教えてやった。」

「奴等は俺の固さを知らねエ、俺のモノの熱さを知らねえ、だから教えてやるのさ!! もうお互いチマチマするのは止めだ! 正常位でやり合おうぜってな!!」

「そうだ、確かに奴等の殺気は中々だ。全力感も充分だ。だが戦法が他のACならともかくタンク型の俺にぶつけるものじゃない。本当に俺をぶつ殺そうっていうならもつと下品さがねえと駄目だ。」

「それは私の面倒も折り込み済みで言っているのか、『V』？」

「当然だろ『M』！お前がいるから俺は好き勝手や……おっと」

俺たちの会話に奴等の砲弾が割り込んでくる。敵の第二波が始まったようだ。

「ハッハー！これまた苛烈だな！いいぜ、今度は正面からかつ食らってやる!!あとは頼むぜ『M』！」

俺は『M』の返事を待たずに——どうせ何だかんだいつてやってくれるから——グライドブーストを吹かし敵艦隊に突っ込んでいく。

今度はチマチマ避けることは考えねえ！言った通り正面突破だ!!

◇ ◇ ◇

突如としてキヤタピラ脚のACが急加速してこちらに迫ってきた。しかしその動きは直線的で、当ててくれと言っているかのようだ。

「いいだろう、この那智の主砲の威力、存分に味会わせてやる!!」

キヤタピラ脚との相対速度や距離から弾道計算し、キヤタピラ脚の予想進路に重なるように砲弾を放つ。キヤタピラ脚は避ける素振りを見せずそのまま突っ込んできた。

(ドンピシャだ!!)

私の20.3cm連装砲から放たれた砲弾が敵に直撃する。

——だが、なんと奴はそんなものど吹く風とでも言わんばかりに全く動じずに進撃

を続けていた。

「そんな馬鹿な!？」

今度は綾波と北上の主砲の着弾を確認するがそれこそどこ吹く風である。

「距離、速度、よし!当てて見せます!」

霧島も続けて砲弾を発射し、計算通りの弾道で敵に主砲を直撃させた。しかしそれも、それでもだ。キャタピラ脚のACはそれでも怯むことなく突っ込んでくる。

「霧島の主砲を食らったんだぞ!?!ダメージが無いのかッ!？」

この艦隊どころか鎮守府でも最高クラスの火力を誇る戦艦『霧島』の砲撃、それに耐えうる装甲を前にし、何をやっても効かないのでは?というような錯覚に囚われそうになる。

(いいや、そんな筈はない!効いてないわけないんだ!)

私は必死に自分に言い聞かせ、艦隊に引き続き砲撃の指示を出した。

だが仲間もやはり動揺を隠せないのか、砲撃の精度や連携が崩れてきている。

(クソッ……無理もないか)

先程の動揺に合わせ、ACがもうすぐそこまで迫って来ていることへの焦りが感情をざわつかせる。それによる脳波の乱れは確実にAMSへに反映され、更に精度が悪化し敵の接近を許すという悪循環に陥っていた。

そしてそれは最悪の事態へと直結する。

——キヤタピラ脚のACが遂に艦隊の眼前にまで接近するのを許してしまったのだ。そしてキヤタピラ脚のACは自慢の弾幕を展開……することなく更に加速して突っ込んできた。

「まさかあいつ?！」

「ハッハー!!」

キヤタピラ脚はスピーカーから大音量の笑い声を発しながら私の艦を横切り、自身を弾丸に見立て戦艦『霧島』へと体当たりを慣行したのだ。

「きやあああああつ」

通信を通して霧島の悲鳴が響き渡る。

「霧島あー!」

彼女の艦へと視線を移すと、突撃して開けた大穴を駆け上がりながら弾幕を撒き散らし、彼女の甲板上に君臨しているACの姿があった。

「よくも霧島をオオツ!!」

それを見た比叡が激怒し、キヤタピラ脚のACに砲門を向ける。下手をすれば自分が妹の止めを差しかねないが、ACを艦船から引き剥がさなければこのままなぶり殺されるだけだ。自身の腕前も加味した上での英断だった。

しかしそれは下されることなく終わる。キヤタピラ脚に向けていた比叡の砲台に突如として銃撃が突き刺さり、砲身がひしゃげて使い物にならなくなってしまったのだ。

「全く、手間をかけさせる」

その銃撃はキヤタピラ脚のACの後方に控えていた重量二脚型ACからのものだった。両腕に長身のライフルを携えており、それから放たれたものだろう。

「ま、まだまだ！砲台の一つや二つ!!」

比叡は別の砲門をキヤタピラ脚へと向ける。だがそれに気を取られ銃撃と一緒に放たれていた『何か』に気づいていなかった。

私は少し離れたところにおいて全体を見れていたからこそ捉えることができた『何か』。魚雷のような形状の黒い弾頭は海中ではなく空を泳いで比叡に接近していた。

そしてそれが比叡に着弾した瞬間、戦艦の三分の一を覆う程の凄まじい爆発が生じ、比叡の艦体が煙に包まれた。

「比叡！応答しろ！比叡っ!!」

必死に通信で呼び掛けると、ノイズが凄まじく何を言っているかは聞き取れないものの辛うじて彼女の生存は確認できた。

しかし、煙が晴れて見えてきた戦艦『比叡』を見て背筋が凍る。攻撃が直撃した箇所到大穴が空き、爆炎により至るところに火災が生じていた。必死にスプリンクラーや自

動消火装置を起動させ火災を鎮火させようとしているみたいだが、もう戦闘は不可能だろう。

(クソツ！接近を許した途端これか、化け物共め!!)

奴等が艦隊にたどり着いてからまだ3分も経っていない。にも関わらず戦艦が二隻も大破に追い込まれた。それはこのあと自分達がどうなるかを想像させるには余りにも充分過ぎる光景だ。

それを覆そうとするように、龍驤の逆間接UNACが戦艦『霧島』の艦体を駆け上がりキヤタピラ脚のACへ強襲を仕掛ける。逆間接の特長らしい高い跳躍力でキヤタピラ脚のACの上を取り弾丸を浴びせようとしていた。

しかし、比叡の時と同じように重量二脚のACからの銃撃をくらいキヤタピラ脚のACの眼前に落下してしまう。

「ハンツ！やっぱりUNACごときじゃ話になんねーなア！」

戦艦『霧島』の甲板に落下したUNACは、まるで散弾を機関砲で放っているかのようなキヤタピラ脚ACのイカれた武装により瞬く間に蜂の巣にされてしまう。銃撃音が静まるころには、UNACはもうピクリとも動かなくなっていた。それは同時に対抗手段を失ったことを意味する。

ACに懐にまで潜り込まれた艦船など無力もいところだ。砲門が近すぎて届かな

い。それは遙か遠方よりも絶望的な間合いであり、二機のACによる蹂躞を容易に許してしまう。

やぶれかぶれに機銃を放つが、戦艦の主砲も耐える装甲にそんなものは無意味で、相手も歯牙にも掛けなかった。

キヤタピラ脚のACは自身の銃撃音にも負けないほどの狂気的な笑い声を上げながら弾丸をばら蒔き、艦船を穴だらけにしていく。重量二脚のACは長身のライフルから手持ちの大砲のような物に武装を切り替え、的確に手早くこちらの砲台などを潰していった。まるでどんな小さな芽も刈り取るように……。

数分もかからない内に私たちの艦隊は見るも無惨な姿に変えられる。全員が轟沈一步手前といった状態だった。

そんな私たちにキヤタピラ脚のACが語りかける。

「ハッハー！良かったぜ、お前ら!!お陰でいい気分だ、これからお前らを沈めるのが楽しみで仕方ねーッ！」

どうやら皆が轟沈手前で海面上に浮いていられるのはこいつの趣味のせいらしい。全くいい趣味をしている。

「わかるか？並べたドミノを倒す時つーか、高く積んだトランプタワーを崩す時つーか、今まさにそんな気分だ。つっても、俺の体じゃそんなこと出来ねけどな！ハハ

ハハハハハハハハハハハハ……」

そしてキヤタピラ脚のACは両腕の砲身を構え、死の宣告を言い放つ。

「……あばよ、楽しかったぜ……お前ら……」

ACから止めの銃撃が放たれる、まさにその時だった。

「そこまでです、『V』『M』、帰投してください」

敵の旗艦『加』から戦闘を中止する通信が入る。

「ふっぎけるなよ!!加アアア!!!後少しでイケそうだったんだぜ、邪魔するんじやねーッ!!!!」

キヤタピラ脚のACは余程頭に来ていたのか外部スピーカーを切り忘れて不満をわめき散らしていた。するとそれをなだめる、『加』とは違う声が通信から聞こえてきた。

——人を小バカにしているような印象を与える男の声だ。

「悪いね『V』、止めたのは僕だ。彼女たちにちよつと頼みたい事があってね」

「チツ……『財団』かよ。……萎えちまった、帰るか『M』……」

『財団』と呼ばれる男により、二機のACは艦隊に背を向け離れていく。

(助かった……のか?)

イマイチ状況に着いていけず呆気に取られていると『財団』と呼ばれる男は私たちに

一方的に話しかけてきた。

「やあ、はじめまして。早速だけど君たちに頼みたい事がある」

「ちよいまち、キミは何者や?」

「内容はごく単純、これから僕が話すことを君たちの司令官に伝言してくれればいいだけ」

「おいコラ!!ウチの話は無視か!」

龍驤の最初の質問も突っ込みもまるで聞こえていない様に無視し、男は“伝言”の内容を話始めた。

「伝言内容はこうだ。君たちのところの”最高の艦隊”で再びこの『死神艦隊』と”演習”をしてもらいたい。日時は明後日のイチヨンマルマル、場所はここ。ちなみに弾は勿論実弾を使用。今度は止めない、最後までやってもらおうよ。こんなところかな、簡単だろうか?」

どうやらこの『財団』という男、どこまでも自分勝手な奴らしい。その伝言内容は身勝手極まりないものだった。

「ふざけるな!誰がこんな話受けるか!!」

「……別にいいよ、応じてくれなくても。ただその時は次の演習場所を市街地とかにしようかな?きつと面白いことになると思うよ、ハハッハハハハハハハハッ」

話を飲まなければACで本土を襲撃するぞ、ということらしい。

「そこまでして…何が目的だ!?何がしたいんだ、お前は…お前は!!」

「質問は受け付けられないよ、話が長くなる。…それでも知りたいなら後は『ブルーマグノリア』に聞いてくれ」

「マギーに…だと?なぜ彼女に…?」

「だから質問は受け付けないって言っただろう。…じゃあ伝言宜しくね、”負け犬さん達”」

最後に私たちへの侮辱を含めて通信は途絶える。いつの間にか『死神艦隊』もその姿を消しており、海はいつもの平穏な姿を取り戻していた。まるで今までの出来事が幻のようだ。しかし、私達の艦隊の凄惨な姿がそれが幻などではなかった事を証明している。

惨敗した悔しきや、生きている事への安堵、様々な事への疑問…、そういったものが頭の中でぐちゃぐちゃになり苛立ちが募る。

「クツソオオオオオツ!!!」

握りこぶしで操縦桿を叩きながら私は哭いた。静かな海に私の遠吠え負け犬が虚しく響くだけだった……。

第二十五話 「EXTRA MISSION」 死神艦隊撃破—03—

塔が敷地内に乱立している工場の様な施設。上を見上げれば粉塵が舞う灰色の空と『タワー』が見える。

その施設内を二機のACが縦横無尽に飛び回り争っていた。一機は黒と蒼を基調色にした中量二脚型、もう一機は白を基調色に黒と赤線がアクセントに入っている重量二脚型だ。

白い重量二脚型『吹雪式』は左腕に装備しているレーザーライフル「A u—L—K 37」をチャージしながら蒼の中量二脚型『ブルーマグノリア』を必死に捉えていた。右腕のガトリングガン「AM/GGA—206」で牽制しつつ、両肩からハイスピードミサイル「SL/KMB—118H」を放つ。『ブルーマグノリア』はそれを避けるために空中でハイブーストを吹かした。

『ブルーマグノリア』に組み込まれている「B o—C—L 13」は数あるブーストの中でも最も出力が優れているものであり、まるでその場で爆発が起きているかのような閃光を放ち機体をピンボールの様に弾き飛ばす。

その加速力はまるで瞬間移動で、『吹雪式式』から放たれた攻撃を置き去りにする。しかしそれこそが吹雪の狙いだった。

(このタイミングなら避けられないはず！)

その圧倒的な加速は強い慣性を生み出し急な方向転換はできない。そこへ本命のレーザーライフルを射す、それが吹雪の狙いだった。そしてその狙い通りにレーザーライフルを放つ。しかし『ブルーマグノリア』はその一歩先を行っていた。

『ブルーマグノリア』はハイブーストを吹かしたあとあえてブーストを切っていた。それによりハイブーストの後に自動的にかかるブレーキをカットし、加速力をそのままに落下する。そしてブーストを吹かしたままでは届かなかった塔を蹴り、方向転換を成功させた。そのため『吹雪式式』から放たれたレーザーは『ブルーマグノリア』に当たることがなく、蹴られた足場を溶解させるに終わる。そして『ブルーマグノリア』が急転換した先は『吹雪式式』だった。

(まずいッ!!)

吹雪はガトリングガンを放ちながら後ろへハイブーストを吹かし、予想される攻撃を回避しようとした。

「それは不正解よ、吹雪」

マギーは再びハイブーストを吹かす。『ブルーマグノリア』の爆発的な加速は『吹雪式

式』を逃さなかった。ガトリングガンを物ともせず『ブルーマグノリア』は一瞬で吹雪のACとの間合いをゼロにし、加速そのまま一番装甲の厚い左足を『吹雪式』のコックピット目掛けてぶつける。

ブーストチャージを食らった『吹雪式』は小気味良い炸裂音を鳴らして地面を転がり、そのまま爆発四散した。吹雪のコックピット内に耳障りなブザー音が鳴り、画面には「MISSION FAILED」の表示がされる。

「はあ……、これで128戦128敗、連敗記録更新か……」

吹雪は溜め息をつきコックピット内でうなだれていた。通信機からマギーの声が出る。

「お疲れ様、吹雪。今回は私もヒヤツとする場面が多かったわ。どんどん強くなるわね、あなたは……少し怖いくらい」

「マギーさん、私……本当に強くなってるんでしょうか？最近、どうも手応えを感じられないというか、結果が出ないというか……」

「結果が出ないって……、まだACに乗って一ヶ月も経ってないのに私に勝つつもり？さすがにそれは自惚れ過ぎよ。それでも私は『前世』の時代じゃ『伝説の女傭兵』なんて呼ばれてた。『黒い鳥』程ではないけれど、それは伊達じゃないわ」

「そう……ですよね、あははは、……はあ」

本日の訓練を終え、二人はACから降りる。吹雪は露骨に肩を落とし項垂れていた。マギーは吹雪のその落ち込みが、ただ自分に負け続けていることが原因で無いことを理解していた。吹雪は現在『ある壁』に当たっており伸び悩んでいるのだ。

吹雪がACに乗るようになったのは三週間ほど前から。

龍驤が倉井元帥の元から『深海鉄騎』を持ち出した際に情報漏洩を防ぐために元帥が仕組んだ（と思われる）UNAC暴走事件に巻き込まれ、自身の艦船を喪失してしまう。しかしその際に『深海鉄騎』に乗り込みUNACを撃破。以降『深海鉄騎』を自分のACとして改修してもらい、駆逐艦『吹雪』改め艦載機『吹雪式式』へと転向したのが始まりだった。

そんな吹雪を心配し、白鳥提督はマギーにACの師事を依頼する。

「絶対に死なないぐらい強くしてやってくれ」

それが提督のオーダーだった。吹雪に『黒い鳥の素養』を感じていたマギーはそれを快諾し今に至る。マギーは暇を見つけては吹雪を引っ張りだしACのシミュレーターモードでひたすらしごいていた。その厳しさは普段から加賀にしごかれていた瑞鶴が話を聞いて若干引くぐらいのものであった。とにかくマギーの教え方は滅茶苦茶だったのだ。

本来訓練というものは、段階的に目標を設定しクリアさせていくものである。しかし

マギーは最初から吹雪に『自分を倒すこと』を目標として突き付け、その上で「敗けてやるつもりなどない」とでもいうように全力で吹雪を叩きのめしに掛かっていたのだ。

お陰で模擬戦開始からの20戦は吹雪は何もできずに一方的に撃破され、他人から見たらただのイジメでしかなかった。

ただこれには一応マギーなりの理由があった。吹雪は最初、仮初めの万能感に支配されていたため、力の差を見せつけて目を覚まさせる必要があったからだ。

マギーは吹雪が天狗になっていたこと自体は仕方ないと思っていた。そもそもACに乗る前の吹雪は、艦船を操るためのAMS適正が最低限しか備わっていない、『粗製』と呼ばれる出来損ないの最弱艦娘だったのだ。しかしそれが反転するようにACという圧倒的な力を手にいれた上、自らの願いだった『仲間を護る』という戦果も挙げていた。浮かれないほうがどうかしている。

しかし、「気持ちにはわかる」という理由で天狗になっているのを放置していい理由にはならない。何故ならこの仮初めの万能感は死に直結するものだからだ。

マギーがまだ『黒い鳥の傭兵』と組んでいた頃、相対していた傭兵の中にリリスという女性がいた。彼女は貧民街から抜け出すため傭兵となり、目覚ましい戦果を挙げて成り上がっていた才気溢れる人物……であった。少なくとも当時、マギーがリリスのことを調べた過去の情報ではそうだった。

しかしいざ『傭兵』が彼女と相対してみると「どうせ不細工なおっさんでしょー！」と完全にこちらを舐めきった発言をし、動きにも事前情報にあつた鋭さは感じられなかった。

彼女はACという力に酔いしれ、慢心し、折角の才能を枯らしてしまっていたのだ。そのため『傭兵』にアツサリと”刈り取られて”しまっていた。

だからマギーは吹雪が彼女と同じ轍を踏まないように徹底的に叩きのめした。吹雪の持つていた「私だつてやれるんだ！」という気持ちと完膚なきまでに踏みにじり、常人であれば二度とACに乗りたくなくなるほどに苛め抜いた。

マギーは信じていたのだ。それでも吹雪が”本物”であれば必ず食らいついてくると……。

事実、シミュレータの模擬戦が30を越えた辺りから吹雪が施設内を飛び交うマギーを捉えられるようになってきていた。模擬戦の回数を重ねれば重ねるほどそのマギーをロツクする時間が長くなっていく。吹雪の才能はマギーの予想通りに無茶な訓練に食いついてきたのだ。

そして模擬戦が60を越えた辺りから近接攻撃も織り交ぜ始め、たまにマギーが冷や汗をかく場面も散見され始める。マギーの動きを盗み、貪欲に経験を喰らい、吹雪の進化は止まらなかった。

もし『黒い鳥の傭兵』と共闘をしたことのある『カリウス』という男が吹雪と出会っていたら、再開した時にはきつと『傭兵』に向けたのと同じ言葉を放っていただろう。

——「化物め」と。

それほどまでに吹雪の成長は凄まじく、模擬戦も80戦目を越えた辺りから『ブルーマグノリア』のAPが半分以上減らされるのが当たり前となる。マギーの勝利はいつも“紙一重”となっていた。吹雪はマギーにとって『強敵』と言えるほどの実力を身につけていたのだ。

だが問題はここからだった。吹雪がその“紙一重”を越えることが出来ないのだ。あと一歩何かが足りず、連敗記録を更新していく。

吹雪は吹雪で戦い方を変えるなどして工夫し、何とかその“紙一重”という“厚い壁”を越えようとするが、手応えを感じられずにいた。突破口が全く見つけられなかったのだ。

今まで二次曲線的に成長してきた吹雪にとって今の停滞は非常に辛いものであり、マギーへの敗北以上に重くのし掛かかる。それが吹雪の肩を落とす原因になっていた。

実はマギーは、吹雪がこの壁を越えられない原因を知っていた。理由はただ一つ。

『殺意が足りない』

これに尽きる、とマギーは確信していた。ただの精神論だが、これが中々馬鹿に出来

ない。

『相手を殺す』という強い意思は強い集中力を生み出し、自分の命を賭けた”あと一歩”の踏み込みを可能にする。コンマの世界で生死が別れるAC戦において、この一歩を踏み出せるか出せないかは決定的な差となつて表れるのだ。

(この子も出来ないはずなのだけれど……)

吹雪が初陣の時にUNACに近接攻撃を当てることのできたのはUNACの動きが大したことないのもあつたのだろうが、何よりこの『殺意』を持っていたからだ”とマギーは思っていた。

仲間の危機という極限状態が吹雪の動きに躊躇いを捨てさせ、リスクを顧みない暴力を振るわせたのだ。吹雪は”一歩踏み出せる殺意”を潜在的に持っているはずだった。だから後はそれを引き出せるようになれればいい。『殺意』のコントロールさえ出来れば吹雪は化けるはずだ、とマギーは考えていた。

しかし、それは模擬戦では身に付けにくい物である。特に吹雪は勤勉な性格をしており、模擬戦ではつい”マギーから”学ぼう”としてしまうのだ。

相手の引き出しを一つでも多く出させ、自らの血肉とする。それはそれで悪くはないのだが、やはりそれは生死が係らない模擬戦の思考だった。これでは技術は身に付くが『殺意』は身に付かない。

(実戦が必要ね……)

これは少し前からマギーがずっと思っていたことだった。

不謹慎ではあるが、できれば倒せるか倒せないかギリギリの……、もしくは仲間を窮地に追い込むような強敵が彼女の『餌』としては最高だ。

「やっぱり那智の艦隊にねじ込むべきだったか……」

A Cの足下で思い悩む吹雪を見ながらマギーはポツリと呟く。

那智は鎮守府近海に出現する不明勢力の撃破を任されていた。なんでも他の鎮守府の艦隊が三つも行方不明になった原因と目されているらしい。かなりの強敵であることが予想されるが、私と加賀にその仕事が回ってくることはなかった。こういう手合いは良く任されるのだが、今回は相手が鎮守府を直接襲えるような近場に潜んでいるため保険として待機が命じられていたからだ。

だったら吹雪の相手として調度いいかも、と思い吹雪を那智の艦隊に入れてはどうかと提督に進言してはみたが「今回の敵は完全に未知数だ、これ以上不安な要素は入れられんよ」と突っ返されてしまった。確かに艦隊戦での吹雪の力は不明瞭だ。個人の實力はかなりのものなのだが、吹雪はまだA Cでの艦隊戦を知らない。A Cの操作技術を優先して身につけさせようとしていて、まだ艦隊での演習をさせていなかった。

私も受けてきた任務から、艦隊戦では仲間との連携が重要であることを思い知らされ

ていた。演習での主兵装のレーザーライフルが使えない状況や、ガダルカナル島近海での『ブルーマグノリア』との相性が最悪だった戦艦棲姫（T0—650Dを深海棲艦が乗ったもの）を相手取った状況においても快勝できたのは、加賀をオペレーターとして味方艦隊と連携を取ったからだ。

それ以降の出撃においても普通の深海棲艦であれば私一人でも壊滅できたが、やはり仲間との連携を取ったほうが効率的であり、艦隊戦において連携は欠かせないものだと実感している。

なので仲間との連携に不安要素のある吹雪を入れられないという提督の意見もわかる。特に相手の正体が不明で出たとこ勝負をするしかない場合において、艦隊には高い連携力が必要とされる。その際、いかに吹雪単体が強くてもその連携にヒビを入れる可能性があるので駄目だ。それすらも覆すほどの強さを持つていればいいと私は思うが、その力は彼女には「まだない」。

だから渋々ではあるが、その場では提督に従って進言を取り下げたのだが……今の吹雪の状況を見ると無理にでも食い下がって吹雪を出撃させればよかった、と後悔する。

（……まあ、過ぎたことは仕方ない）

那智達が近海に潜む不明勢力さえ倒してきてくれれば、加賀と私の待機も解除されるだろう。そして私達の出撃のときに吹雪を連れて行くだけだ。流石にACでの艦隊

戦を熟知している私も一緒なら提督も首を立てに振るだろうし……。と、そこで時計が目に入る。

(そういえば……予定通りならそろそろ帰ってくる頃ね)

時刻は1800を過ぎており、その肝心の那智達の帰投予定時刻になっていた。彼女達の艦隊はこの鎮守府の上位陣を集めた精鋭艦隊だ。生半可な深海棲艦では相手にならない。いくら敵が強敵であることが想定されているとはいえ、彼女たちの負ける姿は想像できなかった。きつと帰ってきたら那智に今日の武勇伝を聞かされるだろう。

(今日は足柄も千歳たちも予定が入ってたはずだから、久々に那智と二人か……)

この鎮守府には『のん兵衛ズ』と言われている艦娘達がいる。那智、足柄、千歳、千代田だ。といっても千代田はあまり酒に強くなく、酔ってさっさと寝てしまうので実際は残りの三人がそうだ。私は寢酒のようなものを飲む習慣があつたため彼女達と夜の食堂で会うことが多く、一度絡まれたのを境にたびたび一緒に飲むと誘われ、気付けば私も『のん兵衛ズ』入りしていた。少なくともこの鎮守府の仲間内では私はこのチーム『のん兵衛ズ』の一員という認識になっている。

最初是一緒くたにされるのに抵抗があつたが、何度も絡まれる内に慣れてしまい、今では……まあ、そんなに嫌じゃない。

特に那智は静かに飲むタイプで、武人氣質な性格もあつてか話の話題も比較的私と

合う。足柄みたく「整備兵イケメンランキングを考えたのよ!」とか別方面で飢えているだけでもいい話なんぞ振ってやることはなく、今日の戦果だとか最近誰が腕を上げているだとか、専らそんな話が多い。他のメンバーからは色気がないとか言われるが、私たちにはそういう話が似合っている。

そういえば那智はA Cと共闘するのは今日が初めてだったはずだ。それが私でないのは少しばかり残念だが、龍驤の扱うUNACであれば連携の点では問題ないだろう。一体那智がA Cに関してどんな感想を述べるか興味が湧いてくる。酒の肴は決まった。

今日はもう秘書艦補佐の仕事もないし、ゆつたりとその時を待つことにするか……そう決めた時だった。

「マギーさん。なんかドックの方が騒がしくありません?」

工廠の出口まで並んで歩いてきた吹雪に言われてそれに気づく。聞き耳をたてると、確かに整備兵達の怒号が聞こえてくる。

「おい!全艦入渠が必要だぞ!!優先する艦を提督に聞いてきてくれ!!」

『『比叡』と『霧島』がヤバイ!!明石さんはまだか!』

「医療班は何してる!!?綾波ちゃんのモチモチほっぺに傷が残ったらどうするつもり

だアアア!!!」

聞き取れた艦名は、どれも今日出撃していた那智艦隊のメンバーだった。しかも全艦修理が必要とも聞こえた。一体、那智達に何があったのだろうか?……不安が過る。

「……吹雪、行くわよ」

「はい」

私たちは踵を返しドックへと向かって行った。

◇ ◇ ◇

やはりと言うべきかドックへたどり着くと、那智の艦隊が工廠にある修理装置に『入渠』するため、艦を移動している最中だった。

その艦体を見て絶句する。痛々しいまでに艦の装甲には穴が空けられ、武装もほとんどが破壊されていた。『比叡』『霧島』は特に酷く、解体用の鉄球でもぶつけられたような大穴が空いていたり、艦体の半分以上が焼け焦げていた。帰って来られたのが奇跡的に見える。

(それにしてもこの損傷はまさか……いや、そんな馬鹿な……)

私は明らかに艦船にやられたのとは違う損傷を見て、妙な想像を働かしてしまう。

「あれ……まるでACにやられたみたいですね」

横にいた吹雪が、私の想像と同じ感想を述べた。艦橋に付いている弾痕は下から撃ち抜かれているものもあり、破壊されている武装も一つ一つ正確に撃ち抜かれている。まるで小型の何かが甲板に取りつき暴れたかのような傷付き方をしており、そんなことが出来る存在となるとACを思い浮かべてしまうからだ。

(別の『深海鉄騎』でも現れたの……?)

とにかく詳しく情報を集める必要がある。旗艦である那智はどこだろうかと辺りを見渡すと、ドックの奥に彼女の姿を見かけた。ガラス片か何かで切ってしまったのか額から軽く血を流しており、医療班が彼女の手当てをしようとしていたところだ。しかし、こちらに気付いた那智はそんな傷お構いなしかのように医療班を突飛ばし、ズカズカとこちらに歩み寄ってきた。何故だかその表情はとても険しい。

「ど、どうしたの、那智? 一体なにが……」

那智は痛みを感じる程の力を込めて私の二の腕を掴み、言い放つ。

「どうしたもこうしたもあるか!! マギー、あいつらは一体なんなんだ! 『死神艦隊』、『財団』、あいつらは何が目的だ!! 答えろ、マギー!!」

「ちよつと落ち着いて!! 那智!! こんなんじや答えられるものも答えられないわ! ……ま
ずは落ち着くのよ」

那智の怒号のような言葉使いにもだか、それ以上に彼女の口から発せられた『死神』『財団』という単語に動揺を隠せなかった。

(『財団』……あいつが!?! 一体なんのつもり……!?!)

現時点では解らないことだらけだ。もつと落ち着いて話を聞かないと答えは出せない。

ただ一つ、那智の態度から予想のついたことがあった。……那智達は生かされたのだ、何かの目的で。彼女達の艦船の損傷は想像通りA C、『死神部隊』にやられたに違いない。そして、やつらがその気だったら那智達は今ここにはいないだろう。つまりは手加減されたのだ。それは誇りを大切に作る那智にとって耐え難い屈辱だったに違いない。

——現に那智の目尻には涙が溜まっていた。それが私の胸をざわつかせる。

彼女のそんな顔を見るのが辛かった。

「……那智。貴女がなんで『財団』のことを聞いてきたのか、一体なにがあったのか、正直まだサツパリよ。……でもこれだけは言える。落とし前はつけさせる、必ず……」

「マギー……」

那智はそれで少しは納得してくれたのか、私の腕を掴んでいた手を緩める。自由になったその腕で那智の額の傷を軽く小突いた。

「ツツ!!」

「わかつたら早く手当てを受けてきて。こっちは先に執務室に行ってるわ。……私がかかることは、ちゃんとそこで話すから……」

「……済まなかった、マギー」

那智は頭を下げると、その場を離れ医療班の元へ向かって行った。

(忙しくなりそうね)

きつとこれから緊急のミーティングが始まるだろう。その準備や必要なメンバーの召集など、秘書艦補佐としてやるべきことを頭の中でピックアップしながら、再び踵を返して工廠の出口に向かう。その時だった。

—— マギー、俺も連れていけ

私は目を見開き、振り返る。いるはずもない『彼』の声、それが聞こえたような気がしたから。視線の先にいたのは吹雪だった。

「吹雪……、いま貴女なんて……?」

「?……えと、私も連れていってください、と……。那智さんの任務の話をするんですよね? 私も聞かせて欲しいんです。……いや、多分私は聞かないといけない、『財団』……あ

の男”のことを……」

那智の話聞いた吹雪の様子は明らかにおかしかった。口調も、『財団』を”あの男”と呼ぶことも。……なによりその目には私との訓練では無かった『殺意』が宿っていた。(吹雪にインストールされたプログラム、……もしかしてそれが何か影響を?)

吹雪のACに深海棲艦が組み込んでいた戦闘オペレーション『ダークレイヴン』、しかしそれは『彼の戦闘記録の集積』に過ぎない。ただのACマニュアル程度のもものはずだ。人格等に影響を与えるような代物ではない。

なのに吹雪から『彼』の、『黒い鳥の傭兵』の面影を感じる。まるで彼がそこに居るかのように……。

(もしかして……)

これは仮説だが、人格というものが『元々の性質』と『経験』によって形成されるものだとしたら、『黒い鳥の素養』を持った吹雪に『彼の記憶』を与えれば、それは”彼の再現”となるのかもしれない。かつて私が処理された意識を電子化する『ファンタズマ・ビーイング』、その前身となる、クローンに作爲的な記憶を与えることでオリジナルを再現しようとする『カルティペイター』という技術と同じ理屈だ。

そして、『財団』の目的が何となく読めてきた。どこかで『吹雪式』の存在を知ったあの男は、吹雪にキツカケを与えて『傭兵』を再現するつもりなのだろう。確かにあい

つが用意した不明勢力も、吹雪がACに乗り始めたあたりから現れている

色々としじつけがましいが、あの男ならあり得る話だ。

『財団』の行動は全て「世界を滅ぼすのは人間自身であることの証明」に基づいている。私をここに送り込んだのも深海棲艦に人類を滅ぼさせないためだ。あくまで滅ぼすのは人間自身だから。そして吹雪にちよつかいを出そうとしているのは『人間の可能性』を再現し、そして否定するため。

もしかしたら過去、『大破壊』によつてうやむやになってしまった”黒い鳥との決着”の続きをしたいのかもしれない。その相手候補にこの子が見初められたのだろう。

——正直、その気持ちは分からなくもない。

どこかで「それはそれで都合がいい」と思っている自分がいた。吹雪が強くなった”その先”を望んでいるのだ。

(この子を殺すつもり? 私は……?)

そう考えた瞬間、胸のざわめきが止まらなくなる。自分に強い嫌悪感を覚えた。

(……今はもうやめよう、考えるのは)

今はやるべきことがある、そう自分に言い聞かせ思考を切った。たとえ私がどう思おうと『財団』の用意した敵を倒すのに吹雪を使わない選択肢は無いし、それで『財団』の思惑通りに事が運んだとしても、あくまで今回はキツカケですぐに”その時”はこない

だろう。

私の葛藤を余所に吹雪は隣でキョトンとしていた。

「……そうね、確かにあなたは必要よ。付いてきて」

「はい！」

私は吹雪と共に執務室へと向かう。その胸に一抹の不安を抱えながら……。

第二十六話 「EXTRA MISSION」 死神艦隊撃破—04」

鎮守府会議室にて『死神艦隊』を撃破するための会議が行われていた。中に居るのは提督と、『死神艦隊』と交戦した那智の艦隊、そして那智からの報告を受け提督より選ばれたメンバーたちだ。

選抜メンバーの構成は、旗艦に正規空母『加賀』、戦艦『金剛』『榛名』、重巡『妙高』、正規空母『瑞鶴』、雷巡『大井』、そして AC 『ブルーマグノリア』『吹雪式式』であった。AC のスポット頼りの長距離砲撃を前提とした、攻撃力偏重の編成である。それは最初の航空戦……いや、AC 戦の勝敗が艦隊の勝敗を決することを意味していた。AC を懐に入れてしまえば、その艦隊には勝ち目は無い。それは敵味方同じだった。

「——以上が報告だ。何か質問のある者は……といつても、私も質問したいことばかりなのだが……」

皆の前で自分に起きた事を説明した那智は、後は頼むという眼差しをマギーに向ける。

「那智、提督に演習を強要してきた男は確かに『財団』と呼ばれていたのよね？」

「ああ、間違いない。しかもご丁寧にそいつは分からない事があればお前に聞けと言っていたぞ、マギー」

——面倒なことを押し付けて。

マギーは内心『財団』の身勝手さに苛立ちを覚えつつ、何から話したものと思索していた。すると提督から質問が上がる。

「マギー、確か『財団』ってのはお前をここに送りつけた奴だったよな？ 深海棲艦を倒すために。だが今回の行動は明らかにその目的と矛盾してやがる。そいつは一体なにが目的なんだ？ お前はそれが分かるのか？」

「……ええ」

本人に妙なプレッシャーを与えたくないので本当はあまり言いたくはないが……、言わない訳にもいかないか。

マギーは「あくまで私の予想だけど」と念頭に置いた上でその理由を口にした。

「『財団』の目的は恐らく吹雪よ」

「はあ、なんだそりゃ？ なんで吹雪が狙われる？」

「そうね……、順を追って話しましょう。提督と加賀には着任時に話した内容と被ってしまう部分もあるけど、理解してもらうには最初から話した方がいい」

提督は首を縦に振り許可をだす。会議室の壁際に立っていたマギーはそのまままゆつくりと口を開け”昔話”から喋りだした。

◇ ◇ ◇

——世界がまだ破滅に向かっていった時代。

ある男は人間に絶望していた。だから人間を辞め、その愚かさを証明しようとした。

『タワー』のAIとなり『財団』と名乗るようになったその男は、人間同士の争いを誘発し激化させ、「世界を滅ぼすのは人間自身だ」ということを証明しようとしたの。

でもその時に邪魔者が現れた。『財団』が作ろうとする混沌すら壊してしまう者。全てを焼き尽くす死を告げる鳥、人間の可能性……そいつは『黒い鳥』と呼ばれたわ。

その存在を予見していた『財団』は、素養のある者を探しだし殺し回った。でも結局、その『黒い鳥』は生まれたわ。……ここまでは私の『前世』での記憶。私は『ある傭兵』が『黒い鳥』になるところを見たの。

（そう……彼に殺され燃え落ちた時、私の目に写った彼は紛れもなく”本物”だった……）

マギーは目を細め、懐かしむ様にその時を思い出していた。加賀だけがそれに気が付き、複雑な表情を浮かべていたのには気づかず……。

マギーは話を続ける。

ここからは『財団』から聞いた話 私の臆測を混ぜたものになる。

『黒い鳥』はありとあらゆる戦場を渡り歩き、様々な戦力を焼き尽くしていった。戦争を激化させたかった『財団』からしたら邪魔で仕方なかったでしょうね。だから『財団』は彼を殺したかった。彼を抹殺して、人間に可能性なんてないことを証明したかった。

でも突如として別の邪魔者が現れた。私たちの敵、深海棲艦のオリジナルである『パルヴァライザー』と、それを産み出す統轄機構『インターネサイン』。『インターネサイン』が『大破壊』を引き起こしたせいで人類は衰退し、残った戦力を『インターネサイン』も含めて『黒い鳥』が止めてくれたから人類は滅びずにいられたの。

……そして今、『インターネサイン』は復活し深海棲艦を産み出している。人類が自らを滅ぼすことを証明したい『財団』にしてみれば、深海棲艦は邪魔で仕方なかった。だから艦娘のシステムを利用して私をここに送り込み、『インターネサイン』を破壊させようとしてるわけ。

深海棲艦さえいなくなれば、今度は人間同士の“本当の戦争”が始まる。深海棲艦に對抗するためだった力を人に向け、深海棲艦から受けた傷を癒すために領地を奪い合う……『財団』はそうなると思ってるのよ。

そして、その”本当の戦争”の時に邪魔になる可能性、『黒い鳥』。彼のACを引き継ぎ、彼と同じ素養を持つ吹雪を見つけたから、『財団』は今になってしゃしゃり出てきたんだと思う。吹雪が”本物”か確かめ、そして抹殺するために……。

◇ ◇ ◇

私が昔話を終えると、会議室内が重苦しい沈黙に包まれていた。「何と言えればいいか分からない」といった雰囲気だ。確かに仕方ないことかもしれない。

私の話した内容は『深海棲艦の大元の破壊』という世界の命運を握るような任務が待ち受けていることや、『タワーの AI』という途方もない相手に目をつけられたことを示唆している。

艦娘ならば深海棲艦の撲滅が使命であることは重々承知だろうけど、流石に自分達はその中心に近い位置にいるとは、以前から話を聞いていた提督や加賀を除いて、誰も思っていないかっただろう。

「……なんだか私たち、very hard な event に巻き込まれてマズネー。特にブッキーなんか bad luck デスヨ」

金剛が沈黙をやぶり、私の隣に立っている吹雪を心配そうに見る。皆も釣られて吹雪に視線を集めた。急に皆から注目されたものだから、吹雪は慌てふためいて苦笑いを浮かべている。

「え、いや……、ホントその通りですね、アハハハ……。でも『深海棲艦』だろうと『財団』であろうと、怖いものはみんな消しちゃえばいいだけです。だからその……大丈夫ですよ！……それに ” あ の 男 ” を許すわけにはいかなから丁度良い……です」

「ブッキー……？」

表面上はいつもの吹雪のようであつたが、何人かは吹雪の様子がおかしいことに気づいていた。確かにいつもの彼女だったら「消す」なんて物騒なことは言わないし、なにより『財団』を ” あ の 男 ” と言つていた時の吹雪の眼光は別人のようだった。

その様子を見て確信する。

(やつぱり『財団』に反応しているのは間違いない……)

吹雪は『黒い鳥』の戦闘記録を持つている。だから彼と長い間争い続けた『財団』が自分の敵であると本能的に感じているのかもしれない。そのせいか『財団』との戦いに吹雪は積極的な態度を見せていた。

「……吹雪の言う通りよ。ある意味皆を面倒事に巻き込んだ私が言うことじゃないかもしれないけど、振りかかる火の粉は払うだけ。とりあえず『財団』の目的についてはもういいわね？ だったら『死神艦隊』を倒す話をしましょう」

「そうですね……」

吹雪の様子がおかしいことや『財団』の目的が全く共感できないようなもののせい、金剛を含めまだ何人かは釈然としない様子だった。

しかし明日の1400には現地に着いていなければならず、あまり時間がないのも事実だったので、少々強引かもしれないが話を進めることにした。まだ皆の前に立つたままの那智へ話しかける。

「那智、もう一度敵の戦力について説明してくれないかしら？」

「ああ、構わん。敵……『死神艦隊』と名乗るやつらの編成だが、旗艦が空母棲鬼、それから順に軽巡棲鬼、軽巡棲姫、駆逐棲姫の四隻だ。どれも我々との戦闘情報から作られたと言われている模倣型の深海棲艦だな。ただ『死神艦隊』の特徴は他の深海棲艦と違って確かな知性があることだ。有象無象の深海棲艦と違って、まるで艦娘みたく連携を使ってくる。今回は龍驤のUNACで敵の爆撃を無効化できたことや、数で勝っているから艦隊戦は優位に進めることが出来たが……深海棲艦の弱点である知性を克服している厄介な相手だ。まあ、それでもこいつらだけならどうにかなるのだが……」

那智の顔が苦々しいものに変わっていく。圧倒的に蹂躪された敗北の記憶、それを思い返すことに抵抗がないわけがない。だがそれでも仲間の勝利のために那智は話を続けてくれた。

「……問題は敵のAC二機だ。一機は『V』と呼ばれる戦車のキャタピラを履いたようなタイプのACで、戦艦の主砲にも耐えるような硬い装甲と、軽巡の主砲並の威力を持つ砲門を四つ付けた機関砲……自分で言っても馬鹿らしくなるようなふざけたモノを両手に持っている。もう一機は『M』と呼ばれる、重量二脚というんだったか？そのタイプのACで、長距離射程のライフルで先程の『V』を援護するような戦い方をしていた。ただそのライフルの一発一発が非常に強力な上、重巡の主砲並の大砲も二丁持っている。そして戦艦すら一撃で大破させるほどの威力の ” 空飛ぶ魚雷 ” までだ。どちらも龍驤のUNACと比べたら、速度は遅めだが化け物じみた火力を秘めている。接近を許したら私達の二の舞になるぞ。……マギー、吹雪、対抗できるのは恐らくお前達だけだ。やれるか？」

那智の話から察するに、『死神部隊』は両手オートキャノンのタンクが突っ込んできて、スナイパーライフルとバトルライフル、そして大型ミサイルを積んだ重二がその援護をする、といった編成らしい。随分と正面火力偏重だが、障害物の無い海上ではなかなかの脅威だ。

直にその火力を味わった那智が私たちを心配するのも頷ける。

「説明ありがとう、那智。大丈夫よ、私達ならやれるわ。敵のアセンを知ることが出来たのは大きい。……結局、敵のACを打ち破って敵艦隊に接近。そのままACでスポット

して艦隊の長距離砲撃で残りを仕留めるって流れに変更はなさそうね」

——私と吹雪の勝敗がそのまま艦隊の勝敗に直結する。

だから那智や一緒に出撃する仲間達の不安を払拭するように自信を込めて話した。そもそもAC戦という領域において負けるつもりはない。

話を終えて壁に寄りかかると、隣の吹雪から回りに聴こえない程度の小声で話しかけられた。

「マギーさん、『財団』の艦隊がこれだけで終わるでしょうか……？」

かつて『財団』から散々だまし討ちを受けた記録を持つているからか、彼女自身の生来の危機察知能力からか、吹雪は私に不安を打ち明けた。

「確かにあの男のことだから他に何か仕込んでる可能性は高いわ。でも例のAC達がいる以上、私達が前に出て戦うことは変えられない。それが深海棲艦のタイプだったら後で、ACのタイプだったら例のAC達と同時に戦うだけ。大丈夫、あなたと私ならやれるわ。あなたが言ったんでしょ？なにが来ても〃消せばいい〃だけよ」

私もそのことは予想してはいないわけではなかった。だけど今回は吹雪もいる。

艦隊との連携は自分が担当すればいいし、純粹なAC戦であれば吹雪はすでに『死神部隊』のメンバー並の実力を持っている。それに加え、今の吹雪の目には私との模擬戦の時にはなかった『殺意』が確かに宿っていた。その状態での実力は未知数だが少

なくとも弱くなることはないだろうし、上手くいけば乗り越えられなかった壁を乗り越え”化ける”かもしれない。

だからそんな吹雪と一緒にであれば大抵の敵には対応できると私は考えていた。

「……そう、ですね。そうでしたね」

そういつて吹雪は微笑んだ。まるで想定外のことだ。想定内である、非常事態が当たり前である、それを思い出したかのように……。

その笑みに『傭兵』の面影を感じてしまう。

(これも彼の影響なのかしら……)

『黒い鳥の傭兵』に依頼される任務にはイレギュラーな事態が起こるものが多かった。その頻度は相方であるファットマンが「もう馴れただろう」なんてこぼすほどだ。

『傭兵』もそれに適応し、大抵の事には動じなくなるところか冗談を言つて笑い飛ばしていたりしたのだが、その時の彼の笑みと吹雪が今見せた笑みが重なって見えていた。

(『財団』の目論見が本当に『傭兵』の再現なら……きつと今の状態は思惑通りなんでしょうね……)

左腕が強く疼き始め、右腕でそれを握りしめる。それでも疼きは止まらない……。(私の”これ”もあいつの思惑通りなの？だとしたら……面白くない)

更に左腕を強く握りしめる。吹雪が彼の面影を見せる度に自分の中で”恐ろしい何

か」が膨れ上がっていくのを私は感じていた。

「マギー、他に説明は無いかしら？」

加賀に声をかけられ、ハッと視線を吹雪から加賀へ移す。私を見る加賀の表情には若干私を咎めているような険しさが含まれていた。

……もしかしたら彼女は、私の今の状態を見透かしていて、声をかけたのかもしれない。

「え、ええ……。私からは以上よ」

「……そう。では具体的な作戦の確認に移るわ」

加賀は少しだけ溜め息をつくと映写機のスイッチを入れた。会議室のホワイトボードに作戦領域の海図が写し出される。

「作戦領域は鎮守府近海、当鎮守府警備担当海域のエリアE—1よ。作戦開始は1400」

ホワイトボードに映る画面に味方艦隊を表すマーカーが現れる。加賀は那智と入れ替わって皆の前に立ち、指揮棒で画面を指しながら説明を再開した。

「まず私と瑞鶴で事前に偵察機を飛ばしておき、敵艦隊及び敵ACを補足。敵ACへ『ブルーマグノリア』『吹雪式』を誘導するわ。大井も甲標的を敵艦隊に向けて発艦しておいて。艦隊は敵艦隊との距離を保つように移動します。……マギー、敵ACと交戦を開

始してからの予想戦闘時間は？」

「三分かからないでしょうね。それまでに決着は着く」

「なら問題無いわ。ではマギー達は敵ACを撃破後、そのまま敵艦隊を襲撃して。その際マギーはいつも通り私にスキャン情報の送信をお願い。そして……」

加賀は瑞鶴へと視線を移す。

「瑞鶴、今回はACに対空戦闘をやる余裕が無いと予想されるわ。だから私と貴女で戦闘機偏重の航空戦隊を組みます。味方艦隊への爆撃は勿論、AC達の戦闘に横槍が入るのを防ぐわ。やれるわね？」

暗に「やれ」という加賀の威圧に緊張しながらも、瑞鶴は威勢良く「ハイ！」と返事をした。加賀は納得したのか「…そう」とだけ呟くと、今度は大井へと視線を移す。

「……なので敵艦隊への先制攻撃の要は大井、貴女の甲標的による雷撃になるわ。ACのスポットを頼りに確実に命中させて。砲撃戦を優位に運ぶのに重要な役割よ、注意して」

瑞鶴に向けたのと同じような視線を加賀は大井に向ける。大井はたじろぎながらも「だ、大丈夫です」と答えようとしていた、その時だった。

「あのさー、ちよつとい〜い？」

北上が手を挙げながら横槍を入れる。

「……どうしました？北上」

「いや、加賀さんさア。今更つて思うかもだけど、やっぱり大井つちには今回の任務、荷が重いよー。雷巡に改装したのこの前だよ？他の人に替えない？」

北上からの横槍は大井を艦隊から外す提案だった。どうやら大井の練度に不満があるらしい。

瑞鶴もそうなのだから、大井はこの鎮守府生まれの『建造組』であり、所謂新人だ。

最前線へはいつも『MI 生き残り組』と呼ばれる過去の敗戦を生き残った精鋭達が駆り出されており、今回『建造組』の二人が駆り出されるのは異例と言えば異例だった。

とはいえ、少なくとも瑞鶴に関して私は異論はない。龍驤が修理中である今、空母として次に練度が高いのは瑞鶴だからだ。

この前『生き残り組』の千歳と千代田が軽空母へ改造されたものの、艦載機の操作に關しては馴れていない彼女たちより瑞鶴の方が上手だ。

何より瑞鶴を推薦して編成に加えたのは、彼女の師事をしている加賀である。加賀が十分だと判断したなら問題は無いだろう。

大井も、雷巡が今回の編成に欲しかったのと日々の戦果から問題無しと判断され加えられたのだが……彼女の師事を任されている北上が、加賀とは逆に不十分だと考えているようだ。

そんな北上の意見を提督は却下していた。

「北上、お前らの扱う甲標的とA Cのスポットの相性が抜群なのはお前自身が一番分かっているだろ。その威力もな。それにお前と比べたら確かに大井の腕は劣るかもしれないが、日頃の成績からしたら問題無いと思うがね」

「でもさ〜……」

「あのなあ、北上……だいたい、千歳と千代田を軽空母に改造しちまった以上、甲標的を扱えるのはウチじやお前らしかないじゃないか。大井が心配なのはわかるが、外す理由にはならんな」

……なんだ。ただ大井が心配で北上は外そうとしていたのか。確かに今回の敵は今までで一番の驚異だが、それじゃあ確かに大井を外す理由にはならない。

どうも北上は大井のことになると何時もの冷静さを欠くらしい。提督に諭されてもいまだに食いついている。仕方ないので私も北上を説得することにした。

「北上、確かに今回の相手は今までと比べて危険だけど、作戦通りに進めばいつも通り一方的な展開で終わるわ。それとも私達が信用できない？」

「いや、そう言うわけじゃないけどさ〜……」

「じゃあ問題ないわね。大井自身がそれでもつていうなら考えるけど……どうなの？大井」

「や、やります！やらせてください!!」

「だそうよ、北上」

「……………大井つちがそこまでいうならさ……………わかったよ」

いまだに渋い顔を浮かべながらもやっと北上は引き下がる。

加賀が咳払いをしてミーティングを再開した。

「んっ…では…………、金剛、榛名、妙高の三名はACのスキャンデータを受信後、スポットしている敵艦隊へ長距離砲撃を行ってちょうだい。妙高はスポット砲撃が今回初めてだから、後程金剛より指導をお願い」

「OKネー！妙高ならvery easyデース！」

「よろしくお願いしますね、金剛さん」

妙高が金剛に軽く会釈する。正直、妙高ほどの練度があればぶつつけ本番でも余裕で対応できるだろうが、あくまで万全を期するようだ。

「では最後に…………『吹雪式式』ですが、リスクと負担の分散のために瑞鶴、貴女に艦載して運用してもらいます。会議終了後、オペレーターリングシステムのリンクを行うからそのつもりで…………以上、作戦に何か質問のあるひ…」

「いやいやいや、加賀さん!?!」

加賀が言い終えるより先に瑞鶴が席を立ち質問する。まあ内容は大体想像つくけれ

ど……。

「吹雪は加賀さんに艦載するんじゃないんですか？」

「さつき言ったでしょう、リスクと負担の分散だと。別々で運用すれば最悪私に何かあっても貴女がオペレータの代理を務めることができるし、何かの際に別行動も取れるわ。それに情けない話ではあるけれど……ACのスクラン情報量は膨大で、二機同時に送信されてきた場合処理しきれないの。だから『吹雪式式』は貴女が運用しなさい。分かったわね……」

瑞鶴はおずおずとしながら「はい……」と返事をし、席に座る。やはり初めてのAC運用なので不安なのかそこに先程までの威勢はなかった。

そんな彼女を励ますつもりか、吹雪が瑞鶴に声をかける。

「大丈夫ですよ、瑞鶴さん。前に言ったじゃないですか、加賀さんはできると思ったことしか言わないって。だから大丈夫です、一緒に頑張りましょう！」

「吹雪……」

「じゃあ良いわね。他に質問のある人は……いないみたいだから会議はこれで終了します。抜錨は明日の0700、各員それまでに準備を整えておいて。……提督、あなたからは何か？」

二人の友情溢れるやり取りをバツサリと切り、加賀は話を続けた。吹雪から暗に瑞鶴

に期待していることを暴露されたのが恥ずかしいのか、その加賀の口調は若干早口だった。提督もそれに気付いているのか口角が少し上がっている。

「はっはっは、俺からはなにもないさ。まあ、強いて言えばいつも通りか。」生きて帰ってこい”、それだけ守ってくれりゃあいい。以上だ。」

「了解」

提督の締めにより『死神艦隊』の対策会議は終了し、各々が準備をするため散々になっていく。私も吹雪のACを瑞鶴にリンクさせるため工廠へと向かおうとした時だった。

加賀に袖を掴まれ止められる。

「……………どうしたの加賀」

「マギー、貴女が『黒い鳥』に思うところがあるのは知っています。吹雪に『例の傭兵』の面影を見ていることも……………でも今は目の前の敵を見て」

「見てるわよ」

「いいえ、見ていないわ。自分で気付いていないの？さっきの吹雪を見ていた貴女の間は仲間に向けるようなものではなかったわ……………」

「……………」

「マギー、例え吹雪の様子がおかしくても吹雪は吹雪よ。『傭兵』じゃない。そして今の貴女は『私の艦載機』『ブルーマグノリア』よ。それを忘れないで……………」

「……わかつてるわよ」

私は加賀の手を振りほどもき工廠へと歩き出した。加賀も瑞鶴の調整があるため私の隣に並んで一緒に工廠へ向かうが、結局あつちに着くまで一言も彼女と言葉を交わすことはなかった。

第二十七話「EXTRA MISSION_死神艦隊撃破—05」

白鳥鎮守府警備担当海域、E—1エリア。シーレーンからも外れたこの海域は普段誰も訪れるようなところではない。精々この国の防衛網を潜り抜けてきた深海棲艦がないかを確認しに警備艦隊を巡回させる程度の比較的 안전한海域である、……本来ならば。

しかし正規空母『加賀』率いる艦隊にはこの海域とは不釣り合いな緊張感が漂っていた。

相手は『財団』率いる『死神艦隊』。いくら準備を整えたとはいえ、この鎮守府設立以来最悪の敵性勢力にかわりない。しかも敵にACがいる以上撤退は不可能であり、どちらかが全滅するまで終わりは無い。この緊張は当然と言えた。

「作戦海域に到着、これより索敵を開始します。瑞鶴、準備はいい？」
「はい！いつでも行けるわ！」

正規空母『加賀』『瑞鶴』から偵察機が発艦される。暫くすると瑞鶴の偵察機が目標を発見した。

「目標と思われる艦影を発見。方角は10時、数が……六つ!? 那智さんの時よりも多い！」

まだハッキリとした姿が見えないものの艦船より少し小型の異形が二つ、那智の報告より増えていたのを瑞鶴は捉えていた。

「その程度は想定内です。瑞鶴、『吹雪式式』と第一航空部隊を発艦させて。マギーも準備を」

『ブルーマグノリア』と『吹雪式式』はそれぞれのグライドブーストを吹かして空母から発艦し、敵艦隊へ高速接近していく。空母らの航空部隊も次々に発艦しその後へと続いていった。

(よし、もう少し近づいて正体を突き止めてやるんだから！)

瑞鶴は偵察機を敵艦隊へ更に接近させていく。今の位置からでは正体不明の敵戦力の詳細まで確認ができない。そのため偵察機に備え付けの光学カメラのズームを最大にし、接近してその姿を捉えようとしていた。しかし偵察機のカメラからAMSを通して瑞鶴の視覚に写し出された光景は、空母棲鬼『加』から大量の艦載機が発艦されている様子だった。

『加』から加賀の艦隊へ通信が入る。

「流石海軍、時間には正確ですね。では予定通り”演習”を始めましょう。今度は途中

で止めたりはしません。最後まで付き合っていたいただきます」

『死神艦隊』からの宣戦布告と同時に、『加』から発艦された艦載機が瑞鶴の偵察機に襲いかかる。

「構ってる暇なんか無いわ！」

瑞鶴は偵察機を最高速で敵の航空部隊に突っ込ませ、巧みな操作で抜けさせていく。難度の高い荒業であるが、成功すれば敵の艦載機は反転に時間がかかり、その間に突っ切った偵察機で正体不明の追加戦力の情報を掴むことができる、はずだった。

しかし突如として後ろから攻撃され偵察機が墮とされてしまう。敵の艦載機にはへのローターの様なものが付いており、その場でホバリングしてすぐさま向きを反転、瑞鶴の偵察機の迎撃を行っていた。

「くっ、なんなのよあの艦載機!? 加賀さん、偵察機が墮とされたわ。敵の艦載機が妙な動きをするの! 注意して!」

その通信を加賀づつてに聞いていたマギーが瑞鶴に指示をする。

「瑞鶴、敵の艦載機の特徴を教えて。もしかしたら知ってるやつかもしれない」

敵は『財団』、となれば自分達の時代の物を持ち出しているもおかしくはない。そうマギーは考えていた。

「えっと、円盤状の胴体に四本足が付いてたわ。それでACみたいに火を吹いて飛んで

た！」

（——まさか『HELLKITE』？）

瑞鶴から敵艦載機の情報を聞き、マギーは当たりをつける。空母棲鬼『加』に艦載されているのは、マギーの『前世』の時代から普及していた戦闘機『HELLKITE』であった。胴体のローターと後ろ足の様子に付いているブースターで高速移動やホバリング、急転換などが可能なのが特徴で、前足の様な銃身から放たれるヒートキャノンやパルスマシンガンは堅牢なACの装甲にダメージを与えるほどの威力を持っている。その上、戦闘機でありながらACのライフルを一、二発程度なら耐えられる装甲まで兼ね備えている高性能機であった。

（いくら加賀達でも流石に分が悪いか……）

加賀の巧みな艦載機の操作をマギーは知っていたが、それでも所詮はプロペラ機であり艦載機の性能差が歴然としている。しかも味方艦隊まで『HELLKITE』の接近を許してしまえばその被害は甚大になりかねない。ACにも通用する火力は当然艦船にも通用する。まとりつかれたら艦船にとつてはAC並みとはいかなくてもかなりの驚異となってしまうのだ。

当初の予定では敵ACとの接触を第一目標とし、そのための戦線をもう少し味方艦隊より遠方に設けたかったがこれを無視するわけには行かない。

「加賀、瑞鶴、敵の艦載機は私の『前世』の時代の高性能機よ。予定を変更して私たちも迎撃に加わるわ」

マギーは足を止め、『ブルーマグノリア』の右腕武器『A u l — K 2 9』を以前やない整備長と夕張に開発してもらったAC用超連射型単装砲『秋霧』へと切り替える。

「吹雪」

「わかつています」

吹雪も『吹雪式』の左腕武器『A u l — K 3 7』をライフル『A u — B — A 0 4』へと切り替えた。

二機のACは両腕を上空に挙げ、まるで鳥の群れのような影を海面に作る敵航空部隊を捉える。そしてACのFCSが敵艦載機をロックした瞬間、その両腕に備えられている武器から砲弾を放ち始めた。

『ブルーマグノリア』のヒートマシンガンとハンドガン、『吹雪式』のライフルとガトリンクガンは連射力の高い兵器であり、特に『吹雪式』に備えられているガトリンクガン『A M / G G A — 2 0 6』は高い有効射程も誇る対空にはもってこいの兵器である。それらが作る対空射撃は現在鎮守府で留守番をしている摩耶、秋月が見ていたら自信を失わせてしまうほどの弾幕を形成していた。

『加』から発艦した『H E L L K I T E』は二機のACの弾幕により次々と落とされて

いく。それによりACへの攻撃を諦めたのかACの射程外へ『HELLKITE』は散っていった。

「チイツ、逃すか!」

マギーは全滅させるつもりで逃げる『HELLKITE』を撃墜していく。しかし数が多くどうしても取りこぼしがでてしまう。吹雪も同じようだった。敵艦の撤退判断が早く、マギーの想定よりも多くの『HELLKITE』が残ってしまった。

しかしACの射程外へ逃げたはずの『HELLKITE』が次々に煙を吹き出し墮ちていく。

「私たちを忘れないで欲しいわね」

加賀の戦闘機『烈風』に搭載されている九九式20mm二号機銃が『HELLKITE』のローターを撃ち抜いていた。戦闘機としてはあり得ない固さの装甲を持つ『HELLKITE』でも流石にローターは弱点であり、そこを攻撃されれば海面へと墮ちていくしかない。

「瑞鶴、思った通り回転翼が弱点よ。そこを狙いなさい」

「んなつ、加賀さん!?無茶言わないで!止まってる的とは違うんだから!」

「四の五の言わずにやりなさい!ここで仕事ができなければ“一航戦”の名折れよ」

「あゝ、もうツ!」と文句を垂れつつ瑞鶴も加賀の真似をして『HELLKITE』に

攻撃を加えていく。AC達の攻撃が功をなし敵の数が減っていたことと、何より加賀に戦闘機の操縦技術からAIの座学に至るまでみっちり叩き込まれていた瑞鶴の練度が艦載機の性能差を埋めていた。加賀と瑞鶴によりACが撃ち漏らした『HELKITE』が次々と落ちていく。

そして制空権をこちらが確保した、その時だった。加賀の艦載機が正体不明の敵が迫っているのを捉える。

「マギー、吹雪、気を付けて！不明勢力の一体が超高速でこちらに向かってきてるわ！ACよりも速い!!」

加賀からの通信に続けて、吹雪からもマギーに通信が入る。彼女の危機察知能力も何かを感じ取っていた。

「恐いもの」が近づいてきます。この感じは……マギーさん気を付けてッ!!」

吹雪の注意と自身の勘からマギーはハイブーストを吹かしその場から離れた。その刹那、

——クアアアアッ!!

『ブルーマグノリア』が元いた空間を電子音の鳴き声をあげながら銀色の機影が突き抜けていく。その機影は鋭い嘴を携えた鳥のような独特のフォルムをしており、ACでスキャンをする暇が無かったもののマギーはその正体を掴む。

「あれは、『SCAVENGER』!? 『財団』のやつ、あんなものまで持ち出してッ」
銀の怪鳥を迎撃しようと『ブルーマグノリア』はハンドガンからレーザーライフルに武装を切り替え身構える。しかしその怪鳥はAC達に見向きもせずそのまま飛び去っていった。

「まさか……狙いはこっちの艦隊!? まずい!」

すぐさま追ってあれを倒さなければ艦隊に甚大な被害が出てしまう。

だが、これ以上戦線を下げる訳にもいかなかった。まだもう一体の正体不明戦力も、そして『死神部隊』もきつとこちらに向かって来ている。今艦隊を助けに引き下がれば『SCAVENGER』を倒している間に他の戦力に接近され、戦闘を味方艦隊付近で行わなければならない。最悪味方艦隊の甲板上が戦闘領域となってしまう。

それを避けるには『ブルーマグノリア』と『吹雪式式』で『SCAVENGER』を撃破しに味方艦隊へ戻る役とこの場所に留まり残りの敵戦力の足止めをする役の二手に別れるしかなかった。しかし後者の危険度は段違いに高い。

(やれるか……いや、やるしかない!)

その役をいくら素養があるとはいえACでの出撃経験が今回含めてたった二回しかない吹雪にやらせるのは無茶といえた。だから自分が後者を引き受けるしかない。そうマギーが決心し、吹雪にそれを伝えようとしたときだった。

『吹雪式式』が敵艦隊の方向へブーストを吹かし進行していく。

「吹雪!?!」

「すいません、マギーさんは『SCAVENGER』をお願いします! マギーさんの武装のほうのアレには有効ですから!」

「いくらなんでも貴女じゃ荷が重い! 引き返して!」

「大丈夫です! やれます!」

マギーの呼び掛けを無視し吹雪は突き進んでいく。引き留めようにも時間の限界だった。

(クツ、こうなったらこの子の力を信じるしかないか……)

「全くツ!……無理しないで生き残ることを最優先に考えるのよ、吹雪!!」

「はい! 皆さんをお願いします!!」

マギーは吹雪の説得を諦め、生き残ってくれることに賭けた。そして『ブルーマグノリア』を『吹雪式式』と反対に向けてスキャンモードを起動し、グライドブーストを吹かす。同時にマギーは旗艦であり自分のオペレーターでもある加賀に通信を繋げた。

「加賀! 今そつちに敵が向かってる! AC並みに強力なやつよ!! 今から指示を出すから従って!」

「わかったわ。各艦AMS通信リンク。一時的に艦隊指揮権を『ブルーマグノリア』に移

行します。マギー、お願いするわ」

加賀の操作により各艦にマギーの通信が行き渡るようになる。マギーの声が艦隊に響く。

「まず加賀、瑞鶴、大井は後ろに下がって！敵は高火力よ、あなた達じゃ数発で致命傷になりかねない。金剛、榛名、妙高は機影が見えたら砲撃を始めて。当てなくていい、敵の注意を引き付けてちょうだい。命中率を重視して戦艦二人は三式弾を装填。敵は攻撃時に跳び跳ねる癖があるわ、接近されたらそのタイミングを狙って！……必ず駆付けける、だからそれまで何とか耐えて！」

マギーの鬼気迫る指示が艦隊に迫っている脅威の大きさを表していた。艦隊に緊張が走る。

「Heyーマギー、心配しすぎはnoなんだからね！No problem デス！ 私たちのことも少しは信頼してヨ」

金剛がマギーに一言放つ。その明るい口調は艦隊の皆と、必死に戻ろうと焦っているマギーの緊張を少しばかりほぐした。

「……ありがとう」

マギーは礼を述べ、ACの操縦に神経を集中させる。艦隊もマギーの指示通りの陣形へ移行を終了した時だった。

重巡『妙高』の電探が猛スピードで接近してくる敵を捉える。

「皆さん、目標が接近してきます！」

「OK! こっちも捉えました! 榛名も準備はOKですか!？」

「榛名は大丈夫です! お姉さま!」

「Yes!! じゃあ砲撃をstartしな! Fire!!」

「第一・第二主砲、斉射、始めます!」

「主砲! 砲撃開始!」

向かってきた『SCAVENGER』に三隻の艦が砲撃を始める。重巡『妙高』から高精度の20・3cm(2号)連装砲と61cm酸素魚雷が次々と放たれ、金剛型戦艦二隻から三式弾による対空弾幕が張られる。海上、空、どちらにも逃げ場のない砲撃であった。

しかし『SCAVENGER』は突撃形態を解き、海面に噴出口を向けて高く跳躍する。そうして妙高の攻撃を回避した後、近信管に変更されている三式弾から散弾の様に放たれる焼夷弾をハイブーストを駆使し器用に回避していった。

「Shit!! 分かっててもここまで綺麗に避けられると流石にshockデスネー」

金剛が『SCAVENGER』の動きに舌打ちをする。妙高との即席の連携とはいえ、ここまでいとも簡単に避けられるとは思っていなかった。成程マジギがあそこまで

危険視するわけだ、と金剛は納得する。

しかし当たらないからといって攻撃を続けたい訳にはいかない。装甲の厚い自分達に注意を引き付けることが目的であるため、引き続き連携を絡めた砲撃を行っていく。

そしてその目的通り『SCAVENGER』は金剛達目掛けて接近していた。そして突如としてその口から青い光弾を放つ。既に『SCAVENGER』はその攻撃の射程内まで近づいていた。

光弾は戦艦『榛名』に直撃する。

「ぎゃあーッ……被害の確認をー」

榛名が艦体にスキヤンを走らせる。光弾は四つ付いているうちの主砲の一つに直撃しており、その主砲は使い物にならなくなっていた。しかも運悪く装填されていた砲弾が熱により誘爆し、周囲の区画に火災まで発生している。

榛名は急ぎ戦艦『榛名』の消化装置を起動させ隔壁を閉鎖し、被害を最小限に押さえる。しかしそれにより攻撃の手が緩んでしまった。

連携砲撃で榛名が抜けた穴を掻い潜るように『SCAVENGER』は再び突撃形態をとり艦隊に急接近する。そして艦橋からその独特の姿を確認できるほど戦艦『榛名』に接近し、レーザーキャノンとミサイルを放った。

「ぎゃあああー」

三連射で放たれたレーザーキャノンにより艦橋前の二つの主砲が潰され艦体が大穴が空く。そしてミサイルにその周囲を兵装も含め吹き飛ばされた。不幸中の幸いか辛うじて機関部までは被害が及んでいなかったものの、戦闘が継続困難な状態にまで『榛名』は追い込まれてしまう。

そして『SCAVENGER』は『榛名』に止めを差すべく高く跳躍し、狙いを定めた。

「Hey!!やらせませんヨー!!」

『SCAVENGER』に金剛から放たれた三式弾が直撃し、三千度にまで達する榴散弾が怪鳥を丸焼きにする。マギーから『SCAVENGER』が攻撃する時に跳躍する癖を聞いていた金剛は怪鳥が榛名から離れる隙を狙っていたのだ。

炎に包まれた怪鳥は海面へと落下し大きな水しぶきをあげる。跳ね上がった水が三式弾により炙られた装甲を冷し、ジュウジュウと音をたてながら水蒸気へと変化した。その煙の中から現れた『SCAVENGER』の装甲は熱耐性が低いこともあり変形している。

「これでFinish!な訳無いデショ!!」

戦艦『金剛』がここぞとばかりに『SCAVENGER』に砲門を向ける。しかし『SCAVENGER』はそれを避けるようにハイブーストを吹かし高速で移動、『榛名』の

甲板へと降り立った。

無論『榛名』に止めを差すわけでも盾にするわけでもない。自身に被害を与え撃破優先度が最上位となった戦艦『金剛』を確実に仕留めるべく安定した足場に乗る、狙いを定めるためであった。

『SCAVENGER』は『榛名』の甲板の上で機体を頭中心に回転させ反転、そして足から鳥の爪のようなブレードを展開する。突撃形態、その嘴を『金剛』の艦橋へと向けた。

その嘴の先が自身を狙っていることを理解し、金剛の背中から汗が吹き出る。『SCAVENGER』が狙いを確認でもしたのかその目を赤く光らせた時だった。

一筋の光線が怪鳥の嘴を穿つ。その熱量と衝撃に装甲が耐えきれず嘴がちぎれ飛んだ。

——クアアアアッ!?

『SCAVENGER』はうめき声のような電子音を上げ、堪らないとばかりに『榛名』から飛び立つ。しかしそれも考慮済と言わんばかりに12発のヒートミサイルがその後を追いつ炸裂した。ミサイルの先端から噴き出すメタルジェットが深々と『SCAVENGER』の装甲に突き刺さる。

「どつやら間に合ったみたいね」

「Just in time!!冷や汗出ちやいましたヨ、マギー!!」

ギリギリ間に合った『ブルーマグノリア』の猛攻により深手を負った『SCAVENGER』は再び撃破対象を切り替え『ブルーマグノリア』をそれにする。

嘴は吹き飛ばされたもののまだレーザーキャノンは生きており、『榛名』にしたのと同じように三連射のレーザーとミサイルを『ブルーマグノリア』へ向けて放った。

しかし当然ACと戦艦では挙動もサイズも全然違う。『ブルーマグノリア』は右腕のレーザーライフルにエネルギーを溜めながら最小限の動作でそれを避けてみせる。一対一の状況であればこの手の単調な攻撃はACに当たりはしなかった。

——クアアアアアアツ!!

『SCAVENGER』はまるで苛立っているかのように電子音を響かせ、両腕に付いているパルスマシンガンを『ブルーマグノリア』に向けて乱射してくる。

「苛立ってるのはこっちよ!!」

『ブルーマグノリア』は右腕のレーザーライフルを放つと同時にハイブーストを吹き、パルスマシンガンの射線上から消える。そして『SCAVENGER』の横合いからヒートミサイルとヒートマシンガンを浴びせかけた。レーザーライフルは『SCAV

『ENGER』の左足を吹き飛ばし得意の跳躍を潰す。そこへCE弾が雨あられと浴びせられ、次々に装甲へ食い込むメタルジェットが『SCAVENGER』の右半身を千切り飛ばした。間接各所から青い爆発が起き、バチバチと放電している。しかしそれでも怪鳥は沈まない。

「いい加減これで終わり」

『ブルーマグノリア』は再チャージが完了したレーザーライフルを『SCAVENGER』に向ける。そして放たれた光弾がその頭を貫いた。数瞬後、出来た穴から噴き出すように大きな爆発が起こりついに怪鳥は事切れ海へと沈んでゆく。

「Ye ar! 流石マギーですネー!!」

金剛がマギーに賛辞を送るがマギーはそれを無視して加賀へと通信を繋ぐ。"もう一つの懸念事項"があるため勝利の余韻に浸っている暇は無かった。

「加賀、吹雪は今どうなってる!?!」

こちらの『SCAVENGER』一体なんかと違い、不明戦力及び『死神部隊』という危険極まりない戦力を相手にしなければならぬ吹雪の心配をする。加賀の返事は期待していたものと違っていた。

「マギー……それが……」

口籠もった返事。普段であれば冷静に受け答えしてくれるはずの加賀の反応に、マ

ギーは最悪の結果を想像してしまう。

「クッ………加賀、落ち着いて事実だけを述べて……」

やはり今のあの子じや無理だったか……。

マギーは後悔の念にかられ操縦桿を握りしめる。しかし加賀からの報告はマギーの想像と全くの逆だった。逆だったからこそ加賀が口籠もっていた理由を知る。

「……『吹雪二式』は不明戦力、……戦艦棲姫でしたが、それを撃破。続けて『死神部隊』も撃破……。損傷は軽微、今敵艦隊に向かっているわ……」

加賀の声には困惑の感情が混ざっていた。吹雪の圧倒的な戦果を艦載機越しに見ていたはずなのに今だに信じられないといった様子だった。そしてただ一言こぼす。

「これが………『黒い鳥』……」

第二十八話 「EXTRA MISSION」 死神艦隊撃破―06―

加賀さんから敵が接近している通信を受けた時、「怖い感覚」がマギーさんに迫っている感じがして、急いで『ブルーマグノリア』へと通信を繋げた。

その後すぐマギーさんがいた場所を銀色の怪鳥が突き抜ける。幸いというかやはりというかマギーさんは無事だったけど、銀色の怪鳥はそのまま味方艦隊へと向かっていつてしまった。このままでは皆が危ない。しかしこれから来る敵のことを考えると、二人して後ろに下がるわけにはいかなかった。

私は自身にインストールされた「傭兵の戦闘記録」を探る。先ほどの怪鳥は『SCA V ENGER』というものらしい。武装はレーザーキャノン、パルスマシンガン、ミドルミサイル、あとさつきみみたいな突撃攻撃をしてくる。高火力を持ちつつ高機動と堅牢な装甲を併せ持つ自律兵器。

ただし弱点が無い訳じゃない。単純に硬い装甲と曲面加工によって物理的な攻撃、KEに分類されるものにはめっぽう強いが、熱で融解させるTE、成型炸薬弾のCE、二つに分類される攻撃には対策が取られていない。

つまりその二属性を主兵装としている『ブルーマグノリア』がああ怪鳥にとって天敵だった。

仲間への被害を少なくするには、いかに手早く仕留めるかが重要だ。ならば『スカベーンジャー』は『マギー』に任せるのが最適といえる。

だから「俺」はその状況を作り出すべく『マギー』が指示を出してくる前に前へ出た。

マギーさんに「皆さんをお願いします！」と返事してから気付く。私……何をやってるんだろう？ 私が選択をした役割は、正体不明戦力…恐らく『SCAVENGER』に匹敵する何か』と、那智さんたちを苦しめた『死神部隊』の相手だ。ハッキリ言って私が勝てるわけがない。殺されるに決まってる。

（嘘つくなよ、本当は死ぬなんて全く思っただけだ……）

——そう、声が聞こえる。

その声は目の前にいる白いACから発せられていた。

「ストレイド」の幻影、最近私の目の前にずっとこのACがちらついている。

始まりはマギーさんとの訓練だった。最初は白いモヤのような何かが見えていて、それが何かを理解していなかった。しかし自分の技量が上がっていくにつれ、その姿がハッキリとしていく。『吹雪式式』と同じ形、しかし仲間が施してくれた制服を模した塗

装がないAC。それが『吹雪式』の前の姿、『黒い鳥』の駆る『ストレイド』の幻影だと理解するのにその時間は掛からなかった。

それもそうだ、その幻影はいつも私の”先”にいたから……。訓練でマギーさんの攻撃を受けてしまったとき、その影は当たらない位置にいた。マギーさんにブレードで切りかかった時、私は避けられてしまったがその影は当てていた。私にインストールされている戦闘記録、それを証明する強さを持つ幻影は「ストレイド」以外あり得なかった。そしてどんなに訓練を重ねても、私はその最強のイメージに届くことは無かった。

その『ストレイド』の幻影が私に語りかけてくる。こんなことは今までになかったのに……。

（——憎いんだろ？許せないんだろ？彼奴らの存在が。わかるさ、俺は君だから）

そうだ、確かにその通りだ。私はあの人達が……『財団』が許せない。

あの人は私の仲間を傷付けた。その誇りを踏みにじった。きつと放っておいたら、いつかきつと、もつと多くのものを傷つけにくるだろう。私の守りたいものを……そんなの許せるわけがない。

（そうだ、だから”言つてやろう”。その為に前に出てきたんだらう？後ろはマギーに任せてさ……）

段々『吹雪式』が『ストレイド』の幻影へと近づいていく。訓練では埋めることの

できなかつた距離が縮まっていく。

それと同時に『黒い鳥の記録』が『記憶』として馴染んでくる感覚がしていた。『ただの情報』に感情という彩りが加わり『思ひ出』となつて染み込んでいく、”俺”と”私”の境界が無くなっていく、そんな感覚。

そして『財団』の名を那智さんから聞いた時、私の中に芽生えた漆黒の意思…それが何か、自分に足りていなかったものが何か、今…心で理解した。

それを口に出して表明する。

『財団』、あなたが全てを…私の大切なものまで滅ぼそうというのなら——』

「貴方は…貴方達は、私の敵です！」

敵を打倒するという、強い強い意思。私の全てがそれに向けて研ぎ澄まされていく。——もう目の前に『ストレイド』の幻影はなかった。その影に『吹雪式式』が完全に重なっている。

見えなくなつた影の代わりとでも言うように、ひとつ目の異形が私の前に迫つて来ていた。その赤い目は離れていながらもギョロリとこちらを睨み付けている。

瑞鶴さんから通信が入る。

「吹雪、不明戦力の照合が完了したわ。あれは戦艦棲姫よ。強力な近接攻撃をしてくるらしいわ、距離をとりながら戦つて！」

申し訳ないけれどそれは却下させてもらう。戦艦棲姫——深海棲艦に乗っ取られていないからだの『T〇〇605A』になるけれど——その後方から強い圧力を感じているから。『死神部隊』、あの人達ももう近くまで来ている。だから『T〇〇605A』の撃破に時間をかけてしまつては合流され状況が不利になるだけだ。だから私はあえて前に出る。

「ちよつと吹雪！聞こえてるの!?近寄ると危ないつて言つたじゃない！」

瑞鶴さんを無視し続けるのも良くないので「問題ありません」と一言だけ告げ、目の前に集中する。

『T〇〇605A』の間合いまで近づくと、それはキビキビと両足を動かして体を縦に広げた。そしてその両足にブースターの火が灯る。

極限にまで高められた私の集中力がその動作をスローモーションで捉えていた。それに合わせ、刻まれている記憶のタイミングでこちらもブースターを思いきり吹かす。そして『ストレイド』の幻影が描こうとしている軌跡に寸分の狂い無く『吹雪式』を重ねた。

『T〇〇605A』はまるで水面を跳ねる小石のように高速回転しながらこちらに向かつてくる。こちらにぶつけようとしている足の両端にはスパイクが付いており、それに速度と質量を載せてぶつけられればどんな装甲でも耐えることは出来ない。

だが似たような物をACだって持っている。『T00605A』が突撃してくる軌道上に私はそれを差し出した。ACの左足に備えられている装甲板、それは最強の盾であり、それに速度と質量を加えれば『T00605A』の突撃と同じ最強の矛になる。

『T00605A』の突撃にブーストチャージでカウンターをしてやった。『吹雪式』は振り下ろされるスパイク付きの足の更に内側へと掻い潜り、特徴的な敵の目玉を蹴り抜いた。

双方の速度が相まって、その威力は跳ね上がる。一撃必殺へと昇華されたブーストチャージは『T00605A』の目玉ごと胴体を粉碎し、『T00605A』は力無く海へと沈んでいった。

「……こんなものかな」

沈んでいく『T00605A』を横目で見ながら機体にスキャンを走らせる。流石にこちらにも凄まじい衝撃がかかったので破損箇所がないかチェックした。幸い表示はすべて「All Green」、無事のようにだ。

「うん、まだ戦える」

言うと同時にペダルを踏み込みハイブーストを後ろに吹かす。すると目の前に二筋の線が走った。

わかつてた。放たれる直前に“怖い感じ”が膨らんでいたから。今のが『M』という

ACのスナイパーライフルだろう。どうやら『死神部隊』が交戦距離まで来たみたいだ。弾の飛んできた方向を見ると、二つの黒い機影をハッキリと確認できる。

「今のを避けるか……勘が良い、まるで獣だな。気を付けろ『V』、これは面倒なことになるぞ」

「ハッハー!! 『首輪つき』ってわけか!? 上等じゃねーか、『M』。望外だぜエエツ!!」

『M』と呼ばれるタンク型ACから通信要請が来ていた。これから殺し合うのに悠長だなあ、と思いつつそれを繋ぐ。するとガトリングガンの銃声よりもけたたましい声が『吹雪式』のコックピット内に響き渡る。

「ハアツ!! さっきの見てたぜ! 最高だお前!! 最高にイカれてやがる!!!」

これは誉められてるのだろうか? 貶されているのだろうか……?

繋げた私もあれだけど、これだけのことを言うために通信してくる相手もあれだ。まともじゃない。

「……貴方達にだけは言われたくありません。あと貴方の声、耳障りです。その存在も……」

そう返して通信を切った。後はあの人達を消すだけだ。

とはいえやつぱり『死神部隊』と言うべきか、なかなか簡単にはいかなさそう……。海上という障害物がなにも無い空間で、オートキャノン両手持ちのタンク型ACと正面きつて戦わないといけない。しかも後ろからスナイパーライフルと大型ミサイルの援護つきだ。相手がタンクだけだったらこちらの機動力を生かして回避しながら戦えなくもないけれど、後ろの重二がそれを許してくれないだろうな。

明らかに二対一を意識した連携、恐らく最初から『SCAVENGER』で私とマギーさんを引き離す算段だったんだろう。現状があちらの思惑通りなのが面白くない。

私はそれを打破すべく、過去を思い出す。

この『死神部隊』に似た相手……。タンクが前衛だと『テオドラさん』と『ベッツィ・ロスさん』のコンビ辺りだろうか……。『テオドラさん』は重二ではなく軽二だったけど、タンクを主体に展開する戦法は同じだ。あの時『傭兵』はどう戦ったつけ？

「ああ、そうだ……。さつきと一緒だった……」

——思い出し、苦笑する。

あの時は軽二の『テオドラさん』を誘い出そうとしたけれど、結局面倒になってさつきと同じ方法で先にタンクの『ベッツィさん』をやったんだった。今回もそうすることに決めた。多少の被弾は覚悟しなくちゃだけど、ダラダラ撃ち合うよりは合理的だ。

『死神部隊』の倒し方を決め、それを実行すべくグライドブーストを吹かしてタンク型

AC『V』に特攻する。スナイパーライフルを警戒して機体を左右に小刻みに揺らしながら、敵との距離を一気に詰める。

『V』は当然のごとくオートキャノンを放ってくるが、今の距離であれば弾が散り散りになっていることもあり大した威力ではない。『吹雪式式』の装甲に当り跳弾する音も無視してそのまま突っ込む。すると、オートキャノンの弾幕の中に巨大な黒い飛翔物を見付けた。

「やっぱり織り混ぜてきた」

『M』と呼ばれる重二型ACの大型ミサイル『Su—G—Q01』が『V』の弾幕に紛れてこちらに迫っていた。瞬時にスキャンモードを戦闘モードへ切り替え、ガトリングガンでCIWSの代わりのように放ちながら機体の進行方向も変える。

瞬間、目の前で巨大な爆発が起きる。ミサイルの爆発に巻き込まれぬよう右に方向転換していた機体を、そのまま『V』を軸に反時計回りに回り込む軌道に乗せた。

『吹雪式式』は装甲を犠牲にして機動力を得た機動重二と呼ばれる特異なアセンをしている。おかげで重二の特長である防御力が半端なのは痛いところだけ、代わりに軽量二脚相手でも追従できる旋回能力を持っている。

近距離でその旋回能力にグライドブーストの速度を加えれば、タンク型ACのロックを振り切りつつそのまま接近することが可能だ。渦の中心に流れ込む様に『吹雪式式』は

『V』との距離を詰める。

『V』はやぶれかぶれとばかりにオートキャノンを乱射するが、全て私の横を通り過ぎていくだけだ。

そして『V』との距離が0になる瞬間に合わせて、怪鳥を狩った時と同じように左足で蹴り抜いた。

「沈め！」

いくら装甲の厚いタンク型ACといえども、重二のブーストチャージを防ぐことは不可能だ。『吹雪式』の蹴りは『V』の左半身を千切り飛ばす。『V』が酷くノイズの混じった声で叫ぶ。

「ガツガツガツさいんたガムP……こう……だagan……mdぜ、おま……え！」

ああ、そうだった。普通のACなら終わっていたけれど、この人たち普通じゃなかった。

”人でない”ACは限界を越えて稼働できるのを思い出す。

「でも、これで終わりです」

ガトリングガンとライフルの銃身を『V』に向ける。

その瞬間を狙っていたつもりか、再び『M』から放たれた狙撃をハイブーストを後方へ吹かして避ける。そして『V』の赤熱化し火を吹いている断面に、向けたままの銃身

から銃弾を浴びせて”鎮火してあげた”。

「あとは貴方だけです」

『M』にFCSのロックを切り替える。ハッキリ言って後は消化試合だ。主力のいなくなった援護特化型など恐ろしくも何ともない。

「やはり面倒なことになったか……」

そうぼやいた『M』は両手のスナイパーライフルをパージしバトルライフル『ARAGANE mdl. 2』へと切り替えた。

どうやら応戦する気はあるみたいだ。でも貴方の機動力ではバトルライフルの有効射程まで距離を詰められないだろうに……。確かに威力が距離減衰するタイプの弾ではないが、その弾速の遅さから近距離でないところらに当りはしない。

そして当然、そこまで接近を許すつもりも、容赦するつもりも私は無い。オートキャノンに妨げられてしまうこともあり温存していた両肩のミサイルユニットを解放し、『M』との間合いを固定して、両手、両肩の全火力を浴びせた。

対して『M』のバトルライフルは私に当たらず、頼りの綱の大型ミサイルもガトリングガンの弾幕によって落とされる。

何の面白味の無い一方的な銃撃戦が繰り広げられ、そしてあつという間に終わった。

「私では……(ハ)までか……」

こうなることを予想していたのか、ヤケを起こして突撃してくることもなく『M』は静かに海へと沈没していく。残るは『死神艦隊』のみだ。

各兵装の残弾も『死神艦隊』を相手するには充分残っているし、このまま進撃してしまおう。そう考え敵艦隊に向けてグライドブーストを吹かし、単身突撃していく。

ある程度近づくと『死神艦隊』の弾幕が容赦なく降り注いできた。けれどそれを掻い潜りながら接近する。『死神部隊』の二人に比べれば可愛いものだ。そして艦隊に取り付き敵艦の兵装を破壊しながら楽々と空母棲鬼『加』の甲板にまでたどり着いた。そして艦載機発艦用のエレベーター部分をレーザーライフルで撃ち抜く。これでもう『加』は無力だ。敵艦隊に反撃する力はもう残っていない。あとは――

「――素晴らしい、まったく驚異的だ」

急に男の声が通信機から聞こえてくる。やたらと痛に障る、人を小バカにしているような微妙に甲高い声……よく知る『敵』の声だ。

「実に興味深い……。まるで本当に“キミ”がそこにいるようだ。まさかここまで上手く再現できるとは思ってもみなかったよ」

「今回のこと、まさか本当にそれだけが目的だったんですか？」

「ああ、そうだよ。『ブルーマグノリア』だけじゃ対処できない事態になつてね。そうしたらキミが都合良く現れてくれたからさ、ちよつとお手伝いをね」

相変わらずふざけたことを言う人だ。でもマギーさんだけだと対処できない事態つて……？ マギーさんは深海棲艦を倒すためにこの『財団』が直々によこした人だ。つまり深海棲艦との戦争に『ブルーマグノリア』だけでは対処できない脅威が潜んでいる、ということだろうか？

「……なにがあるんですか？」

「いずれ分かるさ。僕はね、キミと『もう一人』、そのどちらが本物なのかを知りたいんだ。ただキミが勝つてくれた方が僕としては都合が良いかな。だから個人的にこうして応援してるんだよ……そして続きをしよう。この戦争が終わったら、人と人が殺しあう『本場の戦争』が訪れる。そして、今度こそキミを否定してみせる。人間に、可能性など存在しない。それを証明してみせる……！」

——くだらない。いつまでそんな妄執に囚われているのだろうか、この人は。

『もう一人』というのが気になるけど、きつと『財団』はこれ以上情報を漏らすことはないだろう。だから、私も言いたいことだけ言わせて貰う。そのためにここまで来たんだから。

「続きなんてありません。もうあなたの知る『傭兵』はいませんか」

「……じゃあキミはなんだっていうんだい？」

「私は私です。『傭兵』じゃない。白鳥鎮守府所属、艦載機『吹雪式式』のパイロット。艦娘の吹雪。それが貴方の敵の名です」

それを証明するように、瑞鶴さんの爆撃を筆頭に味方艦隊からの砲撃が空母棲鬼『加』以外を襲う。『加』にも大井さんの甲標的の魚雷が直撃したと思われる揺れが生じていた。私は敵艦隊を襲撃していた時に敵をスポットして、そのスキャン情報を瑞鶴さんに送信していた。その情報を受け取った瑞鶴さんがオペレーターとして各艦に展開し、精密射撃を可能にするスポット砲撃が今届いたのだ。これが私なりの回答だった。

——私は『傭兵』ではない、『艦娘』だ。そしてあなたの『新しい敵』だ。

確かに私には『彼』の記憶が自分の物のように馴染んでいる。『ストレイド』と似た動きをすることが出来る。それでも、そういう『吹雪』が私だ。『財団』への敵意は私自身のものだ。挿げ替えられてはたまらない、貴方という脅威を焼き払うのは「艦娘の私」なんだ。

味方に攻撃を頼んだのはその思いの表れだった。

「そう……いいよ、わかった。この戦争を終わらせることができたら、吹雪、キミを認めよう。キミが僕の敵だ。そしてキミを、キミ達を抹殺する。………その評決の日を楽しみにしているよ……」

『財団』からの通信が切れる。周りを見ると味方の攻撃により敵艦隊はほぼ燃え落ちていた。私は『吹雪式式』の右腕の兵装をレーザーブレード『ANOTHER MOON』に切り替え、『財団』と決別を済ませるように空母棲鬼『加』の甲板に一閃を加える。刃渡り20m近くに及ぶ黒刃は容易に空母棲鬼の機関部にまで届き、大井さんの雷撃で底に穴が開いていたのも相まって、『加』は切り込み口から二つに折れて海へと沈み始めた。念のためリコンを飛ばし敵艦隊の全滅を確認すると、私は沈んでいく『加』から飛び立っていった。

第二十九話「木蓮を縛るもの」

加賀から吹雪が『戦艦棲姫』と『死神部隊』を撃破したと聞いた時、私自身に問わずにはいられなかった。

（私なら勝てた？もうブランクも何もない、今の私なら……）

答えはきつと「否」だ。私は以前の出撃で戦艦棲姫を二体相手したとき、一人で倒すことができなかった。確かに武装の相性というのもあった。けれど、吹雪はそんなの構いなしに、それよりも脅威的な相手を瞬殺してしまった。

そんなことができるのは、私の知りうる限りではたった一人しかいない。『黒い鳥』……『彼』だけだ。

つまり吹雪は『財団』の思惑通り、完全に”目覚めて”しまったのだろう。

——あちらの損傷は軽微、弾薬もAC一体分ぐらいは残ってる。こつちと条件はそんなに変わらない。

左手の疼きと共に、そんな囁きが聴こえる。

だからなんだ。それがどうしたというんだ。加賀にも言われただろう、敵は『死神艦隊』だ。吹雪じゃない。

——でも『黒い鳥』は私の自由を縛る敵よ。越えるべき存在よ。いいの？今しかないわよ？

黙れツ。だからなんだ!?!なにが今しか、だ!?!競うだけならシミュレーターがあるだろう!?!あの時とはなにもかも違う。私は何を焦ってる!?!

私は何度も左手をシートへと叩きつける。何度も、何度も……。

「マギー、吹雪の支援には向かわないの?」

加賀からの通信に我に帰る。そうだ、確かにまだ『死神艦隊』が残っている。普通なら支援に行くべきだ。

……しかしきつと、今の私が行くべきではない。何故かは考えたく無かった。

「……もうこの戦場に私の出る幕は無いわ。行っても資材の無駄よ」

そう言つて誤魔化する。半分は本当のことだ。吹雪が『黒い鳥』として目覚めた今、あの子にとって『死神艦隊』ごとき敵ではない。実際、艦載機を通してその強さを見ていたからか、加賀も「: : : : そうね」と言つて追及してこなかった。私は正規空母『加賀』の甲板へと帰投する。

しばらくすると瑞鶴から通信が入ってきた。

「加賀さん、吹雪からスポット砲撃の要請が来てるんだけど……」

「そう……。各艦通達、これより旗艦を加賀から瑞鶴へ移行、AMSリンクの切り替えを願

います」

「ちよつとちよつとちよつとちよつと!?! 加賀さん、いきなりなに言ってるの!?!」

「吹雪は貴女の艦載機でしよう? なら貴女がやりなさい」

「でもやり方聞いただけで練習だつてしてないのよ!?!」

「あちらが言つていたでしょう。これは”演習”だと。丁度いいじゃない。貴女ならできらわ……」

加賀はそう伝えると本当に艦隊指揮権を瑞鶴へと移し、後は仲間たちの動きを見守るだけだった。艦隊が攻撃を開始し始めた時もただ眺めているだけだ。

「……加賀、貴方は参加しなくていいの?」

「もう私の出る幕は無いわ、資材の無駄よ」

「……それ、当て付けのつもり?」

「マギー、私は事実を言ってるだけよ。それに拗ねているのは貴女でしょう? 子供みたく……」

「誰がッ……!」

言葉に詰まる。加賀の言う通りだ。結局のところ、私が倒せないだろう敵を吹雪が倒した……また『黒い鳥』に勝てなかった。それが悔しいだけだ。負けたままにいるのが嫌で癩癩を起こしている。これでは子供と言われても仕方ない。

「まるつきり子供だなあ」、そうファットマンに言われたときから、私はまるで成長していない……。

そんな私をなだめるように、加賀は言葉が続けた。

「……マギー、貴女自身がどう思ってるか知らないけれど、私は決して貴女が吹雪に劣っているとは思わないわ」

知らないと言いつつ、私がどう思っているか良くわかつている事を言う。そういえば最初の出撃の時から、加賀は私に対する勘が鋭かった事を思い出す。私の体が『赤城』のせいだからなのか？あの時も同じように落ち込んでいた私に声をかけてくれたっけか……。

「貴女がいなかったら、少なくとも榛名と金剛は今ここに居なかったわ。吹雪も貴女を信用していたから後ろを頼んだでしょう。……貴女は紛れもなくこの鎮守府の、私の”一航戦”よ。もうここに欠かせない存在、それは自覚して……」

……確かに私はこの鎮守府が居心地がいいと思っっている。皆のことを仲間だと思っ

加賀と一緒に食べる食事は美味しいし、那智たちと酒を呑みかわすのは楽しい。金剛が提督とのティータイムを得るために秘書艦の私たちに振る舞ってくれるお菓子も日々の楽しみの一つだ。

艦娘『赤城』、それに私の魂が上書きされて出来た今の私。その私の中にある『赤城の残滓』から「ちよつぱり私も混ざっている」と言われたことがある。そのせいもあるのか、今の生活にフアットマンと彼との三人家族だった時と同じ温もりを感じていた。気付けば、ここが、皆が、私の大切な存在になっていた。その自覚はあった。

そうした“日常”を私は自らの手で今日も守ったんだ。

(それでいいじゃないか)

そう自分に言い聞かす。私は何一つ負けてなどいない。目標は達成している、だからこれでいい。これでいいはずなんだ。

——それで、私は私を赦せるの？ 赦せないから、私は“彼ら”と決別したのではないの？

また声が聴こえる。それでも、それでもと……なにかが再び燃え始めている。

「加賀、それでも……それでも私は——」

「こちら吹雪、敵艦隊の全滅を確認しました。これより艦隊へと帰投します」

吹雪からこの戦闘が終わったことを知らせる通信が入る。気付けば味方も砲撃をやめていた。

「Congratulation! 私たちのvictoryデース!」

金剛が勝どきをあげ、それを皮切りに艦隊が湧きはじめる。

「どーよ、加賀さん！ちゃんとこなしてみせたわよ!!」

瑞鶴も上手く艦隊に指示できたのが嬉しいらしく、ドヤ顔なのが透けて見えるような上機嫌な声で加賀に話しかけてきた。

「……そうね、いい艦隊指揮だったわ。次もまたその調子でお願いしたいわね」

「……うそ、加賀さんがマジで誉めてくれた……」

「Oh!?これは storm が来るネ……」

「私だって誉めるときは誉めます……」

艦隊内に皆の笑い声が響く。もはや闘争の空気は霧散していた。真面目な妙高ですら「皆さん、そんなに笑っては加賀さんに失礼ですよ」と言いながらも、少し笑っている。

——興が削がれた。

いや、これでいい。左手の疼きも、あの嘔きも、今はもう鳴りを潜めていた。あのままだったら、きっと私は……。だから、これでいいんだ……。

そう自分に言い聞かせながらも、私は仲間たちの会話に加わる気にはなれなかった……。



母港に着き、各員が補給のため自分の艦をドックへ入れる。戦艦『榛名』は大破、『吹雪式』は軽微の損傷を受けていたため工廠の修理装置入り、いわゆる『入渠』するこ
ととなった。

吹雪がACから降りると、何も無い所で転びかける。瑞鶴が駆け寄り吹雪を支えた。

「大丈夫!?吹雪!」

「だ、大丈夫です。少し立ち眩みしただけですから……」

そう言つて吹雪は瑞鶴を退けようとするが、その顔からは血の気が引いており、体調が優れていないのは誰の目から見ても明らかだった。

その様子を見てマギーは瑞鶴に指示を出す。

「瑞鶴、吹雪をそのまま医務室にまで連れてつて。……吹雪、後の処理は私がやっておくわ。休むのも仕事よ、今は休息を取りなさい。……今日は、お疲れ様」

吹雪は渋い顔をしながら、「済みません、後はお願いします」と言つて瑞鶴と共に医務室へと向かつていく。

(……もしかしたら「目覚める」のが早すぎたのかも)

吹雪の様子を見てそう思う。かつて『彼』が力の片鱗を見せ始めた頃、言っていたことがある。

『マギー、何だか周りが遅く感じるんだ』

いわく、集中すると周囲がスローモーションになるらしい。そして敵がどう動くのか予想でき、自分がどう動けばいいか何となく分かるのだとか……。私もそういう経験が無いわけでもないが、それを意図して発現し、持続することは不可能だ。恐らく『素養』と『経験』が合わさることで実現する、『黒い鳥の力』の一つなのだろう。

吹雪は今回の戦闘でその二つの要素が揃い力を発揮することができた。しかしきつと、体が追い付いて来ないのだ。

それほど感覚を研ぎ澄ませれば当然強い負担がかかる。『彼』は徐々に力を着けることで脳や体、精神力もそれに適応していったのだろうが、吹雪にはそれが無い。恐らく強化人間の体で無理矢理耐えているだけだ。

その予想は私にある懸念を抱かせる。そしてそれは的中していた……。

『吹雪式』は装甲が多少損傷した程度の軽度のもので入渠の時間は大したことなかった。わたしは自分の愛機と一緒に弾薬の補給や動作チェックを行う。『吹雪式』のコックピットに入り整備をしていると、まるで“彼”の手伝いをしていた時を思い出した。そういえば彼にACのことを色々叩き込んだもの私だったか……。そのときみたく、今度は吹雪に整備の仕方も教えなくては、と思う。ACのパイロットは整備も含めて色々できて一人前だ。あの子にはまだ覚えてもらうことが一杯ある。

『あれ、……どうすんだっけ？ マギー』

『ああ、それは……』

まるであの時のようだ。『彼』がまだ雛鳥だったころ……その時は彼に才能は感じていたものの『黒い鳥』になるとは思つてもいなかった。もし『彼』がそうでなかったら……私には一体どんな未来があつたのだろうか？

だが、そんな未来は、『もしかしたら』は訪れなかった。再び生を享けたその先で、私の前に再び『黒い鳥』は現れた。今の状況はまるで再現だ……あの時の。

(いいや、違う。条件も何もかも……。『比べっこ』ならいつでも出来るじゃないか……)

そこである懸念が再び浮かぶ。それを確かめたくてA Cの整備を終えた私は、いそいそと吹雪のいる医務室へ向かった。

医務室に着いたものの、もう結構いい時間なことを思い出す。外を見れば真つ暗で、医務室ももう消灯されていた。ゆっくりと中に入りベットの横にある部屋を覗き見る。案の定、吹雪はもう寝ており、起こさぬよう静かにベッド横の机に置いてあつた診断書を手にとつた。そこには『極度の緊張による』やら『脳波の乱れが』などそれっぽいことがつらつら書き並べられている。

(要は『過労』か、やっぱり……)

「マギーさん……?」

診断書を机に戻した時に、ベッドから声がかけられる。

「ご免なさい、起こしてしまつて。吹雪」

「いえ、別に……。たまたま目が覚めちゃっただけですから」

吹雪は眠たそうな目を擦りながら上体を起こした。

「大丈夫？無理しなくていいわよ？」

「大丈夫です。始めてACに乗った時と比べれば全然ですし……」

「そう……。ああそうだ、ACの整備、もう済んでるから。大した損傷じゃ無かつたから時間もかからなかつたわ」

吹雪の顔が明るくなる。

「ありがとうございます、マギーさん！それなら直ぐに訓練できますね。私も明日には復帰できますのでよろしく願います！」

やはり今回の戦いで何か掴めたのだろう。それを確かめたくてウズウズしているようだった。それは私も同じだ。この子の成長を早く見たい。しかし先程から確認したい懸念事項があつた。それを吹雪に尋ねる。

「……一つ聞いてもいいかしら？」

「なんですか？」

「あなた……『戦艦棲姫』や『死神部隊』と戦っていた時のあの力……あれを自在に引き

出すことはできそう?」

——吹雪の顔が曇る。自身の手を開閉し、何かを確かめるような動作をしながら彼女は答えた。

「……済みません、それは…無理、ですね」

「そんなすぐわかるの?」

「はい。周りがゆつくりになるあれですよ? 記憶の中の『傭兵』は自在に”入れた”んですけど……今集中しても私は出来ませんでしたから……」

「記憶の中の……?」

「あの戦いで『傭兵の戦闘記録』が私自身の記憶みたく馴染んでくれたんです。艦娘に刻まれている艦の戦闘記録、『前世』と同じように。ただ……まだ”器”ではないんです、きつと。練度が足りませんね、あははは……」

吹雪は頭を掻きながら申し訳なさそうに苦笑いを浮かべている。

なるほど、やつぱり……。私の懸念は当たっていたようだ。吹雪はまだ力を使いこなせない。なにかしらの切っ掛けが……強い『殺意』を抱くなにかが必要な様だ。少なくとも訓練であの力を拝むことはできないだろう。今はまだ……私が『黒い鳥』に会うことはできない。

「なんか……本当にすいません。期待外れで……」

吹雪が心底申し訳なきように呟く。どうしたのだと吹雪を見ると、その後ろの窓に酷く落胆したした表情を浮かべている自分がいた。

情けない。『黒い鳥』との再戦は私の願望だ。あくまで私の都合だ。吹雪は関係無いことなのに、この子に気を使わせてしまっている。自分が惨めで堪らなくなった。

「……気にしなくていいわ、吹雪。むしろ実戦二回目でその領域に行けただけ上出来よ。焦ることはないわ、時間が解決してくれる。そう、きつと……。だから……。おやすみなさい」

半分は自分に言い聞かせていた。そして惨めな自分から逃げるように、医務室をあとにしようとした時だった。

「マギーさん。私からも一つ、いいですか？」

「なに？」

吹雪に背を向けながら応える。吹雪はそれに構わず、ゆっくりと喋りだした。

「私は確かに『傭兵』の記憶を貰いました。でも、私は私なんです。……『傭兵』では……ないんです……。だから、例えばマギーさんの生き方を否定しても……私は、あの時、みたく貴女と決別したくない……です……」

「……そう」

私は一言だけ告げると、吹雪の顔を見ることがせず医務室を後にした。

自室への帰り道、その足取りはとても重いものだった。最悪だ。なぜ「そんなことするわけない」と言ってやることができなかつたのか……。こんな態度があの子にあそこまで言わせてしまっているのに。

——そんなの、まだ諦めていないからでしょ？

またあの囁きが聞こえてくる。ファットマンが言っていた、私の中にある『恐ろしいなにか』。鳴りを潜めていたそれが再燃しているのが分かる。

——なにを躊躇っているの？『傭兵』の時と何が違うの？『黒い鳥』と戦う方法を、本当は理解しているクセに……。

煩い、黙れ。これは時間が解決してくれることだ。吹雪が”罫”になるまで待てばいい。『黒い鳥』に挑むのはそれからでいいはずだ。

——もっと確実な方法があるでしょう？

ああ、クソツ。本当に……今日の私はどうにかしている。

仕方ない、酒を吞もう。あまりこういう頼り方は好きではないけど、このままでは幻聴が煩くて堪らない。私は向かう方向を食堂へと変え、早歩きで向かっていった。

◇ ◇ ◇

「おお、マギー。遅いじゃないか。もう祝勝会は閉会間近だぞ」

那智が上機嫌で私に手を振る。やはりと言うべきか、食堂に入るといつもの吞兵衛ズ

が酒を煽っていた。

ちなみに本当の祝勝会は吹雪の体調不良もあり明後日である。これ自体も有志が自主的に行う宴なので本当も偽物もないかも知れないが、何かにつけて呑んでいるこいつらが言う祝勝会は何だか胡散臭い。

「あれえ、マギー。どうしたのお？ふふつ、顔が怖いわよ〜」

「あら、ホント。駄目よマギー。そんなんじや男が逃げるわよ？」

千歳と足柄はケラケラと笑い、千代田は相変わらす酔い潰れている。いつもと変わらない光景だ。テーブルの上には飲みかけの酒瓶が何本も乱立している。なんともまあ、だらしがない……。でも今の私には、この闘争からかけ離れた空気があった。

「余り貰うわよ」

那智の隣の席に座り、ウイスキーの瓶を手取る。空いているグラスに並々と注ぎ、一気に煽った。身を火照させる液体が、食道を通り胃に染み渡っていくのを感じる。そういえば鎮守府に帰ってからまだ食事を摂っていなかったか。空きつ腹にアルコールは良くないが、今は酔いたいから丁度いい。

「ヒュ〜、飛ばすわね〜マギー。じゃあ私も」

千歳が茶化しながら私と同じように清酒を煽る。そこに普段の上品さは無い。お猪口を空にすると、またケラケラと笑いだす。

「どうした、マギー。らしくないじゃないか？」

ウイスキーの入ったグラスを手で回しながら、那智は普段と違う飲み方の私を心配してくれた。私と那智はいつも酒の味を楽しむように呑むためペースは遅めだ。なので一気飲みする私に違和感を感じ取ったみたいだった。

それを見ていた足柄がニタニタしながら言う。

「あく分かったわよマギー。妙高姉さんから聞いたわ。貴女、相変わらざる活躍だったけど吹雪ちゃんにMVP取られちゃったんだって？それが悔しくんでしょ」

「……………黙れッ!!」

グラスを握り割る音が食堂に響く。千歳、那智、足柄は驚いて目を見開き、時が止まったように固まった。

「ゴ……ゴメン、マギー。そんな気にしてるとは思ってたのよ！気を悪くさせたなら謝るわ！このとーり！」

「そ、そうよ、足柄が空気読めないのは何時ものことですよ!?!さきつ、飲みましょ飲みましょ!」

足柄と千歳が空気を取り戻そうと必死に明るく振る舞う。違う。そうじゃない。そ

うじゃないのよ……。足柄は悪くない。聞こえたのよ、幻聴が……。

——悔しいのよね？だから『黒い鳥』を殺しましょう。

——力を引き出すのは簡単よ。あの子の敵になればいい。どうすればいいかも分かっているでしょ？

——目の前の、彼女たちを殺せばいい

黙れツ！黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ！！

お前は、……私は今何を考えた!?彼女達を殺す?『黒い鳥』に会うためだけに!?自分の願望の為だけに、そこまで落ちぶれるつもりか私は!?それが、そんなものが本当に私の願望なのか!?

何がなんなのか分からなくなる。自分がグチャグチャになっていく……。この新しい温もりを大切にしたいと思う傍ら、その全てを捨てても“負けたままの自分”を赦す事が出来ない自分がある。

——ああ、私は、何のために戦うのだっけ……

わからない。煩いくせに、肝心なことに幻聴は答えてくれない。ああ、クソツ！今日
は散々だ。もうなにも考えたくない。

丁度よく目の前にあつた酒瓶を手に取り、グラスに注がずラツパ飲みする。完全にや
け酒だ。

「おい待て、マギー!!それはスピリ——」

那智の制止も無視して中身を飲み干していく。かなり度数が強いのか、喉から胃にか
けて焼けているような感覚が走り、脳に熱湯をかけられているような気分になる。グツ
グツ煮詰まった頭は考えることどころか意識を保つことすら放棄し、私の視界は暗転し
た……。

◇ ◇ ◇

——夢を見ていた。ずっとずっと昔の夢を……。

私はずっと、自由に憧れていた。堅苦しいEGFの社会。思想を押し付けられ、自分で
あることができない場所。

そこはまるで鳥籠で、私はずっとそこから灰色の空を眺めていた。そしてその空に、
自由に近づきたくて、私は戦場へと赴いた。そこで私は“鴉”達に出会う。鼻歌を歌い

ながら人を殺し、自分の命をドブに捨てる。あまりにも刹那的な生き方をする人種、傭兵——。でも自分の意思で自由に戦場を舞う鴉たち、その姿は私にとって宝石よりも綺麗に見えた。だから私は、鴉になった。

素晴らしかった、最高だった。好きなように戦場を飛び回り、好きな獲物を喰らう。そこに私の求める自由があつた。灰色の、どこまでも汚れた世界だけれど、私には輝いて見えていた……その翼を失うまでは。

弱肉強食の世界で、ついに私が弱者に回る時がきた。ただ幸か不幸か、コウノトリに助けられ私は生き残ってしまう。

助けられてくれたコウノトリの翼を借りることで、私は辛うじて生き長らえる事ができた。そして道中、雛鳥を拾い育てることになった。

その生活は、それはそれで悪くなかつた、そう思う。そこに私の求める自由は無かつたけど、私の知らなかつた温もりがあつた。雛鳥は立派な鴉へと成長し、私の心と体を預けられる存在となつた。それを見守るコウノトリは、私に安心感を与えてくれた。両親のいなかつた私だけれど、「父がいたらこんな存在なのかな」、そう思えた。

そして私はそれに満足しようと、戦場を舞うことを諦めた。

——でもそれは、許されないことだつた。

私の愛する鴉を見送る度に、どうしても視界に入る灰色の空、火薬の匂い。その戦場

を舞う彼の勇姿に、かつての自分を重ねてしまう。私は嫉妬していた。

（——そこは私の場所だ）

我ながら最低だと思う。彼は何も悪くないのに……。悪いのは弱かった自分なのに……。

そう、だからこそ自分が許せなかった。弱い自分が、自由に戦場を舞えない自分が憎かった。彼を見るたびに、その黒い感情が高まっていく。『恐ろしいなにか』が膨らんでいく。

だから私は偽りの翼に手を出した。

どんなことをしてでも、私は再び戦場を舞いたかったのだ。そして、戦場の覇者となっていた彼を倒して“自由”を取り戻したかった。もう二度と、何にも誰にも邪魔をされない自由が、彼を倒せば手に入ると思っていた。

（今の貴女は不自由なの？）

——声が聞こえる。今までの幻聴とは違う、暖かい声。

わからない。ファットマンや彼と過ごしていたときも、ここで、加賀達と共に過ごす鎮守府での生活にも……嫌と思つたことはない。でも、なにかが私の心を縛るのだ。……そうだ、左手を失った時に代わりのように植えつけられた敗北の記憶。また翼を失うのではないかという不安、自分を赦せない怒り、そうしたものが黒いものが私を塗り

潰そうとしてくる。それを拭きたい、でないと——

「……………苦しい……の」

なにかが頬を伝わる感覚がする。まるで子供だ、情けない……。すると頬を伝わるそれを拭うように、暖かい、心地のいいものが頬を撫でる。

（そう……………なら、——すわ、——を……）

なんと言ったか聞き取れなかった。ただ何かに包まれているような安心感を感じる。私はそれに身を任せ、再び深い眠りへとついた。

第三十話「空母の決意」

加賀とマギーの部屋、そこから静かにペンを走らせる音が聞こえる。その音の主は加賀だった。

趣味であり日課である日記を書き終え、ペンを置く。時刻は0100を過ぎていた。まだマギーは部屋に帰って来ていない。ACの整備の後、吹雪の様子を見てくると言っていたが、それにしても遅すぎる。この時間までとなると……恐らく食堂で呑兵衛達に捕まったと考えるのが妥当だろう。

別に私がマギーを待つて起きている必要はない。今日みたいにマギーが部屋に戻るのが遅い日は珍しくないし、私が先に就寝していることもそうだ。

しかし、今日はマギーを待つていたかった。今日のマギーは不安定で、危なっかしくて……彼女のことを確認してからでない、寝付けが悪い感じがした。

呑兵衛達にも仕事はある。だから遅くても流石に帰ってくる頃だ。暫くするとドアを叩く音がする。

「おい、加賀、起きてるか？」

マギーとは違う凜々しい声。なぜだか那智が来ていた。彼女はいきなり深夜に訪ね

てくるような不粋なまねをする人物ではないし、緊急時ならばもうドアを空けて入っている。なんというか、私が起きていたら僥倖というような雰囲気だった。

「起きてるわ。今開けるからちよつと待って」

疑問を抱きながらドアへと駆け寄る。そしてドアを開けると疑問は解けた。那智が酔い潰れているマギーを背負って部屋まで運んできてくれていたのだ。

「失礼するぞ」

那智はマギーを背負いながら部屋へと入り、敷いてある布団の上にマギーを寝かせた。ちなみにその布団は私ののだが……そんなことはどうでもいい。

「マギー、お酒に強かったはずよね。いったいどれだけ呑んだのかしら……?」

半ば飽きれ気味に言う。マギーに対してだけじゃない、止めなかった那智達に対してもだ。マギーの様子がおかしいのは彼女達だってわかるはずだ。できたらこうなる前に止めて欲しかった。

「そんな眼で見るな。一応言っておくが大した量は飲んでないし、止める暇もなかったんだ」

「じゃあどうしたらこうなるの?」

「……マギーのやつ、あろうことかスピリタス一瓶を一气飲みしたんだ。そんなことできる酒じゃないんだが……」

「すびりたす?」

「あー、その……度数93%の酒だ」

それはもはや酒ではなくてただのメチルアルコール的なものでは?というより……

「そんなもの飲んで大丈夫なの!」

「一応処置はしておいた。吐かせもしたしな。ただこいつ空きつ腹で呑んでたらしい。固形物が無かったからな。多分一日使い物にならんぞ……」

全く心配をかけさせる。マギーが酔い潰れたことなんて無かったから少々取り乱してしまった。

「加賀、出撃はあるのか?」

「私たちは無いわ。秘書艦の仕事も……大丈夫ね」

「ならいい。……にしても、足柄が地雷踏み抜いたとはいえ今日のこいつはおかしいぞ」
「……足柄はなんて?」

「吹雪にMVPを取られたのが悔しいのだろう、とな。そしたらこの様だ」

「ああ……」

確かに今のマギーには効果絶大だ。とはいえ、ここまで前後不覚になってしまふのは、やはり今日のマギーがおかしいからだろうけど……。

「マギーが起きたら伝えておいてくれないか? 足柄が本当に済まなかったと言っていた

とな」

「分かったわ。ただ悪気がなかったのはマギーも分かっているはずよ。そんなに気にしないでと言っておいて……。貴女達は明日は哨戒任務でしょう？もう寝たほうがいいわ」

「ああ、そうさせてもらおう。マギーのこと、頼んだぞ」

「言われなくても……。彼女を運んできてくれて有難う。おやすみなさい……」

那智はそれに返事をして自室へと戻っていった。後ろを振り返ると、マギーは相変わらず私の布団でぐったりとしている。マギーが鎮守府に着任してから三ヶ月ほど経つが、ここまで弱々しい彼女を見たのは初めてだ。

マギーの傍に寄り、腰を下ろす。そして静かに彼女の頭を私の膝に乗せる。

「……………マギー」

彼女の名前を呟き、頬に手を添えた。私は悲しかった。マギーのこの姿は、私がマギーの“必要”になれていないことの証明とも言えるからだ。

マギーは覚えているだろうか？私達の初陣の帰り、私の言ったことを……。

——私にはあなたが必要よ、マギー。それと一緒に、私があなたの“必要”となれないかしら……。あなたの“敗北”を拭い去るその日まで——

あの時の敵は、前の鎮守府の仲間達の、私の最愛だった人の仇だった。そして恐怖の

対象だった……。でも貴女のお陰でそれに打ち勝つ事ができた。前に進むことが出来たのだ。

あの時、甲板に降り立つ『ブルーマグノリア』を見て……貴女とだったら、もうなにも誰にも敗けはしないと……。そう思った。貴女は私の希望、だから私には貴女が必要だ。心から、そう……。

だから……私は貴女の”必要”になりたかった。

「知らないでしょうね……マギー、私がどれほど貴女に救われているか……」

彼女の頬を軽く撫でる。知らないのだろうか、横の机にある私の日記には、貴女の事が沢山書いてあることを……。

今の鎮守府になってから遠征要員となった吹雪の代わりに私が秘書艦となった。その業務の多忙さと自身の性格も相まって、私は鎮守府で孤立気味だった。けっして仲間と不仲だったわけではないが、そもそも喧嘩するほど近い者がいなかったのだ。前の鎮守府から付き合いのある吹雪や、一悶着あつて親しくなれた天龍と龍田はいつも遠征に出ていたため余計に寂しく感じていた。

だがそれもマギーのお陰でなくなつた。彼女は艦載機扱いなので出撃は私と一緒にあり、また秘書艦補佐として日々の仕事の手伝いもしてくれている。お陰で横を見るといつも貴女がいてくれた。寂しさを感じることは無くなつていた。

仕事にも余裕が出来たので瑞鶴に十分な指導をすることが出来たし、マギーからの繋がりでも、先的那智のように仲が深まった艦娘達もいる。

彼女が来てから、前の鎮守府で様々なものを失い真つ白だった私の日常に彩りが戻った。もはや、マギーは私にとって欠かせない存在となっていた。

「……マギー、どうしたら私は貴女に”返せる”のかしら……」

返答の期待できない、ただの独り言。それが虚しくなつて、天井を仰ぎ見る。するとマギーの頬に添えている手から、頬が動いてる感触がした。

「……たしは、自由に……なりた……かった……だけ、なのに……」

小さく途切れ途切れの声が聞こえる。マギーの寝言だ。何か昔の夢でも見ているのだろうか? 「自由になりたい」、その弱々しい声とは裏腹にその言葉に強い意思を感じ、思わず聞き返してしまう。

「今の貴女は不自由なの?」

きつと聞こえていないだろう。つい言ってしまったものの、返事は期待していなかった。しかし以外にもそれが聞こえていたのか、マギーは反応を示す。相変わらず声は掠れて弱々しいが、私は一言一句逃さないよう全神経を集中させた。

「……わからない。嫌じゃないはずなのに……。でも……」

まるで迷子の子供が泣きじゃくっているような、そんな印象だった。不安に襲われ、

しかしどうすればいいのか分からなくて……ずっと彷徨い続けている子供……。

「苦しい……の……」

彼女の目から涙が零れる。『恐ろしい何か』に捕らわれ、それから逃げようと足掻いてもがいて……それでもそれは叶わなくて……。今の一言はきつと、そんな彼女の奥底にある本音だろう。

貴女を助けない。手を差しのべない。どうしたら貴女に手が届くの？ どうしたら貴女は手をとつてくれる？ 貴女を救う為なら、私はどんなこともしてみせる……。

彼女の涙を優しく拭う。彼女が愛しかった。そして許せなかった、彼女を縛る存在が……。

—— そうだ、吹雪も言っていたじゃないか。怖いものは消してしまえばいい。

「そう……なら——」

ならば私のやるべき事は一つだ。私は決意する。

「殺すわ、黒い鳥を……」

もちろんそれは吹雪のことではない。マギーの中にある黒い鳥の幻想……『恐ろしいなにか』、それを殺す、殺してみせる……。そして証明してみせる。”私達”なら、もう

なににも、誰にも、敗けはしないと。私は貴女の”必要”になりたから……。

「マギー……」

もしそれが叶ったら、貴女は私を見てくれる？ 戦場だけを見てないで、道端に咲く花を見つけるように……私をちゃんと見てほしい。

——彼女に顔を近づける。

私はこの日、誓いを立てた。それが独りよがりの歪んだ物なのは分かっている。それでも、マギーが戦場に惹かれるのと同じくらい……いや、それ以上の狂おしい何かを突き動かす。

「マギー、私には貴女が必要よ……。貴女は私の、私だけの”一航戦”なのだから……」

第三十一話「MISSION 05 | AC特別演習—0

1」

——時刻は0600

何時もなら私もマギーも目を覚まし、今日の準備を行う時間だが……案の定マギーはまだ布団の中から出てこない。

「おはよう、マギー。……大丈夫？」

一応目は覚ましていたのかマギーは布団から顔を覗かせた。度数93%なんてふざけた酒を一気飲みしたせいかわ喉が完全にやられており、その声はガラガラだ。

「……あまり、大丈夫とは言えないわね」

「今日はお酒もないし、溜まっている書類もないわ。最近色々あったし、今日は休んだら？」

「……そうさせてもらうわ」

「そう言うとマギーは再び布団の中に顔を埋めた。この調子では今日一日は駄目そうだ。」

「お水、机に置いておくから。後でお粥か何か持ってくるわね」

自分の身支度を整えながらマギーに伝える。外に出ようとした時になって、布団の中から「……ごめん、加賀」と小さな声がした。

「気にしないで。今日の貴女の仕事はゆっくり休むことよ。……じゃあ、行ってくるわ」
自室のドアを閉め朝食を取りに食堂へと向かう。

食堂に着くと自分用の日替り定食、本日は鮭だったが、その大盛りとマギー用のお粥を頼んだ。お粥は献立に無いので当然作り置きなんてなく、お盆に料理が置かれるまでしばしば時間がかかる。これは仕方ない。一応「そんなにはかかりませんよ」と間宮に言われたのでカウンターで待つことにした。

「おはようございます！加賀さん」

横から元気な挨拶が飛んでくる。振り向くと前の鎮守府からの長い付き合いになる彼女がいた。

「あら、吹雪。おはよう。もう体は大丈夫なの？」

「元々ただの疲労でしたから。早朝の検査も問題なかったですし、もうバッチリです」
「そう、よかったわ」

挨拶のやり取りをしている間に土鍋に入ったお粥が私の盆に置かれた。卵と出汁も入っているのか美味しそうな臭いが蓋越しでも漂っている。

「お粥……ですか？そういえば……」

吹雪は辺りをキョロキョロ見渡した。きつとマギーを探しているのだろう。

「彼女は体調不良で今日は休みなの……」

「体調不良……ですか……」

なぜだか吹雪は申し訳なさそうにうつむく。そういえばマギーは昨日吹雪の様子を見に行っていたはずだ。そこでなにかあったのだろうか……いや、あったに違いない。あのマギーが「本物に成った黒い鳥」と会って何も無いわけがない。

そこでの出来事が彼女のおかしさに拍車を掛け、酔い潰れてしまうような失態を犯してしまったのだろう。

「吹雪、今日は空いてる時間あるかしら？」

「私は休みなので何時でも空いてますよ。やることといえばACの微調整とシミュレーターでの訓練だけですから」

「そう、なら夕食あと……20時あたりにお話できないかしら？場所はここで……どうしても聞きたいことがあるの」

昨日マギーと何があったか……そしてマギーと『黒い鳥』はどんな関係だったのか、吹雪ならきつとわかるだろう。誓いを果たす為にはもつとマギーのことを、——『前世』の時の事も含めて——知らなければならぬ。

「わかりました。……私も加賀さんに話したい事があります。きつと加賀さんが私に聞

きたいことと被つてゐる事が多いと思ひますけど……」

どうやら吹雪も察してくれてゐるみたいだ。そしてこの子が協力的でいてくれて非常に有難い。この子は鍵だ。マギーの中の『恐ろしい何か』、それを殺すにはどんな形であれ吹雪の存在は必要だろう。

「有難う、吹雪。じゃあ、また後で……」

「はい、それではまた」

自分の鮭定食とマギーのお粥が冷めない内に、私は自室へそれを運んでいった。

ちなみにマギーは食欲はあつたようで、気だるそうにしながらもお粥を完食してくれた。しかし食べた後すぐに布団にくるまってしまい、やはり今日は駄目な事は変わらないうようだった。

◇ ◇ ◇

「ん？マギーの奴はどうした？」

執務室に入ると提督が新聞紙を広げながら訊ねてきた。相変わらず机の上の書類に手はついていない。私達が監視しないとこの人はとことん仕事をしてくれない。

「おはようございます、提督。彼女は体調不良で今日はお休みです」

「そうか……大丈夫なのか？マギーの奴」

「……ただの二日酔いです。問題ありません」

「んだよ、心配して損しちまった。しかし珍しいこともあるもんだな。あいつ、体調管理はしっかりしてるほうだろうに」

「彼女にだってこんな時はあります」

「それもそうか。ま、お前らの出撃は今日無いしな。加賀、口うるさいのもいないことだし俺も休んで良いかね？」

「……ええどうぞ。これを片付けてくれたらですが」

いつもの他愛ないやり取りをしながら、いつものように書類をまとめ提督に突き出す。しかしマギーがいないこともありいつもより時間が掛かってしまった。ああ、今日は一人なのか、と実感し憂鬱になってしまう。

「相変わらずの量だな。無駄な書類も多い癖に改善しないのは軍の怠慢だな、まったく……。ああ、マギーが恋しいぜ」

さっきまで口うるさいと言っていたのに……提督の掌返しはもはや名物だ。分かっている上にこちらからの指摘を待っているのだから質が悪い。まったく、もう良い年だというのに変な所が子供っぽいのだ、この人は……。それでも不思議と許せてしまう人徳が、この人を提督たらしめているのだが。

マギーも最初に碎けた会話をするようになったのは提督だった気がする。彼女の秘書艦補佐業務の初日に驚いたのは、まるで昔からの知り合いの様なやり取りをマギーと

提督がしていたことだった。提督のあしらい方、からかわれた時の反応、そういうものが私よりも馴染んでいるように見えたのだ。マギーいわく「知り合いに似ているから」とのことらしいが、会って数日の人間のやり取りではなかった。

おかげで一部の艦娘からは変な誤解をされていたりするが……

ともかく、そんなこともあつてか提督も「いつものお転婆娘」がいないことにちよつぱり寂しさを感じているようだ。

「提督、今日はマギーがいないのですからあまりサボられますと終わるものも終わりませんよ」

「へいへい、分かった分かった。やはり今日は運が悪いらしい」

提督は手に持っていた新聞紙を私に差し出した。紙面はいつもの占いコーナーだ。

「……仕事運、星一つ。面倒事が舞い込んでくるかも……」

「だとさ。はあ、憂鬱だぜ」

「提督、新聞紙の占いなんかに狼狽えなくてちょうだい……」

たかだか新聞紙の占いで馬鹿らしい……。だが私は忘れていた。この占いはマギーとの出会いを予見していた、妙に当たるものだということを……。

◇ ◇ ◇

時刻が1400をまわった辺りだった。執務室の通信機から着信音が鳴り響く。提

督がそれを取り、大淀から通信相手を聞いたのだろうか……表情が険しいものに変わる。そして私をちらりと見た後、ハンズフリーのボタンを押した。どうやら私にも通信を聞けということらしい。通信機から男の声が聞こえてくる。

「御苦労。また随分と活躍しているようだな、白鳥」

「よくもまあ、いけしゃあしゃあと電話してこれるな、倉井」

——倉井元帥

どうやら電話の相手はあの人のようだ。吹雪のACを龍驤が運んできた時、UNACに手を加え関係者を抹殺しようとした人物。謎のACを引き連れ、深海棲艦の支配を目論んでいる男……。正直、私はこの人に良い印象を持っていない。提督も、倉井元帥は一応上司にあたるはずであるのに嫌悪感を隠そうとしていなかった。

「なんのことだ？」

「惚けるなよ、UNAC暴走の事だ」

「ああ、あれは不幸だったな。『深海鉄騎の再解析をそちらに頼んでの移送中で、まさ龍驤の整備不良による暴走が起こる』とはな」

「……ふざけてんのか」

「“そういう話になった”はずだろう、赤羽から聞いてないのか？」

「チツ」

どうやら事実とは大部違うが、上でそのような話にまとまったらしい。このあたりのやり取りについては艦娘が関与できるような次元ではなく、私達は言われたことを飲み込むしかない。それが事実と違っていても、言われたことが軍では事実となる。

「それで!?! いったいウチに何の用だつてんだ」

「……先日のレポートを読ませてもらった。元深海鉄騎……今は『吹雪式』だったか。そのパイロット、なかなかやるようじゃないか。まさか”アイザック”の部隊を退けるとはな」

「アイザック?」

「ああ、アイツは今『財団』と名乗っているのだったか」

「……てめえ、いったいなにをどこまで知ってやがる」

「先日の件についてはレポート以上の事は知らんよ。あれは完全にイレギュラーだったからな。ただ奴とは顔見知りなだけだ」

「マギーが言っていた。「倉井元帥は私と”同じ”かもしれない」と。今の発言によりその可能性が増す。」

「マギーと同じ時代から、タワーのAIかなにかにより復元された人間。『財団』を知っているとはそういうことだ。いや、マギーさえも知らなかった『財団』の人間の頃と思われる名前を知っているということは、彼女よりも前の時代の人間なのかもしれない」

……。いったい何者なのだろうか、この人は。

「話を戻すぞ。それで、その例のパイロットの力を知りたくてな。そちらのAC同士の模擬戦を組んでもらい、その力を見せてほしい」

「ふざけんな！なんでそんなことまでやる必要がある?!」

「今後の為だ。貴様等には『沈黙海域』サイレントライム攻略の手伝いをしてもらう予定だが……未だにそれを渋る老人共がいてな。そちらの力を見せて納得させてもらいたい。因みにこれはその老人どもの発案だ。私は関係無いからな」

「ふざけやがって、あの妖怪ジジイ共……」

白鳥提督もその同期である倉井元帥も大概な歳で在る筈なのだが……どうやら大本営の上層部には妖怪が住んでいるようだ。「まともに各鎮守府の管理もできないクセして一方的な要求ばかりしてくる奴等がいる」と提督は以前毒を吐いていたことがあったが、きっとその妖怪達がそれなのだろう。確かに余計なことをしてくれる……。

マギーと吹雪で戦えとの事だが、果たして今のマギーであるの吹雪に勝てるのだろうか？シミュレーターではマギーが全勝しているらしいが、その情報はあまりあてにならないだろう。素人目で見ても『死神部隊』と戦っていた時の吹雪の強さが“異質”であったことぐらいは分かる。……恐らく万全のマギーでも勝つことは難しいだろう、鼻屑目に見てもだ……。

しかも見せろ、ということとはシミュレーターではなく現実の模擬戦ということだ。軍での演習結果は全て記録される。もし負けてしまえばその記録もしつかりと残る。普通はならそれは大したことでは無いが、今のマギーにとつて”残る傷”は致命的になりかねない。もし本当にそうなれば彼女の決定的な何かが壊れてしまう、そんな気がする。……不味い、今は非常に不味い話だ。

「まあ、私としては調度良い話だったが。貴様らの力、測らせてもらおう」
「抜かせ」

このままでは不味い。私は通信機に近づき会話に割り込む。

「会話中失礼します。白鳥提督秘書艦の加賀と申します。……倉井元帥、その演習は行わなければならぬのでしょうか？」

「ん、例の空母か……。当然だ、これは決定事項だ」

「こちらにも予定や準備があります。せめて延期は——」

「ならんな。老人達にも予定はある。演習は一週間後だ。それは動かん」

「……そう、ですか……」

「もういいか？なら下がれ」

「……失礼しました」

おずおずと通信機から一歩下がった。結局なにも変えることはできない。たった一

週間、それでどれだけのことができるだろうか……。

そんな私を提督がじっと見つめる。その目は事情は理解していないだろうが、何かを感じ取ってくれているようだった。

「なあ、倉井。形式はどうなんだ？」

「AC同士、一対一の予定だが？」

「それ、こつちで変えさせてもらってもいいか？」

「ACの力を証明できれば形式は問わん。好きにしろ」

「ならそうさせてもらうさ」

「……そうか、では頼んだぞ。私も楽しみにしている」

その言葉を最後に倉井元帥からの通信は途絶える。

「だとき、加賀。演習の形式はお前に任せる。三日後までに内容を纏めて提出してくれ」

「……はい、有難うございます」

「なににこだわってるかは知らんが、まあ、頼んだぞ」

提督の配慮にはいつも救われる。この助け船を活用しない理由はない。この少ない期間で、どうにかしてマギーが『吹雪フキ式シキ』に勝つ方法を模索しなければならぬ。とすれば、頼れるのはやはりあの子か……。

(自分を倒す方法を教えてくれ、なんて聞いたら流石に困惑するかしら……)

吹雪に聞かなければならないことが一つ増えてしまった……。。

第三十二話「MISSION 05 AC特別演習—02」

「え、私とマギーさんで演習ですか？」

食堂の隅で元駆逐艦娘が声をあげる。その声は大きいものではないものの軽く裏返っており、驚いてる様子であった。

私と吹雪は約束通り食堂で落ち合っていた。朝食時と同じ様に夕食を受け取るカウンターで会ったのでそのまま一緒に食事を取り、今はお互い食後のお茶を啜りながら話をしていくところだ。

ちなみにマギーの食事は足柄が部屋まで届けてくれている。足柄がマギーの食事を持っていく私を見かけ、「それ私を持っていったらあげるわ。マギーに謝りたいこともあるしね」となかば強引に引き受けてくれたからだ。吹雪を待たせてしまうのも悪かったので有り難いといえば有り難いが。

謝りたいというのは酒の席で「吹雪に MVP 取られたのが悔しいのだろう」とマギーの地雷を踏んでしまったことだろう。これに関してはタイミングが悪かったとか言いようがなく、マギーも恐らく反省しているはずだ。マギーの体調も良くなってきたいるだろうし、今頃は二人で軽い談笑でもしているだろう。それに混ぜてみたい気

持ちもないではないが、こちらはこちらで解決しなければいけない事がある。

私は早速、舞い込んできた面倒事の話を吹雪に伝えていた。他にも聞きたい事はあるが、先ずは倉井元帥から伝えられた演習をどうするかを早急に決めなければならぬからだ。何せ演習の形式を決めるまでに三日しか猶予はない。

「吹雪、どうやったらマギーは貴女に勝てるかしら？ 言っておくけれど……」

「八百長は無し、ですよ。大丈夫です、わかっていますよ。……そんなことしたら後が怖すぎます」

吹雪が身震いする。マギーはそういうのに鋭いし、絶対に許したりはしない。吹雪にとつてマギーは厳しい師匠であり、きつと折檻を受けるとでも思っているのだろう。

私としては八百長なんてすれば今以上にマギーの誇りを傷付け、下手に負けるよりも酷いことになる気がしてたまらないのだが……とりあえず吹雪にその気が無いみたいなので認識の差違は捨て置くことにする。

「それで、どうなのかしら……?」

「どうもこうも……今の私とマギーさんなら普通にマギーさんが勝ちますよ?」

「……どういふこと?」

「マギーさんにも言いませうけど……私はまだ『傭兵』の力を使いこなせていないんです

よ」

——吹雪の話はこうだった。

『黒い鳥の傭兵』の戦闘記録が記憶として馴染んだおかげで今まで以上にムラなくA Cの操縦ができるようになった……のは良いものの、『黒い鳥』の持つ力の一つである周りの時間が遅く感じる力、一種の超感覚とでも言えばいいのだろうか？それをまだ自由に引き出すことができないらしい。

先日の『死神艦隊』との戦闘時の力は極限状態による“火事場の馬鹿力”だったようで、無理矢理力を引き出したせいで医務室へ運び込まれる羽目になったとのことだ。

なので普段の吹雪はいつもシミュレーターでマギーと戦っていた時より若干強くなった程度、というのが本人談である。

確かに言われてみれば当たり前のような気がする。“知っていること”と“できること”は違うのだ。

艦娘だつて生み出された時からオリジナルの艦船の戦闘記録を持っており、どんな戦い方をすればいいかは知っている。しかしそれは大人数で動かしていたオリジナルの艦船の知識であつて、AMSの力で一人で艦船を動かす艦娘のそれではない。強くなるにはひたすら経験を積み、自分に合わせて艦の改修を繰り返し、地道に自分の艦船と自分自身を馴染ませていくしかない。そうやって砲撃精度や艦載機の操縦技術、同時に扱える武装数を上げていくのだ。

吹雪の場合は内面ばかりが急成長してしまい、外面、つまり肉体面がそれに追いついていないようだ。これの解決方法はただ一つ、ひたすら時間をかけて馴染ませるしかない。

「おかげでマギーさんを落胆させてしまいました……」

吹雪が申し訳なさそうに言う。

「昨日マギーに話したことってこの事なの？」

「……はい、そうです」

——なるほど。マギーの失態の原因が何となくわかった。

マギーとしては、やはり『黒い鳥』と再戦を望む気持ちがあっただろう。それは今までの態度で明らかだ。しかし吹雪がこれではそれは叶わない。とびきりのエサを前にして「待て」を強制されているようなものだ。その我慢が限界に達する前に酒に一時避難した、というのがマギーの二日酔いに至るまでの道程だろう。

このままでいくら強化人間であれ体に悪いのでガス抜きの方法は別にして欲しいものだけれど……とりあえずA Cの演習については問題無さそうだ。目下の問題がどうにかなりそうので安堵する。

しかし吹雪はそんな私とは対称的に思い詰めた表情を色濃くしていた。

「……加賀さん。私はできる限り早く、マギーさんの望む領域まで強くなるつもりです」

「吹雪、なにを焦っているの？ 貴女も無理をしては——」

「今の状況は似ているんです。『前世』で、マギーさんが『傭兵』と袂を別けた状況と……。だから怖いんです、このままだと」 また「マギーさんがいなくなってしまうようで……」

「どういようと……？」

「マギーさんは『傭兵』と一緒にいた時、過去の敗北により戦えない体でした。でもその過去を払拭するために『財団』の元へ行き、人間の体を捨ててまでして……『傭兵』の前に立ちほだかったんです」

マギーが時々漏らす過去の話から何となく彼女が『傭兵』と敵対することになったのは察していたが、まさか人をやめてまでだとは思っていなかった。彼女が秘めているものは私が思っている以上に根が深いようだ。

「『傭兵』は止めなかったの？」

「好きなように生き、好きなように死ぬ」、それが『傭兵』の哲学であり”答え”でしたから。だから『傭兵』はマギーさんの”答え”を尊重したんです……」

私が言葉を失っている間に、吹雪は冷めてしまったお茶を口に含み喉を潤す。そして話を続けた。

「マギーさんの”答え”を成就するには、やはり『黒い鳥』を……そうなった私を倒すの

が一番だと思えます。きっとマギーさんもそう思っているはずですよ。……ですが……少なくとも今は訓練で力を引き出せません。なので……」

吹雪は口をつぐんだ。たがこの子が言わんとしていることは分かる。マギーは『黒い鳥』を引きずり出すために敵になるかもしれない、ということだろう。過去と同じ様に……。

「加賀さん、これもマギーさんには言ったんですが……私は『傭兵』とは違います。私の「答え」は仲間を守ること。だから例えマギーさんが望まないにしても、敵対なんてしたくありません。……そしてその鍵は加賀さんだと思っています。今マギーさんを繋ぎ止めてるのはきつと加賀さんなんです」

吹雪は真つ直ぐに私を見つめる。

「だから……私が言えた義理では無いと思いますが……私が”本物”になれるまでマギーさんをお願いします。そしてその時がきたら、『黒い鳥』を倒す手伝いをしてもらえませんか」

実に珍妙な、そして真剣そのものな依頼だった。「自分を倒す手伝いをしてくれ」、私が最初に振つた話ではあるが、改めて本人から聞かされるとおかしな話だ。

しかし『黒い鳥』が私に託してくれていることに気分を高揚させている自分がいるのも事実だった。昨日の独りよがりな私の決意は間違っていない、そう言われているよう

な気がしたからだ。表面はいつもの鉄面皮で覆いながらも、内心それが嬉しくてたまらなかつた。

「当然よ。マギーは私の一航戦だもの。……それにしても、貴女、成長した自分に随分自信があるのね。さつきから普通にやったら自分が勝つこと前提で話すのですもの」

「うぐっ」

吹雪の顔が崩れ、いつもの可愛らしい少女の表情に戻る。やはり吹雪には深刻な顔よりもこちらのほうが似合う。

「そ、それは加賀さんが最初にそういう前提で話してきたからじゃないですかー！ そうやって気分が良くなると毒吐くの、加賀さんの悪い癖ですよ！」

「うっ」

どうやらバレていたか。流石に付き合いが長いだけはある。お互い軽く顔を見合わせたあと、二人して「フフフツ」と吹き出してしまった。深刻そうに話すのはもうお終いでいいだろう。

「よかつたら今後の参考に聞かせて貰いたいものだわ、貴女の倒し方を」

「はい！喜んで」

吹雪から吹雪の倒し方を教わるという珍妙な講義は終始和やかな雰囲気であった。

◇
◇
◇

吹雪との談義を終え部屋に戻ると中はもぬけの殻だった。机に書き置きがある。

「……那智たちに昨日のこと謝りに行つてゐるわ。お酒は飲まないから安心して、マギーより……」

どうやらマギーは夕食を届けてくれた足柄と一緒にいつもの飲兵衛ズのところへ行つたようだ。たぶん食堂だろうから、どこかで入れ違いになつてしまつたのだろう。

とりあえず回復してくれてよかつたというべきか。明日からまた一緒に仕事ができることが素直に嬉しかった。

(それじゃあ、私は私でやるべきことをしましょう)

私は手持ちのメモ帳を広げる。普段から様々なことを記入しているもので、広げたページには先程吹雪から教わつた吹雪の倒し方がびつちりと書かれていた。といつてもメモされている内容は具体的な案とは言いづらい抽象的なものばかりだ。吹雪が「これをされたら嫌だ」という程度の話の羅列である。だからこそ情報を精査するのだ。私に一体何ができるか、どう行動を起こしていけばいいかの指針を決めなければならぬ。

吹雪から聞いた『ブルーマグノリア』が『吹雪式式』に勝つために考えられる方法は主に三つ。『アセンブル』『地形』『数』。

ただそのうち『アセンブル』についてはお勧めできないと吹雪は言つていた。現状私

たちが保有しているACのパーツ数では数が少なすぎる、ということらしい。

私は初めて知ったことだが、ACは武器だけでなく体のパーツ、内装に至るまで統一規格で造られており互換性があるのだとか。そして戦い方や相手によつて『アセンブル』を変更することで戦闘を有利に進めることができるのらしく、『傭兵』も『吹雪式』の元になったAC『ストレイド』以外のACも保有していたようだ。

吹雪は「詳しく話すと夜が明けてしまうので、とりあえずじゃんけんをイメージしてくれば結構です」と言っていた。そして『吹雪式』をグーとすると、『ブルーマグノリア』はやや弱いグー、『UNACちゃん（龍驤のAC）』はチョキ、になるらしい。これを『アセンブル』によりパーにすればいいのだが、現在うちの鎮守府で保有しているACパーツのみでそれを組み上げるには『吹雪式』と『ブルーマグノリア』両方をバラして組直す必要があるようだ。これは吹雪とマギーにしてみれば「感覚的には加賀さんと瑞鶴さんが戦艦と駆逐艦に乗り換えて戦うようなものですよ？」ということに等しいらしい。ついでに言えばやはりお互い自分のACには愛着があるらしく、容易にバラすなどはしたくないという気持ちもあるようだ。やはり『アセンブル』は選択肢として外しておいたほうがいいだろう。

次に『地形』。いつもの活躍で忘れてしまいそうになるが、ACは本来陸戦兵器だ。そしてマギーが最も得意とするのは入り組んだ地形での戦闘だ。以前『深海鉄騎』を相手

にしていた時、基地型深海棲艦の飛行場姫の残骸をうまく利用して一方的な攻防をマギーは行っていた。恐らくあれがマギーの得意とする戦法なのだろう。逆に海面のよ
うな開けた場所だとしても火力と装甲が高いACのほうが有利になってしまっ
うで、これが『ブルーマグノリア』がやや弱いグーになる理由だ。『吹雪式式』……元『ス
トレイド』と『ブルーマグノリア』はどちらもマギーが組んだACであり、『ストレイド』
は『ブルーマグノリア』の装甲強化版のような性能をしている。そのため二機が戦う地
形は機動性が生かし切れる入り組んだ土地でないと『ブルーマグノリア』が不利となる。
(とりあえず特別演習の場所は鎮守府近海の小島でいいか……)

あそこなら凹凸も激しい場所なのでマギーも得意とする所だろう。……しかし、普通
の吹雪相手ならまだしも『黒い鳥』相手にそれだけでは不十分な気もする。吹雪はマ
ギーから師事を受けている。つまりは吹雪も入り組んだ地形が得意である可能性がある
。少なくとも苦手ではないだろう。機体の特性的にやや弱いグーが、ただのグーにな
るだけだ。あくまで『地形』の適切な選択はその程度の恩恵しかない。決定打にはなり
えないだろう。

(とすれば……やはり『数』か……)

AC戦に限らずすべての戦闘における基本。『数で勝る』、実質的にこれしか選択肢
はなさそう。実際にその時がきたら今回の特別演習のようになくまで演習で戦うこ

とになるだろう。二人に殺し合いをさせるわけにはいかないから当然だ。その演習を艦隊戦にしてみれば私も戦闘に加わることができる。吹雪から聞いたマギーと『傭兵』との戦闘は一对一の決闘形式であったのでマギーからしたら少々抵抗があるかもしれないが、演習とは想定される戦場を模して戦うものだ。艦隊戦にすること自体は自然だろう。その中でAC同士の戦いに介入することは卑怯でもなんでもない、はずだ。……とはいえ、どうやって介入すればいいものか。普通の艦載機ではAC、特に強力な機関砲を持つている『吹雪式式』にとつては蚊トンプ同然だ。砲撃も吹雪の機動力相手には効果が薄いだろう。敵の艦隊を抑えつつマギーに加勢できなければ地の利が生かせない分むしろマギーが不利になってしまう。可能性があるとしたらせいぜい龍驤の『UNACちゃん』ぐらいだろうか。こうなつてくると自分の力の無さが歯がゆい……。(……せめて深海鉄騎を回収していた、あの装甲ヘリでもあれば……)

ないものねだりしても仕方ないとはいえ、そんなことを思つてしまう。入手方法が皆目見当つかないのに……。工廠にある装置で造れるのであれば大本営から報告があるはずだ。それがないとすれば、あれもACと同じ『例外』なのだろう。恐らく所有しているのは倉井元帥だけだ。とはいえ、龍驤のUNACを細工して関係者を抹殺しようとした人物に頼るなど論外だ。渡してくれるわけもないだろうし……。

「とにかく私自身が強くなる、その必要があるわね……。正攻法ではないでしょうけ

ど。」

マギーを直接支援できるほどの力、その模索が今後の私の指針になりそうだ。明日は特別演習に向けて明石や夕張、やない整備長と打ち合わせがある。その時に何かないか相談してみることにしよう。あの三人は龍驤のUNACの整備も行っており、マギー、吹雪に次いでACに詳しいはずだ。もしかしたら妙案か、変な発明品か……ないかあるかもしれない。

わずかながらの期待を胸にメモを閉じる。そして今度は日課にしている日記を開き、今日のことを綴りながらマギーの帰りを待つことにした。

第三十三話 「MISSION05」 AC特別演習—0

3

「おい、見ろよ加賀。今日の運勢は『吉報あり』だよ」

提督が執務室の椅子にふんぞり返りながら新聞紙を指差し私にも見るようにせがんでくる。すると私ではなくマギーが「はい、その吉報よ」と私たちが纏めた書類の束を提督の机の上に置いた。

「マギー、この書類もう終わってるなんてことないよな？」

「当たり前でしょ、さっさとやって」

なんてことのない、日常の一場面。ただ今は何事もなくここまで迎えられたことに私は少しばかり胸を撫で下ろしていた。

昨日は結局、特別演習のことをマギーに話せなかったため今日の朝食時にその事を話したのだが、思っていたよりもマギーの反応は薄かった。

「……そう、わかったわ」

その一言のみである。一日休んで冷静になれたからか、演習だから吹雪が底力を発揮できないことを知っているからか、あるいはその両方か……。とはいえ何も思うところ

が無いわけでもなさそうだったので「不機嫌そうね」と問いかけてみたら「老害の見世物って言うのが気に入くわないだけ。あと一方的に実力を計られるのも」と、いつものマギーが言いそうな不満が返ってきた。

そして先程の提督とのやり取りから彼女が本調子に戻っているのを確信する。

「ところで提督、あの件はどうなったの？統轄機構の場所の話」

書類の整備を再び行いながらマギーは提督に尋ねた。『吹雪式式』から解析して発覚した深海棲艦統轄機構インターネーションの場所のことだ。

「あれか。勿論本営に報告したさ。倉井が情報を隠してたことも含めてな。しかし……」

「それで加賀が言ってた『こっちが解析を受け持った』って話になった訳ね」

「ああ、あくまで倉井でも解析しきれなかったから統轄機構の座標は知らなかったし、UNACの暴走は事故って扱いだ」

「きつちり深海鉄騎のパイロットデータまで消しておいて白々しい。上手く事が運べば倉井元帥の動きを封じられるかもと思っただけど、そう上手くはいかないか……」

倉井元帥は統轄機構を使って深海棲艦を支配しようとする派閥の実質的な実行者であり、その点で統轄機構を破壊しようとしている私たちと対立しているともいえる。マギー自身、深海鉄騎討伐の時に横槍を入られたことを根に持っているようだ。

なのでマギーとしては故意に情報を隠していたことやUNACの暴走を引き起こしたことを名目に倉井元帥の行動を制限したかったのだろう。しかしこちらも勝手にACを持ち出した負い目もあるからか、先のような話になってしまったらしい。結果としてはあちらだけが統轄機構の場所を知っているというアドバンテージが無くなっただけにすぎない。

「そんなしなめつ面するなよマギー。加賀もな。まるつきり無駄だった訳でもない」

「どういうこと？」

「どうやら倉井のやつ、自陣の連中にも情報を開示してなかったらしい。理由はわからんがな。だからあちらにも倉井のことを不信しだしたのがいるのさ。……どうも今回の演習はそこらへんのやつが提案したらしい」

「つまり……私たちが保険になるかどうかってこと？」

「そういうことだ。だから結果によっちゃそいつらからも情報が提供されるようになるかもしれない」

本当にそうなれば確かに助かる。倉井元帥は私たちにある任務を任せようとしているらしいが、その裏がとれるからだ。UNAC暴走の時のように何かに見せかけて危害を加えられたらたまったものではない。

「ふむ……」

マギーはその話を聞いて何か考えているような素振りをしていた。そして予想外の提案をする。

「ねえ、提督。特別演習のことだけど、私と吹雪じゃなくて倉井元帥のAC達との対決にできない？」

「ちよつと待つて、マギー。正気で言ってるの!?!相手は事故に見せかけて龍驤たちを抹殺しようとした相手よ、何をされるか……」

「違うわ、加賀。だからこそよ。アイツは私たちに『沈黙海域攻略を手伝ってもらおう』つて言つてたんでしょ?ならば必要な私たちに危害は加えてこないはず。むしろ相手の力量を測るにはこの機会しかない。じゃないといざ統轄機構を目前に対立することになった時、不利になるのはこっちよ」

「……ふむ、一理あるな。演習を提案した連中の知りたいことでもある。确实とは言えんが実現性は高そうだ」

「提督まで!」

「そう怒鳴るなよ、加賀。まだお前も演習案を決めてないんだろ?ちよつと良いじゃないか」

「確かにそうですが……」

マギーの提案にどうしても不安が拭いきれなかった。しかし具体的な演習案も無い

私には後に続く言葉を紡ぎだすことはできない。

「一応確認するがマギー、もし負けたら演習を提案してきた連中に見限られるのは想定済みだな？」

「当然でしょ。でも演習で負けるようならこの先やっていけないわ。……勝ってみせる」

「……よし、じゃあマギーの案を本営に連絡してみるか」

提督が裁判官の木槌のように自身の膝を軽く叩く。判決は下されてしまった。い言えぬ不安がまだあるが仕方ない。マギーの提案も利になつたものではある。何よりマギーと吹雪が公式の場で争わなくて済むのだ、これでいい。そう自分に言い聞かせ、この提案を渋々飲み込むことにした。

◇ ◇ ◇

演習の話も終わり再び三人で書類業務をこなしていると、今度は提督の机の受話器が鳴り響く。

「ん、ああ、もうこんな時間か」

提督が受話器を取り、誰かを執務室まで連れてくるよう指示を伝えていた。どうやらその相手は鎮守府外の人間のようなようだ。

「提督、来客ですか？ 予定には記載がなかったけれど？」

「ん？ まあ急だったし非公式のもんだからな。履歴もできたら残したくないんだ」

履歴を残したくない相手とは何者のだろうか？ まさか非合法な相手ではないかと一瞬不安がよぎるが、提督に限ってそんな輩と付き合いがあるとは思えないし、だからこそ想像がつかない。

暫くすると「連れてきたぜ、提督」と言いながら天龍が執務室の扉から現れ、その後ろから恰幅のよい男性が入ってきた。

「久しいな、白鳥」

「久しぶりだな、銀爺」

『銀爺』と呼ばれる男性は提督の服とは違う制服を身に纏い、入室した際にしていた軽い敬礼は海軍式のものよりも肘を外側に向けていた。要は陸軍の人間だ。おまけに身に付けている階級章を見ると提督と同じ大将と位の高い人物であることが伺える。

「驚いたぜ銀爺。まさかうちの艦の通信機から野太い声が聞こえてきたんだからな。なんの冗談かと思つたぜ」

「済まんのう。ほうら、なにせ基地の通信機では流石にバレる。お互い老害どもの小言は聞きたくないだろう」

どうやらこの人物は、陸軍に支援物資を送りにいつていた天龍を介してこちらに連絡

を取っていたらしい。遠征から帰ってきた彼女に案内されてきたということは、きっとそのまま彼女の艦に乗員して来たのだろう。とても大将の行動とは思えない。とはいえ仕方の無いことかもしれないが……。

嫌な話だが、この国の海軍と陸軍の上層部は私たち艦娘に刻まれている戦闘オペレーションの時代の海軍と陸軍と同じぐらい仲が悪い。

どうも主な戦場や戦果が海軍に寄っていることが軋轢を生んでいるらしい。しかも一人で、つまり圧倒的な低コストで軍艦を運用できる私たちの登場でその軋轢が加速しているのだとか。同じ志を持ち、同じものを守る仲間であるはずなのに権力などが絡んでくるとどの時代の人間も同じ過ちを犯してしまうようだ。

銀爺大将もそんな事情があるため内密にここまで来たのだろう。しかしそこまでしていったいうちに何用なのだろうか？

「……粗茶ですが」

「ああ、かたじけない」

来客用の最高級の茶をお出ししつつ様子をうかがう。内密の話であるはずなのに提督が私たちを追い出す様子はなかった。提督は一緒に私から受け取ったお茶をすすり喉を潤す。

「それで、銀爺。ACのことをどこで知った？一応あれは秘密兵器の扱いの筈だが？」

ACという言葉に我関せずを決めていたマギーが反応する。なるほど、どうやら私たちも関係する話のようだ。銀爺大将も私たちを一瞥して察してくれたようで、そのまま話し出す。

「人の口に戸は立てられんものさ。それにガダルカナル島で深海鉄騎に全滅させられたのは私の部下だ。情報を追いもする。……とはいえ、ついこの間まではACを所有していたのは倉井だけだと思っていたがな。だが……」

「演習の話か？」

「ああ、その噂からお前さんのところにたどり着いたよ。先程の軽巡洋艦の娘にも確認したら、普通に答えてくれたさ。まさかあの可愛い駆逐艦の娘ツ子が深海鉄騎を乗り回していると聞いたときにはたまげたよ」

「天龍め、べらべらと……。まあいい。知ってる理由は分かった。だがそれでいいなんの用だ？」

「……陸軍と海軍の不仲は嘆かわしいことだ、本当にのう。深海鉄騎の情報もまともに海軍から提供されなかつたんだぞ。そうやって”互いに”情報を隠すから現場が苦労するはめになる」

「回りくどいな、もったいつけるなよ」

「……なあ、白鳥。お前さん、陸軍もACを持っていると言ったら信じるか？」

「なんだと?」

「ある箇所からかなり品質のよい状態で発掘されてのう。5機の完成体と複数体分のパーツ、あとはよくわからん代物と力号みたいなやつが見つかって保存されている」

「そんなにか!?噂も聞いたこと無いぞ、本当かよ?」

「仕方あるまい。そちらと違ってこっちは倉庫で埃を被ったままだからな。なにせ全く使い方がわからん」

銀爺大将の話を聞いて何となくその苦労を察してしまふ。実は私も以前好奇心にかけて『ブルーマグノリア』に乗せてもらったことがあったのだ。しかしシミュレーションモードでマギーから懇切丁寧に説明を受けながら動かしてみたのだが、結果は散々だった。はつきり言って操作が複雑過ぎる。単純な複雑さだけでなくフットペダルの踏み加減で全く違う動作をしたりするものだから余計に質が悪い。「慣れれば簡単よ」なんてマギーは言っていたが、どうもそうは思えない。やない整備長や夕張もUNACの調整でシミュレーションを利用するらしいが、未だにまともに戦うことはできないらしい。

そんなACを指導者も無しに操縦しようなど土台無理な話だろう。そもそもどんな動きができるかも想像つかないだろうし……と、ここで銀爺大将がこちらに求めているもののが予想がついた。

「こちらの上陸部隊の死傷率の高さは知っているだろう？だからこのままA Cに埃を被せておくわけにはいかんだ。……白鳥よ、一時的で構わん。お前さんのとこのパイロットを指導教官として迎え入れさせてはくれんか」

座つたままではあるが、銀爺大将は深々と頭を下げた。

確かに上陸部隊の人達の死傷率が高い。私達では泊地に巢食う基地型深海棲艦の撃破はできて、その地に侵攻することは出来ない。陸上型の深海棲艦を駆逐し、その土地を領土として確保するのは陸軍の方々の仕事である。そしてその人達の主な主戦力は『大発動艇』に乗せた戦車や歩兵なのだ。死傷率が高いのは当然と言える。もしそこへA Cを導入できれば革命的な戦果をあげることができよう。死者の数もぐっと減らせるに違いない。だからこそ大将の位の方がここまで来て、こうして頭を下げていくのだ。

私としても犠牲になる人が減るのであればそれに越したことはない。そこに海軍陸軍は関係ないし、そもそも艦娘は、少なくとも私は人を守るために戦っているのだから。とはいえ、この件に関して私の出来ることは無い。私は、そして提督もマギーに視線を向ける。マギーは「やれやれ」といった様子だった。

「銀爺大将。無論、こちらにも何らかのメリットをご提示していただけるのですよね？」
マギーが珍しく敬語を使いながら条件を伝える。

「当然だ。出来る限りのものは用意しよう」

「でしたら発掘したものを幾つか頂けませんか？ ACのパーツ等はこちらの装置でも『開発』できないものですから」

「構わんよ。といつても何が必要で何が不要かもわからんからのう。どれ程そちらに融通出来るかはこの場では言えんが……」

「それで結構です。どうせ現地で色々調整が必要になるでしょうから」

マギーは態度を崩しながら提督へ体を向けた。

「で、提督。いつから指導を行えばいいの？ 演習が終わってからもいいけど、いつ『沈黙海域攻略』に呼ばれるかわからない以上、今すぐって手もあるわよ」

「それもありだが……マギー、お前はいいのか？」

「なに言ってるの？ 行くのは私じゃないわ、吹雪よ」

マギーの発言に思わず私と提督は「そっちこそなに言ってるんだ？」といった顔を彼女に向けてしまう。しかしマギーはそれを予想していたのか、淡々とした口調で説明を始めた。

「陸軍のACがどんなタイプかわからない以上、吹雪の方が適任なのよ。ACは脚部が違おうと操作感覚が全く別物なの。だけど吹雪に“入ってる”『傭兵』は一通りどんな脚部でも平均以上に扱えていたわ。だからあの子の方がいい。それに人に教えるのもい

い経験になるわ」

「ふむ、そういうものなのか。その通りなら確かに吹雪の方がいいかもしれん……」

提督が顎を擦りながら納得したように頷く。そして意地悪そうな笑みを浮かべた。

「それにお前だと厳しすぎて逃げ出す奴が出てきそうだ、はっはっはっ」

「それ、どういうこと？」

「マギー、提督は吹雪への指導のことを言ってるのよ」

この点については提督と同意見だった。マギーはひたすらシミュレーションで吹雪を懲らしめるような指導をしていたが、それに耐えられたのは素養のある吹雪だからであり常人ならきつとトラウマをこさえてACに乘れなくなってしまうだろう。泣いたり笑ったりできなくなってしまうかもしれない。

「流石に私でも節度はわかってるわ」

「はは、そう怒るな怒るな。とにかく吹雪にも聞いてみないと予定は決められんな」

提督は笑っていた顔を少しばかり引き締め銀爺大将へ顔を向ける。

「銀爺、吹雪は工場で演習に向けての調整を行っている。……深海鉄騎、今は『吹雪式』と名前を変えたが……それに乗ってな。どうする？ 挨拶がてら見学に行くか？」

銀爺大将は少々思い悩む素振りをしたが、軽く息を吐き答えた。

「そうだな、よろしく頼む」

私たち一同は銀爺大将をお連れして工廠へと向かっていった。

◇ ◇ ◇

鎮守府の工廠裏には海に隣接した兵器の試射ができる程度の広場がある。そこに二機のACの姿があった。『吹雪式式』と『UNACちゃん』である。

「こちら吹雪、目標までの距離300を確保しました。これより射撃を行います」

『吹雪式式』の左腕に装備されているレーザーライフルにエネルギーが充填されている。そしてその完了と同時に対面に佇んでいる『UNACちゃん』へレーザーが放たれた。

リユウジヨウの『UNACちゃん』は逆間接型のACであり、タダでさえTEタイプ
の攻撃に弱い。それに威力特化にチューンされたレーザーライフルが直撃すれば深刻
な損傷は間逃れない。しかし、その直撃をくらった『UNACちゃん』はかすり傷も負
わずにその場に佇んだままであった。精々レーザーが直撃した箇所から軽く煙があ
がっている程度である。

「……よし、仮想APもちゃんと想定値減ってる。吹雪ちゃん、レーザーライフルの調整
は完了よ」

『UNACちゃん』とリンクされているPCを見ながら、特徴的なピンクの長髪と鉢巻
きをした女性、明石が近くに置いてあるマイクから吹雪に呼び掛けていた。その後ろで

夕張とやない整備長が別のPCで黙々と何かのデータを打ち込んでいる。

彼女たちはACの特別演習に向けてレーザーライフルの威力調整を行っていた。というのもレーザーライフルだけは模擬弾が使用できないからである。

以前そのせいでマギーが実力を発揮できなかったこともあり、演習が決まってからすぐ明石達に対策を取るように提督から指令が出されていた。そして時間が無い中で考え出された案が、レーザーライフルの出力をギリギリまで落とし、シミュレーターのシステムを利用してレーザーが当たった場合に仮想ダメージが入るようにする、というものであった。吹雪の協力もあり、その案が無事上手くいったところである。

ACから降りてきた吹雪と明石が話している後ろで、夕張とやない整備長は『ブルーマグノリア』へフィードバックするためのデータを打ち込んでいた。指を動かしながら夕張が整備長に愚痴を溢す。

「やっぱりレーザー兵器もいいわねー。ああ、『UNACちゃん』にも積みたいなく。え、やないさん」

「いや、僕に振られても……。うちはACパーツに余裕無いからどうしようもないよ。流石にレーザー兵器は造れないし……」

「噂じゃ倉井元帥って人がACパーツを沢山持つてるらしいじゃない？ちよつと分けてくれたらいいのに……」

「ある意味それが『UNACちゃん』と『吹雪式』なんだけどね……」

「あ、じゃあ龍驤さんに頼んでもう一度盗ってきてもらいましょーよ！」

「何言つてやがる、このバカタレが！」

夕張の頭に先程のレポートが挟まれたバインダーが振り落とされる。

「イタタタ」と頭を擦りながら夕張が後ろを振り返ると、提督と秘書艦二人、そして見慣れない軍人が立っていた。鎮守府のトップ達に宜しくない発言を聞かれ夕張は固まる。

「あー、銀爺大将殿。この馬鹿の発言は聞かなかったことにしてくれろと助かる」

「聞くも何も、私はここに居ないことになってる人間だ。何のことだかわからんおう」

「ありがたい、はははは」

二人のやり取りに夕張は困惑していた。提督の言葉通りであれば目の前の来客は大将と位の高い人物である。提督とのやり取りから察するにきつと本当なのだろう。しかしそんな人物がこんなところへ何の用なのか見当がつかない。

「あの提督。こちらのかたは？」

「ん、ああ紹介が遅れたな。こいつは陸軍の大将、銀爺という」

それを聞いて夕張含め横にいたやない整備長や後ろの明石、吹雪が敬礼を銀爺大将に向ける。やない整備長も含め腐っても彼女たちは軍人であるため、その敬礼は綺麗なも

のであった。

「紹介にあずかった銀爺という。姿勢は崩してくれて構わん。私がここにいるのは非公式だ。居ないものとして楽に振る舞ってくれ」

それを聞いて一同は立ったままではあるが敬礼を下げる。すると銀爺大将は吹雪へと近づいていく。

「元駆逐艦の吹雪だな。私はお前さんに用があつてね」

「は、初めまして！」

「実は初めましてでは無いのだが……仕方あるまい。あれは泊地の査察の時だったか。ドラム缶をせっせと運んでいたお前さんの姿はよく覚えていよ。白鳥の遠征部隊は評判が良い。だからこちらの覚えも良いのさ」

白鳥提督の遠征部隊、天龍や龍田を旗艦とした第四艦隊はよく陸軍の部隊への支援物資運搬なども行っていた。そしてその際に天龍の方針で荷下ろしや配給の手伝いを行っているのだが、それが陸軍の兵士達に好印象を与えていたのだった。実際、第四艦隊には暁型の駆逐艦四姉妹も所属しているが、そんな可愛らしい娘達が汚れも気にせず「配給なのです」と物資を懸命に配っている姿を見て好感を持たない人間などいるわけがない。密かにファンクラブ的なものできていても仕方ないのである。

ともかくそんなこともあり、第四艦隊に所属していた吹雪も好印象で覚えられていた

のだった。

「よちよち物資を運んでいたお前さんが深海鉄騎の……いや、今は『吹雪式』だったか。この兵器のパイロットを務めているとは……不思議な縁があるものだ」

銀爺大將は近くに待機している『吹雪式』に顔を向けた。

「私の部下を殺した兵器のはずなのに……やはり、もう別物なのだ。お前さんがパイロットでよかつた。心からそう思うよ」

「あ、ありがとうございます……あの、それで私にどのような用件で？」

「おお、そうだな、本題に入ろう。単刀直入に言うが、実は陸軍も何体かACを所有しているな。ただ使い方がわからなくてのう。そこでお前さんに指導教官をしてもらいたい」

「え、ええ!? マギーさんじゃなくて私がですか!？」

「その秘書艦から君が推薦されたのだが？」

吹雪がマギーをみると、彼女はさも「当然でしょ？」とでもいうような視線を向けていた。

「今の貴女なら色々なのに乗れるでしょ。それに教えるのもいい経験にもなる。だから貴女がやりなさい」

「は、はあ、……わかりました」

「ああ、そうそう。この任務の報酬はAC用パーツよ。あちらの部隊のアセンを終えたら、ついでに余ったパーツから使えそうなチョコイスして来て」

報酬を聞き、吹雪の眼の色が変わる。「もしかしたら……」とぶつぶつ呟いた後、銀爺大将に吹雪は尋ねた。

「あの、その話はいつからでしょうか？」

「おお、やる気になってくれたか。君が大丈夫であれば今日からでも構わんよ」

「それでしたらそちらが何を所有しているか下見させてください。できたら本日にでもっ」

「いいとも。このあと私の部下が迎えに来る手配になっている。それに一緒に乗ればいい。構わんな？白鳥よ」

「吹雪がいいならそれでいいさ。調整も済んでるみたいだし、演習まで任務も入れてないからな。あ、あーただ……」

提督は今さらになって気づいたように不安を顕にする。それは任務がどうのというよりも、陸軍には男しかいないことを思い出したからだ。変な虫が着かないか、提督の父性が要らぬ警告を発していたのだ。提督はある意味そういう心配の無いもう一人の愛娘を見る。

「加賀、悪いがお前も一緒に行ってやってくれ。念のためあちらの様子を確認してきて

欲しい」

加賀は吹雪が見た目以上にしっかりと知っているのを知っているため「必要ですか？」と尋ねようとしていた。しかし吹雪が加賀にも来てほしそうな視線を向けていることに気づき、それを飲み込む。

「……わかりました。私がいなくてもお仕事サボらないでくださいね、提督」

「大丈夫よ、そこは私がしっかりと見ておくから」

マギーが先程皮肉を言われたことへの仕返しとばかりに「しっかりと」をやたらと強調して答えた。この後提督は苦労することを悟った加賀は微笑を浮かべる。

「頼むわね、マギー。済みません銀爺大将、私もお願いします」

「構わんよ。これは道中が華やかになるのう」

こうして加賀と吹雪は銀爺大将と共にACの保管されている基地へと向かうことになった。

◇ ◇ ◇

『Hi, you say "how low?" ……Hi, you say "how low?"……』

薄暗い倉庫の中、ノイズ混じりの歌が微かに響き渡る。

「なんだこの音？」

「ああ、あれ”だよ”あれ”。調べる為に電源繋いでから勝手に鳴り出すんだ」
 「止め方もわかんないんだっけか？」

「ああ、つっても特に害もないから放置してんのさ」

これから日の出を浴びるであろう眠っていた兵器たちの埃を払いながら、二人の整備兵は歌を流している物体を見た。

カ号観測機に着いているような羽を二つ携え、軍艦にも負けない装甲を纏った”それはパイロット席のスピーカーから”鼻歌”を奏でている。

『Hi, you say how low? …… Hi, you say how low? ……』

音だけ聞くと掠れていて不気味なはずなのに、それに描かれているものを見ると不思議と陽気に歌っているように聞こえた。

「下手くそな鳴き声だ。きつとこいつのご主人様は相当な音痴だったに違いない」

「ははっ、ちげーねー」

二人の整備兵に笑われながら、その”コウノトリ”は今日も気ままに鼻歌を鳴らしていた。

第三十四話「MISSION 05」AC特別演習—04」

「え!? 演習の相手変わるかもしれないんですか!？」

アスファルトで舗装された道路を走る一台の車の中に、すつとんきような声が響く。

助手席に座っていた銀爺大将がどうしたことだと後ろを振り向き、その声の主である吹雪が「済みません……」と顔を赤面させながら謝った。

「そんなに驚かすつもりはなかったのだけれど……」

加賀の声は車内であることを考慮してかいつもよりもボリユームが小さめである。吹雪もそれに合わせて声を小さくした。

「済みません。てつきりマギーさんとやるものばかりだと思っていて、つい……。ずっと有効なパーツが何か考えてました……」

ちなみにこの「有効な」は『吹雪式式』が『ブルーマグノリア』に、ではなくその逆にである。

吹雪は今回の報酬がAC用のパーツであることを聞いて、『ブルーマグノリア』が自身の『黒い鳥』に勝つ手段として没にしていたアセンブル案の再検討をしていた。調整が間に合えば特別演習でマギーに使用してもらい、感覚を掴んでもらおうと思っていたぐ

らいである。その段取りを相談するつもりで加賀に付いてきてほしそうな視線を向けていたのだが、その予定が瓦解してしまい吹雪は先程の声をあげてしまっていた。

「仕方ないわ。その提案が挙がったのは今朝だし、まだ返答待ちの未決定案だもの。と言つても、恐らく確定でしょうけど」

提督の言う通りであれば演習を提案してきたのは倉井元帥側でありながら倉井元帥に不信を抱いた連中である。白鳥鎮守府のACが最悪の場合の抑止力として成り立つかを知りたい彼らにとつてみればマギーの提案は渡りに船だ。もしかしたらあちら側の陣営であるがゆえに言えなかつた提案なのかもしれないが、こちらから提案すれば話は別となる。

演習は倉井元帥のAC、『No. 2』『No. 8』と呼ばれる物たちとの戦闘になる可能性が非常に高かつた。

「加賀さん、ちなみにそれ……当然負けるのは無しですよね」

「……そうね。負けたら命に関わる訳ではないけれど、多分演習を提案してきた人たちには見限られるでしょう。そうすると今後が不利になるのは明白だわ」

「はあ、じゃあ『ブルーマガノリア』のアセン見直しは先送りですね……。折角加賀さんが付いてきて来てくれたのに……」

だから自分に付いてきてほしそうな目をしていたのか、と加賀は納得しつつ浮かんだ

疑問を吹雪にぶつける。

「なんでアセンブルが先送りになるの？『ブルーマグノリア』が強くなるのなら、そのまま行えばいいんじゃない？……？」

「あー……、ACはパーツを組み替えても単純に強くなるということはないんです。前も言いましたけど、グーがパーになるように性質が変わるだけなので……。もし相手が話に聞いていた通りのACなら今のアセンブルで問題ありません。新しい装備は馴れるのにも時間がかかりますし……」

元々吹雪が考えていたアセン変更案も、演習までの時間を利用しマギーが練習してくれることを見越しての案である。そして想定対戦相手は“普段の吹雪”だ。死神部隊以上と思われる相手は想定していない。

全く特性の違うACでもあつという間に乗りこなせるマルチドライバー能力はあくまで“例外”である『黒い鳥』ならではのものであり、“特別”な傭兵のマギーでも大きなアセン変更はそれなりのリスクがあった。

だからこそ吹雪は馴れる時間を確保するためにパーツ入手を急いでいたのだが、対戦相手の変更はその意味が無くなってしまっていたのだ。

「なかなか複雑なのね」

「そうですね……。ACの性能を底上げできる方法があれば一番いいんですけど……」

無論そんなものは無い。吹雪は知っていてそう答えた。

ACは10メートルにも満たないサイズに極限と言っているほどの戦闘能力が濃縮されている。これ以上の性能を望むのであれば、それこそ『傭兵』の記録に残っている『N—WGX/v』ほどのサイズアップや謎粒子を使用しない限り不可能なことであった。

困った表情を浮かべる吹雪を見て、加賀も察する。

「……それもやはり難しいのね。でも吹雪、それじゃあ報酬の件はどうするの?」

「急ぐ意味も無くなりましたしゆっくり決めますよ。どうであれ、何があるのか見てみないと分からないですし」

「そう……」

「話の腰を折るようで悪いがお嬢さん方。こっちにも使えるものは残してくれよ」

二人の話に聞き耳を立てていた銀爺大将から釘が刺される。ACのパーツは陸軍の物であり、最優先すべきは彼らの戦力増強だ。あくまで報酬は、その上で余ったパーツからの話である。

「し、失礼しました」

吹雪も加賀もその事を忘れたつもりはない。しかしあまりにも露骨に報酬のことについて話していたため自分達がはしたなく写っていたことを反省した。

「はっはっはっは、真面目だのう。お……、ほうら、着いたぞ」

銀爺大将に促され二人は車の窓から外を見る。すると二人の警備兵が立ち並んでい
る基地の入り口が見えてきた。敬礼をしながら微動だにしない警備兵を尻目に車は中
へと入っていく。警備兵どころかすれ違う兵士が次々と同じように車に向けて敬礼し
ていることから、改めて銀爺大将はやはり大将なのだ二人は実感する。

そして車は基地内のある倉庫の前で停車した。

「こつちだ」

二人は促されるがまま車から降り、倉庫の中へと入っていく。するとそこには予想だ
にもしない光景が——少なくとも吹雪には——広がっていた。

◇ ◇ ◇

誘われたまま倉庫の中にはいると、待つていましたとばかりにライトアップされた五
機のACが立ち並んでいた。

『ブルーマグノリア』と同じ脚部形状のACや、『吹雪式』『UNACちゃん』と似た
特徴の脚部を持つAC、キャタピラ脚のものや初めて見る四つ足のものもある。素人目
で見ても、これら全てのACが違うコンセプトで組まれていることは明確だった。

ただそれと相反するようにどのACにも共通していることがある。それはどの機体
も白を基調としたカラーリングをしており、そして……その肩には深海鉄騎と同じ『黒

い鳥のエンブレム』が刻まれていた。

「あ……………、ああ~~~~ツ!!」

横にいた吹雪が大きな声をあげながらACへと駆け寄って行く。エンブレムから察するに、もしかしたらこれらのACは『黒い鳥の傭兵』と関係があるものなのかもしれない。ならば『傭兵』の記憶を持っている吹雪の反応にも納得がいく。

すでに吹雪は近くにいた整備兵に許可を貰って四つ足のACに乗り込んでいた。操縦席のハッチを開けたまま、何かを確かめるようにコンソールを弄っている。

(邪魔をしないほうが良さそうね……)

一体どうしたのか尋ねようとしたものの、微かに覗くことができた吹雪の表情は作業に没頭している様子だった。

何をしているのかさっぱり分からないが、どうせ聞いたところでACに疎い私には理解できないことだろう。ならば落ち着くまで作業に集中させてあげたほうが良さそうね、というのが私の結論だった。

しかし、そうすると一つ困ったことがある。やることがない私はハッキリ言って暇なのだ。ACを眺めているのも嫌いではないが、パーツの性能が分からない私が観察しているも実りは無い。

一応、提督からは男所帯の陸軍で吹雪にちよつかいをかけてくる輩がいなか確かめ

るよう暗に頼まれていたが、ハッキリ言つてそんなのは取り越し苦労だ。

吹雪は見た目こそ幼いが、産み出されてから実際に生きている時間だけを見ればうちの鎮守府で最年長である。あの子は深海棲艦との戦争が始まった初期につくられた世代の艦娘であり、内面は見た目よりずっと大人でしっかりしているのだ。

それに加え『傭兵』の記憶まで持つようになったあの子はマギーに似た頼もしさまで身に付け始めていた。

なので万が一何かされるような事があつても吹雪なら充分に対処できるだろう、というのが私の見解である。つまり提督の頼みはただ親馬鹿を拗らせただけのものだ。そんなものを律儀にこなす必要などない。

まあそれでも報告はしなければならぬし、念には念をと回りの兵士を見回してみる。中にはこちらに好奇の目を向ける者やひそひそ話をしている者がいるが、比較的普通の反応だろう。私に——特に胸部に——向けられる視線も鎮守府の整備兵の人たちと同じようなものだ。つまりはここの人たちも私たちが普段から接する男性となんら変わらない。私たちの鎮守府で特に問題らしい問題は起きていないのだから、ここでも問題はないだろう。やはり提督の心配し過ぎだ。

その確認が済むといよいよやる事が無くなってしまふ。吹雪も今だACのコンソールを弄っているようで動く気配がない。

さてどうしたものかと目を閉じて腕を組み思案の海に潜ろうとした、その時だった。視覚情報が遮断され、それにより研ぎ澄まされた聴覚が変わった音を拾う。

(これは……歌かしら?)

壊れたラジオから流れるようにノイズがかかっているが……歌だ、歌が聴こえる。その印象通り調子の悪いラジオでもつけているのかと思ったが何故だかそれが気になつて仕方ない。中々頭から離れない変わったフレーズだった。

気付くとその歌が聴こえて来る方へ私は歩みを進めていた。まるでその歌に呼ばれているように……。

(……どうせ暇なのだし、いいか)

私は歌が聴こえてくる薄暗い倉庫の奥へと歩み続けていった。

◇ ◇ ◇

倉庫の奥にはA Cの物と思われる武装や機体のパーツがバラバラに置いてあった。あまり組み合わせを気にしなければあと数機分のA Cを作れそうな量だが、きつと組み方が分からないから放置しているのだろう。そんなパーツを尻目に私はさらに倉庫の奥へと進んでいく。

「Hi, you say "how low?"」

(落ち込んでいるのか? だって?)

その歌の歌詞がはっきりと聴こえる。どうやら大分近づいているようだ。私の足取りは自然と早くなっていた。不思議と気分が高揚している。

そしてついに、少し進んだその先に歌を流している“それ”を見つけた。

「これは……」

“それ”は見たことある兵器だった。かつてガダルカナル島で倉井元帥の艦娘、翔鶴が操っていた物と同じもの……。

ACを軽々と運搬できる力を持った艦載機『装甲ヘリ』がその場に鎮座していた。歌はそのパイロット席から流れている。

私はそのヘリから目が離すことができなかつた。全体が錆びてくすんでいてもなお放たれる力強さ、そしてそんな状態にも関わらずしぶとく機体に残っているコウノトリのエンブレムに惹かれていた。

「Bye, this world gave dry」

（おさらばしたいね、この世界は退屈だ）

歌詞がそのままこのヘリの意思のように思えた。「俺にはここは窮屈すぎる」、まるでそう訴えているようだ。

「……貴方はまだ飛べるの？」

（——もし飛べるといふのなら……私の力になってくれる？）

私は心の中でへりに問いただしていた。妙な確信があったのだ。きつと”これ”は私に必要なと……。

「飛べますよ、きつと」

後ろから声がある。振り返ると吹雪が私の後ろに立っていた。

「驚きましたよ、気付いたらフラフラ倉庫の奥にいつちやってるんですもん。加賀さん」
そう言いながら吹雪は私の横に並び立ち、装甲へりを見上げる。

「もしかしてあなたが呼んだの？”ファットマン”」
「ファットマン？」

吹雪が聞き覚えのない名前を口にした。その表情に、かつて工廠の奥で蒼龍、飛龍の艦載機を見つけた時の自分が重なる。まるで戦友と再開できたような、懐かしさと嬉しさが混ざったものだった。

多分、今私の横にいるのは吹雪だけでも吹雪でないものなのだろう。『傭兵』の記憶が吹雪にインストールされてから、たまにそれが”顔を出す”ことがあった。しかしそれは極限状態であつたり、相手に強い敵意を持っていたりする時だけだ。

それが今表れているということは、『傭兵』にとってこのへりは……”ファットマン”はそれほどまでに大切なものようだ。さっきの黒い鳥のエンブレムが描かれたACたちといひどうやらここには彼と縁のあるものがそろっているらしい。

吹雪は私よりもさらに一步へりに近づく。

「AC乗れないんだから、『傭兵』^{わたくし}のものなんか売り払ってくれてもよかったのに……。本当、どこまでもお人好しですね、あなたは」

一步前に出てるため吹雪の顔を覗くことはできないが、きつと微笑んでいるだろうと予想できた。その様子からもしかしたら私の希望が通るかも、と淡い期待が胸に宿る。「……吹雪。報酬の件だけけれど、このへりにすることはできないかしら。ACのパーツも重要なのは承知しているけれど……きつとこれは私たちの力になってくれるわ。だから……その……駄目かしら？」

「その根拠は？」と言われると「勘だ」としか答えられないため言葉の最後が弱くなってしまう。しかしそれでもと、吹雪の後ろ姿を見据えた。

「フ、フフフッ」

「な、なにかおかしいなと言ったかしら」

「いえ、すいません。さっきは冗談のつもりでしたが、もしかしたら本当にファットマンが加賀さんと呼んだのかなって……」

吹雪は私の方に振り返る。

「加賀さん。このへりのパイロットは……ファットマンは、かつて『傭兵』の“翼”でいてくれた人で……そしてマギーさんを救おうとした人だったんです。だからきつと、

加賀さんにこのヘリを使つて欲しいのかもしれませんが。「これでマギーを手伝つてやつてくれ」つて……。なんて、ちよつとロマンチックに考え過ぎですかね、あはは………加賀さん？」

私は再びヘリのエンブレムを見上げていた。

なんて私は艦載機に恵まれているのだらうと思う。航空戦力が私だけしかいなかった時も、蒼龍、飛龍の忘れ形見、『天山一二型』『彗星』が力を貸してくれた。二人が「私たちもいるよ」、そう励ましてくれた。それと同じだ。マギーを救いたい、その為の力が欲しい。その願いにこのヘリは、ファットマンは力を貸してくれるという。都合のよい解釈かもしれないが私にはそう思えて仕方なかった。

気付くと吹雪が優しい眼で私を見ている。

「……ふふ、加賀さん。早速ヘリのこと、銀命大将に相談してきますね」

「いいの？吹雪……」

「勿論ですよ！むしろこれを持ち帰らなかつたらマギーさんにどやされちやいます」

そう言うと、吹雪は上機嫌そうにヘリから流れていた曲と同じ鼻歌を歌いながらACのある倉庫へと向かっていく。しかし何かを思い出したかのように立ち止まり、再び私の方に顔を向けた。

「あ、すいませんが鎮守府に戻ったら司令官とマギーさんに伝言お願いできませんか？

演習直前まで私はこっちに残りますって。どうもAC部隊の編成と基本戦術の確立だけで結構かかってしまいそうで……」

「それは構わないけれど……へりの扱いはどうすればいいの?」

ここにあるものは『傭兵』の元持ち物らしいのでつきり吹雪が教えてくれるものだと思うていた。通常の艦載機ならいざ知らず、空母の戦闘オペレーションに記録されていないへりの扱いは流石に分からない。

艦載機はAIの補助で飛ばすため必ずしも自身が操縦できる必要はないが、どう戦うのか、どこまで動けるか分からなければ十分に運用することはできないのだ。

なのでこればかりは私でも師事を受ける必要があるが、秘書艦の仕事もあるため吹雪の様にここに残るわけにもいかない。

「それならマギーさんに教われれば問題ありませんよ。なにせマギーさんもそれに乗ってたんですから」

「マギーも!」

なるほど、これはマギーの思い出の品でもあるようだ。持ち帰った時のマギーの顔が楽しみになる。流石にマギーもへりを持ち帰るとは想像だにもしていないだろう。彼女の珍しい顔が拝めるかもしれない。

「それじゃあ加賀さん、あとは宜しくお願いしますね」

吹雪は鼻歌を再開し、倉庫の入口へと向かっていった。

あとはトントン拍子で話が進んだ。銀爺大将はヘリの受け渡しを快諾してくださり、その日のうちに——吹雪が「大変危険なのでこちらで管理します」と言っていた謎の兵器とともに——トレーラーに積まれて鎮守府へと搬送された。

私は一緒にトレーラーに乗せてもらいながら、帰り道の間ずっとヘリのエンブレムを眺めていた。ヘリのコックピットから再び歌が流れる。

「なんだかな〜あ〜」

「そんなこと言わないで……。これから宜しく、ファットマン」

第三十五話「MISSION 05 AC特別演習—05」

工廠の兵器試験場にけたたましいプロペラ音が響き渡っていた。その音源である装甲ヘリの操縦席に人影が二つ見える。

「まさか私が他人にヘリの操縦を教える時が来るなんて夢にも思わなかったわ」

装甲ヘリ『ファットマン』の操縦席の中でマギーはポツリと呟いた。その横で額に汗かきながら加賀が操縦幹を握りしめている。

私は陸軍から受領したヘリの操縦方法をマギーから教わっている最中だった。どんな動きが出来るのか知らなければ、たとえ他の艦載機と同じようにAIを積んでも満足に扱えないからだ。そのため私は鎮守府に戻って早々にマギーに師事を頼み込んだ。

ちなみに陸軍にあったヘリを含むACのパーツ類はやはり『傭兵』のものだったらしい。彼の隠れ家に安置してあったものが今になって見つかったようだ。マギーは「まるでタイムカプセルね」と言いながら鎮守府に届いたこのヘリを懐かしそうに眺めている。私に操作を教えてくれている横顔もなんだかいつともより柔らかい表情をしている。

それを見てやはりこれを選んで正解だったと私は確信した。

実際、性能面においても装甲ヘリ『ファットマン』は予想以上のものだった。速度こそ従来の艦載機に及ばないものの、高い旋回性、軍艦に匹敵する装甲は隔絶したものとなっている。火力に關しても吹雪が上手く交渉してくれたみたいで、死神部隊の『V』が持っていたようなオートキャノンを搭載しており、鎮守府近海に出没する弱い深海棲艦の艦隊程度ならこのヘリ一つで壊滅出来るかもしれない程の力を秘めていた。

マギーからも相性によるが並のACには勝てるかと太鼓判が押されているほどで、本当に良いものを手に入れたと思う。

だがしかし、贅沢な注文だとは分かっているが……私が望む力にあと一步及ばないのも事実だった。”並のAC”に通用する程度では足りないのだ。それはいずれ行うであろうマギーと『黒い鳥』との再戦を見据えてのこともあるが、目下の問題として私も特別演習に参加することになったからだ。

私がヘリと共に鎮守府に戻ってきた時には特別演習についての回答が既に来ていた。以外にも倉井元帥が二つ返事で了承したらしく、演習は元帥側のACとの戦闘となった……のだが、それには一つ条件が付いていた。

『私も参加させろ』

なんと倉井元帥自らもACに乗って演習に参加すると言ってきたのだ。今までのや

り取りから元帥もACの操縦が出来るとは予想していたが、まさか表舞台に出てくるとは予想していなかった。

そしてこれにより問題が発生する。演習において私たちの方が圧倒的に不利になってしまったのだ。相手は『元帥のAC』『N.O. 2』『N.O. 8』の三機だが、こちらは『ブルーマグノリア』『吹雪式式』の二機しかいない。一応龍驤の操る『UNACちゃん』もいるのだが、生憎演習当日に任務が入ってしまった。

当然ながら任務を調整して『UNACちゃん』を加えようとしたのだが、マギーから「連携の取りやすい分、装甲ヘリの方がマシ」との意見が上がり私が演習に参加するに至る。

一応それでも戦力差があるため調整を本営に願ったのだが試合形式がリーダーを倒せばよいフラッグ戦になっただけだった。あくまで本営側が知りたいのは公平な試合結果などではなく、万が一の場合に私たちが倉井元帥を止める力を持っているかだ。当然と言えば当然ではある。

マギーは「それでも十分勝機はある。やれるわ、私たちなら」と言ってくれてはいたが、きつとその「私たち」はあくまでマギーと吹雪であり私は含まれていないだろう。私にはそれが歯痒くて仕方なかった。

「加賀、旋回が甘いわよ。ちゃんと集中してる!？」

マギーに軽く頭を小突かれる。どうも今は余計なことを考える余裕は無さそうだ。まずはヘリを扱えるようにならなければ力にならない以前の問題だ。

艦載機に実際に乗り込むのは今回が初めてなのだから少しは多目に見て欲しいと一瞬思ってしまうが、演習は数日後に迫っており猶予はない。

久々に師事を受ける側であることを楽しむ余裕も無く、私はマギーの厳しい指導をなんとかこなしていった。

◇ ◇ ◇

マギーの指導によりヘリへの理解を深めることができた私は次の段階へと進む。これから補助AIを構築しヘリに載せることでAMSによる遠隔操作を可能にする作業に取りかかるところだ。

明石と夕張に手伝ってもらい、私がAIのロジックを組む傍らで二人はヘリにAMS用の受信機や自動操縦装置の取り付けを行っている。本当は作業場所は別々でも良いのだが二人がセットになるとたまにとんでもないことをしでかすことがあるため、私は目の届く二人の横で作業していた。

「うーん、まだ積載量にだいぶ余力あるな……。ねえ明石、なんか載せない?」
「なんか……なに載せる気?」

「ほら、一緒に持ち帰ってきた例のやつ。」おーばーどうえほん”だっけ?あれ載せま

しようよー！」

「ダメツ!!あれは絶体ダメ!!」

さつそく夕張が悪ノリを始めるが珍しく明石が止める。普段なら明石も夕張の提案に乗っかり暴走するのだが……珍しいこともあるものだ。余程吹雪がヘリと一緒に引き取ってきたOWというのは危険な代物らしい。逆に興味が湧いてしまう。

「……ねえ、明石。それはどんな兵器なのかしら?」

「加賀さんまで……。いいですか、OWというのはその名の通り規格外の超兵器なんです。ACのメインコンピュータにハッキングして規格に合わない装備を無理矢理リソクさせて使用するんですよ。その威力は凄まじいですが、扱いづらいし、反動で使用後の機体はオーバーヒート起こして使い物にならなくなるし、ろくなもんじやないです。核まで使つて……いったい何を倒そうとしたのやら……。造った人は頭のネジをフルパージしてるとしか思えません。そんな兵器です」

「……えと、つまり駆逐艦に戦艦の主砲を取り付けようとするのと同じ行為……と考えればいいの?」

「そうですね。ヘリにOWなんて積んだら自壊する恐れもあります」

確かにそんなものをヘリに積む気はない。なるほど、吹雪が「危険だからこちらで管理する」と言つて陸軍から引き取つてきたのは本当のことのようだ。一緒に話を聞いて

いた夕張が口をとがらす。

「チエツ、なんか勿体無いなあ。あ、そうだ！OWのシステムを利用してハッキング機能で相手のACを操つちやう兵器とか造れないかな？」

「相手がご親切にチャンネル合わせてくれればね。流星に外部アクセスでそれは無理よ。可能なら多分造られてるだろうし」

明石の言うこともごもつともだ。そんな便利な兵器があれば私だつて使いたいが、ここにあるOWを含め数多くのパーツを持つていた『傭兵』ですら持つていないのだ。きつとそれは無理で存在しないものなのだろう。……それがあればマギーの隣に並び立てるのに……と思ったところでふと、閃きにも近い疑問を口からこぼす。

後々になつてなんでそんな発想が出てきたのか皆目不明だが、この時はとにかく思い付いてしまったとしか言いようがなかった。

「……ねえ、明石。それ『ブルーマグノリア』には可能なのかしら？」

「え、加賀さんがマギーさんのACをハッキングするつてことですか!? うーん……オペレーションシステムでリンクしてるので、もしかしたら可能かもしれませんが……どうするんです？」

「なにか、なんでもいいからマギーの負担を軽くしたいの」

「といわれましても……」

明石が右手の人差し指で頬を軽く掻きながら答える。やはり出来ることはないか……と諦めかけた時だった。

「あー、私閃いちやった……」

夕張が意見がある、というように拳手をしていた。ただその顔は苦笑いを浮かべており拳手した手も肘を曲げて頭より上には上がっていない。

「夕張……それ、絶対にロクでもないことじゃない？あなたがそんな顔するときはいつともそうなんだから」

「いやー、うん、まあ……。やっぱ無かったことに……」

「話してちょうだい」

ガチリと夕張の両肩をつかんで睨み付けてしまう。どうしても私は力が欲しかった、マギーを助けられる力が。それが全うな方法ではないとしても、覚悟はとつくに完了済みだ。

「わかりました！わかりましたから睨み付けないでくださいよー」

「……ごめんなさい」

私は夕張の肩から手を離す。夕張は落ち着くためかわざとらしくコホンと咳払いしてからゆつくりと話し出した。

「OWのシステムで『ブルーマグノリア』にハッキングして、加賀さんが生体コンピューター

ターになればいいんですよ」

「??」

「やっぱりロクでもない……」

私が頭に疑問符を浮かべている横で理解しているであろう明石が目頭を押さえながら項垂れている。まともな案ではないことだけはひしひしと伝わるがやはり内容が分からない。

「夕張、理解が悪くて申し訳ないけれど私にも分かるように説明してくれない?」

「いえ、これはACいじったことがないと分かりにくいことです……」

そう言う夕張はどこからともなくホワイトボードを引っ張り出してきて長短二本の棒グラフを書く。そして長い棒にはジェネレーター出力、短い棒には消費エネルギーと書き加えた。

「いいですか、加賀さん。ACは武器や機体を動かす他に、FCSや姿勢制御の演算にもかなりのエネルギーを消費しています。それらの消費エネルギーの総量をジェネレーターが生み出すエネルギー量から引いた余剰エネルギーが実際に戦闘で使えるエネルギー量となります」

夕張はそう言いながらホワイトボードに書いた二本の棒グラフの高低さを表している空間を丸で囲む。

「当然この量が多いほど戦闘は有利です。ですからハッキングしてACの演算能力に使っているエネルギーをカット。代わりにAMSでACのコンピュータの肩代わりをするんです。そうすればACは余剰エネルギーが増えてパワーアップ!!ヘリには元々高性能な通信機能がありますからアンテナ代わりには十分です、やれます!」

夕張は自信满满といった様子で語る。この部分だけ聞けば良いことづくめだが、さて……と視線をずらすと明石が目を細めながら微妙に唸っている。

「……明石、これの問題点は?」

「加賀さんが非常に危険です。冗談抜きで命に関わります。UNACに指示出すのとは訳が違うんですよ!扱う情報量の桁が違います、下手したら脳が焼ききれちゃいますよ!!」

「それだけ?」

「それだけって……」

「私の命を懸ける”だけ”かと聞いているの」

それだけでマギーの隣に立てるのなら、彼女の”翼”に成れるのなら……この程度リスクの内に入らない。元より戦場はいつも命懸けだ。それにいつも戦場の最前線にいるマギーと比べればきつとまだ安全な方だろう。

「夕張、そのシステムの構築にはどれくらい掛かるかしら?」

「え!? えと、基本的に既存のプログラム組み換えだけでいけるから……やない整備長に手伝ってもらえれば三日後には多分……、でも正気ですか?」

「ええ、正気よ。三日後……演習前に起動テストもできそうね。明石はこのままシステムの組み込みまで手伝って貰えないかしら? 必要な申請は私がしておくわ」

明石が夕張の横から私に近づき睨み付けくる。

「駄目です! 使用者を危険に晒すものなんて造れません! 提督だつて許可しませんよ!」

その目には強い否定の意思が込められていた。それもそうか。彼女は……夕張もだが、たまにとんでもない物を造つたりもするがその根底には「仲間のため」という思いがある。半分以上趣味ではあつても造るものは「役に立ちたい」という彼女達なりの善意の形なのだ。だから私を害するものは造れないということなのだろう。

「だけど、それでも——」

「これは譲れません。私たちの戦場は近い内に激化するでしょう。だから抗える力が必要なの。少なくとも次の特別演習を越えられる程度には。だから……お願い」

強い決意を持つて明石を睨み返す。彼女も負けじと視線を合わせていたが、数秒後に折れたようにそれを反らした。

「……わかりました。造りますよ。ただし! リミッターは着けさせてもらいますからね

!!それが条件です」

「ありがとう。宜しく頼むわ」

「もう！こんなのこれつきりですからね！夕張く、やない整備長呼んできてく。多分また「仮暮らし」してるから」

「わかったく」

夕張はやない整備長が仮眠しているだろうテントへと向かっていく。やない整備長が過労で倒れたりしないか少々不安だけれど、何だかんだいつもこの二人の無茶に付き合ってくれているのだからまあ大丈夫だろう。

それよりも私は私でやるが増えたのだ、しつかりしなければ。そう早る気持ちを押さえながら残っているAIのロジックを組み上げていった。

◇ ◇ ◇

——三日後

工場裏の試験場に『ブルームグノリア』と、そのすぐ傍を飛ぶ装甲ヘリ『ファットマン』の姿があった。加賀が明石達に頼み込んで作り出したシステムのテストをこれから行う為である。

「メインシステム起動。加賀、こっちはいいわよ」

「了解。リンクスシステム」を起動するわ」

『ファットマン』に備え付けられている二つの大きなコンテナから鈍い起動音が発せられる。それと同時に『ブルーマグノリア』のコックピットのディスプレイにサブコンピュータの影響下に入った時と同じ小さな銃のアイコンが浮かび上がった。

「……FCSの性能上昇を確認。いい感じよ。そっちはどう？」

「少し頭が重い感じがするけれど……大丈夫よ。ヘリの操作も十分行えるわ」

「テスト成功ですね、お二人共戻って来てください」

二人のコックピットに明石の声が響く。それを聞いて二人は各々の機体から降り整備班の元へと向かっていった。

「なかなか良いもの造るわね。『前世』でも欲しかったくらいよ」

整備班の元に着いたマギーは上機嫌で整備班に賛辞を贈る。彼女からしてみればノースクでサブコンピュータに似た恩恵が得られる今回のシステムは本当にありがたいものだった。レーザーライフルを高起動戦闘のさなかで命中させなければならぬマギーにとって射程やロック速度は非常に重要なパラメーターである。それが上昇することはマギーにとって願ってもないことである。実は今回のシステムの話聞いた際にあまり期待していなかったこともあり、その驚きはひとときわであった。

しかしそんなマギーとは対照的に、同じく整備班の元に来ていた加賀はどこか不機嫌そうな顔をしていた。

「明石……私はまだ余裕あるわ」

「駄目です。実際は戦闘をこなしながらになるんですから負担はもつとかがかります。今でも安全圏ギリギリなんですよ。これ以上は許可できません」

明石たちの手によってリミッターを付けられた“リンクスシステム”では、当初夕張が言っていた程の性能が発揮できずFCSのサポートが限界であった。なのでその話を知らないマギーと違い、加賀からしたら現状の性能は拍子抜けもいところである。「もう少しどうにかならないかしら」とでも言うようにじつとじつとした視線を明石に向けて続けている。

そんな加賀を見かねてマギーは彼女の肩を叩く。

「加賀、無理しないで。今でも十分よ。貴女がパートナーで本当に良かったって思えるくらいにはね。それに貴女が無理して倒れたりしたら私はどこに帰艦すればいいの？」

「マギー……」

彼女に認められている事が嬉しくて簡単に機嫌が直るあたり、なんとも自分は単純か……と加賀は自身を皮肉りながら肩に置かれている手に自分の手を軽く重ねる。

「……ごめんさい。演習を前にして少々焦っていたみたい」

「大丈夫よ。言ったでしょ？ 私たちならやれるって」

マギーは加賀の肩から手を離し、ACの調整について話すべくやない整備長の元へと歩んでいく。

(マギー、その「私たち」に私は本当に入っているの?)

マギーの手が離れた肩に加賀は物寂しさを感じていた。そして不安も……。倉井元帥との演習の話が出た時から何かを予感しているのか、加賀の胸の奥に言い表せない不安がくすぶり続けている。

(もしも……何かがあれば……その時は)

加賀は遠くに待機している”コウノトリ”を見る。

(力を貸して、ファットマン……)

無言のままの新しい相棒を眺めながら、加賀はそつと自身の左薬指に付いている指輪を撫でた。

第三十六話「MISSION 05」AC特別演習—06」

鎮守府近海の演習等に使用する海域、そこに存在する小島群の中でも一際大きい離島の近くに一隻の空母の姿があつた。その空母から大型のヘリと吊られた蒼いAC、そしてそれを追うように白いACが大きな火を吹かして発艦する。

「目的地点に到達、これより『ブルーマグノリア』を投下するわ」

「了解、メインシステム起動。システム戦闘モードに移行する」

元々深海棲艦に占領されていたのか、基地型深海棲艦の跡地と思われる廃墟に『ブルーマグノリア』が投下される。運搬を終えた艦載機『ファットマン』はラックを折り畳み収納し備え付けられたヒートキャノンを展開して『ブルーマグノリア』のすぐ上空に待機した。

もれなく追隨してきた白いAC『吹雪式式』もその場に到着し、白鳥提督の陣営が揃う。

加賀が時計を見ながら不機嫌そうに呟いた。

「もうそろそろ時間だけれど……来ないわね。遅刻してこちらを苛立たせるつもりかしら」

「いえ、もう来ますよ。『すごく恐い物』が近づいてきてます」

『吹雪式式』がメインカメラを上空に向ける。その方角から徐々にヘリの重低音が大きく聞こえ、倉井元帥の陣営がこちらに近づいて来るのがわかる。マギーは吹雪に通信を繋げる。

「吹雪、貴女の見立てだと相手はどれくらい？」

「……これが演習でよかったと思うぐらいです。今までで一番の“圧”を感じます」
 （なるほど、少なくとも死神部隊以上……か）

マギーからしてもそのクラスの相手は『前世』を含めても数度しか経験がない。自分の中にある『何か』に火が着いたように体が火照っていくのがわかる。明らかに気分が昂っていた。

もれなく鶴のエンブレムが刻まれたヘリが三機のACを投下する。白い中量二脚のAC『No. 8』の『レオ』、白い逆間接のAC『No. 2』の『アクアリウス』、そして奇しくも吹雪のACと非常に似たシルエットを持つ倉井元帥の重量二脚の青いACが地面に降り立った。

マギーは『ブルーマグノリア』のスピーカーを元帥達に向ける。

「さすが“傭兵”、時間にはピッタリね」

マギーは元帥相手にあえて「傭兵」と言い放つ。普通であればあり得ない程の侮辱であるが——

「否定はせんよ」

感情の抑揚なく倉井元帥は一言答える。ただそれだけでこの男が生粋の傭兵だと——少なくとも今この場では——マギーは感じ取った。

「……貴方達を運んできたへり、まだ上空にいるみたいだけど……あれも戦闘に参加するの？」

「あれは戦闘を撮影するだけだ。」上^カが見学できるようにな

「加賀の邪魔にならないでよ」

「問題無い、うちの翔鶴は優秀だ。それにこの演習に余計な小細工を入れるつもりはない」

そう言うとき倉井元帥は自身のACの右腕に持っているレーザーライフル、『吹雪式』の装備と同じ「A U L K 3 7」を味方の『N O . 2』に向けて放つ。普段の大出力であれば無事では済まないが、『N O . 2』は装甲の表面に熱を持っただけであった。演習用に調整してあるというアピールだ。

「これで少しは信用してもらえたか？」

「……なるほどね。いいわ、始めましょう」

マギーの言葉を最後に沈黙が場を支配する。時間にして数秒だったが、あまりこのような戦闘に馴れていない加賀は息が詰まるほど長く感じていた。そして演習開始の時刻になった瞬間、はぜるように『N.O. 8』が突撃してきた。

グライドブーストにハイブーストを重ね、『ブルーマグノリア』と『吹雪式式』がレーザーライフルのチャージもミサイルのロックをする間も与えず瞬間的に距離を詰める。そして『N.O. 8』は居合いのようにレーザーブレード「MOONLIGHT」の一閃を空間に走らせた。

無論それを喰らうわけにもいかず、『ブルーマグノリア』と『吹雪式式』はその場から跳躍する。しかしそれを狙いすましていたかのように『N.O. 2』の放つレーザーイフル「KARASAWA」が『吹雪式式』を襲った。

自身の持つ直感からそれを予期していた吹雪はハイブーストを吹かしてなんとかかわすものの、時差を持って放たれた『N.O. 2』のライフル「AUB-17」に狙撃される。

「くっ！」

「大丈夫?!吹雪!」

「よそ見している場合か?」

倉井元帥の注意の直後、『ブルーマグノリア』の眼前に「AUC-H22」の三発の

バーストCE弾が迫る。急ぎ『ブルーマグノリア』は回避行動をとり右肩に一発被弾してしまっても直撃は避けた。しかしこれにより『吹雪式式』との距離が致命的に開いてしまふ。『No. 8』と『No. 2』は完全に『吹雪式式』を狙い撃ちしており、防戦一方の『吹雪式式』は更に『ブルーマグノリア』との距離を離していく。

(最初から分断が狙いか)

マギーがそれに気付いた時には既に遅く、ゾディアックの二機対『吹雪式式』、倉井元帥のAC対『ブルーマグノリア』の図式が出来上がっていた。

『ブルーマグノリア』がヒートマシンガンで牽制しながらオープンチャンネルで元帥に話しかける。

「吹雪のほうに興味があったんじゃないの？」

「あれは二人に任せる。それに貴様にも興味はあったからな、マグノリア：“カーチス”」

「カーチス」という性を若干強調して倉井元帥は答えた。

加賀は焦っていた。目の前で繰り広げられていた攻防に付いていけず完全に出遅れてしまっていたからだ。

これは仕方のないことであつた。艦隊戦であればここまで展開の早い戦いは存在し

ないからだ。制空権を得るためにドックファイトを繰り広げることもあったが、それとくらべても瞬間的に加速できるACの三次元機動の体感速度は圧倒的に速い。それに馴れていない加賀が付いていけないのは当然であった。

しかし、だからといって甘えていられない。加賀は自分を戒めると気持ち切り替え倉井元帥のACに照準を定めた。そしてへりに備え付けられているオートキャノンで倉井元帥のACに向けて放つ。

「ああ、貴様もいたな」

だが倉井元帥は加賀の攻撃と『ブルーマグノリア』の猛攻を岩肌を蹴りながら軽々とかわしていく。加賀は驚きを隠せなかった。

(これでも十字砲火を心がけている筈なのに……)

自身の攻撃が当たる気がしなかった。まるで全てがスローモーションで見えているかのごとく倉井元帥は最小限の動きで二人の攻撃を捌いていく。

そして倉井元帥のACがジェネレータのエネルギーを回復するためか基地型深海棲艦の残骸である建物の中に身を隠した時だった。

「素晴らしい力だ」

倉井元帥からオープンチャンネルでマギーと加賀に通信が繋がる。

「この力、貴様達はなにに使う？」

「馬鹿馬鹿しい！そんな問答して、時間稼ぎのつもり!?」

マギーは苛立ちを隠さずに怒鳴り付ける。そしてリコンにより捉えたACの影を追った。しかし完全に逃げの姿勢に入った倉井元帥のACは一向に『ブルーマグノリア』の眼前に姿をさらけ出さない。そして倉井元帥は淡々と会話を続ける。

「それもある。が、貴様達と話をしたかったのも事実だ。……深海棲艦を破壊すること、それが本当に正しいと思っっているのか?」

「当たり前です!その為に私達は戦っているんですから!」

いつ倉井元帥が建物の中から出てきても銃撃できるようへりを待機させながら、加賀は返答する。それが自身が造られた理由であり、散っていった仲間たちとの約束でもあるから。

「例えその先に待っているのが人同士の闘争と破滅だとしてもか?人間は人間だけで生きるべきではないのだ。人間には管理するものが必要だ」

「管理」という言葉にマギーが反応する。

「深海棲艦を使って『神さま』にでもなるつもり?到底できるとは思えないけど」

「そうではない……が、管理するという点では同じか。できることなら貴様らにはその手伝いしてもらいたいものだが……」

「お断りよ!そんな不自由そうな世界にする手助けなんてまっぴらごめんだわ!」

「……そうか。やはり似ている。……何を犠牲にしても自らの道を歩み続けることを止められない……。やはり貴様は『フランシス』の末裔なのだ」

その名を聞いてマギーは思わずACを止めてしまう。

『フランシス・バツティ・カーチス』

E G Fの祖にしてマギーの何代も前の祖母に当たる人物。そして”最初の黒い鳥が生まれるのを目撃した人”。

マギーの中で点が線になっていく。『フランシス』をまるで知人の様に語る言葉、『財団』の本名を知っていたこと、卓越したAC操作技術……。マギーは一つの答えに辿り着く。

「まさかお前?!……お前は?!」

「……『黒い鳥』、そう呼ばれていた時もあった。エンブレムはその時の名残だ」

倉井元帥のACにある、まるで逆さ吊りになっているように堕ちたカラスのエンブレム。倉井元帥が『ある神さま』に第二の生を与えられた時に渡されたACに刻まれているもの。『前世』の時のエンブレムに『ある神さま』の趣味が反映されたそれは、そのまま彼のACの名前になっていた。

倉井元帥は『フォール・レイヴン』を戦闘モードに切り替える。

「分かり合えぬのなら、もう言葉は不用だ」

瞬間、吹雪でなくとも感じ取れるほどの殺気が場に溢れた。『ブルーマグノリア』のスキャンに建物内を蹴りながら重量二脚とは思えない速度で迫る機影が映る。

「アアアアアアアアッ!!」

マギーは頭を巡る様々な思惑を断ち切る様に叫んだ。今やらなければならない事は「あの敵」を倒すことだ、と言いつ聞かせるように。

急ぎ『ブルーマグノリア』を戦闘モードに切り替え右腕のレーザーライフルのチャージを開始する。そして『フォール・レイヴン』をFCSに捉えた瞬間、左腕のヒートマシンガンを放つ。しかしその弾は敵ACに当たることにはなかった。まだ相手の軌道を予測する二次ロックが完了していなかったこともあったが、何よりも建物内であるにも関わらず『フォール・レイヴン』がグライドブーストで急加速してきたからだ。

その加速の勢いを加えた『フォール・レイヴン』のレーザーと三連バーストのCE弾が『ブルーマグノリア』を襲う。

その直撃による強い衝撃でACが硬直するよりも先にマギーもレーザーライフルで反撃をしていたが、それは攻撃と同時に放たれていた『フォール・レイヴン』の垂直ミサイルによって崩れ落ちた建物の瓦礫が防いでいた。

そして硬直している『ブルーマグノリア』の“すぐ横”を『フォール・レイヴン』は通り抜け、そのまま建物の外へと駆けていく。勢いそのままにライフルを向けた先は加

賀のヘリだった。しかしその弾が放たれることはない。

「なかなか良い判断だ」

このままではACと一対一になってしまうと判断した加賀は、ライフルを向けられるよりも先にヘリを『フォール・レイヴン』の射程外まで急上昇させていた。その距離ではヘリも満足に攻撃はできないが、単体で攻撃したところで当たるわけがないと考えてのことだった。

加賀は急ぎマギーに通信を繋ぐ。

「マギー…大丈夫!？」

リンクしているため見る事ができる『ブルーマグノリア』のAPを確認すると、既に三分の一が減っていた。たった一交差でそれを成した倉井元帥に加賀は戦慄する。

——だが本当はそれ以上だった。

「大丈夫……じゃないわ。私は、死んでいた……。これが演習でなかったら、私はあの時、殺されていた!!」

加賀の通信機が何かを叩く音を拾う。マギーは気づいていた。倉井元帥がすぐ横を通りすぎた時、その気であれば止めを刺せていたことを。演習のためブーストチャージが禁止されていたからこそ無事であっただけだと。

「クソッ！クソッ!!私じゃ……やっぱ無理なの!?私じゃ『黒い鳥』には——」

「違うわツ!!マギーはまだ負けてない!!私達はまだ負けてなんかいない!!」

マギーの言葉の先を言わせまいとするように、加賀の叫びが『ブルーマグノリア』の
コックピットに響いた。

第三十七話「MISSION 05」AC特別演習—07」

「私達は負けてなんかいない！」

私はマギーの言葉を断ち切る様に叫んだ。

その先の言葉を彼女に言つて欲しくなかつたから。言わせたくなかつたから……。彼女がそれを認めたら、何か壊れてしまう……そんな気がした。

演習前に感じていた私の不安、それが最悪の形で現れていた。まさか倉井元帥も吹雪と同じ素養を持っていたなんて思いもしなかつた。……いや、力を使いこなせていない吹雪よりも完成されている力だ。一交差で『ブルーマグノリア』をあそこまで追い込んだ力、目の前にいるのは紛れもなく本物の『黒い鳥』だった。

——だからなんだ。それがどうした。

そう自分に言い聞かせる。いつか挑む運命、それが今来ただけだ。この時のために私は力を模索してきたんじゃないのか？ そう自分を奮い立たせる。

ここでマギーが『黒い鳥』に負けたら、それは彼女に致命的な暗い影を落とすだろう。吹雪から聞いた彼女の『前世』、何もかもを捨ててまで戦い続けようとする執念、それに飲まれ本当に「何もかも」を捨ててしまうかもしれない。そんなのは嫌だ、させたくな

い。彼女と出会ってまだ半年も経っていないが、もう彼女が隣にいてくれるこの日々は何よりも大切なものになっているのだから。

——それを守るためなら命を懸けたっていい。

（頼むわよ、『ファットマン』）

私は操作パネルに“指輪”をかざした。

私達艦娘には錬度指数というものが定められている。戦果を元にその指数は決められ、“どれ程AMSシステムに順応しているか”の目安となっているものだ。武装の増設をするとその分脳への負担が増すのだが、身の丈に合わない改装をして自滅しないために定められた制度である。

そしてその指数が九十九、すなわち完全にAMSシステムに順応していることを示す値に達すると、特別な申請することで『指輪型AMSリミッターアンロックキー』を受領することができる。原理はいまいち分からないが、これによりリミッターを開放し制限されている脳を行き交う情報を増やすことでより多彩な艦の操作が可能となる。

ただ当然、無理矢理安全弁を外して行うものなので通常の操作よりも危険度はハネ上がり使用者は自らの限界を越えないよう注意を払わなければならない。だからこそ特別な申請の中には自身だけでなく提督の許可も含まれている。「お前なら大丈夫だ」と認められていなければならないのだ。

——だからこれから私が行うことは誤った使い方であり、提督の信頼をきつと損なうだろう。その罪悪感だけは拭えなかった。でも、それでも、やめることはできない。

私はその“指輪”の機能を使い、『リンクスシステム』のリミッターを開放させる。『ファットマン』はコンテナに搭載されているシステムをフル稼働させ、重低音を唸らせ始めた。

同時に頭の中が情報の激流に飲まれる。頭を万力で絞められた上に滅茶苦茶に揺らされている様な感覚に襲われ、痛みと気持ち悪さでその場に崩れ落ちそうになる。当たり前だ。本当ならACのスクラン情報を捌くのですら結構な負担なのにACの物理演算やFCSの肩代わりをすればこうなるのは当然の帰結だった。

苦しい、気持ち悪い、意識を手放したい……。全身から嫌な汗が吹き出し、顔からは涙やらなにやら流れ出ている。きつと人様には見せられない状態になっているだろう。意識を繋ぎ止めるのに精一杯だった。

(全く、なにがそんなにお前さんを駆り立てるんだ?)

(提督……?)

あまりの辛さに幻覚が生じ始めたのか、提督の姿が見える。……いや、提督ではない。似ているが違う人だ。提督に似ている人が再び問いかけてきた。

(お前さんがそこまでする義務なんてないだろう?)

（義務とか義理とかではないんです。私がしたいからしているだけ。マギーの手を取りたいから、ただそれだけよ。その何が悪いの！）

（……なるほどな。それがお前さんの『好きな生き方』ってやつか。あいつの手をとるのに、俺にはその我儘さが足りなかったのかもれん……。ようし、だったら気張れよ。おっさんは応援してやることしかできんがね、はははっ！）

（言われなくても……こんなの鎧袖一触よ）

気づくと男性の姿は無くなっていった。依然苦しさは変わらないが、しかし足には力が入り、心に活力が戻っている気がする。あの男の言葉で負けん気が復活したからかもしれない。

「彼女はもう『私の一航戦』よ、ファットマン……」

彼がいた空間に向けて私は呟いた。

◇ ◇ ◇

『ブルーマグノリア』のモニターに警告が浮かび上がる。

<不明なユニットが接続されました。システムに深刻な障害がガガガガガガガガガガガ……>

警告の読み上げが最後まで発されることなくブツリと途切れ、モニターの画面がもとに戻る。いや、正確には軽いノイズが残っており、マギーがACのステータスを確認す

ると軒並みの表示が文字化けしている。そしてジェネレータのエネルギーゲージが倍近くまで増えていた。

「加賀?! いったいなにをツ?!」

「マギー、覚えて……………いる? 最初の任務の、後に、交わした……………約束を……………」

加賀の声は震えていた。嫌でも何か無理をしている事を感じとれるほどに。しかしそんな状態でも加賀は話を止めなかった。

「私が、貴女を、『黒い鳥』にして……………みせるつて。あの時、貴女は私の、希望になってくれた。だから……………今度は、私の番よ……………」

「加賀……………」

「だから……………勝つて……………マギー!! 貴女が貴女でいるためにも!!」

〈Over System『Next』Setup〉

コックピットのモニターに文字が浮かぶ。それは加賀の願いそのものであった。

マギーに出会って自分は“次”に進むことができた。『MI作戦』で仲間を失ってから何かを失うのが怖くてたまらなかった。その恐怖をマギーという“一航戦^{最強}”が打ち

砕いてくれた。ポツカリ空いた自分の穴を彼女が埋めてくれた。だから、今度は自分が彼女を“次”へと押し進める番だ。彼女を墮としなんかさせない、自分こそが彼女の翼になるのだ。

その願いが『ブルーマグノリア』を“次のステージ”へと押し上げる。演算機能に使われていたエネルギーは全て駆動系に割り振られ、何十機もの艦載機を同時に操れる脳が演算処理を肩代わりする。ACの鼓動から、マギーはACに力が満ちていくのを感じ取った。

(これなら……まだ戦える！)

——初めて“自由な世界”^{戦場}を飛び回った時のようだ。

期待感がマギーの心に溢れてくる。先程まで彼女に落ちていた影が引いていく。

「……加賀、どれくらいもつ？」

「……3分が限界かしら」

「ッ、上等オツ!!」

マギーはフットペダルを踏みしめる。『ブルーマグノリア』のブースターにグライドブーストの火が灯り、弾き飛ばすように機体を前に加速させた。

(いつもより安定してる)

急加速による僅かな機体のブレ、それが今は感じない。明らかに機体の安定感が違

う。大出力のブースターを吹かしているにも関わらずエネルギーの減りも遅い。このままレーザライフルのチャージが出来るほどだ。なるほど、"Over System"とはよく言ったものだ。『ブルーマグノリア』はACを"越えたもの"となっていた。

マギーの魂に灯っている火が大きくなっていく。その火は強く、それ故に彼女自身を焦がしていた。だが今、それを受け止めきれぬ軀が彼女の手にある。ならば魂のままに、好きなように戦える。操縦幹を握り締め、スキヤンに映る機影を睨み付けながらマギーは言う。目の前の敵に、そして自分を縛っているものに向けて。

「倒すわ、『黒い鳥』を!!」



「さて、どうしたものか……」

倉井元帥は思案を巡らせていた。目の前のへりはこちらの射程外に滞空したまま動く心配がない。一応、落とそうとすれば落とすことはできる。隣の崖を蹴り上がり、射程内にへりを捉えればいい。もしくは無視して建物の中にいるACに止めを刺しに行くか……?」

だが幾度の戦場を渡り歩き養われた勘がそのどちらの選択肢も否定していた。何度

か味わったことのある感覚……今、目の前で何か生まれようとしているのを感じ取っていたからだ。……“恐ろしい何か”が。

きつとそれにあのヘリが関わっているのだろう。その誕生を阻止するのは容易い。だが元々この演習の目的は彼女達の実力を見極めるのが目的であり、その実力の奥の奥を見せてくれるというならば願ったり叶ったりだ。だから暫しの時を待とう。

そう決めた倉井元帥は自分が笑みを浮かべていることに気付き、自嘲した。

「結局、傭兵はどこまでいっても傭兵か……」

何だかんだ理由を付けながらも、本当は久々の強敵にうち震えているだけだった。

どんなに提督として長年取り繕ってきたても、ACに乗ってしまったえばそのメッキは剥がれ『傭兵レオス・クライン』に戻ってしまう。主義も主張もなく、ただ戦うことでしか生きる術を知らなかった。だから流れのままに戦い続け……その果てに贖罪が必要になったというのにも関わらず、まるで反省していないように戦いを求めてしまう。どんなになってもその本質は変わらなかった。

(……今さらか)

人間の本质は変わらない。分かっていたことだ。だからこそ贖罪を、秩序を復活させようとしているのだから。

『フォール・レイヴン』のスキャンが敵ACの動きを捉える。

「……来たか」

「ごちやごちや考えるのは終わりだ。その様な思考はこの場では不純物でしかない。今、この瞬間は力こそが全てだ。見せてみる、貴様の力を」

倉井元帥はACのスキャンモードを解き、敵が向かってくる方向に注意を向ける。すると高速でこちらに接近してくる『ブルーマグノリア』が視界に映った。そしておかしな点に気付く。『ブルーマグノリア』から青白い発光が見えているのだ。それはレーザーライフルのチャージ光であり、それ自体はおかしくはない。問題はその距離である。先程の攻防で掴んだ相手の射程範囲、それよりもまだ大分離れているからだ。いつでも発射できるように事前チャージしているにしてもあまり適切な距離とは言えない。

（そんな無駄な事をする相手ではなかったはずだが……）

だが直ぐに倉井元帥の疑問は解消される。『ブルーマグノリア』の両肩からフルロツクされたCEミサイルが発射されたからだ。予想外のことに驚きつつも倉井元帥は岩場を蹴り急転換することでミサイルを難なくかわす。しかしすぐにそれは悪手であることを把握した。ミサイルにロックされるということは、離れていると思っていたこの距離は『ブルーマグノリア』の有効射程を示していたからだ。

「ちいッ」

倉井元帥は舌打ちしながらも空中でブースターをカットし、同時にハイブーストを吹

かす。機体を浮かすためのブーストをカットすることで機体にかかる余計な慣性は消え去り、『フォール・レイヴン』は地面に向けて急加速した。しかし『ブルーマグノリア』から放たれていた閃光がギリギリ『フォール・レイヴン』の右足を穿つ。これ以上の追撃は食らうまいと倉井元帥は勢いそのままACを近くの瓦礫に滑り込むように隠した。(……有効射程を隠していた? いや、それはないな。有効射程が伸びた、と考えるのが妥当か)

数少ない情報と自身の経験から倉井元帥は直ぐ様答えを導き出す。先程の勘はやはり正しく、あれは先程まで戦っていたACとは別物だと認識を改めた。

その束の間『ブルーマグノリア』は建物の残骸や岩場を蹴り、連続したブーストドライブで一気に関合いを詰めていく。崖肌を駆け上がり上空から強襲する様はまるで獲物を捉えた鴉のであった。鴉が啄む様に『ブルーマグノリア』は倉井元帥のACの上空を舞いながら持ちうる武装の弾丸を浴びせる。

いくら倉井元帥でも高出力のブーストで上空を跳び回るACの攻撃を全て躲しきるのは不可能であり、演習用の仮想APが着実に減らされていく。しかもその攻撃は従来のACのエネルギーではあり得ないほど持続していた。

(まるでRDのAC……いや、それ以上だな)

『前世』で相対した、OW『グラインドブレード』の外付けジェネレーターにより反則的

な機動力で襲いかかってきたACを思い出す。しかもRDと違い、その暴力的ともいえる力に振り回されず目の前のACは、マグノリア・カーチスは完全にそれを従えている。

——確定だ。やはり貴様は、貴様らはイレギュラーだ。

再び倉井元帥の顔に笑みが宿る。笑みとは本来威嚇行為であり、彼の中で彼女たちは「いずれ倒すべき敵」と決定された。

「十分だ」

もう遠慮はしないとも言うように『フォール・レイヴン』はレーザーライフルを投げ捨て右肩に備えていたショットガンを手にする。左腕もバトルライフルからシールドへと切り替え、垂直ミサイルを放つと同時に地面を蹴った。

『ブルーマグノリア』は迫るミサイルを空中のハイブーストで軽く躲す。しかしそれは倉井元帥の想定通りの動きであり、『ブルーマグノリア』の移動した先に『フォール・レイヴン』が待ち構えていた。

「クソッ！」

倉井元帥の思惑通りであったことを直感的に悟ったマギーはそれが面白くなく声を溢す。そしてその鬱憤を晴らすように目の前の敵に『ブルーマグノリア』のミサイルとヒートマシンガン、そしてレーザーライフルを放った。

その全てが直撃し、マギーはほんの一瞬だけ「勝った」と気を緩めてしまう。しかし

直前に捉えていた敵ACの武装を思い出し、それが誤りだと改めた。その気の緩みは時間にして瞬き以下程度の間であったが、倉井元帥はその刹那を見逃さなかった。

演習用ミサイルの粉煙の中から散弾が放たれ『ブルーマグノリア』に直撃する。その威力は装甲を抜くほどではなかったが、同時に加わる強い衝撃力により機体がぐらつく。その隙に倉井元帥は機体を崖面へ近づけブーストドライブで上へとあがった。今度は『フォール・レイヴン』が『ブルーマグノリア』の上を押さえる。上をとった『フォール・レイヴン』は既に盾をパージしており、左腕に再びバトルライフルを構えていた。そして今までのお返しのようにショットガンとバトルライフルを『ブルーマグノリア』に浴びせる。

マギーは反撃しようと試みるが、倉井元帥は旋回性の高い自身の機体性能を生かし『ブルーマグノリア』の上空を張り付いて離れない。しかも恐ろしい精度でショットガンを命中させ、その衝撃で機動力を殺してくる。それにミサイルとバトルライフルを被せてくる戦法に反撃どころではなかった。加賀の力でACの安定性まで向上していなければこのまま固め殺されていたかもしれない。その「もしも」が頭を過りマギーは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべるが、しかしそれは「もしも」の事であり今の私の事ではないと直ぐさま思考を切り替えた。まだ戦うことはできるのだ。

マギーは先程倉井元帥がしたのと同じようにブースターをカットしハイブーストを

吹かして地面に急降下した。そして着地した瞬間にブースターをオンにしてグライドブーストで障害物の間を縫うように駆け抜けていく。そうして『フォール・レイヴン』の射程外へ逃れ、マギーは体勢を立て直した。

倉井元帥もACを地面に着地させ、スキャンモードで『ブルーマグノリア』を観察する。互いのAPと相手のAPを見比べ、奇しくも両者は同じ考えに至っていた。

——次の一交差で終わりだ。

両者が同時にブーストを点火する。グライドブーストで地表を駆け相対距離を詰めていく。互いが牽制で放ったヒートマシンガンとショットガンは互いが身を隠した障害物の一角を削り飛ばした。それにより生じた煙を掻き分け、『ブルーマグノリア』が上空から『フォール・レイヴン』に襲いかかる。

「私の勝ちだな」

倉井元帥はグライドブーストにハイブーストを重ね吹かし『ブルーマグノリア』の下を高速で駆け抜けブーストを切った。そして右足に重心を置いて軸とし、機体にかかる慣性を活かしてドリフトターンをする。その眼前には『ブルーマグノリア』の背面が写っていた。後は引き金を引くだけだ。

「勝つのは私よー」

叫ぶのよりも早くマギーはフットペダルを踏み込んでいた。加賀のAMSによるサ

ポートにより高度な姿勢制御が可能となっていた『ブルーマグノリア』は空中でブーストによる急旋回を行う。『Next』により従来のACを超え、『世界を破滅させた力』に近づいたからこそできる挙動により『フォール・レイヴン』を正面にとらえていた。

二つの銃声と共に、演習終了のブザーが各ACのコックピット内に鳴り響く。

第三十八話「MISSION 05」AC特別演習—08」

「ありがとうございます」

「AP0」と表示されているコックピットの中で、吹雪は『No. 2』『No. 8』へ向けて通信した。

(……強かったな。でも、だからこそ、学ぶことも多かった)

先程の言葉は相手への素直な気持ちだった。二人の連携は以前戦った死神部隊よりも高く、マギーとの訓練では得られない一対多数の経験として非常に上質なものだっただけからだ。

演習が始まる前は、吹雪は正直なところ相手を嫌っていた。それもそのはずである。間接的とはいえ倉井元帥には仲間共々殺されかけたのだ。しかも結果として自らの半身とも言えた駆逐艦『吹雪』を失った。例え無事でもACに乗り換えてはいただろうが、それでもあの船には様々なものが詰まっていたのだ。それを失う切っ掛けを作った相手に好意など持てようがなかった。

しかし、目の前にいる二機はそんなことを忘れさせてしまうほど——というよりそんなことを思う暇も与えないほど、という方が正確か——それほどの強さを誇っていた。

だからこそ多くのものを学べ、自分の目指す最強の「傭兵」のイメージにまた一歩近づけた実感があり、それについて敬意は払うべきだ、との思いから吹雪は先ほどの言葉を口にしていった。

(まあ、そんな風だから勝てないのかもだけど……)

結局これが演習だと、命の危険は無いと心の奥底で思ってしまったから極限状態には至れないのだと項垂れる。敬意とは別に、負けたことへの悔しさはあった。

—— ヴィイイイ!!

「うわっ!」

突如としてコックピットに撃墜された時と同じアラームが鳴り響く。一体なんだ？と吹雪が事態を把握する前に『No. 8』から通信が入った。

「どうやら試合に負けたのはこちらのようだな」

『No. 8』の言葉を聴き、それを確かめようメインモニターを観る。すると確かに <mission complete> と表示がされていた。それはこのフラッグ戦においてマギーが倉井元帥に勝ったことを意味していた。

(そっか、良かった……)

自身が負けてしまった悔しさが後引くものの、マギーが勝ってくれたことが素直に嬉しかった。加賀程の不安は抱いていなかったが、万が一マギーが負けることがあれば何

か悪影響があるとは思っていたからだ。それが杞憂に終わり、吹雪は胸を撫で下ろしながらコックピットのシートに体を深く預けた。

「状況は終了した。翔鶴、回収を頼む」

一息ついている吹雪を無視するように『No. 2』は翔鶴に通信を入れる。程なくして戦闘を中継するために上空に待機していた翔鶴の大型ヘリが『No. 2』と『No. 8』にラックを接続し、二機を上空へと吊り上げていく。

「……もうちよつと何かあつてもいいんじゃないかな……」

先程までの激戦がまるで嘘のように淡々と撤収していく二機を見上げながら、吹雪は小言を溢す。一応互いにぶつかり合ったのだから一言二言ぐらい言葉の応酬とかがあつてもいいのでは?と思つていたから出た愚痴だつた。

とはいえこのまま突つ立っている訳にもいかないか……と、演習後の呆気なさになにか物足りなさを感じながらも吹雪は加賀に通信を繋ぐ。

「こちら『吹雪式式』、作戦終了しました。これより正規空母『加賀』へ帰艦します」

しかしその通信に返信はない。いつもであればすぐに加賀らしい形式ばつた返事が来るのだが、それが聞こえてこない。

「こちら吹雪、加賀さん聞こえますか!?加賀さんッ!」

いくら叫んでも返事は無く、吹雪の中で不安が膨らんでいく。

「加賀さんツ……」

吹雪はブースターのフットペダルを強く踏み込み、『吹雪式式』を『加賀』に向けて駆けさせた。

◇・◇◇

演習場所の上空では倉井元帥の『フォール・レイヴン』と『No. 2』『No. 8』を運んでいるヘリが装甲空母『翔鶴』へ向かいながら合流していた。

「驚いたぞ、倉井。まさか貴様が負けるとはな」

「まさか手加減したわけではあるまいな？」

『No. 8』と『No. 2』が驚嘆と怒気を顔に倉井元帥に話しかける。

「全力だったさ、紛れもなく。その上で奴が……いや、『奴等』が強かった。ただそれだけだ。そちらはどうだったんだ？」

倉井元帥はこともなく事実を二人に告げ、そしてもうひとつの不確定要素について言及する。それに対し『No. 8』が答えた。

「報告書ほどの戦闘能力は確認できなかった……が、紛れもなく『例外』だ。戦いながら成長していた。……まるで初めて初めて貴様と対峙した時を思い出す。次はどうなるかわからん」

「なるほど……、イレギュラーは二つか。なかなか骨が折れる」

「だが倉井。相手がなんであれ、我々は我々のミッションを遂行するだけだ」

「……その通りだな、No. 2。それに次のミッションに限っては頼もしい限りではある、か。……もう少しだ。もう少しお前たちには付き合っつて貰うぞ……」

その会話はACを運ぶヘリのプロペラ音と共に空へ霧散していった。

◇ ◇ ◇

正規空母『加賀』の中にある居室のドアを叩く音が響く。

「加賀、入るわよ」

マギーは一言伝えると返事も待たずに部屋の中に入った。その手には小包を抱えている。

「はい、これ。携帯食糧と水」

「……ありがとう」

演習終了後、加賀は『Next』の副作用による極度の疲労感に襲われていた。ACに初めて乗った時の吹雪の様に気絶こそしなかったものの、吹雪からの通信に答えようとするとその拍子に胃の中のもの逆流してしまいそうなほど気分が悪く、心配したマギーと吹雪が乗り込んで来るまで操縦席から動けなかったほどだった。

二人に介抱され喋れる程度に落ち着いてから事情を話すと吹雪からは涙を浮かべな

がら怒気を含んだ目で睨み付けられた。

「無茶すぎです!!もし加賀さんに万が一のことがあればどうなるか……。わかっていないわけじゃないですよね!」

そのまま加賀は——同罪だということでもマギーも並べられながら——吹雪から説教をくらっていた。二人が黙って説教を聞いたのは吹雪が真剣に自分達の身を案じているのを理解しているのと、言つてしまえばたかが演習で再起不能に成りかねない行為をしたことに幾ばくか罪悪感があつたからだつた。

そして文句を出しきつた吹雪は「加賀さんの回復のため今日はここで宿泊、帰るのは明日にしましょう」と提案する。流石に艦を動かすだけなら、と加賀は反論しようとするも、吹雪の「駄目です!これはもう決定ですから!」という言葉に遮られその余地はなかつた。

「じゃあ司令官にそう通信しておきますね。マギーさんは引き続き加賀さんの看病をお願いします」

吹雪はそう言い残してそそくさと居室を後にする。そして残されたマギーは言われたとおり（言われなくてもやるのだが）加賀の看病をしていた。

加賀はマギーが差し出した小包を受け取るとそれを荷ほどき、中からラムネ菓子のようなものを取り出し口に含む。それはAMSにより脳を酷使する艦娘用に作られたブド

ウ糖を固めた物である。唾液を吸ったブドウ糖はホロホロ崩れながら溶けだし口の中に甘味が広がった。そして水をゆつくりと含み口の中に残ったブドウ糖を溶かしきって飲み込むと、体にそれが染み渡っていく感覚がする。そのお陰か先程までの疲労感が幾分か和らいでいた。

その一連の動作を見ながらマギーは加賀の隣に座る。二人の体重が局所的にかかり、椅子代わりにされていたベッドの軋む音が部屋に響いた後だった。

「ありがとう、加賀……」

先程までの視線を部屋の床に移し、それでも確かに加賀に向けてマギーは言った。加賀はそんなマギーを横目で見ながら返事をする。

「正直、怒られると思っていたわ……」

「吹雪が同罪だつて言つてたでしょ？ 私にそんな権利は無いわ。そもそも怒つてないし……。それともまだ説教されたいの？」

マギーは皮肉めいた笑顔を加賀に向けた。

「ふふッ、そう……ね。それはもうお腹一杯よ……」

『——余計なお世話だった』

そう言われるのを恐れていたが、そうでないことが分かり加賀は内心安堵する。そしてあることを確信していた。

マギーは加賀を見つめながら再び同じ言葉を紡ぐ。

「本当にありがとう、加賀。貴女のお陰で……あの瞬間、届いた気がしたの、*“彼”*にまで……」

「……ねえ、マギー。貴女を縛るものは無くなったかしら？」

「そうね……。どうなのかしら？でも、何て言えばいいか……」取り戻せた*“*気がするの。あの時、左腕を失った時に一緒に無くしてしまっただけ……」

負けた時に失ったもの。戦場を駆けていたあの頃を。強さという支柱を、自由にいられる権利を、そうでありたい自分自身を……。

「そのお陰かしらね。スツキリしたわ。あのクソ元帥にも一泡吹かせることができたしッ」

マギーは腕を上げて背伸びをした。そして体を伸ばしきり腕を下ろしながら「ふうっ」と息を吐く。その顔は憑き物が落ちたように晴々としていた。

（ああ、やつぱり……。強くなったのね、あなたは）

マギーが素直に感謝した理由、それは『ブルーマグノリア』だけでなくマギー自身も先程の演習で*“*殻を破っていた*”*からだ。マギーはきつと、無意識にそれを理解しているからこそ晴々としているのだと加賀は確信していた。

今までのマギーにはどこか*“*危うさ*”*があった。常になにか急いでいるような、強い

られているような、そんな“危うさ”が……。きつと敗北に囚われている自分への憤怒が、マギーの中の『恐ろしいなにか』がそうさせていたのだろう。だけど——先程の言葉借りれば——『黒い鳥の傭兵』の領域まで手が届き、自分を取り戻せたことでその“危うさ”が無くなったのだ。『恐ろしいなにか』に縛られるのではなく、飼いやらすことができたからこそ……ACだけでなくマギー自身が次の段階に進めたのだろう。

それは同時に私の誓いが果たせたことを意味していた。マギーを縛る『黒い鳥の幻想』を打ち払い、そして私が彼女の“必要”に成れたことの……。それが嬉しくて、胸に熱いものが込み上げてくる。

「どうしたの、加賀？大丈夫？」

感慨に耽っている加賀の顔をマギーがのぞき込んだ。

「なんでもないわ。大丈夫よ」

「そう。ああ、なにかほしい物あれば取ってくるけど？」

「欲しい物……そうね」

加賀は少々いたずらっぽいな笑みを浮かべ、マギーの肩に頭を預ける。

「疲れていたの、忘れてたわ。このまま肩を貸してほしいのだけど」

「疲れてるなら横に……。いや……」

それは野暮か、というようにマギーはその先を言うのをやめた。自分のパートナー

が珍しく甘えてきているのだからその通りにしてあげようとマギーは考える。

「……こんな肩でよければいくくらでも」

「ありがとう……」

二人は目を閉じ会話もやめた。自身に伝わるものは相手の体温と波の音だけだ。

——それは静かな産声。二人で一羽の鳥がこの日、^{可能性}確かに生れ落ちていた。

第三十九話「番外編」アオバ・リポート

「あん時はもう駄目かと思つたぜ。でもよ、そこに吹雪が来たんだ！」

「ほうほう、それで？」

「凄かつたぜ。俺の船の上にいた奴をさ、ズバツと一刀両断しちまつたんだ！」

「おお、それは凄いですねえ」

「だろう、それでさ……」

軽巡洋艦『天龍』の操縦席にて、それを操縦する者とカメラを首に掛けた女性が会話に花を咲かせていた。一応今は陸軍への物資補給任務の帰路でありその様な行為は慎むべきもののだが、生憎それを咎める立場にいる旗艦がその天龍である。しかも普段であればそれを止める龍田もその会話を聞き入ってる上、「警戒は電達にて任せて欲しいのです」と仲間からのありがたい言葉もあつたものだから会話を止める者は皆無という状況だ。

天龍と会話している女性——アオバ——は、その内容をこまめにメモに取っていた。

（ワレアオバ、有力な情報提供者と接触せり、引き続き取材をする、と。……にしても、

まさかアレを追っていたら天龍さん達にたどり着くとは、妙な縁があるものですねえ)

わたくしアオバは元艦娘“青葉”でして、生まれは天龍さんたちと同じ鎮守府です。『MI作戦』の際にアオバ達の鎮守府は敵の襲撃を受けて壊滅し、その時に自分の船を失ってしまいました。天龍さんと龍田さんは遠征任務で鎮守府を離れていたため無事だったみたいですが、アオバと保護されたタイミングが違っていたようでそのまま別れに……。そして数刻前に感動の再会を果たせたというわけです。

それまでアオバはあるモノを追い続けていました。それはアオバたちの鎮守府を壊滅にまで追い込んだ存在——最近なつて『深海鉄騎』と名付けられたもの——、それを追い続けていたんです。たつた一体で鎮守府を滅ぼせる圧倒的な力を持つ新種の深海棲艦。アオバがその報告をした時はあまりの内容に「どうやら錯乱しているようだ」として片付けられてしまい取り合つて貰えませんでした。その時はたつた一枚でも写真を撮れてさえいれば、物的証拠があればと後悔の念に駆られたものです。それが悔しくてか、仲間の死を無駄にしたくないからか、その新種の深海棲艦を探り存在を知らしめ私たちの鎮守府のような被害を未然に防ぐことが残されたアオバの使命だと思つたのが『深海鉄騎』を追うようになった切っ掛けです。

そして船を失つた“青葉”は“アオバ”となつて陸軍に転属したわけですが、それがたまたま銀爺大将の目に止まつたようでした……。突然、大将自らある倉庫に呼びだされ

ることだ。

「きよつきよきよ、きよーしゆくです！自分なんぞに大将自らのような御用件でありましょうか!!」

「おお、よく来たな。まあ楽にしてくれ。是非お前さんに見てもらいたいものがあつてのう」

「は、はあ?」

「……お前さん、確か『あるモノ』の行方を探っているようじゃないか。それが『コレ』と同じものか見てもらいたいのだ」

銀爺大将のおつしやる内容を理解しきれぬまま倉庫の中に案内されると、そこにはアオバの鎮守府を壊滅させた鉄の巨人と同じものが——しかも5体も——存在してしました。脚の形状や兵装は違っているものの確かにアオバが見たものと同種であることは一目瞭然で、その時は思わず襲撃された時の恐怖が蘇り腰を抜かしてしまいました。

「な、なんでアレがここに!?!まさか鹵獲できたのですか!?!アレを?」

「やはりこれらはお前さんの鎮守府を襲撃したものと同じものようだのう。……これらは鹵獲ではなく陸軍が発掘したものだ。使い方も、その力も分からなくてここに放置されている」

「放置って……そんな、危ないですよ!動き出したらどうするんですか!?!」

「動きださんよ、少なくともこれらは。どうも有人兵器のようらしい」

「有人兵器って……でも鎮守府を襲ったのは……」

「わからん。深海棲艦が乗っ取って動かしていた可能性もある。なんせ奴らは戦艦すら模倣して運用するような奴らだからのう。……まあとにかくお前さんのおかげでこれがどんな存在か、そしてその有用性の確認は取れた。そこでもう一つ、頼みたいことがある」

「は、はい!!」

「どうも海軍の上層部はこれがどういうものであるか知っている……どこるか運用までしているらしい」

「え?」

「噂程度の話だがね。だがお前さんへの聴取の対応などを鑑みるに、あながちホラではなさそうだ。……だからその真相を探ってもらいたい」

「それってつまり……」

「ああ、海軍への偵察を頼みたいのだ。そしてこの兵器の運用に関する情報を探って欲しい」

こうしてアオバは後に『深海鉄騎』と呼ばれる存在を探るスパイとして海軍に潜り込むことになりました。一応言っておきますとスパイ行為への罪悪感もあつたので倉庫

にあるものを見せつけて海軍を問いただしてみては？とお伺いしましたが、「理由をつけて徴収されるのがオチだ」と言われてそれきり。まあ情報が共有されていなかった時点である程度の察しはついていましたが……陸軍と海軍の上層部の不仲は相当深刻なようです。ただアオバとしても「存在を知っていたのになぜ？」という思いもあつたので最終的にこの任務を引き受けることに。（そもそも大将直々の命令なので断るという選択肢は実際ないのですが……）

そしてどうやら銀爺大将の慧眼は正しかったようで、アオバはこの任務にまさによつてつけでした。本営などに入ること自体は同じ帝国軍として正規の手順で入ることができますし、中で艦娘「青葉」に変装してしまえば大手をふるって海軍管轄に入り込むことも可能でした。まあ艦娘はみなクローンですし、艦種判別のため建造時の制服が正装として定められているのでわからないのは当然ですが。提督の中には自分の部下の判別がちゃんとつく方もいらっしやいますが、だとしてもアオバを見かけたところで「ああ、他の鎮守府の娘か」が関の山。しかも艦娘「青葉」はどういうわけか無類のカメラ好きであることが多く、ほとんどの「青葉」が（アオバも類にもれず）マイカメラを持っていたりするものですからカメラやメモを持っていても不審がられません。ですので情報は探り放題撮り放題。万が一怪しまれ持ち物を検査されても女の体ですゆえフィルム程度なら隠しようはあります（どことは恥ずかしくて言えませんが）。

こうして海軍を探っていった結果、『深海鉄騎』と深い関わりがあると思われる人物が浮かび上がってきました。——倉井元帥。深海棲艦との戦争の前はどうやら海軍上層部を抱えの便利屋のような仕事をされていたようで、様々な戦場で圧倒的な戦果を上げてきた「首輪付きの獣」。上層部の老人たちが最も頼りにしており、そして最も噛みつかれることを恐れている人物。深海棲艦との戦争においてもこの人が自ら前線に赴いた戦いにおいて負けは無し、という化け物。

どうも海軍とは別支援の元に私兵を持っているらしく、その正体不明の私兵が件の戦果の正体と噂されているようです。……もしそれがアオバの探しているものと同じものであれば、あの圧倒的な暴力でアオバの全てを壊した兵器を抱えているのであれば……その戦果の全部に説明がつきます。

しかしそこまで調べがついたものはいいものの、肝心の倉井元帥の元にまでたどり着くことができませんでした。どうもこの提督は鎮守府を持たず任地を転々としているようで、近くの鎮守府を間借りしたり仮設の基地を設けて各地で任務を遂行するというまるで傭兵のような行動をしているからです。艦娘も秘書艦である翔鶴さん以外は全て派遣で補い、任務を完了したら解散し次の戦地に赴くというあまりにも元帥という肩書とはかけ離れた腰の軽さ。アオバがまだ船を持っていれば派遣として潜り込めたかもしませんが、今は陸軍の身でそれも叶わず近づくことはできませんでした。

そうして偵察がどん詰まりしていた時に一筋の光明ともいえる『悲報』が。

『ガダルカナル島上陸作戦において新型の深海棲艦と遭遇。上陸部隊全滅。』

その報告と共に辛うじて撮影したのである。画像が銀命大将の元へ上がってきたのです。もちろんアオバもその画像を確認させてもらおうと、ピントもあつていなくシルエットしかわかりませんでした。それには紛れなくアオバの鎮守府を襲ったモノが写っていました。

「アオバ、わしはコレをあえて海軍に流そうと思う。……倉井は動くと思うか？」

「もし倉井元帥が同じものを運用しているのであれば間違いなく。……きつと、コレを倒せるのは同じ存在ですから」

そして『深海鉄騎』と名付けられた敵新型の情報を海軍に流すと、やはりというべきか倉井元帥はすぐに行動に移りました。アオバはその行動を逃さぬよう再び本営に潜り込み、逐次倉井元帥に絡む情報を探っていくことに。そこで得られる情報は断片的なものではかなく、とにかく倉井元帥に絡むものならなんでも拾っていきましました。『深海鉄騎の撃破』、『赤羽元帥と倉井元帥の取引』、『鎮守府近海に新たな深海鉄騎が出現』、そして『白鳥鎮守府との特別演習』。

（白鳥大将って確か……天龍さんと龍田さんが今所属しているところの提督さんですよ。ねえ。なんでこの人と倉井元帥が演習を？）

海軍を探っていた時に偶然知った同郷の仲間の現在の上官。気になって銀爺大将に報告したところ、なんと旧知の仲だとか。どうも前線の仲間が物資補給で大変お世話になるなど懇意にしてもらっているみたいです。

「というわけで、早速会いに行くことにするか。アオバ、お前さんはわしの護衛としてついてこい」

「はい?……ええッ、大将自ら動かれるんですかあ!？」

「当然だ。それだけの重要性がこの情報にはある」

こうして銀爺大将と共に天龍さんたちの遠征部隊をお迎えすることに。さすがの天龍さんも大将にお出迎えされるのは初めてで、その衝撃のせいで感動の再開の雰囲気はぶち壊しでした。まあ、あまり湿っぽいのはアオバも好きではないのでよかったのかもしれませんが……。

そしてガールズトークに花を咲かせつつ探りを入れてみると、まあ出るわ出るわ『深海鉄騎』の情報。……アオバはこれでも一年間ぐらいつつとこの情報を追っていたのですが、それが悲しくなってくるほどの情報が天龍さんの口からポロポロと零れてきたのです。挙句、『深海鉄騎』は現在『吹雪式』と名前を変えて白鳥鎮守府で運用されているのだとか。それを聞かされた時は『特別演習』が組まれたことに合点がいきつつ、なんと複雑な気分になりました。そういえばお二人は私たちの鎮守府を壊滅させたの

が、その『深海鉄騎』もとい『吹雪式』だとは知らないのですかねえ。

ともあれアオバの承っていた任務はなんとも意外な形で終焉し、今はACの運用方法をご教授願うため白鳥提督の鎮守府に向かっている最中です。

「そういえばアオバ、お前陸軍になんか転属して何やってたんだ？」

「あー、実は秘密の任務に就いていたんですが……先ほど完了しちゃいました」

「ふーん？じゃあこの後どうすんだ。まだ陸軍にいるのか？」

「……なんだかいてほしくなさそうに聞こえますねえ」

「そりやそうだろ。所属は変わっちゃまったが俺たちは同郷の仲間なんだぜ？安全な道があるならそっちに行ってもらいたいさ」

「フフツ、天龍さんは相変わらずですねえ。駆逐艦の子たちに好かれる訳です。ですが……そうですねえ、やっぱり陸軍に居続けますよ」

「そりやどうして？」

「撮りたいんですよ、勝利を刻んだ暁の水平線を……。それをアオバが撮るにはACに乗るのが一番だと思うからです。前線にいればお二人にもまた会えますしねえ」

「へっ、そういうことかよ。……どうして俺の知り合いはみんな戦場に魂を置いてきちまうんだ、全く」

「いやーすいませんねー。ついでに教官になられる方にアオバを推薦してもらえと助

かります」

「まだその話決まったわけじゃねーだろ！ほんと調子いいよな、お前」

「えへへー」

ちなみにその日のうちに決まった教官——話に出ていた吹雪さん——指導の元、アオバは陸軍初のAC部隊「レイヴンズ」の隊長として活躍することになるのですが、それはまた別のお話です。

——アオバ・レポートより抜粋

第四十話「番外編」弟子達の憂鬱と師匠達の雑談

鎮守府のドックに今しがた任務を終え帰港してくる艦隊がいた。旗艦の空母から緑髪の子インテールを左右に揺らしながら少女が降りてくる。

「うん、今日も快勝！瑞鶴には幸運の女神が付いてくれてるんだから！」

『沈黙海域』の攻略に向けてか、私の鎮守府はここ一ヶ月ほど『沈黙海域』周辺の深海棲艦の間引きの任務に当たっている。担当しているのは鎮守府の第一艦隊で、旗艦を私と加賀さんと交代しながらだ。生まれてから日も浅い私が他の熟練の艦娘を差し置いて旗艦にさせられているのは恐らく……と言うより十中八九、『吹雪式式』を艦載しているからだろ。

旗艦の空母はACとリンクする事でオペレーターシステムが発動することができる。それにより通常の偵察機では得られない圧倒的な情報量を持つACのスクラン情報艦隊に展開する事ができるのだ。その機能の中でもACのスポットを利用したスポット射撃は弾着観測射撃とは比べ物にならない程の精度を誇り、しかもその恩恵を艦隊全員が得られるというのだから利用しない手はない。ACは単機の戦闘能力は言わずも

がな、上手に使えば艦隊の戦闘能力を底上げする事も出来る優れた艦載機なのだ。

んでもって私たちの鎮守府には『吹雪式式』『ブルーマグノリア』『UNACちゃん』の三機のACが存在しており、それを運用できる空母も私『瑞鶴』を含め『加賀』『龍驤』しかない。千歳さんと千代田さんの船も空母に改装してるけど「まだ普通の艦載機にも馴れてないのにACなんて無理」と断ったそう。そんなわけで必然的に私が『吹雪式式』を載せることになり、それが旗艦に任命されていることに繋がる。

あ、そうなるかと私については『幸運の女神』ではなく『全てを焼き尽くす死を告げる鳥』というのが正しいのか?……なんか不吉だし吹雪に合わない気がする。ACに描かれているエンブレムはヤタガラスなので『全てを守護するヤタガラス』なんていうのはどうだろうか?……うん、良い感じ。

「あ、瑞鶴さん、お疲れ様です!司令官に報告に行くんですね。私もご一緒していいですか?」

そんなことを考えているとその「ヤタガラス様」から声を掛けられる。

「え、ああ良いけど……もしかしたら長くなっちゃうかもよ」

なんでってというと、私が報告に行くといつも加賀さんが何か言ってくるから。情けない戦果を報告した日にはそのまま説教へ移行する時だってあったりする。しかも提督もマギーさんも巻き込まれるのが嫌だからその時は知らん振りして助け船をだして

くれることは無い。それで吹雪を待たせるのは忍びない。

「大丈夫ですよ。今日は文句なく快勝でしたし、何かあれば私が『瑞鶴さんと約束がある』って言えば長くはなりませんよ」

ああ、なんてありがたい。やつぱり持つべきものは頼れるパートナーだ。今の私には吹雪が天使に見える。もうなにも怖くない。

「ありがとう！じゃあパパッと報告終わらせちゃおう」

「はい。あ、さつき言った『約束』ですけど、間宮の新しい甘味を食べるっていうのはどうですか？」

「いいわね！賛成っ!!」

心強い味方と仕事の後のご褒美を心の支えに、私たちは提督の元へと向かって行った。

◇ ◇ ◇

「存外呆気なかったわね」

「だから言ったじゃないですか、大丈夫だって」

提督に任務の報告を終えた私はその時のことを振り返る。

『……一航戦なら当然の戦果ね』

私の報告を提督の横で聞いていた加賀さんはそう一言呟くだけだった。

「いつもだったならもうちよつと何か言ってくるんだけどなく。やっぱり吹雪がいたおかげ?」

「関係ないですよ。単純に今回の戦果が良かったからですつて。加賀さん誉めてたじゃないですか」

「え!?あれ褒めてるの?」

「分かりづらつ。本当にそうなのかな……?だったならもうちよつと言い方があつて思ふけど。」

「本当ですよ。じゃなきや “一航戦” なんて言葉を使いませんよ、加賀さんは」

「そう言えばそんなことを言つてたな。思い返してみると最近 “五航戦” “つて言われていないかも。ん……?もしかして私、以外に評価されてたりする?」

「はあ、羨ましい話ね」

「うわあつ!大井!」

「ちよつと、そんなに驚くこと無いじゃない?失礼ね」

「じゃあ後ろから急に声かけないでよ!」

「あれ、大井さん一人ですか?珍しいですね」

「はあく瑞鶴、あなたは吹雪さんの落ち着きを少しは見習うことね。……実は貴方達に相談があつて探してたのよ」

後ろから恨めしい声が聞こえてきたら普通は驚くつつうの。

……にしても、大井が私たちに相談？病的に北上にベツタリで出撃してなかったらいつも二人一緒に怪しい噂までたつてる大井が？私たちに？

そんな大井が私たちに相談するということは、その内容は一つしかない。

「相談つて……北上に関することよね？喧嘩でもしたの？」

「喧嘩？あり得ないわ！あと “さん” をつけなさいよペタンコ野郎！」

「あ”あ”！爆撃されたいの!!？」

「まつ、まあまあ、お二人とも落ち着いて。大井さん、私たち間宮に行くところなんですけど良かったらご一緒にしませんか？立ち話も難ですし」

「それもそうね。ご一緒にさせてもらおうわ」

「え〜!？」

仕事の後の甘味っていうのはなんていうか、こう、救われてなくっちゃならないのに……。北上フリークスの相談なんて受けたらきつと幸せな気分が霧散してしまうだろう。絶対にろくなもんじやないに決まってる。

「良いじゃないですか瑞鶴さん。同じ艦隊の仲間じゃないですか。それに私たち境遇も似てるから大井さんも相談しやすいんですよ、きつと」

「流石吹雪さん、よくわかってくれてるわ、何処かの空母と違って」

「あんた本当に相談する気あんの!？」

まったく、吹雪と私への態度が違いすぎじゃない？確かに吹雪はウチのエースだし艦娘としても大先輩だけど。でも大井のこれは絶対それだけじゃない。きつと吹雪の顔つきが北上に微妙に似てるからだ。目付きとかほっぺのラインとか髪形とか。もし吹雪のことをロリ北上とか思ってるんだったら本気で爆撃せざるを得ない。

「……何かあなた、失礼なこと考えてない？」

「何処かの雷巡にずっと失礼されてるからね」

「はいはい二人とも。続きは間宮でしましょうね」

また口論になりそうなのを察したのか、吹雪は手を叩いて私たちを制止しそのまま間宮まで引つ張っていった。

◇ ◇ ◇

フォークを生地に差し込むとパリパリパリと小気味良い音と共に切り口から湯気が上がる。その湯気を鼻孔に満たすとリングゴとシナモンの香りが広がった。それは疲れた脳を刺激し唾液が止めどなく溢れてくる。

「いただきます」

もう我慢できないとフォークに差しした一片を口の中に入れ噛み締めた。サクサクと何層にも重ねられた生地 of 食感と、その奥にあるリングゴから溢れ出てくる果汁のハーモ

ニ―は悪魔的だ。悪魔的美味。ああ、私今幸せだ。

間宮の新作デザートはアップルパイだった。なんでも今はリンゴが旬なのだとか。

間宮さんは「あまりこういうの作らないから自信無いのよね」なんて言っていたが、これで自信無いなんて言ったら全国のお菓子職人は店を畳まなくてはならないだろう。

まあ戦時中で物資が優先的に集められる鎮守府と違い外で同じような物を作るかは知らないけれど……。そもそも任務以外で鎮守府の外に出たことなんてないから街の様子も見たことないし、お菓子職人が現存してるかどうかも知らない。

そう考えると目の前にあるデザートって実はとんでもない贅沢品なのではなかろうか。ならばもつと味わって食べなければ、なんて思いつつ残りのアップルパイを平らげていった。

「あく美味しかった!」

もうちよつと食べたいという気持ちを緑茶と共に飲み込む。本当は紅茶の方が合うのかも知れないけど生憎間宮にあるのは緑茶だけだった。金剛さんがいつも飲んでるからあると思っていたけど、どうやらあれは自前らしい。金剛さんも一緒だったらご馳走してくれたかもしれないが今はいないので仕方ないか。緑茶は緑茶で悪くないしね。

ああ、あとはこのまま風呂に入ってホカホカのままお布団で寝れたらどんなに幸せだろうか。しかし現実はそのもいかない。

ため息をつきながら湯飲みをテーブルに置いた。

「……で、大井。相談つてなに？」

「なんだか嫌そうね。……まあいいわ」

そりやそうでしょ。北上中毒者から北上に関する相談を受けるのだ。それを喜ぶ奴なんている？

大井は湯飲みの方を憂鬱そうに指でなぞりつつ口を開いた。

「……その、ね。北上さんに認められたいの、私。私たち境遇が似てるけど、私だけが信用されてないじゃない？だからどうしたら貴女たちみたくなれるのか教えてほしいのよ……」

「信用されてない？大井が？」

「そうよ。死神艦隊との戦いの時も私だけ北上さんから出撃を止められてたでしょ。貴女たちは加賀さんとマギーさんから推薦されてたのに……」

思いの外真剣かつ真面目な相談に驚きつつ、その時を思い出す。そういえば北上が「荷が重い」って言って大井の出撃取り下げようとしていたっけ。結局提督の判断で大井は出撃になったけど、北上は最後まで渋った顔してたな。

「そう言えば今回の任務も大井さんが出撃するの渋ってましたね、北上さん」

「ええ、そうなのよ……」

知らなかった。そうだったんだ……。でもなんでそんなに北上は大井の出撃を拒むのだろうか？

私たちは非常に良く似た境遇にある。お互いこの鎮守府で産まれたこと。正規空母も雷装巡洋艦も私たちを除くと『加賀』と『北上』しかないため、お互いマンツーマンで加賀さんと北上から師事を受けていること。そしてACとの相性の良さから高練度の『MI生き残り組』ばかりで構成される第一艦隊に『建造組』でありながら組み込まれていること。

雷装巡洋艦は甲標的という特殊兵装を扱える数少ない艦種の一種だ。単体でも結構強いけど、ACのスポットと組み合わせると百発百中で酸素魚雷をぶちこむ凶悪兵器になる。以前の出撃の際に戦艦レ級と出会ってしまったことがあったが『吹雪式』のブレードレ級の装甲に切り込みを入れ、そこに甲標的の魚雷を差し込み内部爆裂させて撃破した時は流石の私も若干引いた。

とにかくそんな理由で私たちは一緒に艦隊になることも多い。つまり戦歴も一緒ということだ。艦種が違うので一概には言えないかもしれないけど、私と大井の練度は大して変わらないと思う。

しかし私は加賀さんに出撃を止められたことはないし、むしろ積極的に最前線に駆り出されている。この扱いの差はなんなのだろうか？少なくとも大井に問題があるように

は思えない。

「……それ大井が悪いっていうより北上……さんが心配性なだけじゃない？ 大体、今の敵って『M I』の時よりやばいって金剛さん言ってたし」

今攻略しようとしている『沈黙海域』の奥に深海棲艦の統轄機構があるらしい。つまり私たちの戦場は敵本拠地の目の前、最前線中の最前線だ。それでも快勝できるのはA Cの力でゴリ押ししてるからに他ならない。『ブルーマグノリア』と『吹雪式式』という規格外の戦力があるからこそ成り立つ任務なのだ。

そう考えると新参者の私たちが第一艦隊に紛れているのがどちらかと言えば異常であり、北上が心配する事が普通に思える。

「そうなのかしら……？」

「確かに瑞鶴さんの言うことも一理あるかもですね」

「吹雪さん……」

「ほら、私たちと違って大井さんはその……北上さんの『特別』じゃないですか。だからどうしても心配が勝ってしまうんじゃないですか？」

「それって私が二人目だからってことかしら？」

「え!?! いえ、決してそんなつもりじゃ……」

「二人目？」

どういふことか理解できず思わず復唱してしまう。

「北上さんにとつて私は二人目つてことよ。北上さんは前の鎮守府の時も『違う私』とお付き合ひしてたらしいのだけど……『MI作戦』の時に亡くなつてしまつたらしいわ……」

「そうだつたんだ……。てか、そんな理由があるなら心配するに決まつてんじゃん！」

話の流れからしてどうやら『二人は付き合つてゐる』という噂は本当のようだ。つまり北上からすれば大井は恋人でありトラウマそのもの。心配しない訳がない。

「わかつてるわよ……。でも、それでもツ……私は『対等』に成りたいの！『前の私』と私は違うの！それを北上さんにわかつて欲しいのよ!!」

大井は大声をあげてテーブルを叩いた。私はそれに驚いて思わず「うわっ!?!」と声をあげてしまう。

「……ごめんさい。驚かせてしまつたわね」

溜まつていたものを吐き出せたからか大井は冷静になつて姿勢を直す。いや、冷静になつたというよりしよげているだけか。

なんて声をかけたらいいか分からず嫌な沈黙が数秒間続く。それを破つたのは吹雪だった。

「……強くなるしかありません。いくら気持ちが強くても弱ければ意味はありません。北

上さんが心配できないぐらいの実績をあげて証明するしかないんです。……大井さんならできますよ。大丈夫です、いつもすつごく頑張ってるじゃないですか。それに私たちもいますから」

……やっぱりそれしかないか。私も概ね賛成だ。それなら私たちも手伝えるしね。大井は嫌なところもあるけど何だかんだいって似た境遇の大切な仲間だから、まあ手伝えることがあるなら手伝ってあげてもいい。

「吹雪の言う通りよ大井。この『一航戦』瑞鶴も力を貸してあげるわ！」
「……調子に乗りすぎです、瑞鶴」

後ろから聞き慣れた声が聞こえ冷や汗が流れる。もしやと思い振り返るとその答えあわせのように頭をがっしりと掴まれた。いわゆるアイアンクローを加賀さんに決められる。

「え、なんで加賀さんが!? まだ執務中じゃあがががががッ」

「全く、少し誉められたぐらいで増長するとは……。やはり貴女は五航戦ね。言ってますが瑞鶴、私が信用しているのは貴女ではなくて貴女に艦載されている吹雪よ。それを自分の力と勘違いしないことね」

痛い。坦々と辛辣な言葉を吐きながら加賀さんはこめかみにかける指の力を強めていく。心と体が二重に痛い。……すいませんごめんなさい痛いです許してください。

「大井、貴女もよ。第一艦隊に所属できているのはACのお陰だということをお忘れのように。だから吹雪のいう通り精進を続けなさい。……北上はちゃんと『貴女』を見ているわ」

「加賀さん……」

良い雰囲気などこ悪いけど痛いんですけどー。なんで二人とも人がアイアンクロウ喰らいながら悶えてる横で平然と会話できんの？頭おかしいんじゃないの？てゆーか私の頭がおかしくなっちゃう！痛い痛い痛い痛い！

「あの、加賀さんそのへんで……」

「そうね」

鶴の一声ならぬ黒い鳥の一声でやつと私は開放された。吹雪が言わなかったらいつまで続ける気だったの、この人……？

「じゃあマギーを待たせてるからこれで……」

加賀さんはそう言うのと先程まではテーブルの上に無かったティーポットを持ちあげた。芳醇な紅茶の香りを漂わせるそれは加賀さんが私を折檻する前に置いたものだろう。……ん？紅茶？紅茶は間宮に無かったはずだ。

「なんで紅茶が……」

「秘書艦をやっていると色々役得もあるのよ」

加賀さんは不敵に笑い間宮の奥へと消えていった。

「……なんなのよ！もうっホント信じらんない！ていうかあの人どっから聞いてたのよ」

私は頭を掻き乱しながらテーブルに突っ伏してしまふ。それはそうだ。アイアンクローを決められた挙げ句に美味しい所を持っていかれたんだから。

「瑞鶴、一緒に認められるように努力しましょう。この『雷巡』大井も力を貸してあげるわ」

「なにそれ皮肉!?!」

大井がさっきの私の真似をしてきた。しかも少し見下した目付きで。私そんな目してないでしょ、腹立つな〜。

「……お二人とも羨ましいです」

「……どこが?」

吹雪が溢した以外な一言に大井とハモってしまった。今までのどこに羨む要素があるのだろうか?

「お二人は師事してくれてる二人と『師弟』っていう感じがするじゃないですか。私の

場合は……多分そんなふうに思われてません。良くも悪くもマギーさんは私を「同等」に見てるんですよ……」

吹雪の中では私と加賀さんは師弟らしい。そう思われてるのは不本意だけど、まあとにかく吹雪は「師弟」という関係に憧れているようだ。

艦娘はクローンとして産まれるため当然家族は存在しない。その為かいつの間にも姉妹艦の艦娘と姉妹関係を結ぶという伝統のようなものができている。特に軍から強制されてるわけでもなく自然とできたものらしい。鎮守府の仲間は家族も同然だが、やはり皆自分の「特別」が欲しいのだ。

私も別段寂しさを感じるような生活は送ってないが、以前演習で他の鎮守府にいる瑞鶴が翔鶴という姉に甘えている光景を目撃し凄く羨ましがったことを思い出した。

きつと吹雪も同じなのだろう。ウチにいる吹雪の姉妹艦は叢雲だけだし、一応吹雪のほうがお姉さんだ。だから姉代わりに師匠が欲しいのかもしれない。

最近の吹雪は、特にACに乗っている時、歴戦の傭兵の様な風格を纏っておりその戦果も相まって皆から頼られる存在になっている。あの加賀さんですら全幅の信頼を寄せているのだ。そんな立場になってしまった吹雪からするとマギーさんだけが弱音をさらけ出せる相手なのだろう。だからマギーさんと「師弟」という関係でいたいのかもしれない。しかし……。

「同等ね……。確かにマギーさんって吹雪のこと弟子とは見てないかも。どっちかっていっただら……ライバル？」

吹雪が強くなってきたこともあり、最近の吹雪とマギーさんとのシミュレーターの戦績は五分五分となっている。あの人の性格からしてそんな相手を弟子とは言わないだろう。

「ライバルなんて嫌ですく!!もうマギーさんと決闘なんて懲り懲りですよ!うう……」

認められている吹雪ですら色々とお悩みはあるらしい。認められようがられまいが、私たちの悩みは尽きなさそうだ……。

◇ ◇ ◇

「待たせたわね」

加賀がティーポットをテーブルに置く。それを待ちわびていたのは二人の女性だった。

「いや〜ありがとね、加賀さん」

「紅茶のなんて二人淹れるも三人淹れるも変わらないわ」

「いや、そっちじゃなくてさ〜、大井っちのこと。加賀さんがああ言ってくれて助かったよ」

「ああ、先程の……。別に私は事実を述べただけよ。誰かさんが何時までもウジウジしている代わりにね」

加賀はマグーと北上のカップに紅茶を注ぎ込む。

金剛から提督とのティータイムを確保する代わりにと秘書艦達に渡された賄賂はなかなか上質の茶葉らしく、芳醇な香りが三人の鼻孔をくすぐった。これに間宮特製のアップルパイが加わり完璧なセットが出来上がる。

加賀とマグーは瑞鶴達が執務室を後にした直後、金剛の頼みにより休憩に入っていた。そこに北上が大井と似たような相談を二人に持ちかけたため三人で間宮に集まっていたのだ。そこで弟子達の歓談を見つけ隠れるように奥の席に座っていた。

ちなみに北上の悩みは紅茶を淹れに行った加賀が大井にアドバイスしたことによって解決したため、後は瑞鶴達の会話を盗み聞きしつつ雑談といった体になっている。

「ウジウジって、これでも大分良くなった方なんだよ。そんなキツイ言い方しなくてもよくない？だから加賀さんは瑞鶴に嫌われるんだよ」

「それであの子が生き残ってくれるなら安いものです」

「でも好きな子に嫌われるのは嫌じゃない？」

「慢心して傷つかれるよりはマシよ」

「好きな子ってというのは否定しないのね、加賀」

聞きに徹していたマギーが口を挟む。不意を突かれた加賀はみるみる顔を真っ赤にさせていった。

「マ、マギー?! いえ、そのつ、瑞鶴の事は確かに悪くないと思ってるけれどそれは後輩としてで、そういう意味ではなくて、その……誤解よ!」

加賀の慌てふためく姿に北上は「ははくん」と口元を吊り上げる。

「なに必死に弁明してるのかなあ。いやー加賀さんにはシンパシー感じてたけど、やっぱり似た者同士だったんだねえ。ねえ、マギーさんとは『どれくらい』なの?」

「まだマギーとはなんでもないわ!」

「まだ? まだ?」

「くくツツツ!!」

瑞鶴の前では決して見せないだろう加賀の姿に、マギーは肩を震わせながら笑いを押し殺していた。元々ファットマンと傭兵と過ごしていた彼女はこういった下らないやり取りが結構好きだったりする。仕事中でなければダラダラするのは嫌いではない。

ついでに言えばマギーは加賀の気持ちに気づいており、どっちも経験がある彼女は加賀に求められるのも満更ではないと思っていたりする。

それほどまでに信頼できるパートナーと自分の心を震わせてくれる相手に恵まれ、今の状況を悪くないと思っている自分にマギーは紅茶を飲みながら改めて気付いた。

(……私も随分ここに馴染んだわね。ここが私の魂の場所……ということかしら)
——だから終わらせるつもりはない。

マギーは紅茶を飲み干すと未だに北上と口論を続けている加賀に声をかけた。

「加賀、もうそろそろ戻りましょう。例の書類も片さないといけないし」

「え?!……ええ、そうね。では北上、私たちは先に」

「はい、ありがとね」

マギーと加賀は執務室へと戻っていく。執務室の机には『沈黙海域攻略作戦』と書かれた書類が置かれていた。……決戦の時は近い。

第四十一話「MISSION 06_沈黙海域攻略—0

1」

鎮守府のドックに張りつめた空気が漂っていた。それは白鳥提督が珍しく正装して佇んでいるから……ではなく、そうしなければならぬ相手が来るからである。

しばらくすると提督とその秘書艦達のいるドッグに一隻の空母が入港してきた。

——装甲空母『翔鶴』

それは派遣などにより現地で戦力を募る倉井元帥唯一の直属艦である。

『翔鶴』の停泊が済むと、空母からパイロットスーツを身に纏った男性と銀髪の少女がドッグに降り立った。

「これはこれは倉井元帥殿。遠路遙々ご苦労なこつて。腹が減ってるなら飯でも用意してやるが?」

「結構だ。それよりも直ぐにブリーフィングを始めたい。出撃する人員は集めてあるのだらうな?」

「はんつ、ちゃんと集めてるよ。加賀、マギー、案内してやれ」

提督に呼ばれ加賀とマギーは倉井元帥の前に立つ。特別演習で言葉を交えたことは

あるが、直接相對するのはこれが初めてだった。

(この人が倉井元帥?……若い。確か提督と同期だったはずよね……?)

加賀は倉井元帥の見た目に驚きを隠せなかった。提督と同期であれば少なくとも50代後半である。だが目の前の男はどう見積もっても30代前半程度にしか見えない。それが倉井元帥から感じる不気味さに拍車をかけていた。

「大したことではない。貴様らよりも『強化』されているだけだ」

「ッ!」

加賀のいぶかしむ様子から考えを見透かしたのか、倉井元帥はその疑問の答えを口にする。そのまま加賀とマギーを一瞥した。

「なるほど、お前達がああの演習の時の……。今回の作戦、活躍を期待している」

「言われなくても。……こつちよ、付いてきて」

マギーは強気に言い放つと、倉井元帥達を出撃メンバーのいる会議室まで案内していった。

マギーたちが会議室に入ると、中で吹雪、瑞鶴、金剛、摩耶、夕立たちが椅子に座って待機していた。マギーたちに連れられ入室した倉井元帥を当人だと把握するやいなや加賀と同じように驚きざわつきですが、倉井元帥は無視して翔鶴にブリーフィングの準備を指示をする。マギーと加賀はそれの手伝いを終えると吹雪たちの隣に着席した。

倉井元帥はホワイトボードに投影された作戦海域の前に立つ。

「ではこれより本作戦概要の説明を始める。なお本作戦の指揮は私、倉井が務めさせてもらおう」

艦娘達は一様に席から立ち、倉井元帥に敬礼をした。

倉井元帥は着席の許可を出しながら投影された海図に目標の場所の印と、そして『沈黙海域』の境界線を書き込む。

『本作戦の目標はここに存在している要塞型深海棲艦……スピリット級要塞の撃破だ』

『スピリット級要塞』という名称に皆が頭に疑問符を浮かべる。それがどの様なものかを知っているのはマギーと『傭兵』の記憶を持つ吹雪だけだった。

マギーは倉井元帥の話の真偽を確かめるため隣にいる吹雪に小声で訊ねる。

「吹雪、彼がインターネサインを破壊しにいった時もあれはあったの？」

「いいえ、あの人の記録にはありませんでした。でも待ち構えているのはスピリット級要塞で間違いないと思います。話に聞く攻撃方法が非常によく似てますから……」

「似てる…ね」

『スピリット級要塞』の存在は知っていても直接相対したことのないマギーは、その脅威を確認すべく倉井元帥の話に再び耳を傾けた。

「スピリット級要塞とは旧世界……そのマグノリア・カーチスの『前世』よりも前の時

代に造られた全長2キロにわたる超弩級要塞だ。射程40〜50キロのミサイルを武装に有しており、この境界線に入った途端にそれを放ってくる。またこいつは移動機能がオミットされ代わりに機雷をばら撒く機能が備わっている海上防衛型だ。よって海中から近づくことは不可能となっている」

話を聞いていた艦娘達が見合わせる。改めて聞く『沈黙海域』^{サイレントレイ}の不可侵さに、たった一艦隊でいったい何ができるのか?といった様子である。だが倉井元帥は艦娘たちに告げる。

「貴様らが心配する必要はない。空母以外の役割は行きと帰りの護衛だけだ。要塞はA Cだけで叩く」

「ちよつと!いくらACでもそんな大きいのは無理よ!」

倉井元帥の一見荒唐無稽な話に瑞鶴が噛みつく。自分の艦載機でもあり大切な仲間でもある吹雪の身を案じてのことだった。

「口を慎みなさい。倉井様の話の途中よ」

だがそれを倉井元帥の秘書艦である翔鶴が注意する。

「でも翔鶴姉…」

「私は貴女の姉ではないわ」

「う…ッ」

「大丈夫ですよ瑞鶴さん。勝機は十分ありますから……」

吹雪が瑞鶴の裾を軽く引きながらここは押さえるよう促した。それを聞いて倉井元帥は目を細める。

「ほう、どうやら貴様はスピリット級要塞の弱点を知っているようだな？ 答えてみる」

「…はい。スピリット級要塞は砲台のダメージが本体に伝搬してしまうという構造上の欠点を抱えています。そこを突けばACでも撃破することが可能です。……そこまで接近出来れば、ですが」

吹雪にインストールされている『傭兵』はスピリット級要塞を撃破した経験があつた。その戦闘記録から吹雪はスピリット級要塞の弱点を把握していたものの、それは陸上で記録ではない。吹雪達のACは工廠で建造されたり深海棲艦に弄られたためか水上適正が上昇している。しかしそれでも地上と比べ水上の移動は見劣りしてしまうので、吹雪はミサイル群をかわしきれるかに一抹の不安があつた。

だがそれは当然、倉井元帥も考えていたことである。

「接近に関しては問題ない。そのための空母だ。ACの出撃前に全艦載機を発艦。AC出撃後はACに並列して海域内に突入、ミサイルのデコイにする。これならばACの回避行動は最小限で済む」

「艦載機をデコイに、ですか。随分と豪勢なデコイですね」

「スピリット級要塞と引き換えなら安いものだ」

倉井元帥と吹雪のやり取りを聞いて加賀は頭を痛めた。恐らく艦載機は全損するであろう作戦の出費を秘書艦として考えてしまったためだ。後でポーキサイトを集める手配もしておかなければ、と頭の中で追加業務の段取りをする。

同じ秘書艦として察したのかマギーは加賀の肩に手を添え「仕方ない」と無言で諭した。

「では改めて作戦内容を伝える。まず空母以外の艦は『沈黙海域』サイレントトラインまで空母の護衛。『沈黙海域』サイレントトライン到着後、各空母は艦載機、そしてACを発艦。艦載機をデコイにしながらACはスピリット級要塞に接近、これを撃破する。以上だ」

「ずいぶん雑だな、それ作戦って言えるか？」

ストレートに物を言ってしまう摩耶が愚痴をこぼす。しかし倉井元帥はそれを鼻で笑った。

「AC私乗りの任務などこんなものだ。だろう、マグノリア・カーチス？」

「否定はしないわ」

「フツ……では健闘を祈る。各員出撃準備に移れ」

そう告げると倉井元帥は早々と会議室を出ていく。翔鶴も艦隊のメンバーに軽く会釈すると倉井元帥に続いて会議室を後にした。

「じゃあ私たちも行きましょうか」

「マギー、今回の任務は装甲ヘリを使えないわ。だから『リンクスシステム』も使用できない。……気を付けて」

「大丈夫よ。言いたくないけどあっちの実力も折り紙付き。陸軍の『レイヴンズ』とは比べ物にならない最強のAC部隊よ。負けはない」

「……なら、いいけれど」

二人の青を筆頭に、白鳥鎮守府のメンバーも会議室を後にした。

第四十二話「MISSION 06」沈黙海域攻略—02」

——現在 1400

空は青く清み渡りいかにも快晴という天気のほか、『サイレントライオン沈黙海域』の数キロ前にまで倉井元帥率いる白鳥鎮守府の艦隊はたどり着いていた。

三ヶ月におよぶ執拗な敵戦力の間引きもあつてか辿り着くまで大した戦闘もなく、空母の艦載機も十分温存できている。護衛艦である金剛、摩耶、夕立達からすれば自らに課せられた任務は一旦成功といつていい。しかし誰しもそれに浮かれる者はいなかった。

これが嵐の前の静けさだということに皆が気付いていた。

金剛は操縦席に腰を預けながら親指の爪を噛む。

（歯痒いですネ……）

鎮守府でACの運用が開始されてからも自分達が操舵する戦艦は攻撃の要だった。マギーや吹雪が敵をスポットし、その情報を便りに敵を砲撃する。単純な火力だけならACを凌駕する大砲で敵を粉碎する。それが戦う艦としての誇りだった。

それがどうだ。今回に関して『スピリット級要塞』は射程外、自分はすでに役立たず。

後は戦艦ですら近づく事が許されないミサイルの雨の中に仲間が突撃するのをただ見守るだけ。それが悔しくて淑女らしくかぬ行為をしてしまう。

「金剛、聞こえる?」

それを察したのか偶然か、マギーがオープンチャンネルで金剛に話しかけた。

「この前貰った紅茶、なかなか良かったわ。あれ、まだあったかしら?」

「……ええ! もちろんデース!!この任務が終わったら皆でティータイムにしましょ!」

緊張をほぐすための当たり障りのない会話。きっと吹雪や空母達の為なのだろうが、それでも金剛はありがたいと感じた。それは艦隊全体に伝わっていたようで、先程までの重苦しい雰囲気若干和らぐ。

「吹雪ちゃん、気を付けるっほい」

「帰り道もあたしらがしっかり護衛してやつから、全力ぶちかましてやれ!」

「夕立ちちゃん、摩耶さん、ありがとうございます!」

「……もういいか?ではこれより『スピリット級要塞』の攻略を開始する」

倉井元帥の合図により空母達は甲板から次々に艦載機を発艦させていく。誘爆を防ぐため魚雷を外し、あくまでACの盾となる為だけに空へと舞っていくそれは各空母の周りを飛びながら特異な編隊を組んでいく。

通常の爆撃ならまず組まないであろう艦載機を前後ではなく上下に並ばせ、まるで多層装甲のように展開していた。

「瑞鶴、間隔は離れすぎても近すぎても駄目よ。注意して」
「言われなくても！」

上層に並んだ艦載機でミサイルを受け止め、その誘爆で他の艦載機を狙って迫るミサイルも破壊する。離れすぎているはミサイルを誘爆に巻き込めないし、近すぎれば逆に余分な艦載機が巻き込まれてしまう。その絶妙な間隔を加賀は、そして翔鶴も軽々と維持して編隊を組んでいく。瑞鶴も二人を見倣いながら編隊を組み上げた。

「ACは発艦準備を」

「了解」

『ブルーマグノリア』と『吹雪式式』が各々のパートナーである空母の甲板上で身構える。

「『吹雪式式』発艦します！」

吹雪のACがガイドブーストの火を噴かして『瑞鶴』から飛び出した。続けて『ブルーマグノリア』『No. 8』『フォール・レイヴン』『No. 2』が発艦し、まるで単陣のように並んで海面を突き抜けていく。

最高速度でいえば『ブルーマグノリア』が一番であるが、『吹雪式式』の方が速度と持

続性のバランスがとれていたのでため先頭を務めていた。そして重量二脚の巨体を生かし、叩きつけてくる風から後続のACを守りつつ引つ張りあげていく。

その隊列の上空に加賀、翔鶴、瑞鶴が先程組み上げた艦載機の編隊を並列させてゆく。まるで積乱雲が発生しているような様相となったそれは、ACをミサイルの雨から守る“盾”である。

そうして攻略の準備が整うとAC編隊は勢いそのままコックピットのモニター画面に擬似的に表示されている“線”の内側へ突入していった。

「こちら吹雪、『沈黙海域』に侵入しました。……もう敵の第一波が近づいてきます」

吹雪は境界線を越えたと同時に自分の中で膨らんでくる恐怖心を仲間に伝えた。無機質な殺意が確かに近づいて来ていると。

「こちら加賀、敵ミサイルを視認しました。各員迎撃を開始」

「了解」

吹雪の通信から数秒経たずして空に点のような影が並んでいるのを捉えた加賀は合図を出す。それと共に各空母の艦載機は機銃を放ち始めた。段々に並ぶ編隊から放たれる銃弾はまるで巨大な散弾のように広範囲に弾幕を形成し、その対空弾幕によりいくつかのミサイルはこちらに届くことなく爆発していく。しかしFCSが付いているわけでもない機銃ではどうしても限界があつた。

「くっ、やはり落としきれない……。敵ミサイル第一波、艦載機に被弾。損害は3。二人とも被害状況を」

「こちら翔鶴、同じく3機損失」

「こちら瑞鶴、こっちは2機」

（計8機……。まだ入り口に立ったばかりだというのに、辛いわね……）

AC達と『スピリット級要塞』までの推定距離は45km。滞りなく進めればおよそ

9分程度でたどり着く。普段であれば大したこともない時間だが、今の加賀には途方もない時間に感じた。

（『盾』が持つてくれればいいけれど……）

正規空母『加賀』に艦載されていた戦闘機は97。『瑞鶴』は92機、『翔鶴』には73機の計262機。ミサイルの発射間隔は過去の侵攻記録からおおよそ15〜20秒程度。過去に『これ』と戦ったことのある『傭兵』の記録を持つている吹雪からすると発射間隔はこれでも大分長くなっているらしい。しかし、それでも艦載機の数単純計算上ではギリギリだった。いや、数が減っていけば当然撃ち落とせるミサイルも減ってくるので足りない可能性が高いといえる。

だが、それでも賽は投げられた。自分たちの持つ『最強戦力』を何としても万全の状態で送り届けること、それに注力するしかないのだ。

そんなことを加賀が考えていた束の間に艦載機に備え付けられているカメラがある影を捉える。

「あれが『スピリット級要塞』……」

思わず瑞鶴が言葉をこぼす。自分たちの空母の何倍もあろう甲板と思わしきものを6枚も広げ、圧倒的な存在感を持つて海面に佇んでいる。もはや一種の神秘性すら感じられるそれは、その羽から何本もの煙を打ち立てた。

「第二波が来るわ」

目的地から噴出した煙はその一本一本がミサイルの噴出口から出ているもので、改めてその数を確認してしまった加賀は頭痛を覚えた。「あれを何度も防がなければならぬのか」と気を重くしながら機銃による弾幕で段々と近づいてくるミサイルを撃ち落としていく。

「敵第二波被弾。艦載機損失は5。二人は？」

「こちら翔鶴、損失4」

「瑞鶴、損失5」

距離が近づいて被弾するまでの時間が減っていること、また艦載機が減って弾幕も薄くなっていること。それらがじわじわと空母たちを苦しめていく。ミサイルが被弾するたびに失う艦載機が徐々に増えていく。

「第三波接近」

「ああつもう！早すぎるつての!!」

「瑞鶴、精細を欠いては駄目よ」

「被弾、艦載機の損害は6。……この調子では拙いですね」

怒濤の攻撃は続き、気付けば半分も距離を詰めていないにも関わらず艦載機の半分近くを失っていた。しかもある光景がさらに絶望を駆り立てる。

「嘘でしょ……。あれ全部イ級!？」

瑞鶴の艦載機が『スピリット級要塞』の周囲に固定砲台とでも言わんばかりに——実際にそのような役割を与えられているのであろう——びっしりと駆逐イ級が海面に覆っているのを確認した。今までの偵察記録では報告の無かった光景が戦闘機のカメラに映る。恐らく今までの偵察で航空戦力であれば近づかれる可能性があると学んだ深海棲艦——統括機構——が用意したカウンターなのだろう。ここまで辿り着いた航空戦力を全て叩き落すため配置されているそれらは瑞鶴たちの編隊に向けて砲を構えている。

「このままじゃ全部撃ち落とされちゃうわ！艦載機を散らさないと！」

「駄目よ瑞鶴。それではAC達を守れない」

「でも加賀さん！これじゃあ目的の地まで艦載機が持たないわよ!!」

「——問題は無い。艦載機は防御編隊をそのまま維持。次のミサイルを防いでくれればそれでいい、それで貴様らの仕事は終わりだ」

二人の通信に倉井元帥が割り込む。まだ目的地まで20 km近くあるがそれでも構わないと告げた。

「よろしいのですか、倉井様？」

「ああ、構わん。あれだけ“足場”があれば十分だ。——AC各機、聞こえているな？次で“盾”無しだ。駆逐イ級の群れに突入後は各機散開。後は分かるだろう？」

「当たり前よ」

「こちら吹雪、問題ありません」

「No. 2、了解」

「No. 8 了解した」

通信の終わりとはほぼ同時に次波の攻撃が彼らに降り注ぐ。駆逐イ級からも空を覆うような機銃の掃射が行われ、AC達の直上で何機もの艦載機が爆発四散し海中へと沈んでいった。辛うじてミサイルがACに届くことだけは防いだものの、もはや“盾”は存在しない。

「艦載機残数1、『ブルーマグノリア』のみです……」

加賀は砂嵐しか表示されなくなった戦闘機のカメラのチャンネルを閉じ、ACのモニ

ターを注視した。もはや残っている艦載機は各空母の“一航戦”のみだった。

A C達は艦載機の破片を浴びながら単縦陣で駆逐イ級の群れに突撃していく。もはや存在しない艦載機と同じようにその身に機関銃が浴びせられるが、速く飛ぶために極限までに装甲を薄くしている戦闘機と違い戦艦に匹敵する装甲を持っているA Cにとつてその程度の攻撃は攻撃足りえない。どこ吹く風というようにA C達は無視して前進を続ける。その時だった

「ッ、きます!!」

吹雪の勘がミスイルとは違う恐怖を捉える。その通信を聞いたA C達は瞬時に散り散りになり近くのイ級へ足を掛けその場から跳躍した、その直後。A Cのいた空間に一筋の光線が走り、足場となったイ級に大穴が開く。

「当たると痛そうね」

マギーがつぶやく。それは『スピリット級要塞』のレーザーキャノンだった。駆逐艦とはいえ十数kmも離れた個所から一撃で屠るその威力は察して知るべしである。

遠くに見える『スピリット級要塞』の甲板の下がチカリと発光するたびに当たってはならない光弾が発射されてくる。当然、ミスイルもその手を休めることはない。駆逐イ級も『スピリット級要塞』の攻撃が自分たちに当たろうが、自分たちの攻撃が仲間を撃ち抜こうが構うことはなくA Cに向けて砲撃を繰り返す。海面はさながら地獄であつ

た。

しかし、それでもAC達は極めて冷静に——他の者からしたら恐怖心が麻痺でもしているかと思われるくらいに——その地獄の中を八艘飛びさながらの跳躍で前進していく。それは彼らにとつてこの程度の地獄は想定内のものであるからだ。吹雪は『傭兵』の記憶からこれがどんなものであるか、そして倒せることを知っている。倉井元帥はその人生で幾度となく似た異形を屠ってきた。マギーも、No. 2も、No. 8も、これより恐ろしい『死を告げるもの』と対峙したことがある。ゆえに彼らにとつてこの程度の地獄は地獄ではなく、ひるまずにただただ前進を続ける。

『怖い物』が迫ってくる感覚、己が戦闘経験、反射神経、ありとあらゆるものを生かし、駆逐イ級を足場に、時には盾にして死を躲してく。もし戦闘機で俯瞰してその様子を見ることができれば、10mにも満たない存在を全長2kmに近い巨体が必死で追い払おうとしているようにも見えるかもしれない。だがそれはあながち間違いではない。ここにいるACはその一体一体が有象無象とは隔絶した実力を持っている『巨神殺し（ジャイアントキリング）』である。

そのうちの一体、『ブルーマグノリア』がついに『スピリット級要塞』の体躯へと足を掛けた。そのまま何度も跳躍を繰り返し、巨神の懐の隙間にACを滑り込ませる。ドリフトターンして『スピリット級要塞』の甲板にメインカメラを向けると、リコンを飛ば

して解析を始めた。

「さて、どこからそぎ落とせばいいのかしら」

スキャン情報を読み取るマギーの目は狩人そのものであった。巨体にひるまず懐に入り込み、致命の一撃で相手を躡る獣よりも血に飢えた狩人。彼女は、そして遅れて到着してきたAC達もそれと同質の殺気を放つ。

——『巨神殺し』が開始された。

第四十三話 「MISSION 06」 沈黙海域攻略—0

3

スピリット級要塞の装甲の隙間から赤いグローが見えていた。それは『ブルーマグノリア』が獲物を探している光である。

ブリーフィングでの情報が確かなら、敵の弱点は巨大な甲板に備え付けられている砲台だったはず。『傭兵』の記憶を持つ吹雪が言っていたのだから確実な情報だ。

身を隠している要塞の装甲越しから『加賀』を越える大きさの甲板をスキャンで覗き見ると、巨大な砲台の影が映っている。今確認できているのは二台だけだが、恐らくスキャンの範囲外、甲板の先端部にも備え付けられているだろう。

そしてその砲台は筒先をこちらに向けていた。

（外装には自信ありってわけね）

こちらがいる場所は敵要塞の本体側である。にも関わらず自身に砲頭を向けるとは、すなわちそういうことだ。砲台という弱点があるがそれ以外には絶対の自信あり、か……。ここまでたどり着いた所で楽はさせてくれないらしい。

「なら楽しませてもらうわッ!!」

盾にしていた装甲板を蹴り、『ブルーマグノリア』は狙いを定めていた砲台へと襲撃を開始する。マギーはヒートマシンガンと夕張に造ってもらったAC用単装砲『秋霧』を砲台へと放ちながら目標の砲台へと接近していきブーストチャージで止めを刺そうとした。しかしその瞬間、マギーは悪寒を感じて反射的に横へハイブーストを吹かす。『ブルーマグノリア』の横を巨大な光刃が走った。

「あんなものまであるとはね」

それはマギーの狙っていた砲台の後方から放たれたものだった。甲板上の敵を迎撃することに特化し、点ではなく線を放ってくる射出兵器。勘づくのが遅れていたらその刃先はACに食い込んでいただろう。

休む暇を与えないかのように降ってくるミサイルも躲しつつマギーは狙っていた砲台への銃撃を再開した。しかしACよりも巨大な砲台の装甲はなかなか厚く、ヒートマシンガンとハンドガンではまだ破壊には至らない。

(さっきの蹴りが決まっていれば……ッ)

だが近づくことは容易ではなく……。マギーが心の中で舌打ちをした時だった。『ブルーマグノリア』の横を覚えのある光弾が過ぎ去り、そのまま攻撃をしていた砲台へと直撃する。それは『ブルーマグノリア』が持っているレーザーライフルの数倍の威力を

持っており、その威力に耐え切れず直撃した砲台は爆発四散した。

「手こずっているようだな、手を貸そう」

「……別に苦戦なんかしてないわ」

「だとしても協力した方が効率がいい、それは事実だ」

『ブルーマグノリア』に2機の機影が差す。先ほどの光弾を放ったN.O. 2の『アクアリウス』、そしてN.O. 8の『レオ』が『ブルーマグノリア』の横へ並び立つように降り立った。

「それで？ どうするの」

「私と貴様が前衛、N.O. 2は後衛で援護を頼む」

「異論はない。了解した」

早々に役割を決めると3機のACはすぐさま行動を開始した。『ブルーマグノリア』は甲板を蹴り上げ、カラスが獲物を啄むようにヒートマシンガンとハンドガンによる銃撃を上空から開始する。『レオ』はその名と同じ動物の様に力強く甲板上を駆けながらバトルライフルとショットガンの猛攻を砲台へと叩き込んでいく。砲台に接近するACが2機に増えることで砲台の攻撃も二つに分かれ手薄になり、さらにACの接近を助長させる。砲台には接近してきた敵のジェネレータを機能不全にするジャマーも備え付けられていたが、2機がその射程に入る前に『アクアリウス』がライフルで狙撃して破

壊していった。

「こちらは私が潰す。貴様は奥のを」

「言われなくたってッ！」

『レオ』はバトルライフルをレーザーブレードに持ち替えながらヒートキャノンを放つ砲台の懐へと潜り込み、青い三日月型の光刃を砲台へと食い込ませた。『レオ』がそのままレーザーブレードを振りぬくと、その跡に沿って砲台はずりりと崩れ落ちる。

「はあああッ！」

その上を蒼い機影が高速で通り抜けていた。それを迎撃するように最奥の砲台からブレード光波が放たれるが、ブーストカットし急降下をした『ブルーマグノリア』の上部をかすめるだけに終わる。『ブルーマグノリア』はそのまま砲台へとハイブーストで接近し、先ほどは決められなかった鬱憤を晴らすようにその砲台を蹴りぬく。

甲板上の砲台は3機のアCによりあつという間に破壊された。

「甲板に亀裂を確認。二人ともそこから離脱しろ」

「了解」

No. 2からの報告を受けてマギーとNo. 8が甲板から離れると、それは根元から折れ海へと落下していく。巨大な甲板の崩落にスピリット級要塞の周辺を護衛していた駆逐イ級が巻き込まれていた。

「これで残るは5枚ね」

「……いや、どうやら4枚のようだ」

No. 8がマギーにそう告げると同時に3機のACがいる反対側の甲板が崩れ落ちる音が響いてくる。

「ああ、吹雪たちか。この調子なら難なく済むわね」

「当然だ。我らに勝るものなど、この世にあつてはならない」

「……その“我ら”って、私たちも入っているの？それともあなたたちだけ？」

「……」

「そう。私もこのスピリット級要塞と“同じ側”って訳ね、あなたたちにとって……」

『ブルーマグノリア』は『秋霧』をレーザーライフルに持ち替え、メインカメラで『アクアリウス』を射撃める。

「なんだったらここで全ての決着をつけてもいいのよ？」

「それぐらいにしておけ、マグノリア・カーチス。今は同じ部隊だ。少なくとも今はな……」

マギーの闘志が自分たちに向いてきているのを察知し、No. 8が口を挟む。それに興ざめたのかマギーはそっぽを向くように『ブルーマグノリア』のメインカメラを次の甲板へと向けた。

「……冗談よ、さっさと済ませましょう。ティータイムに遅れたくないし」

『ブルーマグノリア』は先陣を切り、次の狩場へと跳躍をする。

(やはり障害となるか、この女は……)

NO. 8は移動しながら、初めてマギーに会った時のことを思い出していた。

初めて会ったあの時、深海鉄騎を巡って対立した時。あの時点では私たちのほうが優位であった。例えばあの時『ブルーマグノリア』が万全だったとしても、戦闘になれば私たちが勝っていただろう。しかし今はどうだ？ 今までの戦闘データよりもこの女は明らかに強くなっている。恐ろしいナニカになっている。……先の瞬間、圧力に飲まれかけた。あのまま戦闘になっていたら、もはや結果はどうなるかわからないだろう。

(あの演習で化けたか。次のミッションは骨が折れるぞ、倉井。それとも、これも織り込み済みなのか……?)

「動きが鈍くなっている。また考え事か、NO. 8」

NO. 2からプライベートチャンネルで通信が入り、NO. 8は思案を打ち切る。

「済まない、NO. 2」

「NO. 8、我々は“今回のミッション”を果たすためのただのコマだ。今の我々はそのために存在している。だから今はこのミッションに集中しろ」

「そうだな。その通りだ……」

2機の白いACは蒼いACに続いて砲台への襲撃を再開した。

◇ ◇ ◇

「なるほど、N.O. 8とN.O. 2が言うだけのことはある。いい腕だ」

「あ、はいッ、恐縮です……」

私はスピリット級要塞を駆け上がった先で偶然にも倉井元帥の『フォール・レイヴン』と合流し、共に砲台に攻撃を仕掛けていた。効率を優先しての共闘だけど、倉井元帥には『吹雪式』を回収した際に「騙して悪いが」を経験させられているため、正直あまりいい気分ではない。だがしかし、これはチャンスでもある。倉井元帥と二人きりという状況は今後起こりえないだろう。私はこの人にどうしても聞いてみたいことがあった。防衛のために現れた『HELKITE』を迎撃しながら倉井元帥に通信を繋げる。

「あの、倉井元帥。少々よろしいでしょうか？」

「戦闘中に随分と余裕だな」

「あなたが隣にいますから」

「……フツ、それで？」

「あなたは何のために深海棲艦を支配しようとしているのですか？人間を管理するつて、どうするつもりですか？」

あまりにも愚直な質問。普通なら答えてくれるはずがない。でも、なんとなくだけれど倉井元帥は答えてくれる、そんな気がしていた。特別演習の時も元帥自らマギーさんたちに話を持ち掛けていたことは聞いていたし、なによりACに乗っている時のこの人は策謀家ではなく傭兵だからだ。

「……言葉の通りだ。深海棲艦を使って人間を管理する。それによって秩序を復活させる、ただそれだけだ」

「ヴェニデのように力で人間を支配するでも？」

「ほう、セサル・ヴェニデのことも知っているのか。だがそれは違う。その方法は失敗している。それは『私たち』が一番理解していることだろう、『傭兵』？」

『吹雪式式』がライフルとガトリングガンでジャマーや『HELLKITE』を破壊しながら、その中を『フォール・レイヴン』はシールドを構え突進し、砲台をブーストチャージで破壊していく。『フォール・レイヴン』の動きが止まった隙を狙った砲台は逆に『吹雪式式』のミサイルを含めた一斉掃射により瞬間にスクラップと化した。2機のACは初めて組むとは思えない連携を取りながら次々に砲台を破壊していく。そしてなお、会話を続ける余裕があった。

「人間を支配することは不可能だ。必ず『例外』が現れる、貴様たちの様なものが……。あるものは言った。その力は人間の可能性だと。だがその可能性が何を生み出した？」

貴様は、貴様の中にいる者は知っているはずだ。セサルが、フランシスが、ロザリイが、作り出した世界の果てを……」

「それは……」

「人間の可能性、それは希望と同義ではない。あの時の破滅はどうやって回避した？それが私の答えだ」

砲台のダメージが伝搬することによる甲板の崩落が再び起きる。2機のACが崩れ落ちる甲板から要塞の本体側へと退避すると同時に、そのうちの1機、『吹雪式式』がライフルの筒先を『フォール・レイヴン』へと向けた。

「まさか……、破滅を回避するために破滅を引き起こすつもりですか!?そんなの矛盾してますッ!!」

「矛盾してなどいない、そこそが人類種の管理方法だ。それよりも矛先を間違えるな。ここを越えねば、待っているのは真正銘の破滅だけだ」

吹雪はトリガーに指をかけ、『フォール・レイヴン』の後ろにいた『HELLKITE』を撃ち抜く。

「今は共闘します。ですが、あなたの目的は絶対に阻止します」

「そうか。結末を知っている貴様ならあるいはと思ったが……、残念だ。やはりRDとは似ても異なるか……」

「RD…………？」

吹雪がだれのことだと聞く間もなく、要塞全体を振動が襲う。

「……………ミツシヨン完了のようだな。崩落に巻き込まれる前に退避するぞ」

「……………」

2機のACはグライドブーストを吹かし上空へと飛び去った。要塞の反対側から3機のACが同じようにブースターの火を吹かして飛び去っているのを吹雪は確認する。

AC達が退避して間もなく、スピリット級要塞の内部から爆炎が吹き出し、強固な装甲が四散していく。そして緑色の爆発を最後に、周囲にいた駆逐イ級を巻き込みながらスピリット級要塞は崩壊し海の底へと沈んでいった。それは同時に深海棲艦の統括機構への道が開けたことも意味する。『沈黙海域』が消え去った瞬間だった。

◇ ◇ ◇

任務を終え艦隊が母港へと帰投をした。だがそこに空母『翔鶴』の姿はなかった。『次の準備がありますので』

そう翔鶴は加賀達に告げると艦隊から離れどこかへと帰投して行ってしまったからだ。そのためドックにあるのは『加賀』『瑞鶴』『金剛』『摩耶』『夕立』だけだった。

『吹雪式』を修復装置まで移動させ入渠させた吹雪に、金剛が待つてましたとばかりに駆け寄り、思い切りハグをする。

「お疲れ様デース、ブツキー!! Congratulation!! みんなで勝利の Tea Time デース! Sisters が準備してくれてるから、参加してくれないと No! なんだからネ!」

「ええ、はい……。でもその前に司令官に報告しないと」

「……どうしました、ブツキー? 元気ないですよ?」

「ちよつと疲れただけです。大丈夫ですよ……。加賀さんたちは?」

「二人なら先に執務室に行ってたヨ」

「そうですか、ありがとうございます」

吹雪は早歩きで執務室へと歩を進めていく。金剛を含め同艦隊のメンバーはそれを心配そうにただ眺めることしかできなかった。

◇ ◇ ◇

「どうした吹雪? お前さんにしては珍しく、やけに不機嫌そうだな?」

戦果を報告に来た吹雪の表情がいつもより険しいことを察し、白鳥提督は尋ねる。

「司令官、報告があります」

「戦果なら加賀とマギーからすでに聞いている。綺麗にぶつ壊したそうじゃないか、お疲れさん」

提督の隣にいた一航戦ズを親指で指さしながら提督は答えた。だが吹雪は態度を軟

化させず話を続ける。

「……倉井元帥の目的がわかりました」

「深海棲艦を支配することじゃないのか？」

「その先です。あの人は深海棲艦を使って『評決の日』に起きた出来事を……、再び『大破壊』を引き起こすつもりです！」

「『大破壊』……？」

その単語を聞いて吹雪の言っていることを理解したマギーが確認するように発言する。

「なるほどね。要はあのクソ元帥の目的は、人類を戦争できない程度に滅茶苦茶にすることってことですよ。技術も文化も何もかもリセットする。とんだ管理方法だわ」

「……その通りですマギーさん。止めなくちゃ、絶対に……ッ！司令官ッ、どうにかなりませんか！すぐにでもあの人を拘束しないと……ッ！」

「それはできませんよ、吹雪。お前のことを信用していないわけじゃないが、証拠もないのに動くことはできません。下手に動けば逆にこっちがお縄だ」

「でも提督。あいつに不信を抱いてる連中もいるんでしょ？そいつらを動かせば……」

「それも無理だな、マギー。それ以上に上の連中は奴のことを恐れている。猛獣の檻の

中に好き好んで手を入れる奴なんかいないさ」

吹雪は悔しそうに顔をしかめた。倉井元帥が自分に目的を話したのは、つまりもう止めることはできないと分かっていたからだと理解した。上層部の不甲斐なさと自分の無力さに、怒りで握りこぶしに力が入る。

「そんな顔をするな吹雪。網を張ることぐらいならできる。赤羽や信用できる鎮守府に連絡して警戒網を敷いてもらおう。そうすれば少なくとも、奴がこの国の海域を出る前にお前たち程度なら出撃させられるはずだ。銀爺にも協力を仰げば陸軍も動いてくれるだろう」

「司令官……」

「面倒だが、ここからは俺の領分だ。加賀、大淀に電報の用意をさせておいてくれ」
「了解しました」

加賀はすぐさま執務室の通信機から大淀へと連絡を入れる。提督はその様子を確認すると、マギーと吹雪に顔を向けた。

「……しかしきつと、奴を直接止められるのはお前たちだけだ。だからその時まで英気を養っておけ。金剛たちが待つてるんだろう？ さっさと行ってやれよ、MVPども」

提督はシッシと手を振りながら休息をとるように二人を促す。二人は軽く目を合わせると、啓礼してその場を後にした。

「加賀、お前も連絡が終わったら向かっていいぞ」

「……お一人でサボらずにちゃんとやれますか？」

「あのなあ、俺だってさすがに分別はつく。これぐらいは信用してほしいがね」

「……そうね。ではお先に失礼するわ」

加賀も軽く会釈してマギーたちの後を追っていった。自分以外誰もいなくなった執務室で提督は椅子に体を預け、天井を仰ぎ見る。

「……倉井、人類を残すために人類種の天敵にでもなるつもりか。イカれてるよ、お前。

……同期のよしみだ。止めてやるさ、俺たちがな」

第四十四話「番外編「決戦前夜」

「ひさしぶりだな、主任」

「ぎやはははは、ひさしぶりだね〜クライン。どうだい、調子は？」

「計画が最終段階に入った。アレを寄越してくれ」

「ん〜それなんだけどね〜、やつぱり無理かな〜。キャロリンがさ〜……」

「ならばいい、やつらだけでやる」

「いやいやいやいや、こういう時はもうちよつとさ、駆け引きとか楽しもーよ」

「それで」

「つれないなく。ちゃんとおげるよ。ただし質問に答えてくれたらね〜」

「質問、だど？」

「そーだよ、クライン。……貴様はなんのために戦っている？」

「秩序を取り戻す為だ。そして贖罪を成す」

「それは『倉井』の答えだ。俺が知りたいのは『クライン』の答えだよ」

「……酷いな、これはこれで嘘じゃないんだが。言われるがまま戦って、焼いて焼いて焼き尽くして、その未来があれだ。インターネサインが復活しなかったらアイザックの予

想通り『評決の日』で人類は滅んでいたよ。……人が人を殺す連鎖は止まらない。だから、人類には天敵が必要なんだ。それによって秩序を作り出す。それが「私の答えだ」

「……うつそだく。だって「人類のため」なんて君の柄じゃないよね」

「柄にもないことをやってみたくなる時もあるさ。やるもんじゃないってわかっていてもな。なあ、主任？」

「まあね」

「……強いて言えば、『俺』は知りたいたいかもしれない、自分自身の可能性を……。お前と対決した時も、この時代に生み出された時も、結局ただ戦い続けることしかできなかった。なにも残すことはできなかった。……だから、それしかできないのであれば、それで何を成せるのかを知りたいのだと思う」

「だから俺たちの実験に協力すると？」

「そもそもそういう契約で今に蘇らせたのは貴様だろうに」

「あれれ〜そうだったっけ？」

「白々しい」

「ぎやはははは。そう怒らないでよ。でも大丈夫〜？あの二人、なかなか強そうだけ

〜っ。」

「そうだな、少なく見積もってセサル以上だ。だが『例外が現れても維持できる秩序』、それを確かめるためにはうってつけとも言える。早期に目をつけて煽った甲斐はあった」
「楽しそうだねえ、クライン」

「数十年の総決算だ、浮かれもするさ。ああ、主任。これ以上の『お手伝い』も不要だからな」

「ええ、仲間外れはよくないなあ」

「確かにお前らの実験の一つかもしれないが、これは俺の闘争でもある。俺の意思で決めた、俺の闘争だ。結末がどうなるろうと、決着は俺が付ける」

「……そう。じゃあ、頑張つてね。あ、楽しみすぎて任務忘れちゃ駄目だよ」

「わかっているさ。『私』の役割はプログラムの修正だ。イレギュラーは抹殺する、例外なく……」

◇ ◇ ◇

装甲空母の格納庫の奥に2体の白い巨人が佇んでいる。その「彼ら」の足元で、本来であれば美しい純白であつたらう髪を汚しながら「彼ら」の装甲を磨く少女がいた。

「翔鶴、メンテナンスは済んでいる。その行動は無意味だ」

巨人の一体、No. 2が自らの体を綺麗にしてくれている少女に呼び掛ける。無駄な

ことに労力を惜しむ必要はないと。しかし——

「そんなことはありません。次の任務、貴方達をみすばらしい姿で送り出す訳にはいきませんから」

翔鶴は強く、そして他の鎮守府の者には見せることのない優しさを見せNo. 2の意見を否定した。そしてクスリと微笑むと、再び彼らの装甲を磨き始める。

「……もう4年になるか。我らがお前に出会ってから」

「そうですね。貴殿方と倉井様が過ごした時間に比べたら微々たる時間かもしれませんが……、私にしたらとても濃密な時間でした」

「我らにとつても有意義な時間だったさ。最初はACを輸送するだけしかできなかったお前が、よくここまで育つたものだ。誇っていい」

「ありがとうございます、No. 2」

翔鶴は彼らにしか向けない満面の笑みを浮かべる。しかし直ぐにその顔に影が差した。

「……やはり次で最後になってしまうの……?」

「次の相手は十中八九あの『二匹の獣』だろう。無事では済むまい」

No. 2は淡々とした口調で翔鶴に答える。その回答を聞いて横にいたもう一機の

A Cのメインカメラに光が灯った。

「お前らしくない発言だな、N O. 2。いつから敗北主義者になった？」

「事実を述べているだけだ、N O. 8。それに我らがどうなろうとミツシヨンは完遂する。『勝つ』のは我々だ」

「なるほど、確かに。失言だったか」

「分かつていて言っているだろう、貴様」とても言いたげにN O. 2はN O. 8に視線を向けた——様に翔鶴は感じた。二機のA Cは先程から微動だに動いていないが、それでも談笑しているように見え、その光景に胸が痛む。

「お二方共「無事に帰る」とは言ってくださらないのですね……。倉井様も……。やはり他の道は無いのですか？」

翔鶴が訴えるように彼らを見上げる。暫しの沈黙のあとN O. 8のスピーカーが震えた。

「お前が生まれるよりも遙か昔に結論は出ている。深海棲艦が現れるよりも前から、我らは戦い続けてきたが……しかし、何も変わりはしなかった。変えることはできなかった。もはや倉井のミツシヨンを成すにはこれより道は無い」

「やはり、そうなのですね……」

項垂れる翔鶴にN O. 2が声をかける。

「翔鶴、己のミッションを忘れたわけではあるまいな」

「そんなことはありません！」

翔鶴は顔を上げてNo. 2のメインカメラを見つめる。

「生有る限り、この結末を見届けること。それが私に課せられた任務です」

「そうだ。……お前は」それでいい」

翔鶴は何かを言おうとしたが、これ以上の言及は下手すれば彼らへの侮辱にもなりかねないと判断し、語るべきではないと口を紡ぐ。その代わりとでもいうように彼らの清掃を再開した。ゆつくりと、丁寧に、彼らとの思い出を思い返しながら。

そうして丹念に清掃に没頭する翔鶴にいつの間にか近づいていた男が声をかける。

「翔鶴、企業から例の兵器を受け取る。済まないが指示されたポイントへ移動を開始してくれ」

「ッ、倉井様!?! 畏まりました」

翔鶴はNo. 2とNo. 8に申し訳なそうに軽くお辞儀をすると、格納庫の出口へと向かっていった。そちらへ視線を向けたまま倉井元帥は口を開く。

「清掃途中にすまなかつたな、No. 2、No. 8」

「問題ない、それよりも……」

目を細めているかのようにNo. 8のメインカメラから光が漏れる。

「いよいよか？倉井」

「ああ。始めよう、我らのミッションを」

第四十五話 「MISSION 07」本宮奪還―01」

毎日変わらず0300と1500に大本営からの定時連絡が各鎮守府へと通達される。内容は当たり障りの無い程度の戦況や各鎮守府の状況、緊急性の乏しい任務etc. ……といったものだ。

深夜三時の報告を確認するために起きていた大淀は眠気覚ましにブラックコーヒーを一口飲む。濃い目に淹れたその香りと苦みで頭の覚醒をうながすと、「さて」と言つて通信室のメインPCの操作を開始した。

大本営や他の鎮守府との連絡は彼女の主な業務である。そして定時連絡を確認し必要があれば報告、展開するのもその仕事の一つだ。「なんでこんな時間に報告があるのかしら……」と心の中でいつもの愚痴を溢しつつ、大淀は画面を覗いた。

「あれ？」

いつもは嫌に正確に届く定期連絡がまだ届いていない。送受信をクリックしても、受信件数はゼロのままである。

（おかしい……。こんなこと今まで無かったのに）

鎮守府が再編成されて以降、途切れなく続いていた定期連絡が前触れもなく届いてい

ないことに大淀は不安を抱く。もしかしたら大本営との接続に何か問題があるのかも
しれないと思ひ至り、通信装置にあるAMSコネクタを自らの首筋に取り付けた。

何故だかは判明していないが、大淀という艦娘はこの国の地下遺跡から発掘された
鎮守府の中核をなす装置にアクセスできる権限を持っていた。もしかしたらオリジナ
ルの人物が装置の関係者なのでは？と推測されていたりするが、真相は定かではない。

ともかくAMSコネクタにより装置と自身を接続した大淀はキーボード操作ではお
よそ不可能な速度で原因を調べてゆく。

(ネットワーク接続を確認……大本営のサーバーにアクセスできない?)

大淀の額から冷や汗が吹き出る。大本営や各鎮守府間とのデータのやり取りはこの
サーバーを介して行われている。それによつて本営が各鎮守府の状況を確認しつつ全
体の指揮、防衛網の形成を行うのだ。それゆえサーバーにアクセスできないとは本営や
他の鎮守府と連携が取れない孤立状態であること同義であった。大淀は原因究明のた
めに脳をフル回転させる。

(自己診断プログラム起動、システムチェック開始。全ケーブルルチェック開始、あとは
……)

様々なチェックシステムの起動と平行してある箇所への回線を繋ぐ。

(今日の夜勤は確かマギーさんだったはず)

彼女なら話が早く済む。大淀は不幸中のささやかな幸いに感謝しながら宿直室へコールを入れた。

「こちら通信室、応答願います」

「どうしたの大淀？定期連絡に面白い話でもあつた？」

「その定期連絡が届かないんです。現在、鎮守府は本営のサーバーとの接続が切れている状態にあります」

大淀の報を聞いて事態の深刻さを理解したマギーは、眠気で薄ぼんやりしていた頭を一瞬にして切り替える。

「原因は？」

「システムチェックをしていますが今だ不明です。ですがもし判明しなかった場合、それ以上は私の権限では……」

「分かったわ。提督を叩き起こしてくる。あと、やない整備長にも施設のチェックをさせておいて。どうせコウシヨウで仮暮らししてるだろうから」

「分かりました。宜しくお願います」

大淀との通信を終えるとマギーは椅子の音を立てて立ち上がり急ぎ提督の部屋へと向かつて行った。



「で、原因は判明したか？」

欠伸を噛み殺した初老の声が通信室で発せられる。深夜に文字通り叩き起こされたせいとその声には若干苛立ちも含まれていた。しかしそんな提督のご機嫌を伺う余裕は無いとでもいうように大淀は早口で状況の報告を開始する。

「すみません、いまだにサーバーへの接続はならず原因も不明です。当鎮守府のシステムおよび施設には異常はありませんでした」

「つまり問題は鎮守府の外ってわけか……」

「こいつはまいったな……とでもいうように提督は顎を手で擦りながら唸り、大淀に再度確認をとる。

「メイン装置のネットワーク以外は試したか？」

「いえ。ですが他の連絡手段だとセキュリティの脆弱性が……」

「構わん、繋がるか確認するだけだ」

大淀は「了解しました」と告げ他の回線で本営に連絡を繋げようとする。しかし一向に本営に繋がる気配は無く、提督に向けて大淀は首を横に振った。

「大淀、一応聞くが本営からこちらに連絡は？」

「ありません……」

「……こいつはマジで何かあったか？」

深夜とはいえネットワークの未接続が判明してから一時間近く経っている。本来なら本営からも何かしら連絡がきてもおかしくはないにも関わらず、それすら未だにない。提督の中に芽生えた不安が膨らんでゆく。横で話を聞いていたマギーは眉間に眉を寄せた。

「提督、本営のサーバートラブルの可能性は？」

「無いな。あちらのサーバーは三つに分離されていて、お互いに補完・監視し合うシステムになっていたはずだ。システムのなエラーはありえん。少なくとも遺跡から発掘、運用されてから一度もこんなことは無かった」

「じゃあ物理的に何かあったとか？」

「物理的にってのは？」

「本営が何者かに占拠されたとか……」

マギーの突拍子もない発言に大淀が「あり得ません！」と割り込む。

「本営には強固な防衛網が敷かれています。それに銀爺大将のレイヴンズだっているんですよ?! 連絡の暇も与えずそれらを突破して本営を押しやるなんて、それこそ不可能です！」

「なら実践してあげましょうか？」

マギーが冗談気味の声で、しかし本気の眼で答えた。その威圧感に大淀は思わず唾を

飲み込む。

「大淀。レイヴンズのACは確かに強力だけど、腕前はハッキリ言ってUNAC以下よ。吹雪に五対一でも負ける程度、大したことはない」

「それは吹雪さんやマギーさんが例外だから……、ツ!」

「そうかもね。そして私たちは同じ例外を知っている」

「その辺にしておけ」

提督が二人の会話を打ち切る。まだなにも分かっていない状況でこれ以上語るべきではないというように。

「何が原因であれ放置しておくわけにもいかん。本営にこちらの状況を直接伝えるしかないな」

「直接って、車でも出すの?」

「いや、加賀と一緒にマギーが行ってくれないか。装甲ヘリファットマンでな」

「加賀もつてことは……」

「ああ、お前はACでだ。何があっても対応できるようにな。何もなけりやそれでいい、大袈裟だって俺が笑われるだけで済む話だ」

「そうであれば何よりだが——と提督は軽口を叩くが、その表情に笑顔は無い。なにかある。マギーの言った推測を意識しているのか、長年の勘が告げているのか、提督も何

かを感じているようだった。

「了解、ドックに発信準備の連絡を入れておいて。私は加賀を起こしてそのままドックに向かうわ」

マジギーが命を受けて踵を返し、通信室から出ようとした時だった。

「待ってくださいー！」

大淀がマジギーを止める。マジギーが振り向くと、大淀が通信機の手操作をしながらスピーカーに注意を向けるように促していた。そのスピーカーからノイズ交じりの声が聞こえ始める。

「……ワレ………バ………オウト………マス。こち……レイヴ……ズ……アオ………」

「……ッ!!大淀、あつちに通信を繋げられる!?!」

「今やつてますッ」

大淀が急ぎ回線チャンネルを調整し聞こえてくる音声クリアになっていく。そして通信してきた相手に繋がったのか大淀が「こちら白鳥提督鎮守府、応答願います」と答えると、すぐさま返信が返ってきた。

「よかつたー!やつと繋がりましたあゝ。こちら陸軍特殊機甲部隊レイヴンズ、アオバです。もうすぐそちらに到着します、緊急事態なんですよお!」

「緊急事態って?」

「マギーが大淀からマイクを奪い取って尋ねた。そしてある意味予想通りの、最悪の内容がアオバから伝えられる。」

「倉井元帥の謀反により大本営は壊滅状態、そのうえ主要施設を占拠されました」

第四十六話 「MISSION 07」本宮奪還―02

アオバ率いるレイヴンズが鎮守府へと到着した。隊長であるアオバは執務室へと招かれ、状況の説明を求められる。執務室には提督、大淀、マギーの通信を聞いていた者たちと、必要と思われたのか加賀と吹雪も加えられていた。

「これを見てもらえますか？」

アオバはメモリーを一つ差し出す。大淀がそれを受け取り、執務室のPCに差し込んだ。その中には映像ファイルが入っており、モニターを皆に見えるよう調整してから、その映像を再生する。

「なんだ、こりゃ……」

モニターを流れる映像に提督は顔をゆがめた。

映像の舞台は大本営周辺都市であった。画面の端に大本営の建造物が見えることからそれがうかがえる。そしてその都市に突如として妙な影がかかる。複数のへりに吊られた『直立したタコのような巨大兵器』が都市上空を通過していくのだ。しかもその数は四つ。見ているもの全員があっけにとられている中、堂々と大本営の周りを取り囲むように『巨大兵器』は投下され、同時にACのミサイルの何倍もあろう大きさの特攻

兵器が次々と降り注いでいく。そして大本営やその周囲に突き刺さった『特攻兵器』から蛇のような射出兵器が次々と飛び出し、無差別に周囲を破壊し始めた。都市はさながら火の海と化し、その海の中を『巨大兵器』が大本営めがけて行進していく。そして脚部装甲を展開し、現れた目玉のような砲台から光弾が吐き出された。光弾を受け大本営は倒壊しそうになり、それを阻止しようと防衛部隊として配備されていた戦車隊などが必死の抵抗を試みようとするが、『特攻兵器』と『巨大兵器』からの攻撃でそれすら許される間も無く殲滅されていく。蛇のような特攻兵器のアップが写ったところで映像には砂嵐が入り、終わりを告げた。

馬鹿げた悪夢の様だった。あまりの突拍子の無さに、現実味の無さに、映画のワンシーンと言われたら信じてしまいそうな惨劇。しかし数刻前に現実として起きた事実である。

「この映像は陸軍の仲間より送信されてきたものです。そして結果として大本営防衛部隊は全滅、大本営もほぼ壊滅状態です」

「どうしてあれの接近を許したの!? あんなの流石に気付くでしょう!」

マギーの怒号がアオバに向けられる。アオバは憤りを隠さずマギーの言いがかりに反論した。

「気づくも何も、倉井は堂々と運んできたんです! 元帥の権限を使ってぬけぬけと!」

普段は傭兵のような立ち振る舞いをしているが、その圧倒的な戦績で元帥にまで上り詰めた人物である。逆らえるような人物など、あの場には存在していなかった。そして大本営が対応にもたついていている間に侵攻が行われたのだとアオバは語る。——まるで嘲笑っているかのような侵攻に、悔しきからか眼に涙が滲んでいた。

「はあ、これだから軍つてのは……。まあいい、レイヴンズが無駄な特攻しないでこつちに来たのだけは評価してあげる。いい気分ではないでしょうけど、それで正解よ」

「銀爺大将のご指示で……。それにアオバも、情けない話ですが自分たちの実力はわかっていてもつもりです。きつとあの巨大兵器だけでなく倉井と白いAC達も控えていると思われます。皆さんの協力がないと大本営の奪還は不可能でしょう」

「でしようね。……畏、かしら?」

マギーはちらりと提督に視線を向ける。提督はやれやれと肩をすくめながら答えた。「だろうな。海軍の統括機構インターネサイ侵攻の足止めと、オマケに俺たちをここで仕留めるつもりなんだろう。しかし無視するわけにもいかん。大本営のサーバーを押さえられてちや、各鎮守府が孤立していることになる。当然、この国の防衛網もバラバラだ。急いで復旧しないとやばいぜ」

「作戦はどうする? 私と吹雪、サポートに加賀のへりと龍驤のUNAC、レイヴンズ……戦力は限られるわよ」

「そうだな……。マギー、吹雪。映像に映っていた巨大兵器の弱点を知っていたりしないか？」

映像の兵器は明らかに異質な、この時代の兵器でないことは明らかだった。倉井の持ちだしたものであるならACと同質のものであるだろう。であればマギーと、その時代の傭兵の戦闘記録がインストールされた吹雪なら何か知っているかもしれないと思い、提督は二人に質問を投げかける。しかしその返事は芳しいものではなかった。

「悪いけど私は知らないわ。あれの残骸をどつかで見たかもって程度」

「すみません司令官、私もあれの記憶は……。マギーさんと同じです」

「そうか……。どうしたもんかね」

映像を再度見ながら白鳥提督は考え込む。そして火の海になっていく都市のシーンのあたりで何かを思いついたのか、執務室に貼られている地図の前へと移動した。

「……ギリギリ届くな」

その一言をこぼしたのち、艦娘たちの方へ振り返りオーダーを出す。

「加賀。瑞鶴と龍驤、千代田、金剛姉妹に……。叢雲、綾波、夕立、秋月を呼び出してくれ。マギーは今言った連中の発艦準備を整備兵たちに通達。急げよ」

「提督、敵は内地よ？なぜ発艦準備を……。まさか!？」

加賀は呼び出す艦種から提督の意図を読み取った。読み取ったのだが、その内容が信

じられず怪訝そうな表情を提督に向ける。白鳥提督はそれに不敵な笑みで返した。

「弱点がわからないなら、こつちの最高火力で叩き潰すしかあるまいよ。あんなものと渡り合うんだ、多少の無茶は承知せんとな」

◇ ◇ ◇

「時間が無い、手短に済ますぞ」

先ほど白鳥提督から指名された艦娘たちとアオバを隊長としてレイヴンズの隊員たちが会議室に集められていた。部屋にあるスクリーンを兼ねたホワイトボードには大本営のある都市を中心とした地図が映し出されている。そこへ提督が本営の場所と映像から予想される巨大兵器の場所にバツ印をつけた。

「本作戦の目標はこの『巨大兵器の撃破』及び『本営施設の奪還』だ。ACは龍驤のUN ACとレイヴンズの混成部隊、『ブルーマグノリア』と加賀の装甲ヘリのコンビ、そして『吹雪式』の3つに分けて行動。艦隊は支援艦隊を編成。第一支援艦隊は旗艦を『龍驤』に『金剛』『比叡』『千代田』、その護衛に『叢雲』『綾波』が就け。第二支援艦隊は旗艦を『瑞鶴』、そして『加賀』『霧島』『榛名』護衛に『夕立』『秋月』だ。支援艦隊はこの場所に就いてくれ」

提督は本営に近い湾にマーカーで印をつける。瑞鶴が「え？なんで私が旗艦なの!？」と言いたげにしているが、提督は無視して話を続けた。

「作戦概要を説明する。第一段階はAC混成部隊で首都圏に侵入。特攻兵器を排除しつつ、そのまま巨大兵器全4機を破壊してくれ」

「はあッ!」

アオバと龍驤が同時に声を上げた。レイヴンズの面々も戸惑いを隠せていない。自分たちは確かにACを扱える人種ではあるが、しかしジャイアントキリングを成し遂げられるイレギュラーではないのだ。マギーや吹雪が前に出てその支援を行うものばかりだと思っていたため、提督の発案は全くの想定外であった。しかし提督はその反応は想定内とばかりに言葉を紡ぐ。

「そのための支援艦隊だ。龍驤、お前ならUNACのスポットで艦隊に敵の位置を知らせられるだろう?」

「確かにできるけど、キミ、自分のゆーてることわかっるとるん!」

「ああ。AC混成部隊で巨大兵器の詳細な位置を索敵、そして支援艦隊の爆撃と長距離砲撃をあれにブチかましてやるのさ」

「ブチかますって、場所は本土やでッ!? 正気なん?」

「正気も正気だ。なあに、もうあの辺りは焼け野原だ。これ以上に撃ちこんでもそう変わりませんよ。それにお前らの腕なら可能なことも知っている。だからやってくれ」

「なんちゆう作戦や……」

龍驤は頭痛を起こし自らの頭を押さえた。金剛のみが提督が寄せてくれていた信頼に「任せて下さいネー!」と息巻いているが、それ以外の面々は龍驤と同じ浮かぬ表情である。

「それで、私たちの任務は?」

マギーはある程度役割を予想しているのか、神妙な顔をしているメンバーをよそに淡々とした口調で提督に尋ねた。

「予想はついているだろうが、マギーと加賀には敵ACの対応を頼みたい。作戦の第一段階が上手くいけば、それを挫くために必ずACが出てくるはずだ。そいつらばかりは支援艦隊でもどうにもならん。お前たちだけが頼りだ。これを作戦の第二段階とする。それまでは機体を温存するためにレイヴンズの後方で待機。加賀はマギーの支援で手一杯になるだろうから、瑞鶴、お前が第一支援艦隊との調整をするんだぞ、わかってんのか?」

急に話を振られ瑞鶴は思わず「ひゃい!!」という言葉返してしまう。赤くなっている瑞鶴をしり目に横にいた吹雪が提督に質問を投げかけた。

「司令官、そうすると私は……?」

「お前はマギーたちと同時に侵攻、ただしAC混成部隊の迎撃に倉井、白いACら両方が来なかった場合はマギーたちにその相手を任せて大本営に向かってくれ。残っている

敵ACが施設防衛に当たっているはずだ。そいつを撃破して本営施設の奪還を頼む。」
「了解しました」

吹雪は得心したのか佇まいを静かにした。しかしマギー、加賀を除くメンバーはまだ戸惑いがあるのか（金剛のみは別の理由でだが）ざわつきが収まらない。その空気を提督は机を軽くたたいて制する。そして咳払いをしたのち、参加メンバーを改めて眺めながら提督は口を開けた。

「俺が無茶を言っていることは十分承知だ。お前たちへの負担が大きいこともな。しかしそれでも、成さねばならん。勝たねばならん。……なに、さつきも言ったがお前ならできるさ。多少へましても俺が尻を拭いてやる。そのためにこんな大層な肩書を持つてるんだからな。——だから、頼むぞ」

しばしの静寂。その言葉を受けて腹をくくったのか、みな一斉に席から立ちあがり強い視線を提督に向けた。提督も佇まいを直しそれに答える。

「それではこれより『大本営奪還作戦』を開始する！総員、出撃準備！」

「了解！！」

日の出と共に艦隊は抜錨し、この国の存亡をかけることになる決戦の序章が静かに幕を開けた。

第四十七話 「MISSION 07」 本宮奪還——03」

大本宮周辺都市は特異な街並みを形成していた。巨大な塔の様になっている大本宮を中心に軍事施設が立ち並んでおり、一部の区画は工業地帯のようにもなっている。そしてそれらの施設に従事する人々かその家族が住んでいるのか、鉄筋コンクリート造の集合住宅が隙間を埋めるように密集して住居区が出来上がっており、そうした建物を全て囲うようにダムのような巨大な防壁が一周している。周囲の民家からは中を窺うことはできず、防壁から一方的に監視されるだけ。その隔絶ぶりは階級社会のような様相である。

事実、深海棲艦が人類に牙を向けるより前からこの世界には鬭争が満ちており、必然的どの国においても軍が力を持ちやすい情勢であった。この国も例外ではなく、深海棲艦の猛攻を受けてからさらに拍車がかかり、軍に関わるものとそうでないものには明確な格差が出来上がっている。防壁の外には木造の民家が普通に存在しており、時代そのものが壁を境に繋がっていないのでは、という印象すら与えるほどだ。

「——せやからこの壁、あんま好きやなかつたんやけど……役に立ってるの初めて見たわ」

偵察機がAMSを通して龍驤に見せる光景を眺めながら彼女はひとりごちる。防壁の内側、大本営周辺都市からもうもうと煙が上がりつついるのが遠くからでもわかるが、壁を境にそれは生じていなかった。中の延焼が壁でせき止められ周囲の民家に燃え移るのを防いでいたからだ。もしそちらにまで被害が広まっていたら木造から木造へと燃え広がる大火災が生じていたに違いない。——本当は逆の場合を想定して壁が作られていたのかもしれないが。

そんな皮肉が頭をかすめながら龍驤は偵察機を戦場と定められた都市に近づけていった。

「……けったくそ悪いわ」

本営周辺都市に入り、まず偵察機のカメラが映し出したのは逃げ惑う人々の群れだった。出入口が狭いために人が詰まっており、いまだにけが人を含めてごった返している。続けて映し出しるのは燃え広がる火と煙。鎮火する人手もおらず工業地帯の燃料などにも引火しているせいか、襲撃が起きて数時間経っているにも関わらずその勢いが収まっている様子はない。地獄絵図、その言葉がぴったり当てはまるような光景が続く。

「龍驤さん、その……、大丈夫？」

瑞鶴が通信で龍驤に声をかけた。第二支援艦隊に情報を共有するために瑞鶴は龍驤の偵察機が得たデータをリアルタイムで受け取っている。つまりこの地獄絵図を一緒

に眺めている状態だった。

「心配ありがと。でもうちは大丈夫や。どつちかかっていうときみのほうがキツイんちゃう？ あんま慣れとらへんやろ、こんな光景」

龍驤は赤羽元帥の元にいた艦娘であり多くの戦場を渡ってきた。当然、深海棲艦の爆撃にあつた基地や街をいくつも見たこともある。そのため、いい気分になどならないが平静を保っていられる程度にはこのような光景には慣れてしまっていた。それが人として良いことか悪いことかはわからないが、少なくとも任務を達成するためには冷静でいられることに越したことはない。

「さて、お仕事お仕事！」

龍驤は偵察をさらに飛ばす。すると大本営だった建物を取り囲むように佇んでいる六つ脚の巨影が四つ見えてきた。

「うへえく……、あれを今からやるんやね……。これは骨が折れるわ」

攻撃目標をあらかじめ破壊しつくしてしまったからか、それらは煙に包まれている街の中をただ突つ立っているだけの様に見える。龍驤が偵察機をもう少し近づけて様子を窺おうとした時だった。突如として蛇のような特攻兵器が空中を泳いで偵察機に襲い掛かつてきたのだ。装甲を食い破り、プラズマ光を伴って爆散するそれに偵察機が数機落とされてしまった。それを合図とするように街中から轟音が鳴り響き、一機、二機と

偵察機が落とされていく。発射音の元からは狙いを定めるためのレーザーサイトが照射されていた。そして建物の隙間から死神艦隊のとの戦闘記録に残っていた戦闘機——『HELKITE』が次々と上空へ姿を現してくる。

「こんなままで用意しとったんか！用意良すぎやろ!!」

龍驤は少しでも情報を拾うために次々と展開される敵戦力の中に偵察機を駆け巡らせる。そして眼前に映し出されているマップに敵戦力のマーカーを付け加えていった。「なにこの戦力……こんな短時間で展開できるものなの!？」

リンクしている画面から、次々と敵マーカーがマップを埋めていくのを見て瑞鶴が疑問をこぼした。それに額に汗を滲ませながら龍驤が嫌味交じりに答える。

「どうせ事前に色々仕込んでいたんやろ！元帥なんて大層な肩書利用してな！」

そして龍驤は偵察機のカメラ越しに大本営を睨みつけた。

「んで、そこからこのオモチヤを操つとんやろ？なあ翔鶴!!」

倉井元元帥唯一直属の艦娘の名を叫ぶ。当然彼女からの返事はない。その代わりとでもいうように、街中に展開している無人兵器が淡々と龍驤の偵察機を撃墜していく。

大本営を破壊し尽くさず占拠しているのはこのためか、と龍驤は合点しながら舌打ちをした。結局現状を招いたのは倉井にいいように利用されていた奴らのせいでもあるからだ。散々自分の上官である赤羽元帥が注意をしていたにも関わらず、倉井の甘言と

その力に怯え身を任せた結果がこれだ。

苛立ちで熱された頭を冷却するように龍驤は大きく息を吐いた。偵察機から得た敵の情報を盛り込んだマップをひと眺めする。反撃の時間はこれからだ。

「ん、大体こんなもんかな。さあ仕切るで！レイヴンズ、発進！UNACちゃんについてきてやー」

「りよーかいです！頼りにしてますよお〜」

マップから展開されている防衛戦力を各個撃破しつつ巨大兵器——誰も知らないがL・L・Lという名称の——へと近づくルートに龍驤はUNACへと入力した。黄色にカラーリングされた重量逆関節ACのメインカメラに光がともる。

「戦闘システム起動。U1、ビーコンを確認。パターン1に移行」

「さあ、皆さんも行きますよ〜！レイヴンズの初陣、派手に行きましょう！」

「了解ッ」

「君らこれが初陣なんか!?!」

「大丈夫です！シミュレーション訓練はバッチリですから!!」

（アカンかもしれない……）

アオバの妙に自信満々な発言に一抹の不安を感じながらも、龍驤はUNACでレイヴンズを攻略ルートへと導いていく。同時に戦闘用の艦載機も発艦させていった。

「ほな、みんなも情報は叩き込んだな？ 航空支援隊、出撃するでー！」

「了解」

龍驤の合図と共に正規空母『加賀』『瑞鶴』、軽空母『千代田』からも攻撃隊が次々と発進していく。本営奪還作戦が本格的に始動した。

◇ ◇ ◇

（ああ、怖い……。正直すっごく怖いですううう）

スキャンモードにより青暗くなつたACのモニターを覗きながら、アオバは密かに手を震わせていた。実戦自体は初めてではないが、あくまでそれは艦娘として、青葉だつた時の話だ。自分の船を喪失し、アオバとして陸軍に異動し、そして初めてのAC戦。シミュレーションや実施訓練で何度もACは乗り回したが、その時には感じなかつた。死のあまりの距離の近さを実感して恐怖心が膨らんでいく。先ほどの龍驤に向けた言葉も本当は自分を奮い立たせるための空元気だつた。

アオバたちレイヴンズの練度はあまり高くない。ブーストドライブも障害物を超える程度しか扱えず、戦闘中に無理に使おうとすれば明後日の方向へ跳んでしまい混乱してしまふレベルだ。ただそうであってもACの通常のブースト移動は100km/hを超え、航空兵器を除く戦車などの通常兵器よりは高速である。ましてや障害物の多い街中で体感速度はさらに上昇していた。しかも四方から弾丸や訳のわからない特攻兵

器が襲い掛かってくるこの状況。恐怖心を煽る情報が周囲に満ち満ちている。

（アオバが乗っているものは何ですか?! 思い出せ!）

自分の鎮守府を壊滅に追い込んだ存在、それと同等の力を持つ機体だ。そんなものに乗っているのだ、大丈夫なはず。そう自分に言い聞かせるが、手の震えは収まらない。それもそうだ。これから相手にするのは鎮守府どころか大本営を陥落させた存在だ。単純な力ではあちらの方が上だろう。

（ああもうツ……こういう時はどうすれば……）

——皆さんは確かに腕前はまだまだかもしれません。でもチームであるという強みを持っています。それさえ忘れなければ大丈夫です。

A Cの指導をしてくれた吹雪の言葉が頭によぎる。アオバはレイヴンズのメンバーへと通信を繋げた。

「こちらブルー。皆さんついてこれてますか?」

今のレイヴンズの編成はアオバの駆る中量二脚が一機、部下の重量二脚が二機、四脚が一機の四機編成である。単純な機体速度であればアオバの中量二脚が一番速いため、先頭のUNACの後ろについていたのはアオバだった。だから後続の確認を、という建前で。

「こちらグリーン、問題ないわ。どうしたの隊長? 声震えてるわよ」

「レッドだ。こっちも問題ない。なんだよ、ビビってんのか？」

「シルバー、異常なし。なに、怖がることはない。前の二機が壁になってる間にわしが全部撃ち抜いてやるわ」

「ひびッ!!」

「べ、別に怖がつてませんよッ。武者震いです、これは！なんとたつて大スクープが目の前ですからね！」

そう、もう怖くはない。艦娘だった時と同じだ。艦隊を組んでいた時の様に——名前に色が含まれているからつてこんなコードネームを設定した愉快な——頼れる仲間がいる。それを思い出した。もうアオバの手に震えはない。

「最初のポイントや！くるでッ！」

龍驤からの通信と同時に複数のレーザーポインターがレイヴンズを差す。アオバはリコンを射出しながら建物の壁に機体を潜ませた。

「えつと、『S77—S WETA』……敵は高いCE防御と大型のスナイパーキャノンを持つています。グリーンとレッドの機動力では近づく前に被弾しかねません。私と龍驤さんのUNACで仕留めます」

「私たちは待機？」

「いえ、敵の戦力はこれだけじゃありません。『HELKITE』や人型戦車みたいなもの

も近づいて来てます。私たちが飛び出していったら取り囲む算段でしょう。だから後ろは任せます」

「要は援護しろと。あい、了解した」

「U1、パターン2へ移行」

作戦を確認するとUNACが逆関節の脚部を生かして高い跳躍でビルを跳びながらスナイパーキャノンを構えた二脚兵器——『S77—S WETA』へと近づいていく。
(わたしだつてツ!!)

そんな器用な真似はまだできないが、とUNACに釣られて標準がブレた『S77—S WETA』に向かつてグライドブーストを吹かし一気に接近する。建物の隙間から待っていたとばかりに『HELKITE』たちが姿を現したが、アオバの後方からの援護射撃によって瞬く間に撃墜されていた。アオバのACCが『S77—S WETA』をロックする。

「よく見えますよお！いきます！」

狙っている敵からアオバのACCにレーザーポインターが差される。しかしアオバは迷わずトリガーを引いた。キャノンが発射されるよりも先にACCのライフルが『S77—S WETA』に風穴を開けていく。

「やったあ！」

「まだまだ危なっかしいなあ。ま、ギリ合格つてとこやな」

建物の上から『S77—S WETA』がもう一機転がり落ちてくる。龍驤のUNA Cが蹴り飛ばしたものだ。C

「いやはや、きよーしゆくです！……とりあえずここら辺はクリアつてところですかねえ？」

「せやな。この調子で次行こか」

「はい！」

AC達は敵がないことを確認し、次のポイントへと進んでいった。

◇ ◇ ◇

「大丈夫かな、アオバさん達……」

龍驤からある程度は情報が共有されるため生存していることは理解しているが、それでも瑞鶴は心配を隠せなかった。ACが強力な兵器であることは知っているが敵はそれ以上におかしなもの揃えているし、ACで撃破された場合は艦船と違い脱出する暇もない。なによりアオバたちはマギーや吹雪のようなイレギュラーとは違うのだ。

先ほど見てしまった傷ついた人々の姿をアオバたちに重ねてしまいそうになり、その想像を振り払う。

「しっかりしろ、私！」

両手で頬を叩く。龍驤はUNACと支援攻撃隊の操作を同時に行っている。加賀も『ファットマン』を使って『ブルーマグノリア』をレイヴンズの後方へ運搬しながらである。支援攻撃隊の操作だけに集中できるのは瑞鶴と千代田だけだった。

(こうなることが予想されてたから第二艦隊の旗艦を任せられたんじゃない！)

——アオバさん達が防衛戦力を減らしてくれた隙に支援攻撃隊を巨大兵器へ確実に届けるのが私の仕事だ。今、私にしかできない仕事だ！

瑞鶴は気合を入れなおすと自らの攻撃隊を先頭に飛ばして他の艦載機の誘導を行った。瑞鶴の攻撃隊を先頭に爆撃支援の編隊が組まれる。まもなく戦闘エリアへと編隊は到達した。

アオバ達の奮闘があつてか、対空射撃もほとんど受けず支援攻撃隊は巨大兵器へと近づいていく。その巨影を艦載機のカメラがとらえて気付く。

(……さつき見たのと形が違うような……)

巨大兵器の足の装甲がフタを開けたように開いていた。開いた箇所からはプラズマ光が漏れており、中心にある球体に光が集まっていく。刹那、極太の光の線が街を射抜いた。

「あつかーん!!ちよつちピンチャ!スポットする暇もあらへん!!」

「どうしたの龍驤さん!!」

「どうしたもこうしたも、あの敵の猛攻がやばいんや！手が出せへんツ」

瑞鶴は艦載機のカメラの倍率を上げた。先ほどの巨大な光とは別に、巨大兵器の脚部から雨の様に細い光線が降り注いでいる。恐らくその先にレイヴンズと龍驤のUNACがいるのだろう。

「急がなきゃー！」

瑞鶴は迷わず攻撃隊を巨大兵器へと飛ばしていく。構造上の問題かACを優先しているからか、街に降り注いでいる光線は艦載機へと向けられることはなかった。代わりに巨大兵器からも蛇のような特攻兵器が射出され攻撃隊へと向かってくる。

「なにそおおッ!!」

艦載機から機銃を発射し、正面の特攻兵器を撃ち落としていく。それでも何機か食われたが、瑞鶴は意に介さず攻撃隊を巨大兵器へと急降下させていく。そして追突する限界で機体を旋回させ航空魚雷を切り離れた。瑞鶴の攻撃隊に誘導され他の艦載機たちもその軌跡をなぞっていく。投擲された多数の魚雷は勢いそのまま巨大兵器を殴りつけるように衝突し、巨大兵器は爆炎に包まれた。それでもなお巨大兵器は崩れず佇んでおり驚異的な耐久度を見せつけるが、レイヴンズに降り注いでいた光線は止んでいた。脚部の側面についていた小型の砲台が爆撃によりつぶれていたのだ。

「よっしゃあ、今のうちやー！」

龍驤はUNACに巨大兵器をスキャンするように指示をだす。UNACは巨大兵器をスポットし、詳細な位置データを龍驤へと送った。

「これやこれや、頼むで〜金剛」

龍驤から第一支援艦隊の金剛と比叡へ、そして瑞鶴を通して第二支援艦隊の榛名、霧島へと巨大兵器の詳細な位置データが送信された。その情報は信号として金剛たちの脳へと送り込まれ、高速で弾道計算される。はじき出された回答はAMSにより彼女たちの砲台へと反映され、主砲が目視することはできない位置の巨大兵器へと向けられた。

「距離、角度よし！いけます、金剛お姉さま!!」

「Hey! やつときた私たちの出番ネ! いきますヨ、Sisters! Fire!!」

金剛型戦艦が一齐射撃を開始し、艦隊に爆音が響く。放たれた砲弾は誘導装置でもついているかのようにスポットされた位置へと向かっていった。

「……着弾確認! さすがやね!」

「Jackpot!! 当然デースッ」

着弾した砲弾は爆撃によって装甲が削がれた箇所を容赦なく穿ち、巨大兵器がバランスを崩す。そして轟音を鳴らしながら兵器の脚が瓦解をはじめ、その巨体が地に落ちた。

「ワレアオバ、巨大兵器の沈黙を確認……。す、スクープですよスクープ!! やれる! やれますよ!! アオバ達だけでも勝てます!!」

まだ巨大兵器は三体も残っている。しかしそれでも『イレギュラーたち』なしでジャイアントキリングが可能だという事実は彼女たちの戦意を大いに向上させた。絶望を押しつけられる可能性が自分たちにあることの証明に他ならないからだ。

——だからこそ、その“可能性”を摘むために二機の白い影が動き出した。

「ね、ねえ……。艦載機がACを捉えたんだけど、これって……」

千代田が艦載機の映像を各空母へと送信した。加賀はマギーにもその映像を転送する。

「間違いない、No. 2とNo. 8だわ。想定より早く出てきたわね……。千代田、確認するけどACはこの二機だけ?」

「う、うん、多分……。少なくともこっちに近づいてくるのはこの二機だけよ」

「わかったわ。吹雪、聞こえてた?」

「はい。予定通り私は大本営へと乗り込みますが……。それでいいですか?」

「当然よ。それよりも吹雪、あなたは自身の心配をしなさい。あいつらが予定よりも早く出てきた分、本営周辺の敵勢力がまだ排除しきれてない。余分な敵には構わないで慎重に向かいなさい」

「わかりました。ご武運を！」

『吹雪式』は壁を蹴り加速、レイヴンズとは比べ物にならない速度で大本営へと向かっていく。マギーは加賀のオペレーションシステムを介して全部隊に通達した。

「皆は巨大兵器攻略を継続、二機の白いACは私たちが対応する」

「了解」

「……行きましょう、加賀」

「ええ。……『ファットマン』離陸」

『ブルーマグノリア』を吊った装甲ヘリがN.O. 2とN.O. 8の進行予想地点に向けて一直線に飛んでいく。街中に響く大きなプロペラ音は「私たちはここにいるぞ」という知らせでもある。

マギーの脳裏には初めて彼らと出会った時の記憶が蘇っていた。後に吹雪のACとなった『深海鉄騎』を巡り対立し、譲らざるをえなかった苦い記憶。マギーはコックピットの中で、犬歯が見えるほどの笑みを浮かべていた。

「あの時の続きを……決着をつけましょう」

装甲ヘリから『ブルーマグノリア』が投下される。そこには示し合わせたかのように二機の白いACが待ち構えていた。

第四十八話「MISSION 07_本営奪還—04」

巨大兵器から離れた工場地帯、そこに三体のACが居合わせていた。もはや言葉は不要と互いに臨戦態勢になっている。

「出し惜しみはしないっ!!加賀ッ」

「ええ、システム起動……」

〈Over System『Next』Setup〉

上空を飛んでいる加賀の装甲ヘリから重低音が鳴り響く。ヘリに積まれた装置が『ブルーマグノリア』へハックを開始した。そして姿勢制御等のあらゆる演算情報を『ブルーマグノリア』から加賀の脳内へと流し込み、処理させ始める。加賀の脳内が情報の嵐に飲まれる中、『ブルーマグノリア』はその情報の処理に使用されていたエネルギーを全て鋼鉄の体躯へと伝搬させACを超えたACへ変貌を遂げた。

白いAC達と対面して数秒も経たぬ間に『黒い鳥』と化した蒼いACは、地面を蹴り跳躍、No. 8を飛び越えさらに建物を蹴つて機体を加速させ、No. 2の逆関節型ACに猛禽類さながらの強襲を仕掛けていた。両肩のミサイルハッチはまるで猛獣の口のように開口させNo. 2へと牙をむく。

近接戦向きではないN.O. 2のフォローをするためN.O. 8は『ブルーマグノリア』に向けてバトルライフルとショットガンを放った。背後から放たれているにも関わらず『ブルーマグノリア』は“空中で旋回しながら”それを躲すと、対面にとらえたN.O. 8に向かってヒートマシンガンとレーザーライフルを放つ。N.O. 8はグライドブーストを吹かして地面を滑空し、滑り込むように建物に身を潜ませてその攻撃を凌いだ。(二対一だというのに我らが飲まれかけている……か。まるであの時の様だ)

——N.O. 8は電子化された脳内に残留している光景を思い出していた。

「我ら二人に勝るものなど、この世になつてはならない」

「知っているさN.O. 2、そのために我らは生まれ変わったのだ」

誰が命令していたのかもわからない、ただ勝つことだけを求めていたミッションが終了した時、目の前にいた存在。それと同質のものと再び対峙している。戦局はあまり芳しくないだろう。

(しかしそれでも、勝つのは我々だ)

失敗作と確定し、存在価値を無くした我らに再び与えられたミッション。倉井と共に“新しい秩序を作り出すこと”。その是非はわからないし、考えるつもりもない。ただ「戦うために戦っている」そんな我らの行きつく答えがこの先にあるような気がして

いた。

「NO. 2、私が仕掛ける。挟撃するぞ」

「了解した」

リコンで身を隠している建物越しに『ブルーマグノリア』を捉えたNO. 8は、バトルライフルとショットガンを構え隠れていた建物の影からその身をさらけ出す。『ブルーマグノリア』もNO. 8を捉えており、すでにチャージを終えていたレーザーライフルを彼に向けて放った。NO. 8はそれを躲すそぶりも見せず、その光弾が左肩の装甲板を融解させ剥がそうとも無視するように『ブルーマグノリア』との間合いを詰めてくる。

「こいつまさかッ!?!」

マギーの額に汗が流れる。NO. 8は回避をかなぐり捨てて、機動力の全てを『ブルーマグノリア』との間合いを詰めるだけに充てていることを悟ったからだ。

元々『ブルーマグノリア』は中量二脚の中でも高機動な機体である。その上マギーは工場地帯という入り組んだ地形での高機動戦を得意としており、『Next System』によってそれに拍車がかかっている今、NO. 8の『レオ』ではまともに追撃することは不可能であった。そのため、それを埋める手段としてNO. 8は防御を捨てて『ブルーマグノリア』を捉え続けることに集中するという手段を取ったのだ。それは彼

らにとつて「生き残ること」は勝利条件ではないということの表れでもあった。後先考えずこの場で『ブルーマグノリア』を倒す、それが達成できればよいという覚悟がマギーの殺意を押し返し始める。

『ブルーマグノリア』は工場施設を跳躍しながら立て続けにN.O. 8にミサイルを放つ。しかしそれらはN.O. 8のショットガンに半分以上が撃ち落とされ致命にまで至らない。そしてN.O. 8から容赦なく放たれるバトルライフルとCEミサイルから逃れようと建物を蹴り飛ばし別の建物の影に隠れようとした時だった。マギーは首筋に突き刺さるような殺気を感じ取り、反射的に空中クイックターンで機体を反らす。同時に左脚の装甲板に高エネルギーのレーザーが掠め、その一部が融解する。

「ちいッーうざったい!!」

N.O. 2の背後からの狙撃をギリギリで躲したものの、姿勢を崩した『ブルーマグノリア』は地面に足をつけてしまう。その瞬間を狙っていたかのように『ブルーマグノリア』が背を預けていた建物の上から、N.O. 8がレーザーブレードを振りかぶりながら落下してきた。マギーはスキャンモードに切り替えながらグライドブーストとハイブーストを併用して『ブルーマグノリア』の最大速度を捻りだし、攻撃を紙一重で躲しつつそのまま二機から距離を離す。

(体制を立て直さないと……クソッ)

行動全てを攻撃にあてているN.O. 8と、それに合わせてくるN.O. 2の予想以上の猛攻にマギーは焦りを覚える。『Next System』が起動中でなければ危ない場面がいくつもあった。そしてそのタイムリミットも刻一刻と迫っている。

(できる限り無傷で勝つのは諦めるしかないか……)

彼らに勝利したとしても、まだ巨大兵器と倉井のACが控えている。特に倉井のACに確実に勝つには先行している吹雪と合流して当たる必要があった。だから余力を……と考えていたが、それが甘すぎる判断であったとマギーは自戒する。

——紛れもなく、この二人は強い。認めよう、余裕なんか無い。

早々に勝利条件を切り替えるとマギーはN.O. 8に狙いを絞った。

「まずはお前を殺す」

N.O. 2の攻撃で驚異なのは『X000 KARRASAWA』の高威力レーザーであり、それに注意さえすれば他の攻撃はひとまず考えない。そしてその高威力レーザーは次発までに時間がかかる。その隙にN.O. 8とは決着をつける。多少の犠牲は払ってでも。

マギーは殺り方がある程度定めると、身をひそめていた建物の隙間を縫うように『ブルーマグノリア』を跳躍させ、N.O. 8との間合いを再び縮めていく。N.O. 8もそれに気づいているのか、マギーと同じように機体を跳躍させて間合いを詰めていく。——

どこかへ誘い出すように横に逸れながら。

(その先は……広間か)

スキャンモードによつて読み取れる建物の外郭から、N0・8が誘い出そうとしている地形をマギーは予想する。低層の倉庫が集まっている地帯のようだ。そのような広間であれば『ブルーマグノリア』のブーストドライブをある程度抑制できるうえ、N0・2の支援も行いやすい。そこで決着をつけるつもりなのだろう。

(ちようどいい)

こちらにも時間に余裕があるわけではない。ならばその案に乗ろう。多少の不利は想定内だ。N0・2の援護を躲し、リロードの隙にN0・8を倒してみせる。マギーはN0・8の誘いに乗り、その地へと機体を跳躍させてゆく。そしてレーザーライフルのチャージも済ませながら倉庫密集地帯へと機体をさらけ出した。N0・8もほぼ同時にたどり着いており、右手のバトルライフルをレーザーブレードに持ち替え左手のショットガンを『ブルーマグノリア』に向けると同時に、ブースター孔から大きなプラズマを吹き出して急加速する。N0・8はグライドブーストをしながらCEミサイルとショットガンを放った。『ブルーマグノリア』はそれをハイブーストで躲しつつ、レーザーライフル、ヒートマシンガン、CEミサイルと自らのACのありつただけの火力をN0・8にたたきつける。レーザーがN0・8のAC『レオ』の左腕を千切り飛ばし、マ

シンガンとミサイルが胸部や脚部の装甲を粉碎した。しかしそれでもNo. 8は突撃を止めずひたすらに突っ込んでくる。

「なにがそこまでッ」

マギーがその圧力に一瞬怯んだ時だった。『ブルーマグノリア』に凄まじい熱量を持った光弾が迫る、が……。

「お見通しよー」

『Next System』によって可能となるハイブーストの隙を無理やりハイブーストで潰して加速する連続ハイブーストで不意を突いたはずのNo. 2のレーザライフルすら捌く。ここまではマギーの思い描いた通りだった。あとはNo. 8に止めを刺すだけだ。

「マギー…そこを離れて!!」

不意に加賀から通信が入る。『Next System』発動中はまともに喋ることすらつらいはずの彼女からの叫び声を受けて、マギーは反射的にスキャンモードへと切り替えた。

「これは!?!」

そして理解する。自分は嵌められていたのだと。スキャンモードに映し出された映像には周囲を可燃物に取り囲まれた『ブルーマグノリア』が映っていた。No. 8とN

0. 2の今までの攻撃はすべてここに追い詰めるための布石だったのだ。

そしてそれを理解する一瞬が命取りになっていた。N0. 8はブレードを振りかぶる寸前まで来ており、N0. 2も肩部のミサイルハッチを開けている。離脱しようとしてもN0. 8に追いつかれ切り裂かれる。それを撃墜しようと銃撃を加えようものなら可燃物に引火する恐れがある。でなくともN0. 2のミサイルによって引火、あたり一帯爆発四散する運命。いわゆる詰みだ。

——ふざけるなッ!!

また燃え落ちるつもりはない。そうならないために、何にも、誰にも負けたくないから、だから加賀の力を借りてまで『黒い鳥』に手をかけたんだ。ここで終わることなんて許さない。

マギーの闘争心が倉庫の可燃物よりも先に爆ぜる。『ブルーマグノリア』は両手の武装を放棄し、ブレードを振りかぶる寸前のN0. 8へ突撃した。『ブルーマグノリア』は最大出力のブースターでN0. 8に接近すると、ブーストチャージさながらのスタンプで『レオ』のブレードを振りかぶっている腕ごと胴体を踏み潰し、跳躍、N0. 2のいる空中へと飛ぶ。N0. 2の放ったミサイルをあえて受けながら、その爆炎を振りほどきN0. 2の眼前へと迫った。

「化け物め」

N.O. 2のメインカメラには『ブルーマグノリア』の左肩に携えられていたハンドガンの銃口が映っていた。隙間から両肩のミサイルハッチが全開になっているのも見える。『ブルーマグノリア』は躊躇なくN.O. 2『アクアリウス』の頭部を撃ち抜くと同時にミサイルを零距离で全弾浴びせ、さらに組み付き落下しながらハンドガンをひたすら放ち続けた。二機のACが地面に落下し、しばらく銃声が響いた後、砂煙から蒼黒いACのみが姿を現す。

「……流石だ、マグノリア・カーチス」

ひどくノイズの入った声がマギーの耳に届く。それは先ほど踏み潰され地に伏しているACからのものだった。

「残念だったわね、私の勝ちよ」

「……いや、今回は我らの勝利だ」

「どこをどう見ればそうなるわけ？」

N.O. 2は完全に沈黙し、N.O. 8もはや指先一つ動かせる様ではなかった。放つておいても活動が停止してしまうだろう状態だ。しかしN.O. 8は言葉を続ける。

「直にわかるさ。我らのミッションは達成された。……貴様がここに来た時点でな」

「何を……」

「マグノリア・カーチス、貴様は我らと同じだ。だからこそ、この先を見届ける……権利と、

義務がある。闘争の果てに何があるのか、その答えを……貴様が……」

『No. 8……』

『レオ』のメインカメラにはもう光は宿っていないかった。しばしの静寂が『ブルーマグノリア』を包む。

「……加賀、装甲ヘリの操作はまだできる？」

「……ツ、少し厳しいわ」

加賀は頭痛をこらえながら装甲ヘリを着陸させる。元々『Next System』は加賀にとって一種の裏ワザのようなものであり、前回はその負担で気絶しかけたほどだ。一定時間はまともに艦載機の操作はできそうになかった。

「わかったわ。加賀は少し休んでいて。私は吹雪の応援に向かう」

「大丈夫？」

「アオバたちは大丈夫よ、あの調子なら。それにここからなら大本営のほうが近い」

「それもあるけど、マギー、あなた自身は？」

「……大丈夫よ。それにNo. 8の言葉、あれも気になる」

「……そう、気を付けて。瑞鶴に通信を引き継ぐわ」

「了解」

マギーはパージした武装を回収すると、大本営へとACを向かわせた。

◇ ◇ ◇

マギーたちが二機のACと対峙したころ、吹雪は大本営へとたどり着いていた。各鎮守府に備え付けられている工廠施設などを担う装置、それが発掘された遺跡の上に大本営は建設されていたが、巨大兵器の襲撃により半壊しその遺跡へ続くメインシャフトが露わになっている。

(確かサーバー施設は奥にあったはず)

サーバーを含むこの国の防衛を担う根幹のシステムは遺跡から発掘された装置を利用したものであり、遺跡自体も非常に堅牢な作りであったためそのまま利用されている。ACすら通れる広さがあるシャフトの中を『吹雪式式』は降りていく。奥へと進んでいく中で吹雪にある不安が芽生え始めていた。

(なにも感じない……)

怖くてたまらなくなるから、すぐにわかるはず。倉井がすぐ近くにいれば。吹雪の持っている恐怖を感じ取る直感、それに何も反応がない。そのことが吹雪にある疑念を抱かせていた。

「ッ！」

『吹雪式式』がシャフトを降りきると同時にレーザーライフルの弾が放たれる。吹雪は辛うじてそれを躲すと、辿り着いた広間の奥を見た。

「あれは!？」

待ち構えていたのは倉井のAC『フォール・レイヴン』だった。左手に盾を構えながら右手に持ったレーザーライフルを『吹雪式』に向けている。

「勝負だ傭兵、どちらが正しいかは戦いで決めよう」

倉井の声が地下の広間に響く。それを聞いて吹雪は抱えていた疑念を確信に変えた。

「……なにが勝負ですかッ!? あなたは、そこにいない、癖にッ!!」

どおりでなにも感じないはずだ。どおりで恐ろしさが無いはずだ。目の前にいるACは姿形こそは『フォール・レイヴン』であるものの、誰も乗っていない紛い物。ただのUNACだろう。倉井がここにいないことへの焦りと怒りが吹雪にこみ上げる。

「こんなものッ」

吹雪は『吹雪式』のレーザーライフルをKEライフルへ切り替え、ガトリングとミサイルと共に『フォール・レイヴン』へと放った。『フォール・レイヴン』はそれを避けることはできずにシールドで受けながらレーザーライフルをチャージする。しかし『吹雪式』はすでにグライドブーストを吹かしてその射線から離れており、シールドに引き続き攻撃を加えていた。『フォール・レイヴン』の装備しているシールドは曲面加工されているTE攻撃向けのものであり、実弾攻撃にあまり耐えられないものではない。瞬間にシールドは崩れ落ち、同時に生じた『フォール・レイヴン』の死角に『吹雪式』の

左足が差し込まれていた。『吹雪式』のブーストチャージが直撃し、『フォール・レイヴン』はその左上半身を大破させ崩れ落ちる。

「シヨブダ、ヨウへい……けっチャクをつ……しよぶだ、ヨウへ……」

コアと共に破損した機械が録音された音声をただ繰り返す。壊れた録音機と化したそれを吹雪はもう一度蹴り飛ばした。『フォール・レイヴン』が完全に沈黙する。

「……までのようですね」

録音されていた倉井の声が途絶え、その代わりに『吹雪式』に翔鶴から通信が繋がった。吹雪はACを奥にある施設に向かわせながら翔鶴と言葉を交わす。

「そうですね、翔鶴さん。直ちに地上の兵器を止めて投降してください」

「……はい、わかりました」

「……やけにあっさりしてますね。倉井がここにいないから、ですか?」

「ええ。先ほど倉井様から連絡が入りました。倉井様からのメッセージをあなたたちに伝えることで私たちの任務は完了します」

「メッセージ……?」

翔鶴は一呼吸置き、倉井から届いたメッセージを読み上げる。一言一句、丁寧に。

「我々はいつも誤りを犯す。そうは思わないか、諸君。戦いこそが人間の可能性だが、際限なく増長した力の先には滅びしかない。人類には天敵が必要だ。人類には人類を間

引く裁断者が必要なのだ。そして艦娘を大量に生み出したこの世界は破滅へと進んでいる。だからインターネサインの力をもってこの世界を浄化する。全ては人類という種を残すため、再生のため、お前たちには消えてもらう。……猶予は二十四時間だ。その運命を拒むというのなら、足掻いてみせろ」

吹雪は息を飲み込む。

「……まさか」

「はい、この大本営襲撃はあなたたちを足止めするための陽動です。倉井様はすでにインターネサインへと到達いたしました。これより二十四時間後に『大破壊』が執行されます」

翔鶴の口から「運命を決める評決の日」が始まったことが告げられた。